令和７年度

幼稚園・幼保連携型認定こども園

教職２年目研修

課題研究レポート

令和８年３月

沖 縄 県 立 総 合 教 育 セ ン タ ー

令和７年度幼稚園・幼保連携型認定こども園２年目研修　研究一覧

園名	氏名	研究テーマ
本部町立本部幼稚園	花城　奈美	他者を思いやる気持ちが育まれる保育環境と援助の工夫 ―園生活の中で教師や友達との関わりを通して―
名護市立名護幼稚園	玉城　理菜	遊びを通して主体性を育むための環境構成と援助の工夫 ―チャレンジ遊びを通して―
嘉手納町立嘉手納幼稚園	島袋　由利香	思いを伝え合いながら活動する楽しさを味わう環境構成と援助の工夫 ―友だちと様々な活動や遊びを通して―
嘉手納町立嘉手納幼稚園	長浜　梨香	友達と関わる楽しさを味わうことが出来るための環境や援助の工夫 ―協同して遊ぶ活動を通して―
沖縄市立宮里幼稚園	嘉陽　愛乃	好奇心･探求心をもって遊ぶ子を育むための環境の工夫 ―絵本の世界を通したコーナー遊び―
宜野湾市立志真志幼稚園	比嘉　綾乃	充実した園生活を送る子をめざして ―発達に合った保育を通して―
宜野湾市立はごろも幼稚園	堅　はつみ	友達との関わりを楽しみ集団の中で共に育つ関係性について考える ―子どもの興味や発達を捉えて―
西原町立西原幼稚園	城間　涼見	幼児がわくわく感をもって遊び込むための環境の構成と援助の工夫 ―心を動かされる体験を通して―
久米島町立仲里幼稚園	與那　渚	人と関わる力を意識した環境構成やあそびの工夫 ―仲間との関わりを工夫した遊びを通して―
南風原町立南風原幼稚園	真栄城　優	学びの芽生えを育むための環境構成や援助の工夫 ―好奇心や探求心をもって遊ぶ活動を通して―
宮古島市立西城幼稚園	伊川　町華	言葉で表現する楽しさや相互に伝え合う喜びを味わう援助の工夫 ―言葉による伝え合いを通して―
国頭村立くにがみこども園	當山　結生	互いの良さを知り認め合い寄り添い助け合いながら共に成長し合うための援助の工夫 ―みんなで協力しながら楽しく過ごす為の環境構成や援助を通して―
大宜見村立おおぎみこども園	親川　智恵美	自分でしようとする気持ちを育むための環境構成と援助の工夫 ―手指の発達を促す遊びを通して―
金武町立金武こども園	米須　麻理子	相手の話をよく聞き、思いを伝え合う力を育む援助の工夫 ―クラスでのひとときを通して―
今帰仁村立認定こども園みらい	島袋　一夢	友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫 ―集団で遊ぶ活動を通して―
今帰仁村立認定こども園みらい	宮本　まりん	遊びを通して、思いやりやマナーを身につける ―室内外遊びにおける保育教諭の援助･関わり方の工夫―
うるま市立赤道こども園	山下　雷太	話に耳を傾ける心と、気持ちを伝える喜びを育む援助の工夫 ―絵本の活用や日々の振り返り活動を通して―
浦添市立当山こども園	伊佐　秀美	身近な生き物との関わりを通して興味･関心を育む ―虫との関わりの中で、知的好奇心が育つ環境構成と援助の工夫―
浦添市立内間こども園	座安　美奈子	互いの良さに気づき、思いやる環境構成や援助の工夫 ―友だちや保育教諭と遊びを通して―

那覇市立真和志こども園	安里　神那	友だちの良さを認め合い、思いやりの気持ちが育まれる学級づくり ―集団活動や遊びを通して―
那覇市立城南こども園	国吉 優子	友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができる環境構成や援助の工夫 ―保育教諭や友達との関わりを通して―
那覇市立開南こども園	宜保　愛	互いの良さを認め合い、協同して遊ぶ楽しさを味わうための援助 ―遊び込む経験を通して―
那覇市立久場川みらいこども園	湧川　愛香	自ら食べてみようとする意欲を高めるための環境構成と援助の工夫 ―様々な栽培活動を通して―
那覇市立城西こども園	與座　美夕貴	園児の言葉の世界が豊かになる為の援助の工夫 ―遊びや生活の場を絵本や物語を通して―
那覇市立城西こども園	屋我　明希	自己を発揮し、友達のよさの気付くことができるような援助や環境の工夫 ―保育教諭や友達との関わりを通して―
那覇市立大道みらいこども園	村田　優希	自分の思いを伝え相手の思いに気付いていく子どもの育ちを支える保育を目指して ―友だちと思いを伝え合い、一緒に遊ぶ楽しさを味わう活動を通して―
那覇市立上間こども園	池原　千真	思いや気持ちを言葉で表現しようとする力を育む環境構成と援助の工夫 ―絵本の読み聞かせや手遊び歌などを通して―
那覇市立宇栄原みらいこども園	喜納　尚子	応答的な関わりの中で言葉への興味や表現しようとする意欲を育む環境構成と援助の工夫 ―絵本の読み聞かせや歌、手遊びを通して―
那覇市立泊こども園	城間　菜音	互いの良さを認め合い、思いやりを育む保育教諭の関わりと援助 ―集団生活で保育教諭や友達との関わりを通して―
豊見城市立上田こども園	大城　美裕	小さな〝できた〟が大きな〝できる〟になる！自信に繋がる援助の工夫 ―保育教諭や友達との関わりを通して―
宮古島市立下地こども園	棚原　有愉	幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について ―こ小の交流活動と育ちの共有、架け橋期カリキュラムの協働作成を通して―
宮古島市立上野こども園	前盛　智香	友だちとの関わりや経験から自己肯定感を育てる工夫 ―保育教諭や友だちとの関わりを通して―
宮古島市立伊良部こども園	下地　夏子	自信をもって思いや考えを伝え合い、主体性・自主性を育むための援助の工夫 ―様々な役割を担う保育教諭の人的環境としての関わり、思いを伝え合う場を通して―
石垣市立かびらこども園	吉濱　江利奈	地域文化に親しむ中で育まれる子どもの主体性 ―八重山のわらべうた遊び・獅子舞再現遊びを通して―
金武町　並里こども園	田端　美希	快適な生活を送るための環境構成と援助の工夫 ―みんなでクリーン活動を通して―
金武町　認定こども園金のほし	宮城　ちぐさ	諦めない気持ち・挑戦する気持ちを育てる ―戸外（運動的な）遊びを通してー
沖縄市　おきなわ地球こども園	喜友名 莉夢	こども達が「やってみたい、遊びたい」と思える環境構成の工夫 ―友達や保育教諭との遊び、園生活を通して―
中城村　吉の浦こども園	新垣　友希	話し合う中で伝える楽しさや喜びを味わうための援助と工夫 ―全体集会や学級での活動を通して―
宜野湾市　おひさま認定こども園	伊佐　莉穂	子どもの主体的な学びを支える保育者の援助と工夫 ―クラス活動や遊びの中での関わりを通して―
宜野湾市　おひさま認定こども園	小橋川　百合花	五感を使い感性の豊かさや経験を育むための援助と工夫 ―遊びや集団生活を通して―

浦添市　仲西こども園	新城　紋音	友だちの良さに気付き関わりを深める環境構成の工夫 ―思いの伝え合いや良いところ探しを通して―
浦添市　あおいこども園	砂川　理沙	継続して取り組む力を身に付ける環境構成と援助の工夫 ―身体を動かす遊びを通して―
浦添市　みのり幼稚園	比嘉　舞子	新しい発想や表現する力を育む援助の工夫 ～ハサミを使った製作活動を通して～
浦添市　みのり幼稚園	宮國　絢女	自分の気持ちを相手に伝える援助と工夫 ～文字と言葉を通して～
浦添市　ハイジこども園	下地　美里	基本的な生活習慣の自立に向けての環境構成と援助の工夫 ―自ら進んで自主的に行動できる様になるには―
浦添市　ハイジこども園	砂川　千廣	友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じられる環境構成と援助の工夫 ―友だちや保育教諭との遊びを通して―
那覇市　若狭こども園	糸数　真夏海	いろいろな食材を食べてみよう ―食べる楽しさを感じる経験を通して―
那覇市　安謝こども園	宮里　エリカ	食に興味をもち、食べることへの意欲を育む援助の工夫 ―遊びや食育活動などの日々の活動を通してー
那覇市　安謝こども園	三木　さつき	自分の思いや考えを言葉で伝え合いながら、生活や遊びを進めていく楽しさを味わう為の援助の工夫 ―互いを認め合い、その子らしさを発揮しながら自信を持って活動できる環境構成や援助の工夫を通して―
南城市　あおぞらこども園	緒方　美代子	互いの良さを認め合い、思いを伝え合って活動する楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫 ―集団生活や遊びを通して―
南城市　あおぞらこども園	新垣　恵利奈	自分の気持ちを言葉で伝え、相手の気持ちも受け入れる力を育てる ―日々の生活や遊びでの関わりを通して―
八重瀬町　あらしろこども園	豊見山　千春	心が動く保育の環境構成 ―子どもの視点と子どもの世界をつなぐ環境構成の工夫―
与那原町　浜田ハピネス認定こども園	大城　未来	相手の思いを聞く力を育み、他者の気持ちに気づくことができる活動の工夫 ―自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりする体験を通して―

様式３【課題研究レポート】

他者を思いやる気持ちが育まれる保育環境と援助の工夫

―園生活の中で教師や友達との関わりを通して―

本部町立本部幼稚園　教諭　氏名　花城　奈美

Ⅰ　テーマ設定の理由

本園では、他者と関わり、良好な人間関係を築いていくうえで大切な行動を考え『おもいやりのある子』を教育目標にしている。

『幼稚園教育要領解説』の第２章第２節「人間関係」の領域には「友達との関わりを深め、思いやりをもつ」とある。幼稚園生活において多くの友達や保育者と触れ合う中で、自分の感情や意志を表しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには友達同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験や、考えを出し合ってよりよいものになるように工夫したり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになることが大切だと考える。

本学級の幼児の実態は、５歳児（１年保育）計２２名（うち支援児１名）在籍し、学級の全員が集団生活を経験してきている。室内外の遊びを気の合う友達と楽しむ姿が見られ、雲梯棒や縄跳び、虫捕りなど戸外遊びを楽しむ姿が見られる。一方で、玩具の貸し借りや意見の違い等で思いが通らない場面で手が出る子や過剰に反論したりと、トラブルが多く見られる。

そこで、園生活の中で、教師や友達との関わりを通して心を動かす出来事を共有し、互いの感情に気付いて自分と異なる考えや思いを持った友達に気付き、幼児の思いやりを育みたいという願いで本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①思いやりの気持ちが育まれる環境構成の工夫について

・身近な生き物を飼育していく中で、生命を大切にする気持ちを育む。

・飼育コーナーや捕まえ虫などを観察できるコーナーを設置し、図鑑や絵本を置く。また、写真やイラストを掲示し、幼児が自ら興味を持ち、生き物に関われるような援助を行う。

②他者を思いやる気持ちが持てるような援助の工夫

・友達の良いところ、自分の良いところに気付けるようにする。

・自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりする場を設け、気持ちの伝え合い、お互いに折り合いがつけられるようにする。

・教師が思いやりのある行動を行い、他者の感情や相手の視点に気付くような働きかけを援助する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「おたまじゃくしを育ててみよう　～何に変身するのかな？～」

≪幼児の実態≫

・園庭には、バッタや蝶など様々な生き物がたくさんいて、虫捕りをする子が多い。

・捕まえた生き物を虫かごに入れて観察を楽しむ姿が見られるが、放置し、死んでしまうことも多い。

≪教師の願い≫

・生きている物には命があること、命は一つしかないことを理解し、大切に扱ってほしい。

・生き物の観察や飼育を通して、生命を大切にする気持ちが育まれていってほしい。

≪教師の関わりと援助≫

・おたまじゃくしの飼育を通して、生き物を大切にする気持ちが育まれていけるように学級で飼育をすることを提案する。
・観察コーナーでおたまじゃくしの飼育が出来るよう環境を整える。
・絵本や図鑑などを置いたり、写真やイラストを掲示したりし、幼児が自ら興味を持ち、生き物に関われるような援助を行う。
・おたまじゃくしの成長に気付けるように、関心が薄れてきた際には再び関心が向くように援助していく。

≪幼児の変容≫

・初めておたまじゃくしを見る子もおり、絵本を見ながら「本当に足が出てくるの？」「カエルになるの？」と子供同士で話をする姿が見られた。
・観察を通して「カエルになるの楽しみ」と期待感を持っている。「足が出てきている」「カエルになってる」など気付いたことを伝え合う様子が見られた。
・おたまじゃくしのエサは何？カエルは何を食べるの？と関心を示し、具体的な質問で会話を広げる姿が見られた。

【実践事例２】　「それ、いいね！気持ちを伝え合おう　～日々の保育の中での出来事～」

≪幼児の実態≫
・意見の違いや自分の思いが通らないと手が出てしまう子がいる。
・思いやりに欠ける言葉を使う子がいる。
・人前での発表に消極的な子がいる。

≪教師の願い≫
・自分の気持ちを言葉で伝えたり、相手の気持ちに気付いてあげたりしてほしい。
・ちくちくことば、ふわふわことばなど言い方によって伝わり方が違うことを知ってほしい。
・自分の意見に自信を持ってほしい。

≪教師の関わりと援助≫

・グループ活動を取り入れるようにし、自分の意見や考えを伝え合える場を設けた。
・意見がまとまらない、自分本位な話し合いになっていないかなど、状況によって教師が介入し話し合いがうまく進むようにする。
・子どもの良い行動や言葉遣いなどがあった際には帰りの会などで教師が嬉しかったこととしてみんなの前で紹介する場を設ける。
・自主的な発表の他にグループごとに発表してもらうなどふりかえりの場の持ち方を工夫する。

≪幼児の変容≫

・グループでの話し合い活動を繰り返していくことで、積極的に発言する子やみんなの意見をまとめようとす

る子の姿が見られた。

・活動中に失敗したことに対して、「大丈夫、大丈夫」と声をかける子をきっかけに数名の子が励まし、応援する姿が見られた。

・グループごとにふりかえりの発表をする機会を増やしたことで、人前に出ることに徐々に慣れていく姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・おたまじゃくしの飼育後、自分で捕まえ生き物を飼育ケースに入れ、観察、飼育する子が増えた。命を大切にする行動として観察後には自主的に逃がしてあげることができるようになった。

・生き物の名前やエサなどが分からない場合は、子供同士で図鑑や絵本を取りに行き、調べようとする姿が見られた。調べて分かったことを子供同士で伝え合ったり、保育者に伝える姿が見られた。

・グループ活動を通して、自分がしなければならないことに気付き、自分たちで道具を準備したり、最後までやり遂げようとする姿が増えた。

・雲梯棒や縄跳びなど挑戦していたことが初めてできた日など心を動かすような体験をした際に、自主的にふりかえりの発表を行うようになった。

②課題

・学級全体で生き物について、気づいたことなどを話す機会を設けたが、生き物に興味や関心がある子の差がある。

・思いや考えの違いを子供同士で解決しようとする場面も増えてきたが、一方的に解決しようとしたり、言葉より先に手が出る子がいる。

・集会時など話を静かに聞くことができず、友達とふざけ合う姿や話を聞く態度や姿勢が身についていない子がいる。

③実践を通した自身の気づき、考え

・生き物の飼育だけでなく、幼児教育を行う上で、環境構成がとても重要だということが分かった。学級での研究課題であったが、複数学級がある本園では、学級の垣根を越えて園全体での活動体験にも繋がるため教諭間での相談や協力が必要だと感じた。

・“思いやり”をテーマに本研究に取り組んできたが、支援児Ａ児に対して、Ｂ児が中心になり、Ａ児が好きな絵本に出てくるキャラクターを製作してあげるという行動を見ることができた。Ｂ児の作ってあげたい、好きな色は何色かな？と分からないことは教諭に尋ねるなど相手の事を考える行動こそが他者を思いやる気持ちが育まれている姿だと感じることができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・生き物への関心が薄い子も興味を持てるように様々な配慮や環境構成などを研究していきたい。

・複数学級がある環境での学級単位の研究は難しく感じる所があり、教師間で相談しながら研究できるようにしていきたい。

・対話を通して問題解決ができるように、子供同士の姿を見守り、子供同士で話し合う機会を大切にし、意図的に考える場面を作るなど環境構成や援助の工夫に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年　『幼稚園教育要領解説』　フレーベル館
・令和６年度　幼稚園・幼保連携型認定こども園　教職２年目研修　課題研究レポート
沖縄県立総合教育センター
・日本図書センター　ふわふわとちくちく

様式３【課題研究レポート】

遊びを通して主体性を育むための環境構成と援助の工夫

―チャレンジ遊びを通して―

名護市立　名護幼稚園　教諭　玉城　理菜

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、新型コロナウイルスの影響から幼児の様々な人や物と関わる経験は少なくなっている。幼稚園教育要領解説第１章幼児教育の基本②集団生活と教師の役割では、「幼児の主体的な活動は、友達との関わりを通してより充実し、豊かなものとなる。そこで、一人一人の思いや、活動をつなぐよう環境を構成し、集団の中で個人のよさが生かされるように、幼児同士が関わり合うことのできる環境を構成していくことが必要である」とされている。

本学級は、５歳児（１年保育）１６名が在籍している。実態として、１学期は遊びや生活の中で「できない」「先生やって」や「できないからやめた」と何事にもすぐに諦めてしまう子が多くいた。そのような中でも、保育園での経験からフラフープや大縄跳びなどのチャレンジ遊びをやってみたいと挑戦する姿が見られるようになってきた。チャレンジ遊びを楽しみながらくり返し挑戦する姿から、幼児が遊びを楽しみながら主体的に環境に関わることで幼児の主体性が育まれ、その経験が今後の生活や小学校教育における教科への興味・関心へと繋がっていくのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　遊びを主体的に楽しむことが出来るような環境構成の工夫について

・幼児の発達や姿に合った道具を準備する。

・遊びの姿や教師の願いから環境構成の仕方を毎日工夫する。

・安全面に配慮しながら、幼児が遊びを十分に楽しめるような場所や時間を確保する。

②　遊ぶ楽しさを味わえるための援助の工夫について

・主体的に取り組めるようになるための言葉かけや援助の仕方を工夫する。

・教師が継続的に関わりながら遊びを楽しめるようにする。

・友達同士を繋げるための援助の仕方を工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例 1】チャレンジ遊びを通して

（幼児の姿）

・誕生会で教師が竹馬や縄跳びを披露したことで挑戦しようとする子が増えてきた。

・「どうせできない」「むずかしいのに」と後ろ向きな言葉を話す子がいる。

・チャレンジ遊びなど、継続して遊びを楽しむことが難しい。

（教師の願い）
・諦めずに挑戦することで、出来るようになった！という成功体験を沢山味わってほしい。
・チャレンジ遊びなどに挑戦する中で、自分や友達の良さに気づいて欲しい。

教師の関りと援助（△環境構成、〇教師の援助）

△それぞれ広い場所で楽しめるように環境を設定し、周りの危険なものを取り除くなど安全面に配慮する。

△自分で高さを選んで挑戦できるように３種類の竹馬を準備する。

△出来るようになってきた幼児が「もっと挑戦したい！」と思えるよう段差などの道具を準備する。

〇毎日継続的に関わる中で幼児の成長を見守り、思いや頑張りを一緒に共有できるようにする。

〇ゲームなどを取り入れ、「やってみたい！」「もっとやりたい！」を引き出せるようにする。

幼児の変容

・教師が継続的に関わることで、見守られているという安心感から次は「これをやってみたい！」といろいろなことに挑戦する姿が多く見られるようになった。
・「一番低い竹馬が出来るようになったから、友達みたいに次は２番目に高い竹馬に挑戦してみる！」と、諦めずに挑戦する姿が見られるようになってきた。
・毎日自分たちで段差や落とし穴、一本橋などのコースを考えて遊びを楽しむ姿が見られるようになってきた。
・「どうせできない」と話していた子が、友達の助けや友達に頑張りを認められる経験を通して「できるようになった！たのしい！」と笑顔で話す姿が多く見られるようになった。
・竹馬の乗り方や、縄跳びの跳び方など友達同士で具体的に教え合う姿が見られるようになってきた。
・友達ができた時には、「昨日は〇〇回だったけど、今日は〇〇回跳べるようになったね！」と一緒に喜びを共有する姿が増えてきた。
・運動会の時にはまだ、フラフープを回すことが難しかった子が、ゲームで勝ちたいという気持ちから毎日少しずつ練習を繰り返し回せるようになってきた。

考察

・教師が継続的に関わりながら喜びや悔しさなどの思いを共有することで、また挑戦してみようとする気持ちが出てきたのではないかと考えられる。
・幼児がやってみたい！と思えるような道具や場所などの環境を教師が意図的に設定することで主体的に挑戦したり、友達同士で関わり合ったりする場面が多く見られるようになったのではないかと考えられる。

【実践事例 2】生活発表会に向けて

（幼児の姿）

・コマ回しを発表会のプログラムに入れることになり、挑戦する子が増えてきた。友達の姿から刺激を受けて色々な技に挑戦しようとする子がいる。

・フラフープバトルでは幼児の要望で男女に分かれて行うことになったが、女子が２名少ないため男子の勝利が多く、悔しさから女子が泣いてしまうことが多々ある。

（教師の願い）

・友達と一緒に最後まで取り組む楽しさや達成感を味わってほしい。

・発表会に向けて練習する中で、自分なりに工夫して遊ぶ楽しさを味わってほしい。

教師の関りと援助（△環境構成、〇教師の援助）

△お手本となる技などを見せて、目標となるようにする。

△プログラム内容などは幼児と相談しながら、自分たちで見通しをもって進めていけるようにする。

〇頑張って取り組んでいる姿や出来るようになったことを友達同士で認め合ったり、他児への刺激となったりするように披露する場をつくる。

〇発表会練習の最後にはサークルタイムをつくり、良かったところや改善点などを友達同士で確認し合って次に繋がるようにする。

幼児の変容

・教師がコマの技を実際に見せながら一緒にバトルを楽しむ中で、「先生に負けないように練習しよう」と取り組む姿が見られるようになった。

・自分たちでコマの回し方を教え合ったり、紐の巻き方をゆっくり見せ合ったりして友達同士で教え合う姿が見られるようになった。

・コマの技に必要な的を自分たちで製作し、的に入れたりバトルしたりすることを繰り返し楽しむようになってきた。

・頑張っている友達の姿を認めることができ、「次は勝てるよ！」など友達同士で励ましの言葉をかけられるようになってきた。

・サークルタイムの中で人数が均等でないことに気がつき、お互いで相談して均等になるように人数を調整する姿が見られた。

考察
・幼児が主体となり遊びや発表会の練習を進める中で必要なものに気づいたり、もっと遊びが楽しく充実したりする方法を考えるようになってきたのではないかと考えられる。
・サークルタイムを取り入れたことで遊びについて振り返ることができ、気づきに応じて遊びを展開させることが出来るようになってきたのではないかと考えられる。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・幼児が主体的に必要な道具や環境を考え、準備しようとする姿が見られるようになってきた。
・前向きな言葉や表情が多く見られ、意欲的に遊びを楽しむ姿が多く見られるようになった。
・友達の良いところに気づいて、前向きな言葉をかける場面が増えてきた。

②課題

・幼児が主体的に遊びを展開することが出来るようになってきたため、より安全面に配慮した環境構成を行うようにする。

③　実践を通した自身の気づき、考え

・幼児が興味をもって取り組む活動では、継続して主体的に取り組む姿が見られたことから、幼児が遊びや活動に興味・関心を抱き、主体的に関わることができる環境構成や援助が大切であることに気づいた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・幼児の姿を見取り、生活経験や発達に応じて一人一人の思いが様々な形で表現されていることを理解し、丁寧に関わっていくようにする。
・サークルタイムを積極的に取り入れる中で、より幼児が主体的に活動を進めていけるように援助の仕方を工夫する。
・幼児が主体的に遊びや生活を進めていけるように幼児の発達や興味・関心をしっかりと捉え、環境の再構成や援助の仕方など職員間で連携を行っていくようにする。
・幼児の育ちを進学先の小学校教諭と共有し、今後の生活に繋がるようにする。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年　幼稚園教育要領解説　株式会社フレーベル館
・幼稚園教育要領ハンドブック２０１７年告示版　Gakken

様式３【課題研究レポート】

思いを伝え合いながら活動する楽しさを味わう環境構成と援助の工夫

−友達と様々な活動や遊びを通して−

嘉手納町立嘉手納幼稚園　教諭　島袋　由利香

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領』の領域「人間関係」の中で、「教師や友達と共に生活する中で、次第に互いの心情や考え方などの特性にも気づくようになり、その特性に応じて関われるようになっていく。そして、遊びの中で互いのよさなどが生かされ、一緒に活動する楽しさが増してくる」と記されている。幼稚園において、教師や友達と様々な心を動かされる出来事を共有し、興味や関心が広がり自分から何かをしようとする意欲や友達のよさにも気付けるよう援助することが重要であると考える。

本学級は、５歳児（3 年保育 8 名、2 年保育 3 名、1 年保育 15 名）男児 12 名、女児 14 名、計 26 名が在籍している。戸外遊びが好きで、身体を動かしたり、砂場遊びに興味を持つ子が多いが、集まりの場面で手遊びをして話に集中できない姿や友達とのトラブルの際に意見の食い違いから思いが伝わらないことや遊びに継続性がなく遊びが発展しないなどの姿がみられた。

そこで、幼児同士が思いを伝え合いながら、友達と協力して様々な遊びや活動に興味を持ち、楽しさや達成感、充実感を味わってほしいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①生活や遊びの実態把握

幼児の興味や関心を捉え、幼児理解に努める。

②思いを伝え合う楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫

生活や遊びの中で経験したことや、考えたりしたことを自分なりの言葉で伝えられる場のもち方を工夫し，友達の思いや考えに触れる機会を設けていく。

③幼児が活動する楽しさを味わえるような環境構成と援助の工夫

様々な活動や遊びから充実感や達成感を感じられるよう用具や場を設定するなど環境を構成し工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】

《幼児の姿》

・友達と誘い合ってよく遊んではいるが、同じ遊びばかりでなかなか遊びが発展せずにすぐに違う遊びに移動したり、遊びの連続性がなかなか見られない。

・泥山には行くが、掘ったり少し触っただけで満足している子が多い。

《教師の願い》

・継続して遊びを続けていき発展する楽しさや様々な発見、友達と言葉のやり取りをする楽しさを味わってほしい。

《教師の援助と関わり》

〇子どもたちの興味や関心を見取り、共感していく。

〇教師も一緒に遊ぶ中で、友達とのやり取りを共感したり、友達に思いを伝えるために言葉を補ったり、振り返りの中で共有していく。

〇子ども達がじっくりと遊べるよう時間と場の確保をする。
〇暑くてなかなか遊べないので、日陰ができるよう環境を見直し、日陰を増やしていく。
〇友達が作った泥団子を飾ったり、泥団子の作り方や絵本等を準備し、友達の遊びに気付き互いの遊びに興味が持てるようにしていく。

【幼児の変容】
・泥遊びに興味を持つ子が増え、毎日友達を誘い合って泥の感触を楽しむ子が増えてきた。
・泥団子作りに興味を持ち、作り方を見て真似たり、サラサラの砂が必要だからと試行錯誤しながら砂を探し、試したりする姿が見られた。また、泥団子をピカピカにするためにといろいろ考え島草履で擦ったり、自分の膝で擦ってみて「ピカピカになった～」と喜ぶ姿が見られた。
・ごっこ遊びも見られ、クッキー屋さんでは、「クッキーは焼かないといけないから太陽に当てておこう」「いらっしゃいませ～」などごっこ遊びを喜んでやり、友達との会話のやり取りを楽しむ姿が見られた。

【結果と考察】
・泥団子作りから「こんな楽しい遊び初めてやったー、毎日やりたい」と子どもの声があり満足感や充実感を味わっているんだなと感じることが出来た。
・泥団子作りを通して、自分たちで考え試行錯誤し友達と言葉のやりとりを通して遊びが発展していく楽しさを味わえたのではないかと考える。

【実践事例２】
《幼児の姿》
・レゴやLaQで遊ぶのが好きで個々で組み合わせて楽しんでいる様子が見られる。
・作ったら作りっぱなしで飾って満足し、そのまま展開もなく忘れられたりすることが多くある。
・自分の思いを伝えられず、見ているだけだったり、黙って友達が使っているおもちゃを取ってしまいトラブルになることが見られる。

《教師の願い》
・思いを出し合って友達と一緒に遊びを進めていく楽しさを味わってほしい。
・遊びが続いて繋がっていく面白さや充実感を他の友達と共有する経験を大切にしていきたい。

《教師の援助と関わり》
〇教師も一緒に遊びに入り、友達のやり取りを共感したり、思いを代弁したりしながら遊びを進めていけるようにしていく。
〇みんながレゴやLaQ等で作った作品を写真に撮り子ども達の見えるところへ掲示していく。
〇学級での振り返りの場で話題に取り上げ他の友達とも遊びの共有ができるように工夫する。
〇遊びが展開していけるよう、時間の確保をし、必要に応じて材料等を一緒に準備していけるようにしていく。

【幼児の変容】
・友達が作った作品に興味を持ち、「どうやって作ったの？」「作り方教えて？」「一緒に作ろう？」等と友達と関わっていく様子が見られた。

・掲示した作品の写真を見て「これすごいなー」「〇〇さん作るの上手だな」と友達を褒め、認め合う姿が見られた。
・友達同士で協力してピラミッドを作ったり、アニメのキャラクターを作ってごっこ遊びする姿が見られた。
・女の子では家を作り、そこからお店などを増やして展開し、大きな町を作り友達同士で相談し次はどうしていこうか話し合いながら作り上げていく様子が毎日続き、継続して遊びこんでいた。
・側で見ていた子も「一緒にあそんでいい？」「これ作ったから一緒に遊ぼう」と声を掛け合い遊ぶ姿が見られた。
・振り返りの場で作品を紹介したりと前に出て発表する機会が増えたことで、前に出て話をするのが苦手な子も、友達と一緒に発表することができた。

【結果と考察】
・友達の作品に刺激を受け、自分も作ってみようと友達に声を掛け、教えてもらったりする中で友達と一緒に作る楽しさを味わったのではないかと考える。
・友達と思いを伝え合いながら遊びを展開していくことで、自分の思いが相手に伝わった喜びや友達と協力する楽しさや充実感を味わったのではないかと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

今回の研究を通して、友達と遊びはするがなかなか遊びが発展せず遊びの連続性が見られなかったり、作って満足したり、思いがなかなか伝えられない等の姿があった。教師が一緒に遊びに入って楽しさを伝え、環境を整えていき、言葉で思いを伝え合う経験を遊びや生活の中で繰り返しやっていくことで、遊びの連続性が出てきて、自分たちで考えた遊びが展開し、友達と思いを伝え合いながら遊びが発展していく充実感や一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができたのではないかと感じる。

実践を振り返る中で、『幼稚園教育要領解説』の第２章「人間関係」の領域の部分をもう一度見返してみた。そこには「幼児同士がイメージや思いをもって交流し、それに向かって遊びや活動を展開する中で、幼児同士がともに工夫したり、協力したりするようになってくる。自分らしさを十分に発揮し、次第に仲のいい友達と思いを伝え合いながら遊びを進めるようになる」とあった。これまでの実践で一緒に楽しく遊んだり活動することを通して、イメージを伝え合いながら、時には思いの違いに気付いたり友達と折り合いをつけ、遊びが発展していく楽しさを味わい、充実感や満足感に繋がることを再確認した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

今後の実践に向けて、幼児が楽しんで活動を取り組むためには、まずは「やってみたい」という興味や関心が必要だと感じた。幼児が心動かされる体験を重ねられるよう今何に興味や関心を持っているのかをそばで感じ取り環境を構成するとともに、幼児の声を聴きながら一緒に活動を進めていくことが大切である。
また、相手に思いを伝え合いながら遊びを進めていく楽しさがさらに味わえるよう、幼児同士で話し合ったり、自分と他の人の気持ちや感じ方が異なることに気付いたり、考えたりできるような援助を工夫していきたい。

〈主な参考文献〉
・文部科学省 平成３０年 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
・武藤隆 監修 ２０１７年 『幼稚園教育要領ハンドブック（２０１７年告示板）
・沖縄県立総合教育センター 令和４年度 「幼稚園新規採用教員研修課題研究報告書」

様式３【課題研究レポート】

友達と関わる楽しさを味わうことが出来るための環境や援助の工夫

―協同して遊ぶ活動を通して―

嘉手納町立嘉手納幼稚園　教諭　氏名　長浜　梨香

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』第２章「人間関係」の領域、内容(７)「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」とあり、「友達と様々な心を動かす出来事を共有し、互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが行き交うことを通じて、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切である」とも記されている。

本学級は、男児 12 名・女児 15 名・計 27 名のクラスで全員が集団生活を経験している。ほとんどの幼児が好きな遊びをみつけ気の合う友達と楽しんでいる一方で、友達の輪の中に入れず傍観している子や友達と関わらず、教師や支援員の傍にいる子や教師や支援員を遊びに誘い友達との関わりが広がらない子もいる。このような実態を含め、友達と一緒に様々な遊びや活動を通して関わる楽しさを味わえるようにするためにはどのような援助と環境構成の工夫が必要かを研究したいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

1　友達との関わりがうまれる援助の工夫

・幼児の実態把握をし、友達との関わりを広げ深められるよう、様々な種類や形態の学級活動を取り入れる。
・学級での集まりの持ち方を工夫し、友達のやっていることに気付き、関心をもつことができるような場を設ける。

２　友達と一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成の工夫

・遊びの中で幼児が「嬉しい、楽しい、困った」などの多様な感情体験をし、その振り返りで子ども達から考えを取り入れながら環境を構成する。
・遊びが継続、発展できるように工夫していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１　「集団遊び」

《幼児の実態》

・積極的に友達と関わる幼児が見られる一方で、1 人遊びを行う子や周りの遊びの様子を傍観したりする姿も見られる。
・やりたいことや好きな遊びが見つけられず、隣のクラスを見に行ったり教師や支援員の傍で遊びに誘われる事を待っている姿が見られる。

【教師の願い】
・友達と関わり、集団で遊ぶ楽しさを味わってほしい。
・周りの友達の遊びに興味を示し、一緒に「やってみたい」といろいろな遊びに挑戦してほしい。

＜教師の関わりと環境構成の工夫＞

・友達に親しみを持てるように、集団遊び(椅子取りゲーム、なべなべそこぬけ、だるまさんがころんだなど)を取り入れる。

・子ども達と一緒に遊ぶ中で興味・関心を捉え、友達とイメージを共有したり、子ども達同士の関わりを繋いでいけるようにし、友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるような言葉がけや援助を行う。

・子ども達との対話を通して「やりたい」と思った時に実現できるような場やものを一緒に整えていけるようにする。

＜園児の変容＞

・友達の遊びに興味を示し一緒に「やってみよう」といろいろな遊びに挑戦するようになってきた。(写真①)

・いつも遊んでいる子だけでなく、同じグループの子とも自分の思いを伝えあう姿が見られた。(写真②)

・友達と関わりが増えた事で、自分の思いを押し通そうという気持ちが強くなっている子も見られた。(写真③)

①

足の裏を合わせるといいよ！

②

③

《結果・考察》

・共通の遊びの中で関わることで気の合う友達だけでなく教師以外の関わりの少なかった友達へ目を向ける機会が増え、「一緒にやってみよう」という気持ちが出てきたのではないかと考える。

・少しずつ友達の輪が広がりみんなと遊ぶことが楽しく、心地よいと感じられるようになってきたのではないかと考える。

・自分の意見を通そうとする子には、他者の思いにも気づかせるような援助の工夫が必要である。

実践事例２　「お化け屋敷ごっこ」

《幼児の実態》

・友達と好きな遊びを行う中で、自分の思いを言葉や行動で伝えようとするがうまく伝わらず友達とぶつかることもある。うまく伝わらないと遊びの途中でも輪から抜けてしまい、友達との関わりが広がらない。
また、教師の指示や援助を待っている姿が見られたり、いろいろな遊びに目移りし、遊びの連続性が見られない。

【教師の願い】
・共通の目的を持って活動を展開していくことで、充実感や達成感を味わってほしい。
・友達と一緒に遊びながら自分の気持ちを言葉で伝え、相手の話を聞けるようになってほしい。
・自分に自信をもって感じたことを話してほしい。

＜教師の関わりと環境構成の工夫＞

・必要な素材を子ども達が、自分で選んで手に取れるように教材教具の配置環境を再構成する。

・子ども同士で工夫したり協力している時や必要な援助以外は見守り、試行錯誤する姿ややり遂げた姿を大いに認めていく。

・クラスでの集まりの際に、自分の思いを発表する場を設ける。

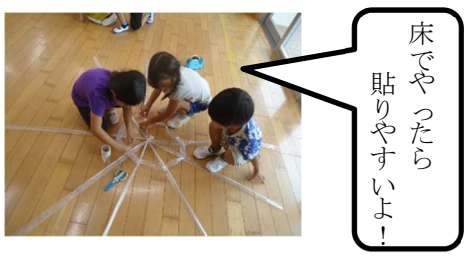
・子ども達が考えた遊びの予想図や遊びの様子をクラスの集まりの場で紹介することで、友達の遊びの様子に気付いてもらえるようきっかけ作りをする。

＜園児の変容＞

・以前は「先生やって」とすぐに教師を頼っていた子ども達も、イメージ通りに設置できなかったりうまくいかない場面でも「最後までやりたい」と諦めずにやり遂げようとする姿がみられるようになった。

・以前に比べるとトラブル時、子ども同士で解決しようとしたり、解決して一緒に遊びを楽しむ場面も見られるようになったり、「〇〇の作ったものおもしろい」「ここにやるのがいい考え」など友達のアイディアを認め合い、楽しむようになった。

・「完成したらみんなを招待したい」と目標を立てたことで継続して遊びを進められるようになってきた。



《結果・考察》

・自分の考えを言葉で相手に伝わるように話せるようになり、認めて貰えた喜びや相手の話も認め受け入れることが出来るようになってきた。

・イメージを出し合うことで遊びが発展していく楽しさや充実感を感じることができるようになってきた。

・様々な教材や教具を使い、イメージするものを自分たちの力で作り上げることの楽しさを味わうことが出来るようになってきた。

Ⅳ　実践の振り返り

・集団遊びを取り入れたことで友達と楽しい時間の共有をすることができ、クラスの一員としての繋がりや、友達との信頼関係を築くことができ、遊びを広げられたのではないかと考える。友達と一緒に活動を楽しむためには、友達への興味関心を広げ、共通の目標を達成するために子ども達自身がやってみたいと思えるような環境の構成や声かけを行うことが大切だと改めて実感できた。

・幼稚園教育要領第２章「人間関係」には、「人と関わる力を育む上では単にうまく付き合うことを目指すだけではなく、幼稚園で安心して自分のやりたいことに取り組むことにより、友達と過ごす楽しさを味わったり、自分の存在感を感じたりして、友達と様々な感情体験の交流をすることが大切である」と記述があるように集団遊びや興味のある遊びを通して友達と様々な体験をし、喜びや悲しみなど多様な感情体験を味わうことが出来た。そこから友達の良さに気付き、一緒に遊ぶ楽しさを味わうことが出来たのではないかと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・幼児との対話を通して、幼児が今何に興味があるのかをきちんと捉え、幼児理解を深めること、またそれにあった環境の構成と適切な援助ができるように自分自身も積極的に学んでいくことが大切だと感じ、今後も学びを深めていきたいと思う。また、自分の気持ちをうまく表現できない子もいるので、思いを受け止めながら無理なく相手に伝わるように表現する方法を伝え、自主的に友達と関わろうという気持ちが芽生え、友達とのつながりがもっと深まるような援助の仕方を工夫し実践していきたいと思う。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省　平成３０年 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館

監修　無藤　隆　　幼稚園教育要領ハンドブック　２０１７告示板　　Gakken

様式３【課題研究レポート】

好奇心・探求心をもって遊ぶ子を育むための環境の工夫

――絵本の世界を通したコーナー遊び―

沖縄市立　宮里幼稚園　教諭　氏名　嘉陽　愛乃

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境は少子化や核家族化、情報化社会が急速に発展し、身近な自然に触れて遊んだり、発見を楽しんだりするなどの直接体験や感動体験の機会が少なくなっていると感じる。

学級の幼児の実態として５歳児（1年保育）計23名が在籍し、明るく人懐っこい一方「やりたい遊びがない」「やったことないからしない」など物事に対しての興味が薄い様子が見られたり、遊びを転々とし持続しない子の姿も見られたりする。また、絵本の読み聞かせを行う中で興味が薄く、周りの子とおしゃべりを始めたり、絵本貸し出し時には「見たい絵本がない」「つまんない」等と発言したりする等、絵本の世界に親しみをもてない子の姿もある。

幼稚園教育要領解説の第２章第２節「言葉」の内容（9）にて「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう」とある。また同じく「環境」においても、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」とあり、幼児期に育つべき態度であることを示唆している。

そこで、幼児自ら選択し、集中して取り組み様々な活動を実現できるようなコーナー遊びの環境を整える事で好奇心や探求心に繋げていきたい。また、季節に合った絵本や親しみやすい物語を教師が意図的に読み聞かせをしたり、遊びに取り入れたりすることで幼児が絵本の世界をイメージしながら「この遊びを試してみたい」「やってみたい」と積極的に環境に関わり、好奇心・探求心をもって遊ぶ子を育みたいと考えテーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①絵本の世界をイメージしながら、心動かす体験や好奇心・探求心が育まれる環境構成の在り方と教師の援助と工夫

絵本の世界をイメージながら「やってみたい」「試してみたい」と感じ、幼児が主体的に環境に関わることのできる用具や場を設定する。

②自分の思いを伝えたり相手の思いを聞きながら、遊びを進めることのできる援助の工夫

遊びを進める中で自分の力だけでは展開が難しかった時に、友達に思いを伝えたり相手の思いを聞きながら、一緒に取り組む必要性や大切さを感じることができるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「自分だけのミックスジュースを作ろう～色水遊びを通して～」（６，７月）

（幼児の姿）
・砂場遊びを楽しむ子の中に摘んできた花びらを使って、ままごと遊びを楽しんでいるが花びらがしぼんでしまうとそのまま捨ててしまう子の姿があった。
・チョウマメやアサガオなどの世話を行う中で、花に親しむ姿が見られた。
・特定な遊びを楽しみ、遊びの広がりが薄い子の姿がある。

☆教師の読み取り　〇教師の願い
☆身近な植物に興味、関心をもっている子の姿が増えてきた。
〇興味、関心を持っている草花を使い遊びが広がるようにしたい。
〇しぼんでしまった花びらも、遊びに使えることができることを知ってほしい。
〇様々な遊びに興味をもって取り組んでほしい。

（教師の援助）
・ままごと遊びで使い終わった花びらを、水遊びを楽しんでいる子達の近くで教師が花びらを擦って色を出してみることにした。その様子を見ていた数名が「先生きれいな色だね」と興味を示す姿があったので「しぼんでしまったアサガオの花びらを試しに擦ってみたよ」と伝えたところ「やってみたい」との声があがった。そこでじっくり遊び込むことができるよう戸外の環境を整えたり一緒に色水で使えそうな花を探したり、試行錯誤しながら色水遊びが楽しめるよう時間の確保をおこなった。
・一生懸命に試しながら遊びを楽しむ子もいれば、友達や教師が「やってみる？」と誘っても「つまんなそうだからやらない」と断る姿もあった。そこで帰りの会にて「ポポくんのミックスジュース」の読み聞かせを行うと共に、色水遊びを楽しんでいる子達の色水を発表する場を設けた。

どのアサガオにしようかな

友達と力を合わせて

どんな色がでるか実験中

（幼児の変容）
・特定な遊び（虫捕りなど）にしか興味を示さなかった子達が「やってみたい」「どうやってするの？」と色水遊びに興味を示すようになった。
・登園して直ぐに「ポポくんたちみたいなミックスジュース作りたい」と活動を楽しみにする様子が見られるようになった。
・「今日は、ぶどうのジュース作ろうよ」等と友達と一緒に遊びを楽しみイメージを共有し合う姿が見られるようになった。

（考察）
・実体験が少ない子やイメージがつきにくい子達へ「色水遊び」の紹介をすると共に「絵本」を活用したことで興味をもつようになったのではないか。
・戸外の環境構成としてテーブルを設置したり、子ども達が直ぐに手に取ることのできるようプリンカップやトレーなどの様々な素材を用意したり、テントを張って影をつくるなどし「遊び込める環境」を意図的につくることで子どもが主体的に遊ぶことができたのではないか。

【実践事例 2】「海賊ごっこを楽しもう」（10 月）

（幼児の姿）
・10 月に入り、学級に飾ってあった手作りの魚のカーテンを見た K さんの「なんだか水族館にいるみたい」の一言により女児数名で「水族館作り」が始まった。水族館作りから数日経った頃、R さんが「何だか海にいるみたい」の一言により海作りへと発展。また同時期に「船に乗ったよ」と一人の女児が発表した事をきっかけに「船作り」も始まった。しかし、どう作ってよいか分からず遊びが続かない日が続き「船作り」への興味が薄くなってしまっていた。また遊びたい物が見つからずに周りを歩き回ったり、遊びの様子を傍観する子の姿もあった。

☆教師の読み取り　〇教師の願い
☆興味、関心をもって遊びを楽しもうとする姿が見られるようになってきた。
☆自分なりのイメージを相手に伝えることが難しい様子がある。
〇思いを伝え合いながら、自分達で遊びを進められるようになってほしい。
〇絵本の世界をイメージし、皆で遊ぶ楽しさを味わってほしい。

（教師の援助）
・どうすれば子ども達が好奇心をもって再び「船作り」へと取り組むことができるかを構想し環境の見直しを計る。運動会練習のダンス曲で使われていた「海賊」に焦点をあてることで子ども達の生活から遊びへと繋げていく。
・海賊に関する写真や本を準備すると共に、帰りの会にて「わんぱくだんのたからじま」の読み聞かせをおこなうことで「海賊」を知らない子達がイメージをもてるようにした。
・絵本だけではなく集団遊びとして「だるまさんがころんだ～海賊バージョン～」を行い学級の皆で楽しむ時間をつくった。

ドクロはこうやって描くんだよ

（幼児の変容）
・運動会の曲と同じように「宝箱が必要だよ」「海賊船の他にも海賊帽子もあったらいいね」など子ども達同士で話し合いをしながら遊びに必要な道具を作る姿が見られるようになった。
・「遊ぶ物がない」と歩き回っていた子も「海賊船で遊ぼう」「先生、だるまさんがころんだの海賊バージョンをみんなでやりたい」と目的をもって登園する様子が見られた。

（考察）
・子ども達のこれまでの経験や生活に関連のある絵本を読み聞かせすることでイメージがつきやすかったのではないか。

・子どもの興味・関心が何処に向いているかを見取ることで、その姿に合った環境構成や、教材教具の準備ができたのではないか。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・絵本の世界を通したコーナー遊びを取り入れる事で、時期に合った遊びの展開が無理なく行なえた。
・特定な遊びにしか興味のなかった子達も、自分なりのイメージをもって様々な遊びを楽しむようになった。
・絵本に興味をもたず「見たい本がないから借りない」と訴えていた子が、絵本の世界をイメージした遊びに触れることで「先生、この絵本面白そうだよ」と興味をもち、嬉しそうに絵本を借りるようになった。
・「次はこれを作ろう」「一緒にやろう」と友達同士誘い合い、自分達で遊びを進めようとする姿が見られるようになった。
・「何故、この色になるのだろう？」「海賊船ってどんな形をしているの？」「旗って何で出来ているの？」など疑問に感じたことや気付いたことを絵本や図鑑を見て考えようとする姿が見られるようになった。

②課題

・時間の確保が難しく思う存分遊びを楽しむ事ができない時があったので、時間をしっかりと確保し遊び込むことができるようにしたい。
・体験させたい思いが強くなりすぎてしまい、時期に合せたコーナー遊びをいくつか取り入れたが広がりが薄くなってしまったので絵本の世界を充分に体験できるような保育の展開を今後、考えていく。

③実践を通した自身の気づき、考え

・研究を通して、絵本の世界を通したコーナー遊びの楽しさや難しさを知ることができた。子ども達の心の動きを読み取り、保育にどう繋げていくことで楽しく遊びが続いていくかなど試行錯誤の日々であった。また研究をするにあたり３つのポイントを意識しながら保育を行った。
１つ目は一緒に遊びを楽しむ中で「何処に関心が向いているか」「どのように遊びが展開されているか」など子どもの動きを見取ることで必要な援助が明確になる。また、教師主体ではなく子どもと共に遊びを楽しむことのできる「共主体」を意識する。
２つ目は実体験の少ない子、興味が薄い子へは教師が遊びを楽しむ様子を見せるなどして刺激を与え「やってみたい」「試してみたい」と感じることができるようにする。
３つ目は「沢山の絵本を読み聞かせすることで子どもがイメージを持ちながら遊び込めるようにする」を念頭に置いて日々の保育を楽しんだ。
今回の保育で学んだことを今後の保育にしっかりと活かし、引き続き「好奇心・探求心をもって遊ぶ子」の育成に取り組んでいきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・今回の研究では時間の確保が上手くできず遊びが十分に展開できなかった部分があるので、子ども達がじっくりと遊び込む事のできるように環境構成や時間の工夫をしていく。
・子どもの心の動きや何に興味を示しているのかが分かるようウェビングマップの活用や、リフレクションを通しての職員間の連携をし、育みたい幼児の姿へと保育ができるようにする。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成30年　「幼稚園教育要領解説」フレーベル館
・大好きな絵本でもっとあそぼう！絵本から広がるあそび大集合　石井　光恵・甲斐　聖子　著　ナツメ社
・幼児保育　子どもが主体的に遊ぶために　吉本　和子　著　エイデル研究所

様式３【課題研究レポート】

充実した園生活を送る子をめざして

～　発達に合った保育を通して　～

宜野湾市立志真志幼稚園　教諭　氏名　比嘉　綾乃

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼児教育要領の総則には「幼児の主体的な活動としての遊びを大切にする」とともに、「幼児の個人差や発達の段階、生活経験に応じて、適切な指導を行う」ことの重要性が明記されている。また、どの幼児にとっても充実した園生活となるために、特別な配慮を必要とする幼児への指導のための指導計画の作成についてや日本語の習得に困難さがある幼児への指導内容や指導方法の工夫を行うことについても示されている。

本学級の幼児の事態としては、５歳児（２年保育）男児９名、女児 12 名、計 21 名在籍し、半数以上は年中児から進級し保育２年目の子や、近隣の保育園からの入園児が多い。その中で、家庭からの入園で初めての集団生活の子や、外国籍の子もおり、感情の面、友達との関係、気持ちの表出の面からの経験の差が否めない場面も多々見られている。他児と関わり、遊びや生活が広がっていくために、言葉の果たす役割が大きいが、外国籍の子（今後Ａ児とする）については日本語の習得に困難さが見られ、発達への配慮も必要性を感じる。

そこで、本研究では言葉の習得の困難さや発達に課題がある A 児を抽出して、発達の過程を丁寧に把握し、個に応じた環境構成や援助を行う「発達に合った保育」を行い、個に応じた保育をすることで子どもが安心して自己を発揮し、友だちと関わりながら意欲的に園生活を送って欲しいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児の実態や発達を捉え、適した援助や関わりについて

幼児の興味関心や発達を把握し、信頼関係を築き、幼児が安心感のもと、自己を発揮しながら生活や遊びを楽しむことができるような援助、関わりを行う。

２　自己を発揮しながら遊びや生活を進め、友達と関わることの喜びや楽しさを味わうための工夫

その子が夢中になって楽しんでいることを子ども達と共有し、認め合える環境の工夫を行う。また、教師は一緒に好きな遊びを楽しむ中で、本児の興味関心や必要な経験を探り、友達と繋がるため適時適切な言葉かけをし、遊びが広がっていけるような援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【　実践事例①　】　「　Ａ児　気持ちの表現の変容　～安心できる環境作り～　」

≪　幼児の姿　≫　　‥　１学期の様子　‥

・好きな遊びを仲良しの友達と遊ぶ姿もあるが、弟（年中クラスに入園）が泣いている様子を見たり、不安そうな様子を感じたりし一緒に過ごす時間が多い。
・友達との関わりが減り、弟と英語でのやり取りが主になっている。
・友達との関わりや兄弟喧嘩の中でも我慢することが多く、気持ちを表現したり声にすることがなかった。

≪　教師の願い　≫
・弟を思いやる気持ちを認めてあげたい。しかし、自分のやりたいこともできるよう自分の思いも大切にして、友達とも関わる時間を持ってほしい。
・嫌だという気持ちの表現方法を知り、表現しても大丈夫だという自信をつけてほしい。
・日本語でのやり取りも楽しく感じてほしい。

≪　教師の援助と関わり　≫
・弟も一緒に遊び過ごす中で、教師を通して友達との関わりも持てるように友達と同じ空間を共有したり、時に簡単な日本語や英語で仲介したり言葉での関わりをしやすくする。
・弟を思いやる姿や、友達との関わり、気持ちを表現できたり伝える姿をコミュニケーションノートや写真を通して保護者に伝え共有できるようにする。
・「困った時にはhelp　me してね」と伝え、困った様子が見られた時には場に応じた簡単な日本語を知らせた。伝えてくれた時は認め、自信が持てるような言葉をかける。

コミュニケーションノートの利用

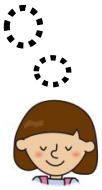
≪　幼児の変容　≫
・落ち着いた雰囲気の中で兄弟同士や友達と過ごし、遊びの関わりの中でも日本語で伝えようとすることが増え、その意思が伝わった喜びや褒められた経験から発声も大きくなった。
・トラブルが起きた際に、泣きそうな表情を浮かべながらも嫌だったことをジェスチャーで伝えるようになり、教師に励まされながらその場に応じた言葉を知り、言葉で伝えようとすることが増えた。
・仲の良かった友達以外のクラスメートからの、声かけや誘いのも頑なに拒否することが減った。

≪　結果と考察　≫
・兄弟共に過ごしながら、教師や友達と安心した雰囲気の中で遊びを楽しめるようになり、活き活きとした表情や声が聞こえるようになった。
・困った時、A児がhelpを出した時に対応できたことで教師に助けを求めてもいいということを感じ、適した対応を知る機会が増え言葉、日本語にする気持ちが高まったように感じる。また、その経験を通して友達と関わることにあまり抵抗を感じなくなったように思われる。

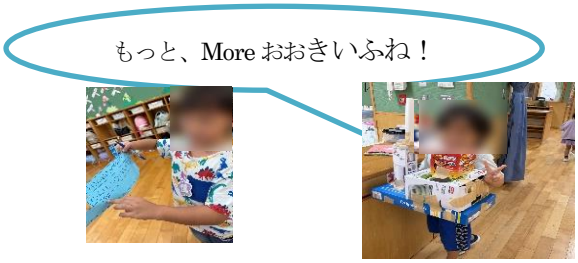
【　実践事例②　】　「　A児　好きな遊びを通しての自己発揮　～　船を作って遊ぼう　～」

≪　幼児の姿　≫　　‥　2学期の様子　‥
・ブロックや粘土で船を作ったり、船の絵を描き切り取って形にして楽しんでいる。
・先生とのやり取りで満足している。
・いろいろな素材に大きな船や船員の絵を描き表現することを楽しんでいる。しかし作ったものを捨てたり、片づけには壊してしまう。

≪　教師の願い　≫
・遊びを通してもっと友達と繋がってほしい。
・A 児の表現力をみんなに知ってもらい、みんなに認められる喜びを感じ自信に繋げてほしい。
・作った物を活かして、継続、発展した遊びの楽しさを味わってほしい。



≪　教師の援助と関わり　≫
・A 児の興味が高い“船”をいろいろな素材で作って表現できるよう、画用紙や段ボールなどの教材を準備し、教師も一緒に作り楽しむ。
・船を置く海を作って仕切りを設置し、続きができるような場所を設ける。
・クラスでの振り返りなどで本児の作品を紹介し、作っている様子や楽しんでいる姿を写真で共有していく。



≪　幼児の変容　≫
・船の絵を描いて切り取って張り付けていたり、作っていた様子をクラスに紹介すると翌日もいろいろな箱を組み合わせて「もっと、ｍｏｒｅ大きい船！」と教師に伝えて紹介している。
・段ボールを使って作る様子をみんなに紹介してもらい、恥ずかしそうにしながらも嬉しそうな表情で作品を披露していた。
・いろいろな素材で作ることを楽しみ、途中で片付けになっても海の場所へ停泊させまた続きをしたいという様子が伺えるようになった。

≪　結果と考察　≫
・A 児の興味がある“船”作りをいろいろな素材で楽しみながら、自分で作ったり友達と共有する経験ができ表現する面白さを感じたようだ。またそのことを紹介してもらえ、楽しんでいることを認められ自信に繋がったようである。安心して置いておける場所があることで、遊びを継続できる、明日もしたいという気持ちが高まり、翌日には弟を誘って遊ぶこともあった。継続した遊びを体験しているようである。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・教師や友達と安心して過ごせる環境ができ、大きな声でリアクションをするなど自己発揮しながら遊ぶ姿が見られるようになり表情が明るくなっている。
・自分が不快だと感じる事柄が起きると、「やめて！」「ノー！」と言葉で伝えたり手を振ってジェスチャーでしっかりと意思表示をして伝える姿が見られている。
・教師が A 児の楽しんでいることをみんなに紹介し、みんなが興味を示したことが嬉しかったようである。その経験が自信となって表現する意欲に繋がったように感じた。そのことを経て、２学期終了当日にクラスで振り返り“２学期に楽しかったこと”の発表をすると、自ら手を挙げて「船作りました」と日本

語で発表していた。

②課題

・環境構成の深化：本児が興味を持った「船作り」を継続できるよう、海の場所の設置や素材の準備を行ったが、今後はそこから友達との関わりが自然に生まれるような仕掛け（共同で使う大型の素材や、役割分担が生まれる場作り）をより工夫していく必要がある。

・満足感を支える継続性：遊びを中断せず翌日も継続できる環境作りは有効であったが、遊びがマンネリ化せず、さらに思考力や表現力が深まるような新たな素材提示や情報の提示をタイミングよく行うことが課題である。

③実践を通した自身の気づき、考え

・A 児が戸惑わないようにと教師が先回りして手を差し伸べたり、声をかけることが多かったように思う。友達との関わりが広がるよう、教師は困った場面で A 児からの発信や自分で考え試行錯誤することをじっくり待つ援助が大切だと感じた。

・教師との信頼関係や「自分の作品が認められた」という自信が、不快な時のはっきりとした意思表示や日本語での発表に繋がることを再確認した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策

・対話を生む環境構成：本児１人の世界で完結する遊び環境だけでなく、「ここを持ってて。」などのやり取りが必要な共同制作のきっかけとなるような環境を整え、子ども同士での関わりが生まれるようにする。

・段階的な言語支援：困った時の声だけでなく、遊びの中で自分のイメージを友達に伝えるためのジェスチャーを、遊びの流れを止めない程度にさりげなく提示し、自信を持って関われるよう援助していく。

○今後取り組んでいきたいこと

・本児の作品紹介や写真での共有を継続し、クラス全体が“違いを認め合い、互いの良さを喜び合える”となるよう、一人ひとりの良さを丁寧に見ていきたい。また、園での変容や頑張りをコミュニケーションノートや写真を通して保護者と細やかに共有し、家庭と園の両方から子どもの自己肯定感を育む支援に取り組んでいきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　　平成３０年 幼稚園教育要領解説　　株式会社フレーベル館

友達との関わりを楽しみ集団の中で共に育つ関係性について考える
―子どもの興味や発達を捉えて―

宜野湾市立はごろも幼稚園　教諭　堅　はつみ

Ⅰ　テーマ設定の理由

子どもは、友達関係や集団生活を通して、コミュニケーション能力や社会生活を営む上で必要なスキルを学んでいくと考える。しかし、近年、少子化や核家族化の進行、そして遊びの多様化により、子どもたちが異年齢の集団や地域の子どもたちと自然に関わる機会が減少している傾向にある。このような状況において、幼稚園が提供する集団生活の場は、子どもたちが社会性を育む上で極めて重要な意味を持つと考える。『幼稚園教育要領』序章第２節の２「幼稚園の生活」（１）において、「幼児は他の幼児と支え合って生活する楽しさを味わいながら、主体性や社会的態度を身に付けていくのである」とあり、「幼稚園において同年齢や異年齢の幼児同士が相互に関わり合い、生活することの意義は大きい」と明記されている。

本学級は５歳児（支援を要する３名を含む）３５名が在籍している。その中で私の担当する支援児の１名は、集団生活が初めてであり、全体的な精神・発達の遅れがあり、言葉も不明瞭であるためコミュニケーションの困難さが見られた。日常生活動作はほぼ介助が必要である。入園当初は、緊張した面持ちではあったが、徐々に友達との関わりに楽しさを感じており、自ら関わろうとする姿も見られるようになった。また、周りの友達も本児に声をかけたり、手伝いをしたりしながら互いに触れ合いを喜ぶ姿が見られた。

そこで、本児が意欲的に友達と関わり、集団の中で「自分も大切な一員である」と感じながら育っていくような具体的な援助のあり方を模索していきたいと考え、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①子どもの実態や発達を捉え、適した援助や関わり方の工夫について

多面的、多角的な視点から子どもの興味、発達を捉え、援助や関わり方を考えていく。

②友達との関わりを楽しみ、集団の中で過ごすための発達に合った援助の工夫について

友達と共に生活や遊びを楽しみ、関わりを広げていけるように幼児の内面理解に努め、安心できるような環境作りや他児を意識できるような働きかけを工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例①】友達と一緒は楽しいな！

≪幼児の実態≫

・歩行は他児に比べるとゆっくりであるが、１人で歩くことが出来る。しかし、靴を履く、洋服の着脱などにおいては介助が必要になってくる場面もある。
・初めての園生活の中で、友達と接することに嬉しさや楽しさを感じているようだが不安もある。
・教師と接するより友達と接することを好み、教室移動やクラス活動に参加する際、教師が誘っても拒否する姿が見られるものの、友達が誘うと嬉しそうに付いていく姿がある。

≪エピソード≫

小学校へ七夕飾りを見に行くことになった。クラスの友達が小学校へと移動していく中、本児（A）は年中組の保育室へと向う。「みんなと一緒に行こう」と声をかけるが「行かん！」と教師の手を振り払って拒否した。そこで、靴を取りにやってきたB児とC児に「Aも誘ってもらっていい？」と声をかけると「いいよ」と快く引き受け、「A、一緒に行こう」と手を引いてくれた。友達からの誘いに嬉しそうについていく A。誘うだけでなく、デッキに出ると「座って靴履くよ」「足出して」「自分で出来る？」と声かけを行い、教師の手を借りながら手伝ってくれた。その後も小学校までの道のりを両側から手を繋いで誘導し、着いてからも、遅れてしまった理由をきちんと説明しながら「ここに並ぶんだよ」と丁寧に知らせている。小学校からの帰り道でも両手を繋いで戻ってきた。友達に手伝ってもらったことが嬉しかったようで、「見て！友達と一緒だよ！」というように、満面の笑顔を見せる姿があった。

俺たちが手伝うよ！

転ぶからゆっくりな！

≪考察≫

・友達が誘い、移動や靴の着脱を援助し小学校へと促していた。このような仲間との繋がりの中で、本児は心地よさを感じ活動へ向かい、最終的には「友達と一緒だよ！」と教師に嬉しさを表現する姿は、「人との関わりの中で自己を表出する」社会性の育ちへの芽生えが感じられた。

・周囲の友達が自然な形で手助けし、必要な支援を行う姿から、仲間にとってもクラスメイトA児を知ると共に、自己有用感へと繋がる経験となったのではないか。思いやりや他者への理解が育まれている保育環境が生まれていると感じた。このような集団の中で、「助けてもらう喜び」や「仲間と一緒に活動する楽しさ」を重ねていくことが、今後の自立や社会性の育ちに大きく繋がっていくと考える。

【実践事例②】俺できたよ！～運動会を通して～

≪幼児の実態≫

・保育参観やお招き会など園行事への参加経験が１度もない。（体調不良や家庭の事情等）

・運動会への取り組みが始まると、興味を持っていた道ジュネーだったが、園全体の取り組みに不安を抱き登園時に泣き出すなど、拒否する姿が見られることもある。

・運動会練習を重ねる中で、環境の変化にも柔軟に対応し笑顔で参加する姿が見られていたものの、リハーサルでは大泣きし、担当教師を泣きながら追いかけている。

・リハーサル以降、他の教師と共に過ごすことを嫌がり、幼稚園で過ごす中で少しでも担当教師の姿が見えなくなると、泣きながら姿を探している。

≪エピソード≫

リハーサルまでは笑顔で運動会練習に参加していたこともあり、演技内容が嫌なわけではないと思えた。その日は登園時間がゆっくりであったため、時間の都合上運動場での受け入れとなった。気持ちが安定しない中での練習だったことが原因なのではと考え、保護者へ早めの登園をお願いし、幼稚園で情緒の安定を図ったあと練習に取り組めるようにした。すると、涙ぐむことはあるが大泣きし、担当教師の後を追うこともなく演技している。練習中は列に並ぶ、片付ける、かけっこの誘導など友達と関わる

機会を多く取り入れたこともあるのか、運動会本番では、教師からの「こっちに並ぶんだよ」との手招きに「こっち来ないで！」と友達の手を取って共に並ぶ姿が見られた。かけっこのゴール後はガッツポーズも見られ、家でも「俺できた！」「エイヤーやった！」と繰り返し訴えていたとのことだった。

≪考察≫

・登園から園生活が流れていることが大切であることを、保護者に理解していただき、共に進むことができた。それが本児にとっての成長に大きな影響を与えることができたように思う。これにより、本児は安心して演技に取り組み、「運動会」という大きな行事を楽しむことができた。心の安定を支えることの大切さを感じる場となった。

・運動会中の教師への「こっち来ないで！」という一言から、友達の手を取った姿に友達と「一緒に行動することを楽しんでいる」様子が伝わってきた。練習を通じて友達と同じ道具や衣装を着け、一緒に動いたりすることで、満足感を感じることができたように思う。

・運動会を終え、家でも繰り返し動画を見ながら「俺できた！」と自慢げに話す姿に、満足感を得ることができたと感じ、本児の中に「自信」と「自己肯定感」を育むことができた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・園生活の中での身辺自立の面においての支援や遊びの誘導など、教師が関わる姿を見せることで、分かりやすいモデルとなると共に他児に示すこととなり、子ども同士で生活に必要なことを補い合いながら、友達からの誘いや助けを受けることへの喜びを感じ「友達と一緒に！」という“友達との繋がり・関わり”が生まれた。

・大きな行事に向けた取り組みの中で、満足感を得て、自分に対する自信を高めることができた。

・自信を得たことで表情が豊かになり、教師や友達へ自ら声をかけて遊びに誘う姿が見られるようになった。語彙が増えたことで、簡単な言葉のやりとりも出来るようになり、「あそぼう」「やって」など自分の気持ちを言葉で伝えながら周りと関わる姿が見られるようになった。

②課題

・準備や片付けなど、生活の中で教師に促される、友達に手伝ってもらう場面が依然と多いため自立に向けた支援方法の工夫。

・園での活動において、周りから誘ってもらうだけでなく自ら積極的に関わっていける遊びの場の工夫と環境構成の工夫。また、自分の力で乗り越えていける、それに向けたアプローチの仕方、自分で出来るための関わり方を考えていく。

③実践を通した自身の気づき、考え

・機嫌が悪い時でも友達が遊んでいる姿を見たり、友達から誘ってもらえたりすると笑顔になる。園生活の中で友達と一緒に楽しむ姿に、関わりの中で大きな喜びを得ていると感じた。集団の

中で生活することを通して全体的な発達を促していきたい。

・安定した情緒で過ごすことが、活動への積極的な参加や自己肯定感の向上に繋がることを感じた。今後、情緒的支援を中心にしたアプローチがより一層必要であると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・生活面での自立へ向け、一つ一つ獲得していけるよう「自分でできること」の範囲を少しずつ広げていけるよう支援の工夫を行い、できたことを成功体験として実感できるよう褒めながら、「自分でできた！」という喜びを感じてもらうことで自立心を育む。

・自ら積極的に関わり、その結果得られる成功体験を増やすことでＡ児の世界を広げていくことができるよう、クラス活動や遊びなど友達と自然に関わる機会を増やし、一緒に何かを楽しむことで、「自分が活躍した」「頑張った」と感じられるようにし、次の活動への意欲を高めていくと共に、友達との関わりの中で「育ちあう関係性」を深めていけるような環境を工夫する。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成 30 年　「幼稚園教育要領解説」　フレーベル館
厚生労働省　平成 30 年　「保育所保育指針解説」　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

幼児がわくわく感をもって遊び込むための環境の構成と援助の工夫

―心を動かされる体験を通して―

西原町立西原幼稚園　教諭　氏名　城間　涼見

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、少子高齢化、核家族化、グローバル化などの急激な社会の変化を受け、子どもを取り巻く環境も大きく変化している。生活利便性が高くなった一方、家の中で過ごす時間が増え、YouTube やテレビゲームなど室内遊びに偏った経験が多くなっている。また、インターネットからの間接的な知識はあるものの、野外でたくさんの友達と遊んだり、身近な自然や社会の中での直接体験の機会が減ったりしていることも懸念されている。『幼稚園教育要領解説』の第２章領域「環境」内容（８）では、「身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、工夫したりして遊ぶ。」 と述べられている。また、「人間関係」内容（８）では、「友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする。」と述べられている。幼児が夢中になって遊ぶ中で、様々な感情を味わい、心を動かされる体験を積み重ねていくためには、環境に教育的価値と意図を込め、幼児の主体性と教師の意図をバランスよく絡ませた保育を展開させていくことが求められている。

本学級は、５歳児（２年保育）男児９名、女児 11 名、計 20 名が在籍し、うち特別な支援を要する子が５名いる。幼児の実態として、様々な素材を使って製作遊びに夢中になっている子が多くいるが、作ったもので遊ぶなど遊びの展開が見られない。また、クラス全体で一つの目標や目的に向かって取り組んでいくことが難しく、途中で投げ出す子や、気持ちが向かずに参加が難しい子もいる。

そこで、友達との関わりや様々な遊びの中で「やってみたい！」「おもしろい！」「こうしてみよう！」と心を動かされる体験を通して、一人ひとりが遊び込めるような環境の構成や援助の工夫を探っていきたいと考え、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友達との関わり合いを楽しみながら、遊びを展開していくための環境の構成や援助の工夫

(1) 幼児が安心できる環境を整え、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わいながら様々な遊びに興味や関心をもてるようにする。

(2) 幼児の声を拾い、遊びの展開や友達同士の繋がりをサポートできるようにする。

２　幼児同士が共に工夫したり、協力したりするための環境の構成や援助の工夫

(1) 一人ひとりの幼児が十分に自己を発揮し、他の幼児と多様な関わりがもてるようにする。

(2) 共通の目的に向かって工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を十分に味わえるような援助の工夫や環境の構成を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例①】『お店屋さんごっこからの遊びの広がり　～様々な表現を通して～ 』

≪幼児の姿≫（５～６月）

・空き箱やカップ等、様々な素材を使って製作を楽しんでいる姿が見られる。
・２～３人の少人数グループができ、特定の友達と関わる姿が見られる。
・登園を渋っている子、なかなか教室に入れない子が数名いる。

≪教師の願い≫

・友達とのやりとりを楽しみ、お互いのアイディアを出し合いながら、遊びを展開していくおもしろさを感じてほしい。
・友達と協同して遊ぶ楽しさを感じてほしい。

≪〇教師の援助　★環境の構成≫	≪幼児の変容≫
（５月～６月） 〇作ったものを見せ合う発表タイムを設け、子ども達の作品に対する思いを十分に認めて、満足感や充実感を得られるようにする。 〇十分に遊び込める時間を保障する。 〇作ったものをどうするか（どこにどのようにして置くか）を子ども達と相談し、遊びの場を整える。 ★使いたい時に必要な物が使えるよう、様々な素材を種類ごとに分け、手の届く場所に用意する。 ★遊びの続きを保障できるよう、製作途中のものや完成したものを置けるように机を用意する。 	・自分の作った作品を友達や教師に褒めてもらえることで、作ったものに対する愛着や喜びを感じる姿が見られた。また、登園渋りをしていた子も、「昨日の続きをして遊びたい！」と期待をもって登園するようになった。 ・午前と午後の保育を繋がりあるものにしたことで、預かり保育でも継続して製作を楽しんでいた。 ・置き場所を設けたことで、「私は〇〇作ったよ」と嬉しそうに友達に説明し、友達との会話のきっかけになった。
（６月～７月） ★作品の置き場所がなくなったため、ひな壇を用意し、子ども達が対面でやり取りができるような配置にする。 〇お店屋さんをイメージできるようなやりとりや言葉がけをする。例：「これは何ですか？」、「〇〇ください！」、「お店屋さんみたいだね」 （７月後半） 〇今後も遊びが展開していくことや、子ども同士でイメージのずれがあり、仲間に入れなかった子の気持ちを汲み取る等、担任間で保育カンファレンスを行う。 ★夏休み明けに続きができるよう、場所を確保する。	・友達や教師と一緒にひな壇を広げ、イメージに合わせて配置を変えたり、作ったものを嬉しそうに並べたりしていた。 ・教師の言葉がけに少し照れくさそうに対応したり、「お店屋さんみたいだね」という言葉をヒントにイメージが湧き、お金やレジ等を作り始めた。 ・少人数のグループでお店屋さんごっこを楽しむようになり、興味を持って見に来る子がいた。 ・夏休みに教師主催のお楽しみ会を行うと、“遊戯室でもいろんなブースを用意して、こんな風に楽しめるんだ！”という気付きがあり、「ゆり組まつりをやってみたい！」という声があがった。
（８月後半～９月） 〇夏休みに行われた地域のまつりや、今まで経験したことを聞き、まつりに対するイメージを深めていく。 〇子ども達が感じたことや考えたことを伝え合える場を設け、一人ひとりのイメージを十分に受け止める。 ★子ども達のイメージをウェビングマップにまとめて可視化する。 〇「おみこしを作ってみたい！」、「口が開く獅子舞を作ってエイサーを盛り上げたい！」等子ども達の“やってみたい！”という気持ちに寄り添い、実現できる方法を一緒に考える。	・友達や教師と一緒に焼き鳥やアイス、綿あめ等を作り、祭りに対するイメージが深まっていった。 ・一人ひとりのイメージをクラス全体で共有したことで、“ゆり組まつり”という目的ができた。 ・お店屋さんの少人数グループは、「ゆり組まつりで、お店屋さんとして出店したい！」と教師に伝え、他児と関わりをもとうとするようになった。 ・「カラフルなおみこしにしたいけど、大きくて大変だから誰か手伝ってほしい」、「いいよ！」と子ども同士のやり取りも見られるようになり、少しずつ同じ目的に向かって協力し合う姿が見られた。

○目的に向かって準備を進められるよう、いつ、どこでゆり組まつりをするか等、子ども達と相談する。 	・「あと○回寝たらゆり組まつり本番！」と子ども達もわくわくして気持ちが高まっていた。 ・他のクラスへ招待状を渡しに行ったり、「○日にゆり組まつりに来てね」と声をかけたりして、クラス以外の友達とも繋がりをもつようになった。
（ゆり組まつり）（９月１１日） ○「お友達と一緒に準備をしたら楽しいね」等、友達と一緒に協力しながら遊びを進めていくことの楽しさを感じられるような言葉がけをする。 ○子ども達がその瞬間に感じたわくわく感に共感し、やってみたいという気持ちを尊重する。（金魚すくいは本物みたいに、水を溜めたい） ★ミニプールやブルーシートを用意する。 ★まつりの雰囲気を感じられるよう BGM を流し、法被を用意する。 ○子ども達がまつりを楽しみ、自分たちで進めていく姿を見守る。「これください」など、ごっこ遊びの世界観に合った言葉がけをする。	・友達と一緒に遊戯室に机を運び、机の配置等セッティングにもこだわっていた。 ・子ども達が感じているわくわく感が他児にも伝わり、自然と友達同士で協力し合って準備を進める姿が見られた。 ・「いらっしゃいませ」と自信を持って呼びかけている子もいた。また、お客さんが来たことを喜び、お店の人になりきってやりとりを楽しむ姿が見られた。
（生活発表会への取り組み）（１１月～１２月） ○生活発表会の取り組みの中で、「お店屋さんをしたい」という子ども達の声を拾い、クラスの劇遊びの中に組み込んでいった。 ○それぞれの表現の仕方を認め、子ども達が楽しく自己発揮できるようにする。（踊って表現、言葉で表現、作って表現等） ○小道具等は子ども達と工夫しながら準備をし、遊びの中で作ったりできるように素材や教材などを用意する。	・普段から緊張感が高く、人前に立ったり、舞台上に上がったりすることを躊躇するが、自分の好きなことだからこそお店屋さんで子ども達なりの表現を楽しむことができた。 ・自分なりの表現方法を選択できたことで、自分の好き、得意分野で伸び伸びと表現することができた。 ・発表会当日は、クラス全員で一つの目的や目標に向かって力を合わせ、自信を持って発表することができた。

≪結果と考察≫

・少人数の遊びが広がり、いろいろな友達と一緒に、さらに学級全体、園全体を巻き込んでゆり組まつりを楽しむことができた。また、皆で考えを出し合い、友達の意見を受け入れたりすることで、クラス全体で小さな目標ができ、その目標に向かって自分たちで遊びを進めていくことができた。ゆり組まつり当日は特に役割を決めていなかったが、一人ひとりが自分なりにやりたいことを選択し、クラス全員が自然と参加して楽しんでいたことから、少人数では味わえない集団での遊びの楽しさや醍醐味を感じることができたと考える。

・ゆり組まつり後は他のクラスにも遊びが広がり、他のクラスからもおまつりごっこやお化け屋敷に招待してもらえた。クラス以外の友達と関わるきっかけが増えたことで横の繋がりができ、クラスを行き来して遊ぶ姿も増えてきた。様々な遊びを友達と経験したことで、一人ひとりが自己発揮できたと考える。

・工夫したり協力したりしながら遊びを進めていく中で、「あれもやってみたい！」、「おもしろそう！」等わくわく感をもって遊び込むことができた。ともに楽しむ友達や教師がいることや、やりたい気持ちが沸き起こる環境があることで子ども達の遊びが深まり、展開していったと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・「今日も明日も続きができる」という環境を工夫したことで、子ども達も安心感をもって幼稚園生活を送り、遊びに向かう意欲を引き出すことができた。
・教師のさりげない言葉かけや提案から、自分なりに考えたり、友達と一緒に協力したりして遊びを進めていく経験をすることができた。
・遊びや生活を進めていく中で、友達と一緒に遊ぶ楽しさや遊びを展開していく面白さを味わうことができた。さらに継続して遊び込めた経験より「またやりたい！」、「次は〇〇をしたい！」と意欲も高まった。
・一つの遊びを十分に楽しめたことで、子ども達のイメージが広がり、工夫したり、試行錯誤したり、時には失敗したりしながら満足や納得のいく経験を積むことができた。１２月の生活発表会では、学級でアイディアを出し合いながら劇の内容を考え、身体表現や造形表現、言葉での表現を楽しみ、達成感や充実感を味わいながら自己発揮することができた。

②課題

・製作後、「こうしてみよう！」と主体的に遊びを展開していくまでには至らず、子ども達の発想を引き出すための問いかけや働きかけが十分でなかった。
・遊び込む中で、やり遂げる経験や達成感を味わう経験が十分でなかった。

③実践を通した自身の気づき、考え

・担任間で保育リフレクションをすることで、それぞれの思いや考え、意図などを共通理解し、同じ方向に向かって保育実践を行うことができた。また、別の視点から子どもの姿や気持ちを読み取るきっかけにもなり、新たな視点を持つことができた。
・子どもの目指す姿に向かっていくために、目の前の子ども達の姿をしっかりと読み取り、教師間で子ども達にどんな経験が必要かを吟味していきながら援助の工夫や環境の構成、適切な関わり等を考えていく必要があると感じた。
・考えたり試したりしながらやり遂げた経験や友達と一緒に力を合わせて頑張った経験が自信に繋がり、次への意欲になると改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・製作後、子ども達が「こうしてみよう！」と主体的に遊びを展開できるよう、問いかけや関わりを工夫していく。また、完成後には「どうやって遊ぶ？」、「他にも何かいいアイディアないかな？」と想像が膨らむような言葉がけをし、子ども同士で考えを共有する時間を大切にしていきたい。
・遊びの中で見通しや目的をもって取り組めるような言葉がけや環境の構成を工夫し、試行錯誤しながら最後までやり遂げられるよう援助していく。また、一人ひとりの過程を丁寧に認める関わりを行い、達成感を味わえる経験に繋げていきたい。
・小学校以降の主体的で対話的な深い学びに繋げられるよう、今後も子ども達の「やってみたい！」、「試してみたい！」という気持ちに十分に寄り添い、様々な経験をする中で学びの根っことなる非認知能力（コミュニケーション能力、忍耐力、意欲等）を育んでいきたい。
・今後も保育リフレクションや記録等を活用し、日頃から子ども達の様子を伝え合う努力をしていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成３０年　『幼稚園教育要領』　フレーベル館
田澤里喜　吉永安里　令和２年　『あそびの中の学びが未来を開く　幼児教育から小学校教育への接続』　株式会社世界文化社

様式３【課題研究レポート】

人と関わる力を意識した環境構成やあそびの工夫

―仲間との関わりを工夫した遊びを通して―

久米島町立仲里幼稚園　保育教諭　與那　渚

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、人と関わる力が弱いと感じる人が増えていると言う指摘がある。これは現代社会におけるコミュニケーションの変化や、個人の価値観の多様化などが影響していると考えられる。更にスマートフォンやＳＮＳの普及により、オンラインのコミュニケーションが活発になる一方、対面でのコミュニケーションが減少していることがクローズアップされている。「幼稚園教育要領」の第二章、人との関わりに関する領域「人間関係」には「友達と積極的に関わりながら喜びや悲しみを共感し合う」とある。幼児期は、友達との関わりを通して、社会性や人間関係、コミュニケーション能力が発達する重要な時期であり、将来社会で生きていく上で不可欠な協調性、問題解決能力、コミュニケーション能力等を育んでいく。これらの力は、人間関係を円滑にし、より豊かな人生を送る上で、とても重要になっていく。

本学級の園児は、５歳児（１年保育）男児１２名、女児１６名、計２８名在籍し、人なつっこく元気があり、ほとんどの園児が友達と一緒に遊びを楽しんでいる。しかし、自分の思いをうまく伝える事ができずに友達とトラブルになり遊びを転々と変える園児や、固定の友達としか遊ばない園児、自分の興味のあること以外には関心を示さず、友達との関わりが少ない園児も見られる。このような状況を踏まえ、友達と関わる中で、一人一人の園児が将来、自分の良さや可能性を意識すること、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えること、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の作り手となることができるための基礎を培う事が大事だと考える。

そこで、他者と協働しながら自分で人生を切り開いてほしいとの願いから、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　色んな友達と関わる楽しさを知り、自己肯定感を高め、豊かな人間関係を築ける工夫

成功体験を積み重ね、自信をもてるようにし、教諭が積極的に褒めたり励ましたりする。

教師が個々の興味を理解し、友達同士の会話や関わりが広がるよう援助する。

２　幼児自ら、他児と関わろうとする気持ちが持てる環境の工夫について

子ども達が互いに協力し、認め合い、自己肯定感を育むことができるように遊びや活動を通して自然に人間関係を深められるような環境の工夫や援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み　（実践）

実践事例１　～お当番やグループ活動を通して～

《幼児の姿》

・４月、新しい環境に積極的に関わる幼児が見られる一方で、一人で絵本を読んだり、周りの遊びの様子を傍観したりする幼児も見られる。

・やりたい事や、好きな遊びが見つけられず、泣き出す、教諭と１対１の関係を求める。また、室内、外を走り回ったりしている。

《保育教諭の思い》
・安心して園生活を過ごす中で、クラスの一員としての繋がりを感じ、友達と触れ合ったり関わったりする事を通して、一緒に遊びを進める楽しさを味わってほしい。

《◎保育教諭の援助　□環境構成》
◎入園して張り切ったり、緊張したりするなどの一人一人の気持ちを丁寧に受け止めながら、教師との信頼関係を通して、新しい生活を楽しめるようにする。
◎新しいことに興味をもって、生活する中で、子どもが疑問に感じたことや気づいたことに共感しながら、クラスの話題として取り上げ子どもと一緒にクラスの約束事や当番活動を決めていく。
◎保育教諭が仲立ちとなり、友達と関わりながら、遊びを楽しめるよう援助する。
□４～５名ほどのグループを構成し、集団遊びや、朝の会、帰りの会、給食など一緒に過ごす事で、仲間意識や友達との繋がりを感じられるようにする。
□小集団で楽しむことができる玩具や環境を用意し、自由に手の取れる場に設置、気の合う友達同士が集まって遊びが進められるようにする。

（お当番活動）
友達と協力し、役割分担を行い協力する楽しさを学ぶ。

（トランプ・あやとり・見立て遊び）
経験したことを遊びの中で表現。また、少人数で安心して過ごせる環境

《幼児の姿の変容》
・お当番活動や、グループ活動を通して、色々なお友達に興味が出て少しずつ自ら関わろうとする姿が出てきた。
・帰りの会で、クラスゲームや、グループゲームを取り入れ、楽しい時間を共有し充実感を味わったことで、自由遊びの際に友達と話し合って幼児自身で遊びを進める姿があり他園から来た園児同士が一緒に遊びを楽しむ姿が見られるようになってきた。

実践事例２　～行事や様々な集団遊びを通して～
《幼児の姿》
・気の合うお友達を見つけ、遊びを楽しむ一方で、自分の気持ちが上手く伝えられずにトラブルになる事も多い。
・失敗や勝ち負けに対するこだわりが強く集団遊びやゲームになると「やらない」「負けるから嫌」「できないから嫌」等と言う子が多い。

《保育教諭の思い》
・好きな遊びや集団遊び、行事を通して自己発揮したり、友達や保育教諭に自分の思いを伝えたりしながら友達と一緒に共通の目的を持って遊びを進める楽しさを味わってほしい。
・勝ち負けや成功、失敗を経験し、友達の気持ちを理解し、自分の感情を調整する力を育んでほしい。

《◎保育教諭の援助　□環境構成》
◎友達と意見を出し合ったり、ぶつけ合ったりする中で、お互いの思いを理解し、折り合いをつける経験をサポートする。
◎達成感や、失敗経験を分かち合い、次への意欲に繋げられるよう援助する。
□行事に向けたアイディアを一緒に考え、集団遊びで作戦を考えるなど、遊びの中でそれぞれの考えが生かされ、遊びが、より面白くなる嬉しさに共感していく。

《集団遊び・園の行事》・友達と協力してルール遊びや行事を楽しみ、自分の意見を言いつつ相手の気持ちを考えながら役割を意識し、最後までやり遂げようとする。

《幼児の姿の変容》
・クラス全体で、集団遊びやゲーム、行事等に取り組み、楽しい時間を共有したことで、必要な物を幼児自ら相談したりルールをアレンジしたりと工夫して遊びを進めた。
・ゲームに負けたことが悔しくて泣いている幼児を見ると「大丈夫！次は勝とうね！」「作戦会議しよう！」などと励まし、気持ちに共感する姿が見られ、思いやりを持って友達と関わるようになった。
・「できない」や困っている幼児が居ると、自ら声を掛け教える姿や、上達していく幼児を見ると、その姿を認め褒める様子が見られてきた。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果
・集団遊びを取り入れたことで、クラスの一員としての繋がりや、友達と楽しい時間を共有することができ友達との関係や遊びを広げられたのではないかと感じる。
・クラスの集まりの場で、幼児の作品の紹介、また得意なことを披露する機会を設けたりすることで、友達の良さや頑張っている姿などに気づき、それらを活かしながら友達と一緒に遊びを進める姿が見られた。

２　課題
・実践を通して友達との関わりを広げ深められるような援助を行ってきたが、コーナー設定や、じっくり集中して遊びを進められる環境構成が不十分であったと感じる。

３　実践を通しての気づき
・実践事例より、人と関わる力を意識し、深めるためには、一人一人が安心して過ごす中で自己発揮し、保育教諭や友達に受け入れられる経験が大切だと考える。
・受け入れられる経験を通して、他児と共通の目的や願いが生まれ、協力したり工夫したりしながら、一緒に遊びを進める充実感や満足感を味わうことができると感じる。
そのために保育教諭は個々の興味や関心を理解し幼児が多様な関わりを持つことができるよう援助することが大切だと感じる。

Ⅴ　今後の実戦に向けて

本研究の課題を踏まえ、今後の実践では幼児理解に基づいたコーナー設定や環境構成の工夫などを実践し遊びを通して幼児が友達との関わりを深められるようにしていく。また、心の中にある思いや考えを読み取ったり受け止めたりしながら、安心して自己発揮し友達と遊びや生活を進めていく充実感や満足感を味わえるよう援助していく。色々な集団遊びを通して、「みんなでやり遂げる楽しさ」を実感し、より社会性を深め、生きる力の土台を築いていけるようにしていく。今後も自己研鑽しながら保育の質の向上を目指し、日々の保育を充実させていきたい。

《主な参考文献》

「幼稚園教育要領解説」　株式会社フレーベル館　文部科学省

様式３【課題研究レポート】

学びの芽生えを育むための環境構成や援助の工夫
―好奇心や探求心をもって遊ぶ活動を通して―

南風原町立南風原幼稚園　教諭　氏名　真栄城　優

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、子どもを取り巻く環境は変化し、核家族化や都市化が進み、子ども同士が遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って活動する機会が減ってきている。『幼稚園教育要領解説』の第１章総説第３節にある「教育課程の役割と編成等」には「幼児が、遊びを通じて、学ぶことの楽しさを知り、積極的に物事に関わろうとする気持ちをもつようになる過程こそ、小学校以降の学習意欲へとつながり、さらには、社会に出てからも物事に主体的に取り組み、自ら考え、様々な問題に積極的に対応し、解決していくようになっていく。幼児期に多様な体験をし、様々なことに興味や関心を広げ、それらに自ら関わろうとする気持ちをもつことは、幼児期から育むことが重要である。」と記されている。小学校以降の学びに対する意欲を育むため、幼稚園生活で友達と夢中になって遊ぶ経験が、重要であると考える。

本学級の幼児は５歳児（２年保育）男児１４名、女児１０名、計２４名在籍し、男女ともに好奇心旺盛な子が多く、好きな遊びに積極的に関わり、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じたりしている。しかし、遊びに対しての興味が長続きしないことや、新しい遊びにどう関わったらいいのか分からず困り感を感じている姿も見られる。

そこで、幼児が自ら「やってみたい」という気持ちを引き出すため、環境構成や援助を工夫し、好奇心や探求心をもって遊ぶことを通して、「学びの芽生え」が育ってほしいと願い、テーマを設定し研究を行っていく。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①幼児自ら「やってみたい」と遊びに関わろうとする気持ちがもてる環境構成や援助について

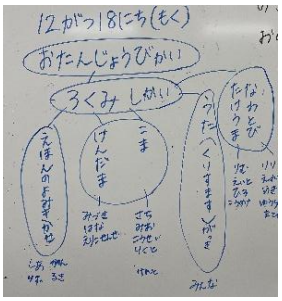
幼児が主体的に遊びを見つけ、興味や関心がもてるような環境構成を行う。また教師が個々に応じた関わりや言葉かけを工夫しながら、好奇心や探求心を育むことができるよう援助を行う。

②遊びが広がり持続していけるような環境構成と援助の工夫について

日々の遊びが広がり、持続していくように環境構成の工夫や援助の仕方を探る。幼児の「やってみたい」とイメージが膨らむように援助し、遊びの展開を予測しながら環境構成を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例】「得意なこと、やってみたいことをみんなに見せよう！
～誕生日会の取り組み～」

○幼児の姿	☆環境構成　◇教師の援助	□幼児の変容　◎学びの芽生え
12 月 ○「次の誕生日会の出し物は何かな？」「3 組でもやってみたいな！」と誕生日会に期待をもっている。	◇「3 組でもやってみたいね！」と共感し、「何をしたいのかみんなに聞いてみよう！」と問いかける。	◎「やってみたい」と気持ちが動く。
○「こま見せたいな！」「竹馬と縄跳びもやってみよう！」「絵本の読み聞かせはどうかな？」「クリスマスの絵本は？」とやりたいことや様々なアイディアが出てきた。  	◇学級の集まりで話し合える時間を設ける。 ◇一人一人の意見に「いいね！」「絵本はどうやってみんなに見せようかな？」と共感したり、問いかけたりする。 	□様々な考えやアイディアを友達や教師に伝え合い、話題を広げていく。 □「竹馬できるようになったから見せたい！」「けん玉の技も見せたいな！」とできるようになったことに対して、自信をもって伝えようとする。 ◎思いやイメージしたことを言葉で表現する。
【絵本チーム】 ○「クリスマスの大きい絵本読んだことある！」「これにしよう！」「でも読みづらいよね～」「紙に書いたらいいよ！」と友達と一緒に会話をしながら考える。 ○K さん「1 番に読みたい！」R さん「じゃあ 2 番にする！」「S 男と R 男は 3 番、4 番ね！」「自分で読むところを書こう！」と役割分担しながら台本を書く。 ○R 男「難しくて書けない」H さん「手伝うよ！」「見えやすいように絵本をつかまえておくね！」「『れ』はこれだよ！」とお互いに協力しながら書いていく。	◇必要に応じて、話し合いをまとめたり仲介に入ったりする。 ◇子どもの作りたい気持ちやイメージを引き出すよう話し合いの場を設ける。 ☆一緒に作れるように相談しながら用具や道具を準備する。 （画用紙、色鉛筆、マーカー、ひらがな表） ◇自分達で進めている様子を見守る。	□友達と一緒にイメージしたり、友達の意見を認め合うことに繋がっていった。 □友達同士で協力しながら自分達で進めている。 ◎友達への思いやりが見られる。 □友達と思いを共有しながら進めることの楽しさを感じたり、実現に向かっていけることを喜んでいる。 ◎友達との関わりや、自信へと繋がっていった。 ◎文字に関心をもって書いている。

○舞台での練習では、R 男「文字読むのが難しい…」と不安そうな様子。その様子を見ていたS男「ぼくが一緒に読んであげる！」と手伝いながら一緒に読む姿が見られた。 ○一緒に見ていた Y さん、H さん、S さん。「絵本もつよ！」「めくるのもやるよ！」と大型絵本を支え、めくる係を引き受ける。台本を読むタイミングを見計らって、めくることができた。	◇幼児の気持ちに寄り添いながら、励ましたり見守っていく。他の子に「どうしたらいいかな？」と聞いて、一緒に考えていく。 ☆大型絵本が見えやすいように机を準備する。 ◇子ども達の思いを受け入れ、励ましたり、見守っていく。	◎困っている友達に声をかけ、助けようとする気持ちが見られる。 □友達と一緒に取り組み、安心感をもっている。 □目的に向かって、友達と一緒に進める体験となり、充実感や満足感をもって取り組んでいる。
【こま・けん玉チーム】 ○「見えないから机の上にこま板を置いてやってみよう！」「せーのって言ったら皆でこま勝負しよう！」「せーの係は R 男ね！」「曲はこれがいいな！」と友達と一緒に、相談しながらやり方を考える。	☆机やこま板を配置し、安全に回せるように、やり方を考えていく。 ◇子ども達なりに考える姿を見守り、「いいね！」と共感して、色々な考えを認めていく。	□自信をもって自分の思いを友達に伝える。
【竹馬・縄跳びチーム】 ○舞台で竹馬や縄跳びに挑戦する。H 男「壁なしでできない～」と不安そうな様子を見て、見ていた他の子達が「頑張れ～」「できるよ！」と応援し、励ましている。応援の声を聞いて、安心した様子の H 男。「できた！」と自信をもって竹馬に乗ることができた。	☆竹馬で歩く際、安全に配慮してマットを敷いておく。坂道の障害物も準備する。 ◇幼児の気持ちに寄り添いながら、励ましたり見守っていく。 	◎友達の考えを受け入れる。 ◎応援する姿から、友達を思いやる気持ちが育まれている。 ◎自分の力でやり遂げようとし、諦めずに挑戦する。 □友達の応援や励ましの声から諦めず挑戦することができた。
【誕生日会】 ○誕生日会では、たくさんの園児の前で、緊張する姿が見られた。しかし、得意なことを、やってみたいことをみんなに見せたいという気持ちから、自信をもって取り組む姿が見られた。	◇幼児の気持ちの寄り添いながら、励ましたり見守ったりしていく。	◎自信をもって考えたことや試行錯誤したことに取り組んでいる。

○他のクラスの友達や、教師から「3 組さんすごかったよ！」という言葉をもらい、「楽しかったね！」「またやりたいね！」と充実感や満足感を感じていた。	◇一緒に喜びを分かち合い、自信へと繋げていく。 	□共通の目的に向かって、楽しみながら取り組み、喜びを十分に味わうことができた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・友達と共通の目的に向かって楽しみながら取り組み、子ども同士が試行錯誤して活動を展開する姿が見られるようになってきた。

・友達と一緒に楽しみながら達成感を味わう体験が、自信に繋がり、自己発揮することの喜びを感じることができた。

・困っている友達に声をかけたり、励ましたりと思いやる姿が見られるようになってきた。

②課題

・子ども達が互いの良さに気付いたり認め合ったりすることができるよう、振り返りの場面で話し合いの時間を十分に確保するなどの工夫が必要だった。

・子どもがより好奇心や探求心を膨らませるため、次なる発見への意欲を引き出す問いかけを丁寧に行ったり、試したり、工夫したり、表現できるよう、用具や道具を十分に準備するなど、教師の援助や環境構成の工夫が必要だった。

③実践を通した自身の気づき、考え

・教師が次への遊びに繋げたい思いやねらいなど、意図をもって保育を行う大切さに改めて気付かされた。

・共通の目的が生まれてくる過程や、子どもが試行錯誤しながら一緒に実現に向かおうとする過程、いざこざなどの葛藤体験を乗り越えていく過程を大切に受け止めることで、活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わうことができた。子どもが遊ぶ中で、共通の願いや目的が生まれ、工夫したり、協力したりする楽しさを十分に味わえるようにすることの大切さを学ぶことができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・思いや考えを伝え合ったり認め合ったりしながら遊びを進めていけるよう、振り返りの場のもち方を工夫し、一人一人の育ちや成長過程を踏まえながら、援助や環境構成を行っていく。

・子ども達が充実感や満足感を味わった後の姿について深めていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成 30 年　「幼稚園教育要領解説」　フレーベル館

無藤隆　2017 年　「イラストたっぷりやさしく読み解く幼稚園教育要領ハンドブック」　学研

様式３【課題研究レポート】

言葉で表現する楽しさや相互に伝え合う喜びを味わう援助の工夫

―言葉による伝え合いを通して―

宮古島市立西城幼稚園　教諭　氏名　伊川　町華

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』の第２章「言葉」のねらい（１）に「自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。」とある。安心して自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞こうしたりするためには、教諭や友だちに親しみをもち、言葉で伝える経験を重ねていくことが重要だと考える。

本園の園児の実態として、４歳児３名、５歳児７名の計１０名の異年齢クラスである。家庭からの新入園児が２名いるが、ほとんどの園児が集団生活を経験してきている。友だちを誘って興味を持った遊びを見つけて積極的に遊びを展開しながら取り組む園児もいるが、友だちと遊びたい気持ちがあるものの、どう関わって良いか分からず、自分の気持ちを伝えることができずに、相手の気を引こうと好ましくない言動をとる園児もいる。また、「今日は○○とだけ遊ぶ」と遊ぶ友だちを決めて、他児が関わろうとすると嫌がる様子を園児の姿も見られる。教諭が園児の気持ちを代弁したりして、友だちとの関わり方や思いの伝え方を一緒に考えているが、園児同士で思いを伝えられるようになるための環境構成や援助の工夫で不十分な面があり、課題を感じる。

このような実態を踏まえ、安心して自分の思いを伝えたり、相手の思いに気づくことができるための環境構成や援助の工夫を研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分の思ったことを自分なりの言葉で、表現できるようになる援助の工夫について

(1) 身近な保育者や友だちに言葉で伝えたくなる活動や援助を行い、言葉で伝える楽しさを味わうことができるように工夫する。また、言葉について意識できるような視覚的な教材の準備をする。

(2) 帰りの振り返り等で、自分の気持ちを伝えたり、友だちの話を聞いたりする場を設ける。

２　友だちとの関わりを深めていく中で友だちのよさ、自分のよさに気付ける工夫。

(1)　教諭が園児一人一人の発達や幼児理解に努め、肯定的な姿勢を向ける。園児同士も互いを肯定的に受け止め合えることができる援助や工夫をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例】「こんな時、友だちはどう感じているのかな？気持ちを知ろう！」視覚教材を通して

★幼児の姿

- 気の合う友だちを見つけて遊びを楽しむ一方で、自分の思いが上手く伝えられず、手が出ることがある。
- 自分の思い通りにいかない場面で、相手が嫌な気持ちになるような行動をとる姿が見られる。
- 友だちとの関わりの中で、「今日は○○とだけ遊ぶ」等の否定的な言葉を使ってトラブルになっている。

★教師の願い

・自分の思いを言葉で伝えられる楽しさや喜びを味わってほしい。
・相手の話を聞いたり、相手にも思いや気持ちがあることに気づいてほしい。

★教師の援助と環境構成

・園児の主張や気持ちを十分に受け止め、互いの思いが伝わるように気持ちを代弁したり、関わり方のモデルとなったりする。
・「カラーモンスター」の絵本を通して、相手の気持ちに気付けるようなきっかけを作っていく。
・帰りの会で一日の振り返りをする時間を設定し、話をする際の手立てとなるようにカラーモンスターのイラストを小さなパネルを用意する。発表する子に選んでもらい、友だちに見せながら発表する形式も取り入れた。

うれしい、おだやか、いかり、かなしい、ふあん

「どうしてうれしいの？」
「なにをして遊びましたか？」

今日は「うれしいきもちとおだやかなきもちでした」

★幼児の変容

・「今日もカラーモンスターで発表をしたい」と積極的に発表することや、今まで話すことに抵抗があった子も話してみようとすることが増えてきた。
・相手の話に興味を持ち、「〇〇の何が楽しかったの？」等、質問する子も出てきた。
・「楽しかったこと」だけでなく、「悲しい」「怒り」等の感情のカードも取り入れてことで、「こんなことで困ったんだね」とクラス内で相談する機会も作れた。

★結果と考察

・目に見えない気持ちを、カラーモンスターに例えて視覚化したことで、自分だけでなく、友だちの気持ちにも気付いて、それが友だちとの関わり方を考えるきかっけになった。
・「今日はこんなことを話したい、伝えたい」等、期待感を持って取り組む姿や友だちの発表に対して質問したりと、興味を持って聞く姿が増えてきた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・相手を思いやる言葉を用いたり、優しく伝えようとする姿が見られるようになってきた。
・教諭からの言葉だけで伝えるのではなく、相手の気持ちが分かりやすいような絵本を活用し、イラストを掲示することで、自分の気持ちを振り返るきっかけ作りとなった。
・日々の振り返りを通して自分自身が発表したことに対して、共感してくれる場や他者に認められる喜びを実感できたことで、自分に自信を持てることができた。

②課題

・理解はしていても、無意識に相手が嫌がる言葉を使ってしまう姿も見られる。その都度、継続的に話し合いの場を設けることが必要と感じる。

③実践を通した自身の気づき、考え

・思いを伝えられるようになってきている反面、自分の思いだけが一方的になることもあるが、相手との関わりが増えて、思いを伝えることができるようになったからこその姿でもあると感じる。
・発達の個人差もあるため、一人一人に合わせた援助、経験、環境構成の必要性を感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・その場に合った言葉の使い方ができるような教材研究や表示の仕方等、園児の実態にあった取りみ方を探っていきたい。
・友だちとの関わりの中で葛藤体験をトラブルとして捉えるのではなく、それについて考えたり、話し合ったりしながら自分の気持ちと他の人の気持ちや感じ方が異なる事に気づいたり、考えたりできるようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年　「幼稚園教育要領解説」　フレーベル館
・ひかりのくに　「１０の姿プラス５・実践解説書」

互いの良さを知り認め合い寄り添い助け合いながら共に成長し合うための援助の工夫
―みんなで協力しながら楽しく過ごす為の環境構成や援助を通して―

国頭村立　くにがみこども園　教諭　氏名　當山　結生

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第１章第２節３（１）障害のある園児などへの指導について、「集団の中で生活することを通して全体的な発達を促していくことに配慮し、適切な環境の下で、障害のある園児が他の園児との生活を通して共に成長できるよう、指導内容や指導方法の工夫を計画的に行うものとする」とある。また第１章第２節３（１）①において、「友達をはじめ様々な人々との出会いを通して、家庭では味わうことのできない多様な体験をする場でもあるとし、園児が互いに認め合う肯定的な関係をつくっていくことが大切とある。」と記されている。

本学級の園児は４歳児（６年保育）男児１６名、女児１０名の計２６名が在籍し、その内特別な支援を必要とする園児が２名いる。支援児Ｍさんは自閉症スペクトラム症と突発性拡張型心筋症で発声はするが言葉がまだ出ない。また、集団の苦手さやじっとすることの難しさがある。支援児Ｓさんは脳性麻痺による肢体不自由でバギー型の車椅子で過ごしている。全身の麻痺があるので、水分補給や移動などすべてにおいて介助が必要である。他の園児は、ほとんどの子が持ち上がりということもあり、２歳児クラスの時からＭさん、Ｓさんと関わり過ごしているので、２人がいることに慣れ、自然に関わる姿が見られる。しかし、一緒に過ごす中で同じ活動をすることの難しさがあり、２６名の園児が協力しながら楽しく過ごす為に必要な環境や活動の内容を細かく考えていく必要があると感じた。

そこで、支援児の障害の状態に応じた指導をしながら、共に刺激し合い、助け合いながら思いやりの心を持ち、一人一人が育ち合ってほしいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　支援児と他の園児が関わり遊べる環境構成の工夫について

支援児がクラスに入りやすく、落ち着ける場所の確保をし、安心してクラスで過ごせる場の工夫をしていく。また他児と支援児が関われるような時間を作り、仲立ちをしながら援助していく。

２　支援児と他の園児が共に育ち合うための工夫について

支援児と他児が遊びながら、自然な交流を通じて互いの違いを理解し、支援児に優しく関わったり話し掛けたりしながら、共に成長できるような援助をしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】～様々な環境、物、人に慣れるために～（Ｍさん）

＜園児の姿＞

・クラスに入る事や、集団の中で過ごす事が苦手で、クラスに入るとイライラしたり不機嫌な姿が見られた。
・机や椅子を引きずる音や子ども達の大きな声が苦手で、怒って自分の頭を叩いたり、ドアや壁を膝で蹴ったりすることがよくあった。
・言葉でのやり取りが難しかったり、手を繋いで歩くことも出来ず、抱っこやおんぶを求める事が多かった。

＜保育教諭の願い＞

・新しいクラスの環境や担任、友達に慣れ安心して過ごして欲しい。
・ルーティーンだけでなく、色々な経験をして欲しい。
・自分のして欲しい事を身振りや行動で伝えたり、簡単な言葉の理解が出来るようになって欲しい。

＜◇環境構成◎保育教諭の関わりと援助＞

◇クラスの端に２畳の畳スペースを作り、パーテーションやロッカーで周りを囲い、安心して過ごせる空間を作る。

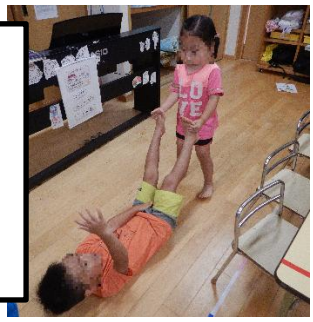
◇友達と同じクラス内に居るが、少し離れた場所で食事が出来るように環境を工夫する。

◎思いが伝わりにくいが、伝わっていなくても繰り返し物や言葉、指差しで行動を伝えていく。

◎友達と同じことが出来なくても、同じ空間で少しずつ過ごせるように援助していく。

＜園児の変容＞

・Mさんの部屋を作ったことでクラスにまったく入れなかったMさんがクラスに入ると、自分の部屋に行ったり、自分の部屋で着替えをしたり、レゴブロックで遊んだりするようになった。
・偏食があり座っての食事やクラス内での食事が出来なかったが、クラス内に食事の時間居られるようになった。
・手を洗う・座る・食べるが結びつき、今まで食べなかった食材を食べれるようになったり、時々椅子に座り食べるようになった。
・友達と一緒に遊ばなくても、友達が外で遊んでいる時は外に出る、散歩の時は同じ場所に行くなど友達と同じ活動をMさんも出来るようになった。
・時々友達と手を繋いで走ったり、支援員から離れて遊ぶ時間も増えるようになった。
・表情が豊かになり、指差しや実際に物を見せると見通しを持てるようになった。



クラスの中でお友達と触れ合うMさん

お友達にブランコを押してもらい、喜ぶMさん

お友達と手を繋いでお散歩をするMさん

＜考察＞

・Mさんの部屋を作ったことで自分の落ち着ける場所、安心できる場所がクラスにでき、クラスに居られる時間が増えた。
・決まった時間に手を洗ったり、食事をいつも同じ場所ですることで最初は嫌がっていたが、徐々に慣れ落ち着いて食事が出来るようになった。また、食事は食べなくても食事の時間はクラス内に居られるようになった。
・友達と同じ活動をすることで、色々な活動に参加できるようになり、友達との関わりが増えた。
・視覚で次の活動や思いを共有することで、安心して次の活動に移れたり、思いが伝わりパニックも少なくなった。

【実践事例２】～友達からたくさん刺激を受けながら一緒に楽しく過ごすために～（Ｓさん）

＜園児の姿＞

・人見知りがあり、進級当初は新しい担任が話しかけると目を逸らして恥ずかしがる姿が見られた。
・友達が近くに来たり、話しかけたりすると微笑んだり、動いている友達を目で追ったり、興味を持つ姿が見られた。

＜保育教諭の願い＞

・友達に興味を持っているので、一緒に出来る活動を増やしていきたい。
・自分の好きな玩具を見つけて、手を動かしたり、体を動かし表現してほしい。
・周りの友達が思いやりを持ちＳさんに寄り添って一緒に遊んで欲しい。

＜◇環境構成◎保育教諭の関わりと援助＞

◇移動はバギーで行うことがほとんどなので、Ｓさんが刺激を受けたり、楽しめる場所にバギーを移動し、友達の近くで過ごす時間を増やせるように意識をした。

◇自由遊びの時間にマットを床に敷き、Ｓさんも友達と同じ目線で物を見たり、友達と関われるように環境を工夫した。

◎保育教諭や看護師がＳさんと楽しそうに関わる事で、周りの園児がＳさんと一緒に遊びたくなるような雰囲気を作る。

◎Ｓさんの気持ちを代弁しながら、Ｓさんがどんな気持ちで過ごしているか、周りの園児が気付いていけるような関わりをしていく。

＜園児の変容＞

・散歩や園外保育など、友達と同じ活動場所に行く機会を増やしたことで、首を動かし周りを見たり、良いリハビリにもなり、表情も豊かになった。
・マットを床に敷き遊ぶことで、体を動かし友達を見たり、自分で体を動かそうとする姿が見られた。
・自分の気持ちを大きな声を出してアピールしたりするようになった。

＜考察＞

・Ｓさんが声を出すと「いまよろこんでるよ」など友達がＳさんの気持ちを代弁する姿が見られるようになった。
・保育教諭がＳさんの近くで遊ぶことで、他児もＳさんの近くに来て遊ぶことが増えた。
・話しかける機会、遊ぶ機会を増やすことで、クラス担任や環境にも慣れ、声を出したりよく笑うようになった。

Ｓさんに関わり遊ぶのが好きなＲさん

散歩でＳさんに捕まえた虫を見せてくれるお友達

自然にＳさんに関わり絵本の読み聞かせをする姿が見られた

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

（Mさん）

・今までは自分のルーティーン以外のことをしようとすると、パニックを起こすことがほとんどだったが自分の居場所を作ったり、自分だけの空間を作ることで、安心できる玩具を見つけたり、支援員やクラス担任、クラスの友達にも慣れ、落ち着いて過ごせるようになった。支援員とのやり取りや信頼関係が出来てくると、少し我慢をして支援員の話を聞いたり、言葉のやり取りは出来ないが、視覚を通してのコミュニケーションが少しずつ出来るようになった。言葉も「やりやり」がほとんどだったが、「まー」「いやー」「あばあば」なども言うようになっている。自分のやって欲しいことがあると、我慢をして苦手な物を食べたり、交換条件も少し理解してきているので、やり取りが増え本児の困り感も減り、パニックが少なくなった。

（Ｓさん）

・表情が豊かになり、声もよく出すようになった。周りの園児もＳさんを気に掛けてくれて、声を掛けたり、絵本を読んでくれる姿も見られた。言葉が話せないＳさんに対して優しく話しかける姿に周りの園児も心が優しく育っているのを感じた。友達の近くで色々な遊びを見る事で、顔や目を動かしたり良いリハビリにもなったように感じた。

②課題

（Mさん）

・言葉でのやり取りが難しいが、視覚での理解や思いを仕草で伝えようとする姿が増えているので、写真による絵カードで、今後はもっと本児の理解を深め、コミュニケーションの幅を増やしていきたい。

・パニックは少なくなったが、時々思い通りにならないと怒るので、気持ちの切り替え方法を増やし、落ち着いて園生活を送れるようにしたい。

（Ｓさん）

・今年度は痰や咳が多く、体調不良で欠席することが多かった。他児と同じ活動をすることも必要だが、本児の体調面や体力面などの配慮が必要だと感じた。また、感染症などの流行もあり、他児との近い距離の接触にも配慮をしていく必要もあり、今後もどのような距離感で友達と接触していくかは考える必要があると感じた。

③実践を通した自身の気づき、考え

・子どもの無限の可能性を感じ、日々の保育の環境や周りの物や人によって、こんなにも支援児が成長し、周りの園児も成長できるのだと感じた。支援児に対する言葉掛けや関わりを周りに居る園児がよく見ていて、優しく接したり、騒いでいても動じないクラスの友達の育ちにとても成長を感じる事が出来た。一人一人の丁寧な関わりが周りの子にも伝わっていくのだと改めて感じ、とても良い気づきになった。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・園全体の支援児に対する理解がとても必要で、支援員も心身共にリラックスできるように周りがサポートしていくことも必要だと感じた。支援児に関わる人が元気なことも大事。支援児が無理なく健康に色々なことを経験し成長できる環境作りに今後も務めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成 30 年『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』　フレーベル館

自分でしようとする気持ちを育むための環境構成と援助の工夫
―手指の発達を促す遊びを通して―

大宜味村おおぎみこども園　保育教諭　氏名　親川　智恵美

Ⅰ　テーマ設定の理由

乳幼児期における指先運動は、子どもの発達に重要な役割を担い、指先を積極的に使う遊びを通して脳の発達を促し、運動機能や思考能力、集中力などを養う効果が期待でき日常生活に必要な動きを育てることにもつながると考える。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』第２章第３節では「つまむ、めくるなどの指先の機能が発達し、食事、衣服の着脱なども保育教諭等の援助の下、自分で行うようになる。」とある。それらの機能の芽生えを促すために１歳児の発達の特性と過程を十分に考慮しながら、子ども達の理解を深め、一人ひとりの発達に見通しを持って関わっていくことが大切だと考える。

本学級の園児は１歳児クラスで新入園児が９名いて、男児５名女児７名、計１２名在籍している。初めての母子分離や不慣れな集団生活となり、保育教諭に抱かれ過ごすことが多いながらも好きな遊びを見つけ楽しむ姿が見られる。また他児の玩具に興味を示し取り合いになる姿も見られる。一方、砂遊びや裸足での戸外遊びなどを初めて体験する場合は、保育教諭に抱っこを求めることがある。食べ物を目の前にしても積極的に口にしなかったり、衣服の着脱で意欲的に着脱しなかったりと保育教諭の援助を待っていることが多い。

このような実態を踏まえ、遊びを通しての手指の発達は様々な日常生活の成長につながる大切な発達のひとつと捉え、身の回りのことを自分ですることにつながる指先の動作を遊びの中で育てる為、一人ひとりの発達に応じた遊びや自ら興味関心を持ち遊び込めるような遊びの環境構成・援助の工夫について研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　手指の発達を促すための一人ひとりに合わせた遊びや環境構成の工夫

・子どもの興味関心、発達に合わせた玩具等を用意する。
・遊びの設定（砂遊び、粘土遊び、洗濯ばさみ遊び、新聞紙遊びなど）を通して、子ども自身が試行錯誤できるような環境構成を工夫する。

２　手指の発達を促すための関わり方や保育教諭の援助

・保育教諭が一緒に楽しみながら、遊び方などを知らせる。
・自分でしようとする気持ちや子ども達がやってみたいと思う気持ちを育む。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践事例）

□　園児の姿　○保育教諭の読み取り　◎保育教諭の願い　◇環境構成　☆保育教諭の援助

１　「砂遊び」（４月～９月）

・初めての感触に不安を感じて、保育教諭に抱っこを求める姿や砂場にいく事を泣いて拒む姿が見られた。
・保育教諭の声掛けに周囲（他児の遊ぶ様子など）を見渡すようになってきた。

◇保育教諭が常に目の届く範囲にいるようにし、砂の誤飲などが無いよう安全面に十分配慮する。
◇遊びを深めるために手で触れる、型抜き、水との感触遊びが出来る道具を用意し、自然素材（草花、木の実、枝など）を用意する。
☆園児が砂の感触を存分に楽しめるよう丁寧に関わったり、安全な環境で見守ったりする。
☆一人ひとりの興味・関心や発達段階に合わせた遊び方を把握する。
☆園児が砂の感触に興味を示したら、一緒に感触を共感し、遊びの展開を援助する。

〈園児の変容〉

・保育教諭や他児の遊ぶ様子を見たり、一緒に無理なく砂に触れたりしていく事で砂の感触に慣れていき、自ら砂に触れ、簡単な砂山を作ったり、砂を水の中に入れたりして楽しむ姿が見られるようになった。
・砂の感触に慣れると保育教諭に見守られる中、スコップですくった砂を容器に入れたり、貝殻を摘まんで集めたりして楽しむ様子が見られるようになってきた。

（1） 結果

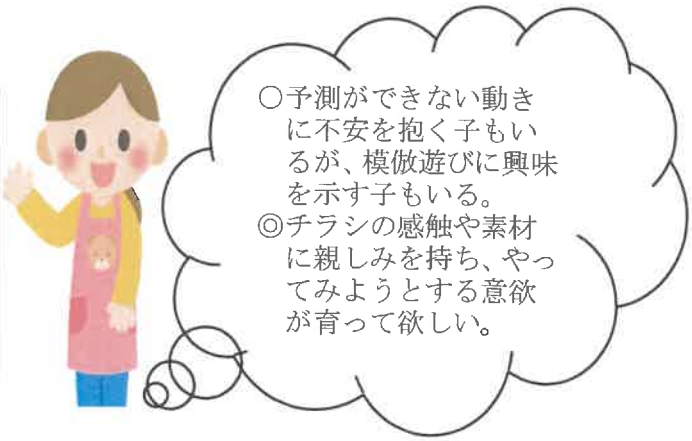
・園児が少しでも安心できるよう一人ひとりとの対応を丁寧に行った。例えば、抱っこなどする中、保育教諭や園児が楽しく遊ぶ姿を見せたり、さり気なく指先に触れたりするなどを日々繰り返し行ってきた。そのことで砂に興味を示し、自発的に砂に触れる姿や保育教諭に見守られる中一人遊びを黙々と楽しむ姿も見られるようになってきた。また、日を重ねるごとに他児との交流も見られた。

（2） 考察

・園児一人ひとりの気持ちに寄り添い、十分に受容する。砂の遊びの楽しさを繰り返し知らせていくことで園児の（やってみよう）とする気持ちを引き出す。興味・関心を引きだすことで遊びの集中力にもつながることが分かった。
・初めの頃は指先でつついて感触を確認する。➔砂の感触に慣れてくると手のひら全体で砂を握る。貝殻を摘まむなど、手指の巧緻性が育まれる事でさらに手指の器用さが養われると分かった。

2 「チラシ遊び」（５月～９月）

・チラシの感触やチラシの舞う動きなどに驚き涙して保育教諭に助けを求める。
・保育教諭が遊び方を示すことで興味を示し、「〇〇もやりたい！」とチラシを手に取る。上手くちぎる事が出来ず、「先生～やって～」と手伝いを求める。



◇滑って転倒などのないよう安全面に注意し、十分な量のチラシを用意する。
◇遊びが展開できるようビニールやタライ、段ボール箱を用意する。
☆園児が興味・関心を持って自分でやってみようとする気持ちを育んでいけるよう、一人ひとりの気持ちに寄り添う。
☆保育教諭が破り方を示し、破ったときの音を楽しんだり、手を添えたりしながら一緒に遊び方を知らせる。

〈園児の変容〉

・上手くちぎる事が出来ずにいた子も保育教諭が手を添え、手全体ではなく指先でちぎる事を知らせ、繰り返し一緒に楽しむ事でコツをつかみ一人でもちぎる事が出来るようになった。本児の頑張りを大いに褒めることでさらに自信につながった。また、次のやりたい事を見つけ黙々とちぎっては段ボールの中に入れ、雨降らせごっこ遊びを始める姿が見られた。

（1） 結果

・保育教諭が「聞いていてね」と導入でチラシを破る音を聞かせると、園児たちはすぐに興味・関心を示し、「やりたい～！」との声が上がる。チラシを手に取り同じように音を出そうと力づくでやってみるが破る事が出来ずに「ビリビリしたい」と援助を求めてきた。手のひら全体では保育教諭も破る事が出来ない、（指先で摘まんでひねる）の動作を繰り返し行う事を忍耐強く練習することで一人で破る事ができ、一緒に音を共有することで達成感を得ることができた。

（2） 考察

・保育教諭が一緒に楽しみながら遊び方を示したり、チラシ以外の教材を用意したりすることで、ごっこ遊びや見立て遊びに広がり、やりたいと思う意欲や他児との関わり、思考力の芽生えに繋がることが考えられた。

3 「シール貼り遊び」（6月～9月）

・カラフルな色に興味を示し、「〇〇も～（やりたい）」と言葉や仕草で知らせる。大きいシールはすぐに台紙から剥がし、次々と貼っていく。
・小さいシールでは台紙から剥がすまでに時間を要する。剥がす事ができるが、指先にシールがくっついて上手く紙に貼れずにいる。

◇誤飲を防ぐために台紙から剥がしやすいシールを用意し、場合によっては台紙を少し折る。
◇画用紙などを用意する。シールを小分けにして準備しておく。
☆シールを誤って口にしないよう保育教諭が側で見守る。
☆無理強いすることなく保育教諭が援助をし、自由に貼ることを一緒に楽しむ。

〈園児の変容〉

・シールの大きさや色に興味を示し、製作活動に参加するが、個人差が大きく見られる。初めは保育教諭が台紙を折ったり、指を添えてコツを知らせたりする。繰り返し遊ぶ中でコツをつかみ、一人で黙々と楽しむ姿が見られるようになってきた。段ボールの家にシールをたくさん貼って楽しむ姿や貼ったものを剥がして腕や顔に貼るなどして喜ぶ姿が見られる。
・シールをはがして貼る動作を繰り返し楽しむ事で、集中して貼るようになり、重ねて貼ったり、並べて貼ったりする姿も見られるようになってきた。指先でシールを摘まむ・剥がす・貼るという一連の動作を習得すると小さなシール貼りも一人で出来るようになった。

（1） 結果

・個人差が感じられた。初めは指先でシールを剥がす事が難しいため、保育教諭が台紙を少し折ったり、指を添えたりするなどの援助していった。その事を繰り返す中、園児一人で剥がして貼る事が出来るようになったので、一人ひとりの発達に合わせて教材の提供の仕方を変えることも大切だと分かった。

（2） 考察

・繰り返しシール遊びをする中で、指先を器用に使いながらも、貼る位置を意識することで指先のコントロール能力を高め、集中力を養っていることが分かった。
・大きさや色にも配慮することで、園児の興味・関心や意欲をさらに高めることができると分かった。

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果

○クラスの実態を把握し、一人ひとりの姿を知ることで月齢差や個人差に応じて、適切な援助に繋げることができた。

○保育教諭が一緒に遊びながら遊び方等を伝え、無理することなく遊びに関わることで、遊びの幅、種類が広がった。

○日々、繰り返し遊ぶことで自ら好きな遊びを見つけ、やってみたいとの意欲がみられるようになってきた。

2　課題

○一人ひとりの手指の発達に合わせて教材・教具を用意し、遊び方や活動の進め方などの保育研究の充実を図ることが必要だと感じた。

3　実践を通した自身の気づき、考え

○手指を使った遊びは、子どもの発達の中で大切な遊びだと考える。遊びを通して、着脱や食事などの生活面の発達とともに言葉の成長も見られ、身の回りのことを自分でやってみようとする意欲を高めることができた。今後も色々な手指を使った遊びを取り入れ、手指の機能の発達をさらに促していきたいと思う。この結果から、子どもの発達に見通しを持った遊びを取り入れ、意欲的に遊ぶことが手指の発達に繋がっていると考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

1　課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

○１歳児にとって、安心できる保育教諭との関りが情緒を安定させ、遊びへの意欲へと繋がると分かったので、今後も園児の思いを十分に受け止めながら、丁寧な関りを持ち保育を進めていく。

○今後も手指の使った遊びなどを多く取り入れ、遊びの中で感覚や手指の機能の発達を促していきたい。

○子どもの興味関心を汲み取りながら、色々な遊びを取り入れ「なんだろう」「やってみたい」と思えるような環境作りを試行錯誤していきたい。また、日々の遊びに変化を付けるなど、様々な工夫を取り入れ、色々な遊びが体験できるように努めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』

相手の話をよく聞き、思いを伝え合う力を育む援助の工夫

―クラスでのひとときを通して―

金武町立金武こども園　保育教諭　米須　麻理子

Ⅰ　テーマ設定の理由

文科省は幼児教育において、主体性を「自分の意志・判断で行動する態度」や「自発的・能動的な活動」として捉え、主体性を育むことで自分の意見を表現したり、他者の意見を聞く耳をもち、コミュニケーション能力や協調性が育まれるとしている。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の人間関係の内容（６）に、「園児は相手に対する興味や親しみが増してくると、自分中心の主張をしながらも、少しずつ、相手にわかるように伝えようとする」とある。また、言葉の内容（４）には、「人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す」と記されている。

本学級は、４歳児（６年保育）計１５名（新入園児１名）の園児が在籍している。仲の良い友達関係ができており、誘い合って遊んだり、話し合って遊びが展開し意欲的に遊びを進めていこうとする姿が見られる。しかし、自己主張の強い子が多く、相手の意見を聞かずぶつかりあったり、相手を傷つける発言をすることがある。このような実態をふまえ、仲間意識がもてるような体験や、自分の思いを伝える援助の工夫を通して、話を聴く力を育み、友達の思いに気づき、優しい言葉で伝え合えるようにと願い本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　豊かな言葉や表現を身につける

絵本の読み聞かせを通して、様々な言葉、感情表現にふれ、自分や相手の気持ちを言葉にする。

②　話を聴く力を育み、相手に分かりやすく伝える援助の工夫

クラス活動、遊びで気づいたこと、楽しかったことなどサークルになって発表の場を設ける。

③　相手の思いに気づくための援助の工夫

心を動かされる遊びを通して仲間意識を育み、友達と協力したり言葉で伝え合い、思いの違いに気づいて折り合いがつけられるように援助していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

〇幼児の姿　◎保育教諭の願い　☆環境構成　◇保育教諭の援助　♡幼児の変化

【実践事例①】「絵本の読み聞かせから気持ちの言葉を知る」

〇遊びの中で、友達が嫌がる言葉を発したり、言葉より先に手が出てしまう事もありトラブルにつながる。

◎自分の思いや考え、要求を言葉で伝えられるようになってほしい。
◎友達に言われて嬉しい言葉・嫌な気持ちになる言葉を知り、思いやりの気持ちをもってほしい。

☆きもちをわかりやすく伝えられる絵本を読み聞かせる。

♡絵本を見た後は「いいお話だったね」と感想を言ったり「〇〇って言われて嬉しかった」「〇〇先生大好き！」など言葉で表現する事が増えてきた。

◇絵本の内容から「こんなときどうすればよかったかな？」「先生はこう思うけど、他に違う気持ちの人はいる？」など様々な考え、気持ちがある事を伝えながら嬉しい事、悲しいことを皆で考えていく。
◇読み聞かせた絵本は、こども達が手にとって読めるようクラスの絵本コーナーに置いておく。

【実践事例②】「クラス会議・発表を経験する」

○積極的に発表する人はだいたい決まっている。
○いざ前に出ると言葉が出なくなってしまう。
○考え、アイデアは豊富で遊びこむ力がある。
☆前に出るスタイルだと緊張しやすいので、サークルでその場で発表スタイルをとってみる。

◎話し手の気持ちを思いやり、最後まで話が聞けるようになってほしい。
◎自分の思いを言葉で伝える楽しさや喜びを味わってほしい。

◇週末の出来事、行事の感想など日常の出来事から自分の言葉にする経験を積み重ね、話し上手な子から指名したり、保育者が意見を聞いて代弁したり話す楽しさが味わえるよう援助する。

♡遊びの中で特技を披露したり、作った物を紹介するなど、こども発信で自ら伝えようとする姿が見られるようになる。

太鼓の披露♪

恐竜の説明♪

好きな絵本の読み聞かせ♪

♡自分が話し手になる緊張感を味わうことで、話している友達の気持ちに気づき、耳を傾けるようになる。
♡遊びを通して相手の話に興味を持ち、親近感を感じている。
♡発表する時は、聞いてもらえる喜び、興味を持ってくれているまなざしを嬉しく思っている。

☆好きな遊びを十分楽しめる環境、それを誰かに知らせたくなるような友達関係の充実が土台である。

◇安心して思いや考えが表現できるよう、話しやすいクラスの雰囲気を作っていく。またこどもの気持ちに寄り添い、共感したり受け止め、話す満足感が味わえるようにする。

【実践事例③】「集団遊びを楽しむ」

○友達同士の関係が深まり、集団でルールのある遊びを楽しむようになる。
○意見の食い違いで遊びが中断してしまうことがある。

◎集団遊びの中で、自己発揮しながら遊びを楽しみ、仲間意識が芽生え、自分たちの力で話し合い、解決する事ができるようになってほしい。

☆遊びが広がってほしいとき、問題が起きた時などその日のうちにみんなで振り返る時間を持つ。
◇保育教諭の決めた考えではなく、「みんなはどう思う？」などの問いかけ方式で一人一人の意見が引き出せるようにする。どの意見も否定はせず肯定的な受け止めをし、様々な考えがあっていいことを感じてもらう。

【集団遊びからの会議の様子】
○韓国版「だるまさんがころんだ」で“バーン！(鉄砲で打つ)”“死んだ”などマイナスな言葉が飛び交う。
◇「先生はその言葉では楽しく遊べないから、楽しくなるような合言葉をみんなで考えてみよう」と提案をする。
☆たくさん出た意見をホワイトボードに記入する。
♡最後は「チンパンジーニバナニーニ！」と今はやりのキャラクターの名前がでて笑いに包まれ、様々な意見を受け入れようというクラスの雰囲気が感じられた。

【氷鬼ごっこを楽しもう！】
○仲間集めから鬼決めなど、こども同士で楽しむ姿がある。
◇ルールの確認をし、遊びを見守る。こども同士で解決できない時は必要に応じてアドバイスをする。
♡これまでのクラス会議を通して意見を交わす環境から、自分たちで「こどもかいぎ」としてルールの確認、遊び方の意見交換をしていた。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・「きもちのことば」の絵本を読み聞かせることで、気持ちに関する語彙が増え、表現が豊かになった。(わくわくする、緊張する、苦手だななど)
・クラス会議をする時は、意見をホワイトボードに書き出すことで、自分の意見を書いてもらえた、聞いてもらえた喜びを味わい、発表する事が苦手だった子も手をあげて発表する機会が増えた。
・集団遊びや話し合いの場を持つことで、友達同士の関りが深まるだけでなく、様々な感情を経験し、相手にも思いや都合があることに気づくきっかけとなった。
・遊びを進めていく中で、互いの意見を出し合い、試行錯誤しながら遊び込む姿があり、充実感が感じられる。

② 課題

・全体の場で意見交換することは上手になっているが、こども同士のトラブルがあったときは一方的に気持ちをぶつけたり、相手は“嫌だよ”も言えない関係がまだある。お互いが気持ちを言い合える関係づくりをするために、一人一人に合った言葉かけや丁寧な援助をしていく。

③ 実践を通した自身の気づき、考えなど

・あそびや生活の中で、“どうしようかな”と保育教諭が立ち止まったときは、こども達と一緒に考えてみる。全員がいる場で会議のように皆に意見を聞いてみるようにしたことで、友達の様々な考えに触れ、発表した子は自分の考えを認めてもらったことが自信につながり、発表者が増えてきた。
・日頃から自分の考えや気持ちを言う機会をたくさん設け、発表する事が特別ではなく日常の一コマとしてとらえると、こども達も臆することなく意見を言えるようになると感じる。そして、意見を肯定的に受け止める声かけがあると、発表した後の満足感も感じさせることができる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・ちくちく言葉だけがこども達の耳に残りやすいので、ふわふわ言葉をもっと取り上げるようにすると優しいことばが広がるのではないかと考える。(嬉しかったこと、お友達のいいとこ探し、誰かに感謝したいことなど)
・保育者が主になって会議を進め、意見も積極的に言えるようになっているので、こども同士の小グループ(3,4名)で話し合う場を設け、意見が言い合える経験を重ねていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』
大豆生田啓友　豪田トモ《著》　『子どもが対話する「保育サークルタイム」のすすめ』

友だちのよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わうための環境構成と援助の工夫
―集団で遊ぶ活動を通して―

今帰仁村立認定こども園みらい　保育教諭　島袋　一夢

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』「人間関係」の領域第２章（２）において、「園生活においては、何よりも保育教諭との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤としながら様々なことを自分の力で行う充実感や満足感を味わうようにすることが大切である。また、園児は園生活において多くの他の園児や保育教諭と触れ合う中で、自分の感情や意思を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには園児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験や、考えを出し合ってよりよいものになるように工夫したり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねたりしながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる」と記されている。すなわち、大人という安心感のもとで様々な経験をしながら共感や思いやり等が育っていくということである。

私のクラスは、３歳児（６年保育）新入園児２名、在園児１１名と個性豊かな子どもたちが１３名（男児９名女児４名）在籍しており、賑やかで楽しい。人懐っこい子が多い。

遊びでは、昨年同じクラスだったお友達同士で過ごす場面が多く、活発でのびのびと過ごしている。しかし、使いたい玩具を友達が使っている場面で「かして」と伝えても貸してくれないと無理やり取る、叩く、大声を出して泣くという行動に繋がったりしている。

そこで、その葛藤などを通して友達のよさに気付き、集団で楽しく遊ぶことができるよう園児の実態を踏まえた環境構成や援助の工夫が必要と考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　友だちのよさに気付けるような援助の工夫

クラスでの集まりなどの持ち方を工夫し、楽しかったことや気付いたことなどを園児同士で伝え合い、共有できる場を設ける。

２　集団で遊べる環境構成の工夫

園児の実態を捉え、興味関心があり、かつ集団で遊ぶ活動を意図的・計画的に設定する。また、遊びに必要な遊具や用具、スペースなどを工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「友達の良さに気づいて、一緒に遊びを楽しもう！and どうしたらいいかな？みんなで考えよう！」

（凡例：　□幼児の姿　○保育教諭の読み取り　◎保育教諭の願い　△環境構成　☆保育教諭の援助）

（現状）
・昨年同じクラスだったお友達同士で遊んだり、一人遊びを楽しんだりしている。それぞれに好きな遊び（おにごっこ・助け鬼・すべり台・三輪車・虫探し）があり、色んなお友達と交わる姿があまり見られなかった。

（担任の思いと願い）
○色んな遊びを楽しんでいるな。
○助け鬼おもしろそう、どんな遊びなのかな。

◎全員が一つの遊びを行い、楽しさを共有してほしい
◎クラスの子同士で交わってほしい。
◎好きな遊び以外にも、一緒に遊ぶ楽しさに気付いてほしいな。

（環境構成と援助の工夫）
△帰りの会にて今日一日を振り返り、楽しかったことをお話しする「発表タイム」を設ける。
☆保育教諭も一緒になって遊びに参加し、楽しむ。
☆発表タイムにて、できるだけ園児の言葉で遊びを伝えられるように見守り、必要に応じて「○○さんは、今日○○が楽しかったんだね」と敷衍してあげて、お友だちが理解を深められるようにする。
☆楽しかった事を共感しながら、「先生もやってみたい、どんな遊びなのか教えて」と聞く。発表が苦手な園児へは、その園児の遊びを紹介したり、言葉を代弁したりと必要に応じて援助をする。
△それぞれが遊びを楽しめるように、ホールや園庭に必要な準備をする。

～全体遊び編～
・わらべうた（むっくりクマさん／なべなべ／川の岸の／おてらのおしょうさん／でんでらりゅーばー）
・大根抜き／赤白ゲーム／椅子取りゲーム／じゃんけん列車／パックンちょゲーム／だるまさんが転んだ／おにごっこ／ボールよけゲーム／カラーボール入れ

【実践事例２】生活の中で保育教諭の指導や、他児のやり方を見て望ましい生活習慣を身につける。

・遊びを楽しんだ後、着替えが必要になり着脱するが、そのままビニール袋に入れている。保育教諭や支援員が言葉かけをするが、園児の気分が乗らず、時間がかかる。中には、家庭や昨年度でも取り組んでいたのか、着脱時に「おしりを付けずに着替える」・「脱いだ衣服は畳んで入れる」園児の姿が見られた。

（担任の思いと願い）
○言葉かけでは伝わっていないかも。
○意識している園児をしっかり認めよう。

◎丁寧に着替えを行ってほしい。
◎できた喜びを味わい、自信につなげたい。

△帰りの会にて今日一日を振り返り、活動の中で写真に収めた「かっこいい人紹介」を設ける。
☆普段から言葉かけをしている事を、写真を用いて伝えることで「目」で見て言葉の意味が伝わりやすいようにする。

・生活の流れの中で、上履きの脱ぎ履きで度々揃えないことがあった。揃えて置く子の姿も見られたが、置いた場所がわからなくなり、失くしてしまう子の姿も見られた。

（担任の思いと願い）
○上履き置き場を担任が決めずに子どもたちと一緒に決めるのもいいかも。
○一人一人の意見や思いに触れられるかも。
◎上履きを揃えておくなど、丁寧な暮らしを心掛けてほしい。

△朝の会にて、子どもたちと一緒に「上履き置き場」を考える場を設ける。
△☆保育教諭を含め、みんなで意見を出し合い、柔らかい雰囲気で一緒に考えられるようにする。
☆提案のある園児の言葉を聞いたりしながら、色んな考えがあることに触れられるようにする。

【実践事例３】自然の中で身近な生き物に気づき、興味や親しみをもつ。

・夏の生き物（バッタやダンゴムシ、セミ）に興味を持ち始める子どもたち。園庭に出る準備をするときには、虫アミ・虫かごの用意をして並んで待つ姿が増えた。「バッタ掴まえたよ、みてみて～！」「あおむしさんいる」と感触や、観察を楽しむ。
・初めて見る虫を見つけると「これなんの虫？」と手のひらや容器の中を何度も覗き込みながら、形や動きを確かめている。虫への興味関心は高まり、触れてみたい気持ちがある一方で不安を感じると保育者の側に立ったり、手を保育者の方に添えたりしながら安全を確かめる姿もある。

（担任の思いと願い）
○虫への興味関心が高いな。
○みんなで一つの遊び楽しめるかも。

◎もっと色んな虫に触れてほしい。
知ってほしい。
◎子ども同士でのやり取りを楽しんでほしい。

△☆虫観察コーナーを作り、好きな虫や名前のわからない虫を探せるように図鑑や絵本（特定の虫・育て方）を用意し、虫かご・虫アミの使い方を丁寧に示す。
△すぐに取り出して遊べるように虫アミ・虫かごを用意する。
△家庭での虫取りや、他クラスからの情報（○○な虫見つけたよ）などを聞き、「虫取り探検」と名付けて近くの公園など散策に出かける。
☆虫の感触や観察を楽しんでいる園児に対し、「強く握ると痛いよ」「そっと優しく触れてみよう」と虫の扱い方を知らせる。
☆散策時、子どもの気づきに寄り添いながら「どこにいるのかな、この葉っぱの下も見てみる？」と探し方を提案する。
☆発見した園児の声を拾い、「○○さんが見つけたね」とみんなに共有して興味を広げる。
☆「ここは少し涼しいね。虫も好きなのかな？」と、環境と虫の繋がりに気づけるような言葉をかける。
☆散歩後や帰りの会にて、「どんな虫がいた？捕まえることできた？」と、経験を言葉にして振り返る時間を作る。また、写真を使って興味がつづくようにする。

Ⅳ　実践の振り返り

１成果

・発表タイムを設け、他児の遊びや思いを聞く事で、「その遊びやってみたい」と自ら関わろうする姿が見られた。一人遊びから二人遊びへと、複数遊びへと変化した。
・一緒に考える場を設けることで、他児の思いに触れ、他児の思いに気付く場面も増えた。また、他児の困り感に気づき、「やる？」と声をかけ他児を思いやる姿が育ってきた。また、困り感をに対して「こうした方がいいよ」と教え合う姿も見られるようになっていった。
・クラスや異年齢児と関わりが増え、「○○ごっこ遊び」と工夫して遊ぶ姿が見られる。一緒にルール

を作り、それを守ろうとする姿が増えた。
・自分の思いを言葉にして伝えようとする姿も見られた。
・遊びが始まると「〇〇さん、一緒に〇〇しよう」と他児を誘う姿も増える。
・友だちに認めてもらえる喜びを味わい、新たな遊びを考えて自己を発揮して遊ぶ姿が多く見られるようになった。
・他児も同じ遊びが得意になると誘い合って一緒に遊ぶようになり、数を競い合う姿も見られるようになった。
・他の幼児も友達の言葉に耳を傾けて聞く姿が見られるようになった。

２課題

・自分の気持ちを言葉で伝えることが難しく、行動で表してしまう姿も見られる。一人一人の気持ちを受け止め、代弁しながら言葉につなげていく援助が必要である。
・思いの違いから戸惑ったり、遊びが止まってしまったりする場面も見られる。子ども同士のやり取りを大切にしながら安心して関われるような保育者が側で見守り、必要に応じて仲立ちしていくことが必要である。
・友達や保育者に認められることで意欲が高まり、遊びを広げる姿が見られているため、子どもの気づきや工夫を丁寧に認め、言葉にして返す関わりを積み重ねていくことが今後の課題である。

３実践を通した自身の気づき、考え

三歳児は友だちへの関心が高まる一方で、思いを言葉で表現する力は発達途中であり、行動で気持ちを表す姿が多くみられる。子どもの姿を発達過程としてとらえ、丁寧に関わることの重要性を再認識した。また、子ども同士の関わりが広がる中で、保育者が関わりすぎるとやりとりが途切れ、見守ることで関係が深まる場面もあることに気付いた。子どもの力を信じ、関わるタイミングを見極めて支援していきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

子どもの小さな気づきや工夫を言葉にして認めることで、「またやってみたい」「伝えたい」という意欲につながることを実感した。今後も一人一人の姿を丁寧に受け止め、成長の芽を大切にしたい。それとともに、少人数での関わりや共通の遊びが生まれやすい環境構成を工夫し、自然に様々な友達と関われる機会を作っていく。

〈主な参考文献〉

・『内閣府支部科学省、厚生労働省（平成３０年）幼保連携認定型こども園教育・保育要領解説』フレーベル館
・『内閣府文部科学省、厚生労働省　（令和４年３月）幼保連携型認定こども園における園児が心を寄せる環境の構成』フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

遊びを通して、思いやりやマナーを身に付ける
―室内外遊びにおける保育教諭の援助・関わり方の工夫―

今帰仁村立認定こども園みらい　保育教諭　氏名　宮本　まりん

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章「人間関係」(4)「保育教諭の仲立ちにより、他の園児との関わり方を少しずつ身に付ける」第２章「言葉」(5)「保育教諭等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ」(6)「保育教諭等を仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ」とある。このように幼児は保育教諭の力を借りながら成長していく。

本学級の実態は、２歳児(6 年保育)男児２名、女児４名の計６名である。進級時に比べ、全身を使った遊びが出来るようになったり、衣服の着脱など身の回りの事を自分でしようとする姿がある。一方で、友だちと遊んでいく中で、思い通りにいかないと泣き叫ぶことがあったり、話が合う友だちとしか遊ばないこともあった。時間が経つにつれ、会話が成り立つようになり、ごっこ遊びをして言葉のやり取りを楽しめるようになってきた。しかし、私はもっと子どもたちが保育教諭とごっこ遊びや言葉のやり取りを楽しめるように、援助・関わり方の工夫が今まで以上に必要だと感じ、このテーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　子どもたちの興味・関心、発達に応じた遊びの準備と提供

子どもの興味・関心、発達に沿った様々な遊びを先輩や同僚から聞いたり、研修会や書物等から学び、実践する。

２　友だちと一緒に遊ぶことの楽しさを味わえるような援助・関わり方の工夫

まず、担任が子どもの遊びの状況を把握し、友だちと一緒に遊べない子には担任が遊びの相手をする。また、特定の友だちとだけ遊ぶ子には、他の友だちと遊ぶことの楽しさを伝え、遊びが集団に広がっていくような援助・関わり方をしていく。

Ⅲ　研究計画

月	研　究　計　画
4 月・5 月	幼児の実態把握・課題の検討
7 月	研究テーマの検討（テーマ設定理由、研究内容、研究計画の検討含む）
7 月～12 月	理論研究・保育実践
12 月～1 月	課題研究のまとめ

Ⅳ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】　思いっきりジャンプをしたいができずにいる

《園児の実態》

・両足でジャンプ、走るなど運動能力が上がり、室内では牛乳箱で作った台の上からジャンプしたり、戸外遊びでは自分たちで追いかけっこをしたりする姿が見られる。

・一人がままごとを始めると、自然とみんながままごとをはじめ、料理をしたり、お弁当に入れたりす

る姿が見られる。

・「貸してちょうだい」「今使っているから待っててね」と言えずトラブルになってしまう。

《保育教諭の願い》

・みんなで仲良く遊んでほしい。

・「貸してちょうだい」「今使っているから待っててね」と言えるようになってほしい

・思いっきり体を動かして遊んでほしい。

《保育教諭の関わりと援助》

・一人がジャンプをすると、真似してみんながジャンプすることが多いので、ぶつかったりしないようにリトミックやわらべうたをして思いきりジャンプができるようにした。

・ままごとを始めると、ロッカーの上でお料理やお弁当が始まるので、テーブルを二つ出し、ロッカーの上という狭い範囲ではなく広いスペースでままごとができるようにした。

《園児の変容》

・室内でジャンプをしたいとなると、自分たちから「かえるのうたやりたい」や「〇〇やりたーい」と言うようになり、歌やわらべうたを自分たちで歌い始めたりするようになった。

・ままごとをしたいときは、「ままごとやりたいからテーブル出してちょうだい」と一人の女児が言うと、他の友だちは食べ物やお弁当、ハンカチなどを出しはじめ椅子を持ってきて、ままごとを始める。

女児：何、選ぼうかな
〇〇は何選ぶのー？
男児：〇〇はね、これにする

子：ままごとするならイス出そう
子：みんなの分も出そうか

《結果と考察》

・広いスペースを確保したことで思いっきりジャンプができたり、自分たちでぶつからないように広がって自分たちで歌を歌ってリトミックをしたり、わらべ歌を始めるようになった。

・普段使っているテーブルを出したことによって、狭い場所でやっていたままごとを広い場所に移して、お弁当箱を広げたり、ハンカチを広げて遊んだり広いスペースで出来ることが広がり、自然とみんながままごとを始めるようになった。

【実践事例２】　お友達の輪に入れず一人で遊んでいる

《園児の実態》

・話が合う友だちとしか関わらず、「一緒に遊ぼう」と言われても違う場所に行ったり、逃げたりする場面があった。

・一緒に遊びたいが声のかけ方や遊び方が分からず、無理やり輪の中に入ろうとしてトラブルになることが多い。

・「先生嫌！」「〇〇と遊ばない」「〇〇が仲間に入れてくれない」と相手を傷つける言葉をよく使うことがある。

《保育教諭の願い》

・特定の友だちだけでなく、他の友だちとも仲良く遊んでほしい。

・好きな遊びを通して、友だちの輪に入れるようになってほしい。

《保育教諭の関わりと援助》

・友だちと一緒に遊びたいけど関わりが分からない子どもには、「一緒に遊びたいけど…」という気持ちに寄り添いながら、保育教諭と一対一で関わりながら少しずつ輪を広げ、誰かと遊ぶ楽しさを知ってもらうようにした。

・特定の友だちと遊ぶ子どもには、「〇〇も一緒に遊びたいって言っているけど、どんなかな？」「先生も一緒に遊ぶから、〇〇も一緒に遊んでいい？」など声をかけ、特定の子でもだけではなく、他の友だちとも遊べるように保育教諭が仲立ちとなり遊びが広がっていくようにした。

担：〇〇ちゃんも乗りたいって

子：いいよー！乗って乗って

子：ねえー　見て見て、
〇〇、葉っぱいっぱい採ったよ
〇〇もやってみて

《園児の変容》

・保育教諭と一対一で関わって遊んでいく中で、他の友だちが輪の中に入り（保育教諭が他の友だちも輪の中に入れる）、保育教諭と遊んでいた子どもは、自然とその子と関わって遊んでいく姿が見られた。

・特定の友だちだけと遊ぶ子に声をかけたことで、その子だけでなく、「〇〇一緒に遊ぼう」「こっちにおいで」と他の友だちも誘うようになり、一緒に戸外遊びをするようになった。

《結果と考察》

・保育教諭と一対一で遊ぶことをベースにして、友だちの輪を広げることによって他の友だちと遊ぶ楽しさを知り、保育教諭だけでなく、自然と他の友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができたと考える。

・保育教諭が仲立ちとなり声をかけたことで、特定の子だけでなく、色んな友だちとも遊べるようになり、自分から声をかけるようになり、その楽しい経験によって、自然とみんなと遊べるようになったと考える。

Ⅴ　実践のまとめと考察

１　実践のまとめと考察

自分の思いが通らなかったり、自分の思いが相手に伝わらず、もやもやしトラブルになってしまったり、他の友だちとどう関わっていけばいいのか分からない子もいた。まずはそこで、保育教諭との言葉のやり取りを楽しむことから始めた。保育教諭と一対一でやり取りを楽しんだことで、少しずつ他の友だちとも関わろうという意識が芽生え始め、自分から声を掛けたりすることが増えてきた。言葉のやり取りでのトラブルは付きものではあるが、いかに自分の言葉で伝えることができるのか、保育教諭が仲立ちしながら見守りつつ、言葉のやり取りを楽しみながら、遊びが徐々に広がっていくようにしていきたい。

２　今後の課題と取り組み

自分の思いが上手く伝わらず、もやもやし他の友だちとトラブルになってしまう時期なので、子どもたちが相手にどう伝えていきたいのか保育教諭が汲み取り、どう相手に伝えていくのか子どもたちと一緒に考えていきたい。

子どもたちが何に興味をもっているのか、友だちとどう関わっていくのか見守りつつも、保育教諭が子どもたちに対してどう応えていく必要があるのかも考えながら子どもたちと関わっていくように取り組んでいきたい。

このように、今後とも遊びを通して、思いやりやマナーなど人との関わり方を少しずつ身に付けていけるようサポートしていくつもりである。

〈主な参考文献〉

内閣府　（平成３０年）　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』　フレーベル館
金子龍太郎、吾田富士子　（平成２３年）　『子どもの発達がわかる本』　ナツメ社

様式３【課題研究レポート】

話に耳を傾ける心と、気持ちを伝える喜びを育む援助の工夫
―絵本の活用や日々の振り返り活動を通して―

うるま市　赤道こども園　保育教諭　　山下　雷太

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級の園児は５歳児（３年保育）男児１３名、女児７名、計２０名在籍し、うち進級児は１０名である。男女ともに活発で好奇心旺盛な子が多い。絵本の読み聞かせや、学級での話し合い活動においては、興味を示すと聞くことができるが、興味がなくなると途端に話に集中できない。また、遊びや生活の中で自分の思いを言葉にして伝えることができずトラブルになることがある。という様子も見られる。新型コロナウィルス流行時期を経験したこともあり、社会的発達に関する視点「身近な人と気持ちが通じ合う」両親以外の身近な大人との受容的・応答的な関わりが十分に体験できず、何かを伝えようとする意欲や信頼関係が不十分なまま育ったという経緯があるためと考えた。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章第４節「言葉」の領域には「保育教諭や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみを持って聞いたり、話したりする。」や「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。」とある。さらに「人間関係」の領域では「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。」とある。近年「小１プロブレム」という言葉も聞かれるようになった。園では子どもの興味・関心に基づいた遊びを通した学びなのに対して、小学校では教科書に沿った学習の学びになっていることから、小学校の環境の変化に適応できず、先生の話を聞いたり、自分の気持ちをコントロールしたりなどが難しい子がいる。

そこで、保育者や友達と心を通わせ絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身につけ、経験したことや考えた事などを言葉で伝えたり、相手の話に関心を持って聞いたりすることで、言葉による伝え合いの楽しさを感じ、小学校へのスムーズな接続に繋げていきたいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①読み聞かせの実践・絵本環境の充実

・毎日の読み聞かせを継続していくことで「聞く」楽しさや雰囲気を感じ取れるようにする。
・物語に入りやすい様に、季節や発達時期、子ども達の興味関心に沿った絵本を選ぶ。
・いつでも手に取れるようにクラスに絵本コーナーを設置する。
・絵本の貸し出しを行う。

②豊かな言葉や表現を身につける

・行事の後や帰りの会で振り返りを行い、子ども達が思いや考えを伝え合う場を設ける。
・思いが上手く伝えられない子に対して、必要に応じて言葉を補ったり、思いを代弁したりする。
・発表する意欲を認め、褒めることで自信や次回への期待に繋げていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例①】

〈園児の姿〉

・半数以上の子が絵本に興味を示すが、集中が続かず離席したり、隣の子にちょっかいを出したり、

おしゃべりが始まったりする姿が見られる。

・広場でチョウやバッタ探しに夢中になっている。

〈保育教諭の願い〉

・絵本に集中して、楽しめるようになって欲しい。

・長い間座れるようになって欲しい。

〈保育教諭の援助〉〇環境構成　☆援助

昆虫への興味から、そのことに見合った題材を選んだ。

長い物語も楽しんで見られるようになってきた。

〇観察ケースや図鑑を準備していく。

〇子ども達の興味関心に合わせて、クラスの絵本コーナーを入れ替え、充実させていく。

☆子ども達が絵本を読む様子を見守ったり、絵本の感想に対して認めたりして共感していく。

☆活動中など、子どもたちが今何に興味があるかに耳を傾けていく。

☆帰りのひとときで読み聞かせを行っていく。

☆子ども達が理解しやすい様にゆったりとした読み方や声の調子を意識していく。

〈K 児の変容〉

絵本の読み聞かせの時、興味を示さず友達同士おしゃべりをしたり、ちょっかいを出したりすることが多く、嫌がられることもあった。本児は虫が大好きで自分で捕まえたり、友達と一緒に「〇〇虫」とオリジナルの名前を付けたりして遊んでいる。そこで本児の好きな昆虫に関する絵本を選択していくことにした。すると、『とべバッタ』の読み聞かせでは「バッタが結婚しているね」と絵本へ興味を示し、そこから少しずつ絵本への興味が高まり、読み聞かせも集中して聞けるようになってきた。また、他児に対してのおしゃべりやちょっかいも少なくなっている。そして、クラスの絵本コーナーの環境も工夫したことで、絵本を通して友達同士で「入れて」「一緒に見よう」などと伝えて一緒に読んでいる姿が見られるようになった。今では、長い話の読み聞かせでも聞けるようになり、皆が虫のことで何か発見したり、質問したいことがあったりすると、K 児を呼ぶようになり、友達との関わりが深まっている。

〈結果と考察〉

・興味関心に合わせた絵本選びを行うことで、読み聞かせを楽しむことができるようになってきたと考える。

・読み聞かせを通して、集会などへの集まりへの参加、話を聞く態度で落ち着きが見え始めている。

・絵本という共通の話題を通して、友達同士の関係が深まっている。

【実践事例②】

〈園児の姿〉

保育者の「発表したい人いますか？」の呼びかけで手を挙げて発表をする子もいれば、自分があてられたとき固まってしまって話せなくなる子がいる。また、遊びの際には 1 人または少人数で遊び、玩具の取り合いによるトラブルも多い。

〈保育教諭の願い〉

・自分の気持ちが言葉で表現できるようになって欲しい。

・言葉による伝え合いを楽しんで欲しい。

〈保育教諭の援助〉〇環境構成　☆援助

〇帰りの会や、振り返り活動の中で発表する場を設ける。その際、発表者に注目しやすい様に手作りのマイクも準備しておく。また、発表しやすい雰囲気を心掛ける。

〇話し終わった後には拍手をし、次への期待を持たせるようにする。

☆言いにくそうにしている場合は、必要に応じてサポートに入り、気持ちを代弁していく。

〈S 児の変容〉

本児は活発で、発表の場で元気よく手を挙げるが、当てられると急な緊張から保育者の陰に隠れてしまったり、固まってしまったりする姿が見られた。手を挙げた際にはなるべく自分の言葉で伝えることができるように保育者が側で寄り添い、言葉を補ったり、気持ちを代弁したりしながら「伝える」経験を積み重ねていった。すると、自分の席から動けなかった姿から少しずつ前に出て立てるようになり、自分で発表できるようになった。まだ大勢の前では恥ずかしがることもあるが１学期と比べると非常に成長を感じている。また、注意を受けた際に癇癪を起して泣いて話ができないことが以前はあったが、自分の思いを言葉で伝えられるようになってきてからは癇癪も減ってきた。受け答えもしっかりと出来るようになっている。玩具の貸し借りでの友達とのトラブルも減っている。

〈結果と考察〉

・保育者が本児の気持ちを代弁していくことで、自分の思いに気付きスムーズに感情を表現することができたのではないか。

・自分の思いを言葉で伝えることができるようになってきたことで友達との玩具の貸し借りによるトラブルも減ってきたのではないか。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・子ども達の興味関心に沿った絵本の選択を心掛けたこと、読み聞かせを工夫してきたことで絵本への興味が高まり、集中して聞けるようになってきた。

・絵本を介した共通の話題として、友達同士会話を楽しむ姿が見られるようになった。

・絵本を短い物語から少しずつ長い物語へと変えていくことで、自然と長い間座れるようになってきた。

・学級活動の中で子ども達の思いや考えを伝え合う場を設け、言葉による伝え合いの経験を積み重ねてきたことで気持ちを伝える喜びや必要性に気付いてきた。

②課題

・話し合い活動の中で集中が続かず姿勢が崩れたり隣の子とのおしゃべりを始めたりしてしまう子がいる。

・長く絵本を借りていない子がおり、絵本への興味が持てるように工夫が必要である。

・会話の中で強い言葉やジェスチャーが出てくることがあり、その都度個別に、または全体で言葉の使い方、友達との接し方について話し合うようにしている。またトラブルの際に子ども達だけで解決するのが難しいので必要に応じてサポートしていくようにする。

③実践を通した自身の気づき、考え

・担任の伝えたい思いを表現したり、アイコンタクトや会話を交わしたりすることで、落ち着いて聞けるようになってきた。

・振り返り活動を通して自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いたりする伝え合いができるようになってきた。

・進級当初の子ども達は、集まるまでに時間がかかったり、担任の話に関心がなくすぐに隣とおしゃべりを始めたりなど集中力の続かない子が多かった。読み聞かせや学級活動を工夫していくことで少しずつ改善が見られる一方、まだ集まるまでに時間がかかったり、おしゃべりをしたりする子がいる。そのため、今後も継続して援助を続けていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・読み聞かせと共に年賀状や郵便屋さんごっこを通して、友達とのやり取りを楽しめるようにしていきたい。

・帰りの会での発表や、誕生会での司会進行、係、行事ごとの出し物で自信を持って皆の前に出て表現し、聞いてもらえる喜びを味わい、自己発揮できるような環境作りを行っていく。

・伝え合いの深まる環境や、援助の工夫についての学びを深めていく。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』
株式会社フレーベル館

相澤妙子・谷口康子　平成２９年　『選ばれる園になるための小学校までに育って欲しい学びの姿』
株式会社チャイルド社

赤木和重・岡村由紀子　平成２５年
『保育実践力アップシリーズ１「気になる子」と言わない保育　こんなときどうする？考え方と手立て』
ひとなる書房

ふるたたるひ・たばたせいいち　昭和５５年　『おしいれのぼうけん』　童心社

赤羽末吉　昭和４７年　『おおきなおおきなおいいも』　福音館書店

田島征三　昭和６３年　『とべバッタ』　偕成社

様式３【課題研究レポート】

身近な生き物との関わりを通して興味・関心を育む
―虫との関わりの中で、知的好奇心が育つ環境構成と援助の工夫―

浦添市当山こども園　保育教諭　伊佐　秀美

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』第２章「環境」の領域では、子どもが身近な自然や生き物に触れ、生命の不思議さや尊さに気づく経験の大切さが示されている。また、自然事象に対する子どもの興味や気づきを広げ、丁寧に扱おうとする態度が育つよう、保育教諭が意図的に環境を構成し、適切な援助を行うことの重要性が述べられている。

本学級は、3 歳児（3 年保育）男児 8 名、女児 9 名計１７名在籍し、入園当初は不安から泣く子も多く、環境に慣れるまでに時間がかかっていた。次第に園生活にも慣れ、好きな遊びを見つけて楽しむ姿が増えていった。しかし室内を走り回ったり、ホールへ飛び出したりするなど、遊びに集中できず落ち着かない様子も見られた。そうした中、年長児が育てていたカバマダラの幼虫に触れたことをきっかけに、虫探しを楽しむ姿が増え、身近な生き物への興味や関心が高まり、虫を見つけた喜びを伝え合う、じっと観察するなどの姿が見られるようになった。しかし、加減がわからず強く触って弱らせてしまう、雑に扱ってしまう、見つけた虫を握りしめてしまうなど、3 歳児らしい関わり方も見られる。

こうした姿から、子ども達が生き物に主体的にかかわる機会を保障しながら、興味・関心をもって関わる経験を十分に積むことを大切にしたいと考え、援助の工夫について研究したいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①身近な生き物を飼育し、興味が持てるような環境構成の工夫

観察しやすい飼育環境を整え、発見する面白さや好奇心、探究心が芽生えるような援助を行う。

②身近な生き物との関わりの中で、命を大切にしようとする心を育む援助の工夫

保育教諭が生き物を見つけた瞬間に共感したり、観察方法や虫との関り方の見本を見せながら、優しく触る経験ができる場を保障する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】　「カバマダラの幼虫」

《幼児の実態》
- 蝶を追いかけ、カバマダラの幼虫探しに夢中になる子もいる。
- ゼリーの空き容器に幼虫を入れて観察しようとする。
- 興味はあるが、怖がって触れずに“見て”楽しむ子もいる。
- 触りたい気持ちが強く、取り合いになる場面がある。
- ペットボトルに入った石鹸クリームあそびの石鹸水を幼虫にかけてしまう姿も見られる。
- トウワタにカバマダラのさなぎを見つけると、触ったり捕ったりする行動が見られる。

《保育教諭の願い》
- 幼虫への興味・関心をもつ子がもっと増えてほしい。
- 子ども達が幼虫にやさしく触れ、丁寧にかかわってほしい。
- 捕まえた後も、命として大切に扱う姿を育てたい。

《環境構成》
◎子どもの「お部屋に持っていきたい」という思いを受け止め、飼育ケースを用意し、いつでも観察できる環境を整える。
◎飼育ケースを子どもの目線で見やすい場所に置き、見たい時に見に行けるコーナーを作る。
◎幼虫のえさとなるトウワタの葉っぱを一緒に探しに行き、生活環境作りを子ども達と行う。
◎図鑑をいつでも見られるようにし、調べたり比べたりする探求活動を自然に促す環境を工夫する。
◎子ども達が安心して観察できるよう、幼虫がさなぎになった時点で、別の飼育ケースに移し替え、落下や衝撃が起きないように環境を整える。

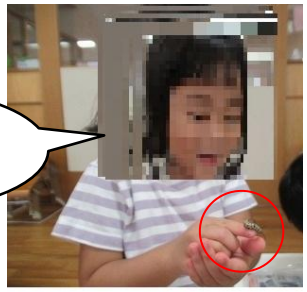
《保育教諭の関わりと援助》
・「何を食べるのかな？」「ウンチはどうする」など、子どもの気づきを待ちながら、考えるきっかけとなるヒントをさりげなく示す。
・幼虫の扱いがわからない子には、保育教諭が一緒に触り方を示し、優しく扱う経験をさせる。
・幼虫の変化を見つけた時に、子どもの発見を共感しながら一緒に喜び、丁寧に関わることの大切さを伝えていく。
・興味はあるが怖がる子には無理に触らせず、まずは「見る」「近くで観察する」など、安心して関われる距離感から経験を積ませる。
・幼虫の取り合いが起きたときは、関わり方を一緒に考えたり、順番を決めたりして子ども同士が気持ちよく関われるよう援助する。
・ずっと手に持っている子には、「虫さん苦しくないかな？」気づける言葉かけを行い、生き物の気持ちに気づかせるような援助を行う。

どこにいるのかな？

見て！
たくさんいるね！

ぶら下がってる！
さなぎになるのかな？

くすぐったい



かわいい～！

《幼児の変容》
・触り方が優しくなり、怖がっていた子も喜んで触れるようになった。
・見つけた幼虫を図鑑で調べたいという気持ちが出てきた。
・年長クラスを訪れオオゴマダラの金色のさなぎを見て喜び、他の生き物にも興味が広がってきた。
・オオゴマダラにも興味を示し、飼育ケースに入れて育てようとする姿が出てきた。
・幼虫が大好きになり「触っていたい」という気持ちから、ずっと手に持っている子もいた。
・幼虫を家に「持って帰りたい」と訴える子が現れ、実際に家庭で育てて蝶に羽化させ、園に持ってきてくれた。
・年長児から「ぶら下がっているさなぎは触っちゃだめだよ」と教えてもらい、触りたい気持ちを我慢して観察できるようになってきた。
・死んだ幼虫を見て「病院行かなくっちゃ」「注射したら元気になるよ」と話し、幼虫を思いやる気持ちが芽生えてきた。
・さなぎから蝶へと羽化する瞬間を実際に目にし、驚きや感動を言葉や表情で表す姿が見られ、羽化した蝶を外に放してあげる体験を通して、「またね」「頑張ってね」と送り出す気持ちが育ってきた。

【実践事例２】　「カマキリ見つけた！」

《幼児の実態》
・ベランダの洗濯干しスタンドに止まっていたカマキリを見つけ、「かっこいい」と興味津々で見る。
・今にも飛び掛かりそうな姿勢（威嚇姿勢）に驚き、後ずさりする様子も見られた。

《保育教諭の願い》
・カマキリそのものに親しみ、興味を深めてほしい。
・カマキリが何を食べるのか、どんな環境で過ごすのかなど、生態にも目を向けてほしい。
・怖がらずに、身近な生き物として関わってほしい。

《保育教諭の関わりと援助》
・「どんなお家がいいのかな？」と問いかけながら、年中児が飼育しているカマキリを見せてもらい、落ち葉や枝集めを行う。
・餌として無糖ヨーグルトや魚肉ソーセージを食べる様子を見せ、カマキリがどのように食べるのかを観察できるようにする。
・「顔の形は？」「どんな動きしているかな？」など具体的に見る視点を持てるよう声掛けを行う。
・夜間の温度管理のため、保育教諭が毎日カマキリを持ち帰り、大切に扱う姿を見せる。

あっ、
かまきりだ～！！

たべている～

かっこいいねー！
でも、ちょっと　こわいな

虫眼鏡で観察

《幼児の変容》
・カマキリの食べ方を真似しながら「こんなしてる！」と、両手を口元に持っていき観察したことを表現する姿が見られた。また、カマキリが左右に揺れる動きを真似る姿も見られた。
・「カマキリはヨーグルト食べるよ」と話すなど、知ったことを共有しようとする姿が出てきた。
・怖がらずにカマキリを手に乗せてみようとする子が増え、距離が縮まってきた。
・手に乗せていたカマキリが突然跳ねて T シャツに飛び移り、驚いて払いのけてしまう子もいた。

≪カマキリの死と子どもの受け止め≫
・カマキリが死んでしまい、子どもの反応を大切にしたくて飼育ケースを机の上に置いていた。
・「寝てる？」「動かないよ」「なんか固まっている」「触っても動かない、死んじゃったんだと思う」と子ども達自身が気づいていく姿があった。
・保育教諭が涙を浮かべながら悲しさを伝えると、子どもが肩をとんとん叩きながら「新しいカマキリ探そう」と励ます姿も見られ、優しさが育っていることが実感できた。
・「どうして死んじゃったのかな？」という問いに対して、「暑かった？」「お腹すいたのかな？」など子ども達なりに理由を考える姿があった。
・「土に埋めよう」「ウートートーしよう」という声も上がり、みんなでお墓作りを行った。最後まで世話をし、見送りをする経験を通して、命の大切さに触れる時間となった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・幼虫やカマキリとの出会いをきっかけに、生き物に主体的に関わろうとする姿が増えてきた。
・図鑑を開いて調べたり、他の種類の幼虫やさなぎにも目を向けるなど、探求の幅が広がった。
・最初は強く握ったり、落してしまう姿もあったが、保育教諭の丁寧な声掛けや関わりの積み重ねにより、優しく触れる、触るのを我慢して観察するなど虫との関わり方が変わってきた。
・羽化の瞬間を見た時の驚きや感動、死んでしまった時の悲しさ、土に埋めてあげたいという思いなど、命に向き合う中で、心が大きく動く経験が見られた。
・年長児から「さなぎになると触っちゃだめ」と教わり、年中児の飼育方法を見て自分たちも真似るなど、自然な形で知識や思いやりが伝わっていった。

②課題

・興味が強すぎて、長時間手に持ち続けたり、触りたくて取り合いになったり、優しく触ることが難しい子もいた。
・飼育環境の整え方、管理の安定が必要で、さなぎを揺らして落してしまう、夏場の室温で死んでしまうなど、環境管理に保育教諭側の課題も見られた。

③実践を通した自身の気づき、考え

・丁寧に関わることが、子どもの心の動きと学びを深めると実感した。
・保育教諭の言葉がけ、態度、観察する姿勢が、子どもの生き物への向き合い方に直接影響することを強く感じた。
・すぐに教えたり止めたりするのではなく、問いかけながら気づきを待つことで、子どもの主体的な学びにつながる場面が多かった。
・死んでしまったときに子どもがどう感じ、何を考えるのかを丁寧に共有すると、悲しみだけではなく、命に対する深い学びへとつながることを実感した。
・日常の中での自然との関わりは、心を育てる力が大きいと実感した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・夏場の高温で命を落とす経験を踏まえ、夜間の室温、直射日光の対策、風通しなど、生き物の命を守るための環境構成の見直しをしながら、生き物に応じた飼育ケースの使い分けを行う。
・子どもが適切な距離で観察できる環境を工夫する。
・保育教諭が扱い方を実際に手本として見せ、「どう触ると安心かな？」と一緒に確認しながら、生き物と関わる際の約束を作り、触りたい気持ちと命を守る気持ちのバランスを育てる。
・捕まえて生き物を図鑑で調べたり、調べたことがさらに広がる環境を整える。
・生き物の誕生・生長・死を見守る中で、驚き、嬉しさ、悲しさ、葛藤など子どもの心は大きく動く。これらの気持ちを保育教諭が丁寧に受け止め、言葉にして返すことで、生き物に対する優しさ・共感・責任感が育まれていく。今後も、身近な生き物との出会いを通して、子ども一人ひとりの興味・関心が広がる保育を大切にしていきたい。

お墓を作り、草花を置き、手を合わせていました。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成 30 年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説　株式会社フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

互いの良さに気づき、思いやる環境構成や援助の工夫
―友だちや保育教諭と遊びを通して―

浦添市　内間こども園　教諭　氏名　座安　美奈子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　第２章　第４節（２）には、「人と関わる力の基礎は、自分が保護者や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと、さらに、その信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われるとある。近年、核家族化や様々な事情を抱えた家庭が増え、温かく見守られる機会が減っているように感じる。「また、園児は園生活において多くの他の園児や保育教諭等と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさを味わい、ときには園児同士自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験や、考えを出し合ってよりよいものになるよう工夫したり、一緒に活動する楽しさを出し合った体験を重ねたりしながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになる」とも表記されている。

本学級の幼児は４歳児（３年保育）男児７名、女児１１名、計１８名在籍し、自分のやりたい遊び、手伝ってほしい部分を伝える姿がある。しかし、生活リズムや愛着の面など一対一の関わりを求める子、午睡明けに泣く子がおり、友だちとの関わりの中で、自分の思いを相手に伝えるが、相手の話を聞かずに強い口調で怒ったり叩いたりする場面が見られた。

そこで、保育教諭との関係を基盤に徐々に情緒面が安定し、周囲の環境に落ち着いて関われるようになってほしい、遊びや生活の中で思いが相手に伝わることで楽しさや嬉しさを感じ、言葉でのやりとりができるようになってほしいと願い、テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①自分の思いを言葉にし、相手の思いに気づくための援助や環境構成の工夫

幼児一人一人の姿を受け止め、内面を理解し、安心して園生活が送れる、好きな遊びを見つけて楽しめるようにする。また、子ども同士の繋がりが持てるようにする。

②子どものやってみたいという気持ちを育むための援助や環境構成の工夫

身の回りにある遊具や道具など様々な教材を組み合わせ、友だちや保育教諭との関わりの中でやりたいものを見つけるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

≪幼児の実態≫

・生活面において保育教諭へ着替えの援助を求めてくる子が多い。
・休み明け登園時や午睡後に泣く姿がある。
・友だちや保育教諭の遊びを傍観している子がいる。
・遊びたい遊具が使えずに友だちに強い口調で怒り叩く姿が見られる。

≪保育教諭の願い≫

・生活リズムを整え、毎日、笑顔で登園して欲しい。
・一人一人が大切にされている安心感を持ち、遊びを通して様々な活動を楽しんで欲しい。
・自分の思いだけでなく相手の思いに気づくことができるようになって欲しい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・生活リズムや情緒面での不安な面が見られる子へは、一緒に所持品の片付けや寝具を準備することで心が落ち着けるような環境を用意する。
・保育教諭に抱っこやおんぶをしてもらう、膝の上に座って遊ぶ、会話を楽しむ等、愛着面でのアプローチを積極的に取り入れる。

・担任間で一人一人の特性や性格、遊びの様子などを常に話し合う事で、共通して子どもへ同じ対応が出来るようにする。

・生活や遊びの中で自分の思いが相手にうまく伝わらない、理解してもらえない場合、保育教諭が仲介役となり状況に応じた対応を行う。
・保育教諭も子どもと一緒に遊びを楽しむ中で、子どもの気づきやつぶやきを共感し、それを他の子へも知らせることで繋がりが持てるようにする。

【子どもの変容】　　◎保育教諭の読み取り　　★保育教諭の援助

【繰り返し遊ぶ】大型ソフトブロック
　正方形、長方形、三角形、円柱の大型ソフト積み木を遊戯室の広いスペースを使って、４月５月は積み上げてみる、広げる遊びが見られた。数が限られていることで、「もっと使いたい」「今使っているからダメ」とトラブルになることが増えていく。遊戯室で使用する共通遊具なので時に壊されて怒る姿も見られる。

◎遊びたい気持ちが全体的に広がっている！子ども同士が繋がるチャンスである！

★どのような言葉かけで輪の中に入るのか、保育教諭も一緒になって遊び込む。
★ブロックが使えずに困っている子に「一緒に仲間に入れて」と言葉をかける。
★共通の遊具なので全部使ってしまうと困る友だちがいる、他のクラスが使う可能性があることを知らせ、どうしたらいいのか一緒に考える。

【繰り返し遊ぶ中で一緒に作るって面白い】
　「じゃあ、この三角なら使っていいよ」「じゃあ、一緒にバイク作ろう」と、友だちへ譲る、一緒に作って遊びを楽しむ姿が見られる。
　「明日もバイク作って遊ぼう」
　「長いブロック（重ねて）跳んでみよう」
　「にじ組が使っているので壊さないでねって書いておこう」
　「お母さんたちにも見せたいな」
子ども同士で会話をやりとりしながら、遊びが発展していく。

★朝の会、帰りの会などで遊びの様子を知らせ、友だち同士で作り上げる楽しさを感じられるような言葉かけをする。

★他のクラスとの共有の遊具の為、遊びが継続できるような配慮を行う。
★保護者に見せたいという声があったので、保育参観や運動会で披露する場を設ける。

≪結果と考察≫
・一人一人に応じた対応をすることで、生活面や情緒面が安定し、「これやってみたい！」と自ら好きな遊びを見つけられたと考えられる。
・自分の思いが相手に伝わらず苛立っていた子も保育教諭にくり返し仲立ちしてもらうことで、気持ちを伝える、相手の思いに気づき譲るなど思いやりのある行動に繋がったと考える。

実践

≪幼児の実態≫
・身近な生き物に関心を持つ姿が見られる。
・「先生、捕まえて」と昆虫に触れない子もいる。
・捕まえて満足している。

≪保育教諭の願い≫
・身の回りの動植物への興味関心をさらに深めて欲しい。
・昆虫の観察や飼育を通して大切にする心を育みたい。

≪保育教諭の関わりと援助≫
・子どもと一緒に昆虫探し、発見や気づきに共感することで関心が広がるようにする。
・保育教諭が昆虫などに親しみを持って触れ、世話をすることを通して興味を持てるようにする。
・飼育コーナーを設け、図鑑や必要な道具がいつでも手に取れるようにする。

【どうなるかな？】飼育体験を通して
「チョウチョいた！」「捕まえよう」と園庭で駆け回る姿がある。
オオゴマダラの幼虫を見つけ「お部屋で育てたい」という意見がある。
友だちや保育教諭と一緒に飼育ケースの中で飼育、観察が始まる。食草であるホウライカガミが少なくなったこと、ウンチで飼育ケースが汚れていることに気づきお世話する姿が見られる。昆虫が苦手だった子も近くで観察するようになる。
オオゴマダラが蛹になり、羽化した事を喜ぶ。羽化直後は羽を乾かしているので触らない方が良いなど、気づいたことを伝え合う。

★興味が深まるよう、飼育コーナーを設けいつでも絵本や図鑑が手に取れるように置く。
★保育教諭がどのようにお世話するのか知らせながら一緒に手伝う子のつぶやきや気づきをクラス全体へ知らせる。
★飼育ケースや虫取り網の扱い方、昆虫の触り方について時に雑に扱う場合があったので、どうしたらよいのか話し合う。

≪結果と考察≫
・初めは帽子や手で昆虫を捕まえようとしたがうまくいかず、どうしたらいいのか友だちと考え、虫取り網や虫取り籠を使うことに気づいた。また、どういう触り方がいいのか友だちに教える。
・昆虫を捕まえるだけでなく、「どういうチョウチョになるのか」好奇心や探求心が生まれ飼育することへ繋がったと考えられる。
・飼育を通して昆虫の触り方等、子ども同士で教え合う学びの姿が見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

一人一人の生活リズムや家庭環境を把握、職員間で共有しながらアプローチすることで笑顔登園、身の回りの後始末も進んで行うようになった。

保育教諭の仲立ちの元、自分の思いや相手の思いに気づけるような関わりをしたことで遊びが楽しいという経験が増え、共通の遊具の貸し借りを通して、少しずつ互いの思いが伝わるようになった。

身近な生き物に対して興味を持ち、世話をすることでいたわりや大切にする気持ちが育まれたと考えられる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

遊びを通して、「一緒にやると楽しい」「嬉しい」「負けて悔しい」など感情体験を味わい、お互いの気持ちが通じ合い関係が深まるような援助や環境を今後も継続する。

園庭だけでなく、散歩などでみつけた動植物の状況を把握し、子どもがより好奇心・探求心が育まれるような計画、環境を再構成する。

子ども一人一人の発達過程を踏まえ、興味や関心に沿った環境を構成し、その時々で変化する子どもの気持ちに配慮した教育及び保育を職員間で連携しながら今後も１展開していく。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年３月　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館
内閣府　文部科学省　厚生労働省　「幼保連携型認定こども園における　園児が心を寄せる環境の構成」　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

友だちの良さを認め合い、思いやりの気持ちが育まれる学級づくり

～集団活動や遊びを通して～

那覇市立真和志こども園　保育教諭　安里　神那

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級は、５歳児（２年保育）男児１２名、女児９名の計２１名が在籍している。友達や保育教諭との関わりを積極的に求める子が多く、エネルギッシュでとても活発的なクラスである。一方で、友達と遊びを進める中で互いの思いが食い違うと、自分の意見を押し通そうとしたり、その場から抜けてしまい遊びが続かなかったりする姿が見られる。また、仲の良い友達同士で集まると、他の子を仲間に入れようとせず、自分達だけで遊びを楽しもうとする場面も見られる。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第２章第４節「人間関係」の領域には、「友達との関わりを深め、思いやりをもつ」とある。これは、本学級のもつ課題に深くつながる項目ではないかと考える。そこで、「相手と自分の気持ちの違いに気付き、思いやる心を育む」「互いの良さに気付き、認め合いながら遊びや活動を楽しむ」為には、どのような環境構成や援助の工夫をすればよいのかを探るべく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①互いの良さに気付き、認め合いながら遊びや活動を楽しむ為の環境構成と援助の工夫

互いの思いが違う事に気付くような言葉かけをしたり、感じた事を引き出したりしながら、友達同士で言葉にして伝え合うことができるよう援助を行う。

思いがぶつかり合う事も大切な経験とし、共感したり一緒に考えたりする中で相手の視点から考たり、思いを受け止めたり、折り合いがつけられたりする事ができるよう援助を行う。

②相手と自分の気持ちの違いに気付き、思いやる心を育む為の環境構成と援助の工夫

保育教諭が園児のありのままの姿を受け止め、自分らしさを発揮する中で友だちの良さに気付いていけるよう援助を行う。

一人一人の良さを活かし認め合いながら遊びを進める楽しさが味わえるよう、意図的な働きかけをしたり、環境構成を工夫したりする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

□ 幼児の姿　○保育教諭の読み取り　◎保育教諭の願い　◇環境構成　☆保育教諭の援助

【実践事例１】「友達と関わりあうなかで、互いの良さに気付こう。」（７月～９月）

６月上旬～

【興味・関心】
気の合う友達と寿司屋さんや的あてなどをそれぞれで作って楽しむ姿が見られる。一方で、同じ遊びを繰り返し楽しみ、他の遊びに広がらない子も見られる。

⇨

○好きな遊びに夢中になったり、友達と一緒に同じ遊びを楽しんだりしているな。

◎興味のある遊びを通して、友達と関わる楽しさや面白さを十分に味わってほしい。

☆一人や少人数で○○屋さんをイメージして作っている子を紹介し、「一緒にやってみたい」と思えるようなきっかけ作りをする。また、発表する機会を設けることで、友達に認められる経験や嬉しさを味わえるよう援助する。

【園児の変容】

・「自分もやってみたい！」と、友達のしている遊びに興味を持ったり、「どうやって作ったの？」と、遊びをきっかけにやり取りする場面が多く見られるようになった。
・友達と関わりが増えたことで、自分の考えを相手に伝えたり、思いを言い合ったりする場面が増えたが、上手く伝わらずにいざこざが生じる場面も見られる。

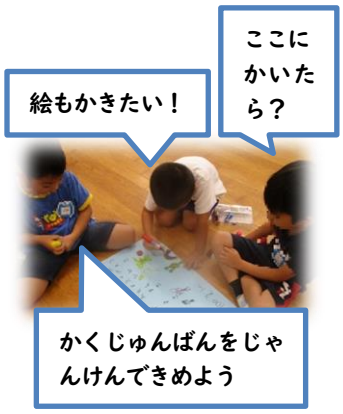
７月下旬～

【遊びを進めていく中で】
自分と相手のやりたいことが違うと、自分の思いばかりを押し通し、友達の話に耳を傾けられなかったり、自分の思いを言葉で表現できず、いざこざになってしまったりする場面も見られる。

○相手に伝えようと自分なりに話しているけど、一方的で上手くいかないな。
◎友達と遊びを進める中で、自分と相手の思いが違うことが分かり、自分たちなりに言葉で表現しながら折り合いを付けられるようになってほしい
◎友達の考えを聞いて、新しい発見や気づきをし、友達の良さに気付いてほしい。
☆保育教諭自身が園児一人一人のありのままの姿を大切にし、園児が安心して自己を発揮する中で友達と関われるようにする。
☆いざこざが起こる場面を大切に、それぞれの主張や気持ちを十分に受け止め、子ども同士が体験していることを捉えながら、互いの思いが伝わるよう橋渡しをしたり、納得して気持ちの立て直しができるようにしたりする。
◇子ども同士がイメージを共有できる場を設け、そこでイメージしたことや友達と一緒にやりたいと思ったことを形に出来るよう、必要な材料や用具の準備をする。

【園児の変容】

・自分の思いと相手の思いが違うことに気付き、どうしたらお互いが納得してお店屋さんを進めていけるか、個人差はあるものの相手の思いや言いたいことを聞こうとする姿が見られた。
・お互いに同じ目的に向かって遊びを進める中で、自分と相手の考えが違うと、上手く言葉で伝えられなかったり思うように折り合いを付けられなかったりする子もまだ見られる。



【実践事例２】「思いやりの気持ちが育まれる学級を目指そう
～しあわせのバケツを通して～」（１１月～１２月上旬）

【実態】
「○○さんがこんなことしてる」「○○さん片付けてない！」と、自分なりに善悪の判断をし、ルールや決まりを守っていない友達へ指摘をする声が多く聞かれ、それに同調する子もいる。

○自分や友達のいいところに気付けていないな。
◎自分の感情や意思を伸び伸びと表現する中で、自分自身の良いところに気付いて欲しい。
◎友だちの素敵なところにも気付き、認め合いながら思いやりをもって関わりを深めていってほしい。

●園児　★保育教諭

【「しあわせのバケツ」の読み聞かせ～振り返りの場面で～】

★じつは、もう皆はしあわせのバケツをいっぱいにしたことがあるんだよ

●どういうことー？

・「ありがとう」や「ごめんね」を伝える時
・困っている友達に「どうしたの？」と声をかける時
・「一緒に〇〇しよう」と誘う時
（子ども達と話しながら例を挙げていく。）

★言ったことないお友達っている？

●いないー！

★気付いていないだけで、皆にはいいところがたくさんあるんだよ

☆保育教諭や友達から受け入れられているという安心感を持って園生活を送れるよう、一人一人の背景を捉えながら丁寧に関わり、自己肯定感が育まれるよう援助する。

☆自分自身や友達の良さに気付けるよう絵本「しあわせのバケツ」を活用し、思いやりの気持ちを持ったりお互いの良さを認め合ったりすることは素晴らしいということを感じ取れるようにする。

【園児の変容】

・自分も友達のしあわせのバケツをいっぱいに出来ることを知り、自ら友達の様子に気付き「どうしたの？」と声をかけたり、「〇〇しよう」と優しく伝えたりする場面が多くなった。

【皆の素敵なところを共有しよう～学級の集まりの場面で～】

●お友達に折り紙をおしえてあげた

★〇〇さんが落とし物を拾って渡してたよ

●転んだ時に「大丈夫？」って聞いてくれて嬉しかった

★みんなで教え合いながら製作を進めていたね

★みんなのしあわせのバケツがいっぱいになったね！

☆友達同士での思いやりのある行動を見逃さず、学級全体に伝え、お互いが良さに気づき認め合いながら関わりをもてるような援助を行う。

◇バケツをいっぱいにした出来事を発表する場を設け、皆で出し合ったことや自分が経験したことをハートの紙に書いて可視化する。自分は学級の一員で、温かな繋がりのある仲間の中にいるということを、バケツの中がハートの紙でいっぱいになっていく事で感じられるようにする。

【園児の変容】

・友達の素敵なところにも気づき、相手の良さを認めながら園生活を一緒に進めていこうとする姿が見られるようになった。生活発表会の取組では、自然と助け合いながら自分たちの力でやり遂げようとしていた。
・学級全体では、しあわせのバケツをいっぱいに出来るような行動をする場面が少しずつ増え、互いの様子を気にかけ合う、心の繋がりを感じる温かい集団となってきている。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・保育教諭が子ども一人一人と信頼関係を築き、友達のやっていることに興味がもてるような言葉がけをしたことで、友達同士の関わりがより深まり、自分達で活動を進めていく楽しさや共通の目的が実現す

る喜びを味わうことができたと感じる。その中で、相手の思いに気付き、聞こうとしたり折り合いを付けたりする姿もあった。

・保育教諭が園児一人一人のありのままの姿を認めることで安心感をもち、絵本「しあわせのバケツ」を活用し互いの良さを伝え合い、認め合いながら関わりを深めていく中で、友達を思いやる心が育まれ、心の繋がりを感じられる温かい学級風土ができてきたと感じる。

②課題

・互いの思いが対立した際、一人一人の経験の違いやその背景を汲み取りながら、行き過ぎた援助にならないよう、その場に応じた言葉がけをしたりきっかけを与えたりする場面の対応に難しさを感じた。

・自分と相手の良さに気付き、互いを認め合えるようにする過程では、園児が気付いていない思いやりのある出来事に気付くことができるよう促したり、一人一人が自分も学級の一員として繋がりを感じたりすることができるような援助をする事に難しさを感じた。

③実践を通した自身の気づき、考え

・他者への思いやりの気持ちを育むには、まずは保育教諭が個々の園児の経験の違いを把握したうえで心に寄り添い、それぞれの良さや特徴を認めることが大切であると感じた。

・互いの良さを認め合いながら遊びや生活を進めていくために、友達同士で経験した素敵なところを共有する機会を設けたり、園児の気付かなかったことに気付くことができるよう働きかけたりしたことで、相互に影響し合いながら関わりを深めていくことができたと感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・いざこざが起きた際、一人一人の経験の違いや性格、背景を日々の保育の中でよく観察し、園児の心としっかり向き合い信頼関係を築き、個に応じた適切な対応ができるような関わりをする。

・誰もが学級の中のかけがえのない一員であるのだということを感じ、仲間を信頼し合う関係が築いていけるよう、安心して自分らしい動き方ができるような状況を作ったり、一人一人の良さや魅力を見つけ全体に共有したりと、必要な援助を行っていく。

・互いに認め合い、繋がりを感じられるあたたかな学級づくりに向かっていくことができるよう、引き続き子どもの発達や背景にある姿を読み取り、学級の状況に応じた適切な環境構成や援助の手立てを探っていく。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』　フレーベル館

内閣府・文部科学省・厚生労働省　令和４年　『園児が心を寄せる環境の構成』　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

「友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができる環境構成や援助の工夫」
―保育教諭や友達との関わりを通して―

那覇市立城南こども園　保育教諭　氏名　国吉　優子

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説第１章には「園児が意欲をもって積極的に周囲の環境に関わっていくこと、すなわち、主体的に活動を展開することが乳幼児期の教育及び保育の前提である。（略）その基礎には安心感や安定感がある。」とある。また、領域「人間関係」には、「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」と記されている。

本学級は、４歳児（２年保育）計１０名のクラスで、これまで全員が集団保育を経験している。しかし、新しい環境に不安を感じ、保育教諭のそばにいることで安定する園児もいれば、同じ場所にいながら、それぞれで好きな遊びを見つけて楽しむ姿もあるが、友達との関わりがなかなか見られない。

これまで、園児の行動や心の動きに関心を寄せ、応答する姿勢を持って保育実践に努めていたが、園児が友達との関わりの中でお互いに刺激し合い様々な環境に対する興味や関心を深め、それらに関わる意欲を高める手立てが十分ではなかったと考える。

このような実態を踏まえ、園児が興味関心を持ち、夢中になって遊ぶことを通して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができる環境構成と援助の工夫を行いたく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園児が安心してやってみたいと思えるような環境構成や援助の工夫

・園児の興味や関心に応じた環境構成を工夫する。
・園児の行動に温かい関心を寄せたり、心の動きに応答したり、共に考える援助を行うことで園児が安心感をもって過ごせるようにする。
・タブレット等を活用し、振り返りの場を工夫する。

２　園児が友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫

・友達と一緒に考えや思いを出し合い、イメージを共有しながら遊びを進められる環境構成や援助を行う。
・園児が遊びに必要なものをすぐに作れるように様々な素材、道具の準備を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１　明日もやってみたい！（4月）

〈A児の姿〉
・入園してしばらくは保護者と離れる際に泣き、新しい環境に不安を感じている姿がある。
・園で飼育している生き物に興味を示し、保育教諭と一緒にエサやりや観察を楽しんでいる。
・友達に自分から関わる姿はあまり見られない。
・興味の向かない活動では保育室から離れたり、保育教諭等と一緒に周りの様子を見ている。

〈保育教諭の願い〉
・こども園で安心して好きな遊びを十分に楽しんでほしい。
・友達と関わって過ごす楽しさを味わってほしい。

〈環境構成（☆）と援助（◎）の工夫〉
☆室内外でも生き物を観察したり、触れ合える場や絵本、図鑑などを用意し、安心して過ごせる雰囲気や環境をつくる。
☆タブレットで記録した遊びや活動の写真を振り返りの場で活用し、園児の思いや考えを共有しながらお互いに関心が持てるようにする。
◎新しい環境に不安な気持ちを受け止め保育教諭も一緒に遊びに参加し安心して過ごせるように関わる。

◎園児の思いや発見などを伝え合う振り返りの場を設け、友達に関心をもてるようにする。
◎園児の姿を肯定的に言葉にして認めていく。

〈A児の変容〉
・保育室で飼育ケースに入れた幼虫と図鑑を見比べながら、名前を調べたり、観察しながら「これ、カバマダラじゃない？」など、他児と会話を交わす姿が見られた。
・帰りの会の振り返りの場で、タブレットの写真を見ながら、「Aとあの子が見つけたんだよ。明日も捕まえたい」と楽しかった気持ちや、友達のよさを言葉で伝え、明日への意欲を発表していた。
・生き物との触れ合いを楽しむ中で、友達から「（Aさんは生き物が好きだから）一緒に虫探そう」とA児のよさに気付いてもらい、遊びに誘われることで、笑顔で友達と活動を楽しむ姿や、自信をもって行動する姿につながった。
・友達と一緒に幼虫の飼育を通して生き物への興味や関心を深めたことで、毎日期待を持って登園するようになり、クラスの活動にも意欲をもって参加するようになった。

〈考察〉
・入園当初は新しい環境に不安を感じている様子のA児だったが、保育教諭等に思いを受け止めてもらい、A児が好きな生き物に関わることができる環境や時間が保障されたことで、自分らしさを発揮して安心して過ごす姿につながったと考える。また、振り返りの場では、タブレットで記録された本児や友達の姿をクラスで共有し、思いを伝え合うことで、本児が友達のよさに気付いたり、自分のよさに気付いてもらいながら、友達同士で関心をもつ姿につながった。友達に関心をもって一緒に遊ぶことで、学級での活動にも意欲的になった。

実践事例２　城南博物館作ろうよ（９月～１０月）

〈園児の姿〉
・地面に描ける石の面白さに気付いて遊ぶB児の姿を真似て、同じ場所にいながらそれぞれで見つけた石を使って地面に絵を描いて楽しんでいる。

〈保育教諭の願い〉
・保育教諭や友達と一緒にお互いのイメージを共有しながら、一緒に遊ぶ楽しさや充実感を味わってほしい。

〈環境構成（☆）と援助（◎）の工夫〉
☆イメージしたことが実現できるよう道具や素材を用意する。
☆園児と協力しながら遊びの場を考え、作っていく。
☆作りたいものがイメージしやすいように、写真の掲示や、絵本を用意する。
◎遊びを思いっきり楽しめるように遊ぶ時間を確保する。
◎園児なりのイメージを表現している姿を言葉にして認め、周囲の友達にも知らせ遊びの共有化を図る。
◎保育教諭も一緒に遊びに参加しながら、園児同士の思いや考えをつないでいく。
◎さらに遊びが発展していくように言葉かけや援助の仕方を工夫する。

〈園児の変容〉
・「せんせいこれみて！」とみつけた石の形や色の美しさに興味関心を示したB児の気付きや新しい石との関わり方を振り返りの場で紹介したことから、他の園児らも「ここひかっているダイヤモンドかな」と石そのものに興味を持つ姿がみられた。
・スコップ等の道具を取り出しやすいように準備すると、バケツに水を運んだり、スコップを使って石探しを楽しむ園児の姿が増えてきた。しばらくすると「みんなでこれ掘ろうよ」と、仲間を増やし協力しながら地面に埋まった大きな石を掘る姿が見られ、共通の願いや目的が生まれて遊ぶ姿がみられた。
・E児が「これ大きいから恐竜の骨だよ！」と言った言葉に刺激を受け、石を＜恐竜の骨＞に見立てた遊びが始まった。振り返りの場で、遊びのイメージを保育教諭や友達と共有したことで、大きな＜恐竜の骨＞を掘りたいと遊びに共通の目的が生まれた。
・また、保育教諭や友達と協力して大きな石を掘れた満足感を味わったことで、「大きな恐竜の骨いっぱい取れたから、城南博物館作ろうよ」と自分の世界を相手と共有したいと願う姿がみられた。

・城南博物館をつくるために環境を整えていくうちに、今まで興味を示さなかった園児も、博物館に展示するための石探しを始めるようになった。
・園児が石の形や色からイメージが広がるように「これは恐竜の骨なの？」と考えを引き出せるように言葉かけしたことで、園児から「じゃあ、これは小さいから恐竜の歯だよ」「これはあごの骨だよ」などとイメージや思いを友達同士交流しながら遊ぶようになった。
・園児が石からイメージした言葉を保育教諭が書きとめ、それぞれの石に名札を作ると、周りにいた園児も興味を示し、大きさ順で石を並べ替えたり、名札に番号を書くなどして、園児同士工夫したり、協力しながら、意欲的に城南博物館作りに取り組むようになった。

〈考察〉
・Ｂ児が石の特徴に気付き夢中になっている遊びを学級で紹介したことで、友達もＢ児の遊びに興味をもち、一緒に遊ぶ中で、＜恐竜の骨＞新しい遊びが生まれイメージを共有し、工夫したり、協力したりと学級全体で楽しむ遊びにつながった。
・集めた石で、様々なイメージが生まれるように写真の掲示や図鑑を用意したことで、興味を示さなかった園児も関心を持って遊ぶようになった。
・保育教諭も一緒に遊びに参加しながら、遊びに必要な素材や道具を用意したり、じっくりと遊ぶ場や時間を確保しながら園児同士を仲立ちすることで活動のイメージを共有して遊びを進めることができた。
・振り返りの場を設けたことで共通の目的意識が生まれ、友達と協力して遊びの場や必要なものを作り、遊びを進めることができたと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・園児の実態を捉え、興味や関心や思いに寄り添う環境構成や援助を行ったことで、園児が安心感をもち環境に自ら関わる姿へとつながった。
・園児が面白いと感じていることを捉えて、遊びのイメージを友達と共有しながらじっくりと遊びに取り組めるような場や時間を保証したことで、園児同士で目的をもち、それに向かって工夫したり、意見を出し合ったりと安心して友達と遊びを展開する姿へとつながった。
・振り返りの場面では、タブレットによる写真や動画を活用することで、園児の遊びの様子が可視化できた。その際に活動を振り返ることで、他児の存在や遊びに気付かせることができた。友達の感じ方や行動の違いに気付くことでお互いを認め合い、友達とのつながりが生まれた。

②課題

園児が主体的に環境と関わり活動を展開するためには、園児の興味関心を捉えた環境構成や、じっくりと関わるための援助が必要である。園児が必要な経験を積み重ねることができるように、園児の生活する姿を捉え、園児の生活や発達を見通して友達と関わりを深めながら遊びや活動がより豊かに行われる中で充実感や満足感を味わえるような環境構成や援助の工夫が必要である。

③実践を通した自身の気づき、考え

園児の活動の実態を捉え、保育教諭等との信頼関係を基盤に、適切な環境構成や援助を行うことで、園児が安心感をもち、やってみたいと活動への意欲をもって遊ぶ姿がみられたことから、保育教諭等は園児の活動の流れや心の動きに即して、常に適切なものとなるように、環境を構成することが大切であると気付いた。また、園児の気付きや心の動きを捉えて、園児と共有していくことが、遊びを発展したり深めたりする手掛かりであると考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

園児の主体性が発揮できるような生活の中で、園児が何に面白さを感じているのか、遊びの中でどのような経験をしているのかなどを捉え、発達に必要な経験を積み重ねていけるように状況の変化を予測する力を身に付け、園児が互いに関わりを深めるような環境構成や援助の工夫に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　2018　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

互いの良さを認め合い、協同して遊ぶ楽しさを味わうための援助

―遊び込む経験を通して―

那覇市立　開南こども園　保育教諭　宜保　愛

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年はAIやグローバル化の発展により､機器の操作のみで生活に必要なものを手に入れることができたり、バーチャルの世界で遊んだりすることができたりするなど、便利になった反面、人と人との関りが希薄になってきたことも否めない。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の第２章第４節の「人間関係」の領域に「他の園児と一緒に楽しく遊んだり活動したりすることを通して、お互いの良さや特性に気付き、友達関係を形成しながら、次第に人間関係が深まっていく。人間関係が深まるにつれて、園児同士がイメージや思いをもって交流し合いながら、そこに共通の願いや目的が生まれる」とある。また「共通の目的に向かって遊びや活動を展開する中で園児同士が共に工夫したり、協力したりする」とも記されている。

本学級の実態としては、５歳児(２年保育)男児１２名、女児１０名、計２２名が在籍し、ほぼ全員が集団生活を経験しており、年度当初から新しい環境に興味を持って積極的に関わる姿が見られた。しかし、生活や遊びの中で友達と関わる姿は見られるものの、自分の考えを友達に伝えたり、友達と協力したりしながら遊びを発展させていく姿はあまり見られない。また、一つの遊びが長続きせずに、遊びを転々としている。このような実態を踏まえ、遊びの中での発見や心を動かす出来事を友達同士やクラスで共有したり、自分の思いや考えを友達に伝えたりしながら遊び込めるようになって欲しいと感じた。友達と一緒に遊び込む中で、友達の良さに気付いたり、協力してやり遂げる経験をしたり、充実感や達成感を味わう経験をするには、どのような環境構成や援助の工夫が必要なのか考えるため本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分の思いや考えを友達に伝えたり、相手の話しを聞いたりしながら友達と関わる楽しさ味わえるための環境構成と援助の工夫

遊びの中で、自分の思いを言葉で伝えたり、相手の話に耳を傾けたりできる機会を捉え、その中で園児が自分と違う考えや意見に触れ、遊びをより楽しくする方法を見つけ出していけるような援助をする。

２　お互いの良さを認め、協力しながら遊びに没頭できる環境構成と援助

遊びを通しての発見や心を動かす出来事を共有できるような場を設ける。また自分と違う意見を聞き、それを受入れたり、友達と一緒に試行錯誤したりする姿を言語化して伝えることでお互いの良さに気付けるような援助をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

「ねぇ、みんなでお化け屋敷つくろう！」

《幼児の姿》

家族でお祭りに参加してきた子が「初めてお化屋敷に入って、怖かったけど楽しかった！」と友達に話をしている姿が見られた。それがきっかけとなり、小集団で教室の一角を使って「おばけ屋敷作り」が始まった。

《保育教諭の願い》

・友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを感じて欲しいな

・自分の思っていることや感じていることを言葉で伝えられるようになって欲しいな

《◎保育教諭の援助　☆環境構成》

◎遊びの中で子ども同士のイメージのずれが生じ、トラブルになった際には、どうしたらいいかをその都度、一緒に話し合ってみんなが納得のいくよう仲立ちをした。また、子ども達のイメージが共有できるよう考えを出し合い、書き留めてみんなの見えるところに掲示した。

☆お化け屋敷に行った経験のない子もいたので絵本をみながらイメージの共有ができるよう準備をした。

☆作りかけの「おばけ屋敷」をそのままにして、継続して作ることができるようにした。

☆何が必要なのかを一緒に考え、空き箱やガムテープ、新聞紙などの必要なものをタイミングよく提供できるように豊富に用意をした。

《幼児の変容》

・初めは保育教諭が仲立ちとなっていたが、伝え合う経験を何度か繰り返していくと、次第に他に何が必要なのかを子ども同士で相談する姿が見られた。また、アイディアが豊富な子に聞いたり、お化け屋敷で一番何が怖かったのかを友達に聞いたりして情報を集める姿もあり、友達の意見に耳を傾け、「それもいいね！」と受け入れる姿が見られるようになった。

・自分の作ったお化けを友達に見せ、「ここにつけたらどう？」と提案する姿が増えた。日頃保育者に頼りがちだった子も、友達と相談しながら製作を進める姿が見られた。

・それぞれのイメージでお化けをつくっていたが、だんだんとイメージを共有しながら、１つのお化けを協力してつくる姿が見られた。

「入口作りたいから、ここ支えてほしい」「いいよ！」

一緒におばけの色塗ろう！目は何色にする？

《幼児の姿》

完成したおばけ屋敷を見せたいと４歳児のクラスで呼び込みをし、いよいよお化け屋敷のお披露目。

しかし、「あまり怖くなかったね」と４歳児。その言葉に悔しがり「もっと怖いお化け屋敷にしたい!!」と熱のはいった子ども達。お化け屋敷がどんどんと大きくなっていくにつれて子ども達の生活の場まで広がった。それが原因で、友達が間違ってぶつかり壊れ始めた。

「また〇〇が壊れている。」と修復作業に時間を使ってしまい、なかなか思うようにお化け屋敷作りが進まず、子ども達も気持ちが離れかけている現状が見られた。

《保育教諭の願い》

・友達と一緒に試したり工夫したりする楽しさを感じてほしい。

・１つの目的に向かって、友達と相談しながら遊びを進められるようになってほしい。

《◎保育教諭の援助　　☆環境構成》

◎もっと怖いお化け屋敷にするためにはどうしたいのかを聞き、お化け屋敷の「引越し」を提案し、子ども達が空間を思い切り使ったり、イメージしたものをじっくり作ったりできるようにした。

☆大きな段ボールや暗い空間を作るためのポリ袋などの新しい素材を用意した。一人では扱いづらい素材をあえて用意し、自然に協力が必要になる環境を意識した。

◎子ども達の作ったお化けの工夫を言葉で拾い上げ、「A さんの提灯お化け、動きが面白いね」などと紹介し、互いに認め合う雰囲気をつくった。

◎協力が必要な場面では、すぐに介入せず、「誰か手伝ってくれる人いるかな？」と促し、子ども同士で関わりが始まるきっかけをつくった。

◎意見がぶつかった際も、どちらの思いも尊重し、「両方ができる方法はあるかな？」と解決策を一緒に探した。

《幼児の変容》

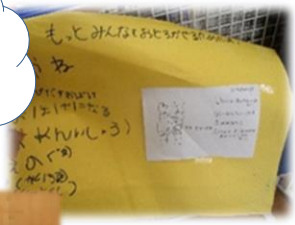
・一度、壊れた経験からお化け屋敷を強くするにはどうしたらいいのかを考えながら作る姿が見られた。

・大きなポリ袋を貼り付ける際に「こっち持っておくから貼っていいよ」と子ども達同士で協力する姿が見られた。

・友達の工夫に気づき、「それいいね！入口に使おう」と相手の良さを認める姿が増えた。

・完成に近づくにつれ「もっと怖くしたい」「こうしたら？」など、自分たちでアイデアを出し合いながら遊びに没頭する様子が見られた。

どうしたら怖いお化け屋敷を作れるかな？と話し合いが始まった。



Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

・自分の思いや考えを友達に伝え、同じイメージをもって遊びを進める楽しさを感じている様子が見られた。自分と友達の思いや考えの違いに葛藤する場面も多々あったが一方に決めるのではなく、どうしたら両方が納得いく形になるのか、何度も話し合いを重ねた。そうすることで自分と友達の意見を合わせて、新しいアイディアが生まれ、遊びをより楽しく進めることができた。

・クラスでの集まりの場で子どもの作ったものを紹介したり、発表する機会を設けたりすることで、友達の良さや頑張っている姿などに気付き、それらを活かしながら友達と一緒に遊びを進める姿が見られた。

２　課題

・自分の気持ちを言葉にして伝えられるようになってきたが、上手く伝えられずに手が出てしまうこともあったので、言葉で伝えることが苦手な子への配慮をさらに意識していく必要がある。

・小集団から始まったお化け屋敷づくりだったが、どんどん人数が増え、クラス全員を巻き込んでの活動となった。本活動では、クラスのみんなで楽しむことができたが、今後、スケールの大きな活動になっていく際には、主体的に参加しているのかといった一人一人の内面をしっかり読み取りながら援助をしていきたい。

３　実践を通した自身の気づき、考え

・今回の実践を通して、自分の思いや考えを友達へ伝えるには、思いや考えを受け入れてもらえる安心感が基盤になっていることを感じた。4 月からの集団あそびの中で友達や保育教諭と楽しさを共有しながら信頼関係を構築し、受け入れられる経験や困ったことがあった時に、みんなで考えて解決しようとする経験が土台となっていると感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・上手く言葉で伝えられない子に対しては、保育教諭が気持ちを受け止め、その子の気持ちを友達へ代弁しながら言葉での表現方法を伝え、言葉で伝えられるよう援助していく。

・それぞれで好きな遊びをしている幼児の姿を丁寧に見守り、思いや考えを読み取ったり受け止めたりしながら、安心して友達と遊びや生活を進めていく充実感を味わえるように援助していく。

・遊びを通して、何が育ってほしいか、何を経験してほしいか、を考えながら日々の環境構成をしていきたい。今後も自己研鑽しながら日々の保育を豊かにしていきたい。

〈主な参考文献〉
・文部科学省　２０１８年３月　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館
・河邉貴子　田代幸代　２０２０年８月　「遊びが育つ保育～ごっこ遊びを通して考える～」

様式３【課題研究レポート】

自ら食べてみようとする意欲を高めるための環境構成と援助の工夫

―様々な栽培活動を通して―

那覇市立久場川みらいこども園　保育教諭　湧川　愛香

Ⅰ　テーマ設定の理由

子どもたちの「食」を取り巻く環境は日々変化し、多様化の一歩をたどっている。「食」に関して、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説「第３章　健康及び安全」第３節に「食育の推進」の記載がある。その節では、食育の「目標」「基本」「計画」「環境」「保護者や関係者等との連携」「個別の対応」等、６つの視点へと細分化されている。「食育」は、幅広い分野にわたる取り組みが求められるほど重要なテーマであるため、専門職として日々変容していく「食」に関しての知識を深堀していきながら、資質向上につなげていく必要があると考える。

本学級は、４年保育の３歳児クラスで、男児８名、女児６名、計１４名が在籍している。日頃から、園庭の草花や野菜等に興味・関心を持って観察を楽しんでいる子が多い。だが、「食」に関しては、給食に入っている野菜を食べ渋る姿や、苦手な食材を避けて食べようとする姿などが見られ、保育教諭等の声かけによって一口は食べてみようとするも、自ら進んで食べる姿は中々見られない。このような実態を踏まえ、「子ども達の「自ら食べてみようとする」気持ちを育み、「食」に対する興味・関心を広げるにはどのような環境構成や援助が適しているのか」を探ることで、専門職としての資質を高めたいと思い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 食材に対しての興味関心を持ち、視聴覚教材を用いた食材クイズや食材のパネルを設置する等の環境構成を行う
② 室内や園庭等で様々な食材の栽培活動に挑戦する
③「食」に関心が向くようなリズム体操や歌を取り入れ、感触遊びの一環で様々な食材に触れてみる
④ 食材の名前を覚える楽しさに繋がるような環境を工夫する

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「この食べ物は、なあに？給食に入っている食材を知ろう！」５月中旬

【背景】給食の時間、子ども達と配膳されたメニューを見ながら「これは何の野菜かな？」と話していると、「何の野菜かわからない」「緑色しているから！野菜だけど…」等と話す様子が見られ、ほとんどの子が野菜の名前を知らないことが判明した。そこで、まずは食材について知らせることから始めようと考えた。

□ 幼児の姿　　○教師の読み取り　◎教師の願い　◇環境構成　☆教師の援助

【興味・関心】
今日の給食のメニューは何かな？と興味をもつ子の姿や、食材ボードを見て、「この食べ物知ってる！」と発見を喜ぶ姿、友達と共有する姿など見られた。

＜栄養ボードを確認する子ども達＞

○食材に関心を持つ子が増えてきた。
◎食材の持つパワーについても興味をもってくれたら嬉しいな。

◇保育室に「栄養ボード」コーナーを設置し、給食に入っている食材が【赤・黄・緑】に分類されることをわかりやすく掲示する。
◇それぞれの栄養素にニックネームを付けて、親しみやすくする。

【赤の栄養素→レッドマン、黄の栄養素→イエローマン、緑の栄養素→グリーンマン等】

「見て！この食べ物は、れっどまんなんだね～！！」
＜ヒーロー化した栄養ボードに関心を持つ園児の姿＞

【自ら見つけようとする】
「この食べ物は赤色だから、どのヒーローかな？」とボードを見て確認したり、友達と共有したりして、保育教諭にどんなヒーローなのかを尋ねる姿が多く見られるようになった。

〇食べ物の栄養をヒーロー化することで、以前に増して興味や関心が高まったように思う。
〇栄養ボードに回転する仕掛けを取り入れたことも関心を高めるきっかけになったのかもしれない。

【実践事例２】「いろんな野菜を育ててみよう！」６月初旬

【背景】
・父の日に向けた取り組みの中で、クラスでの話し合いにより栽培をすることに決まった。梅雨時期だったため室内で世話がしやすい、かいわれ大根の栽培をすることになった。
・園庭にある畑でどんな野菜を栽培するかを子ども達に話す中で、夏の野菜をいくつか紹介したところ、「なす」「おくら」に興味を示す子が多かったため、園庭の畑で「なす」「おくら」の栽培を開始する。

【　興味・関心　】「かいわれ大根」
自分がまいた種から発芽する喜びを味わい、保育教諭等へ共感を求める姿や、どのように生長するのか期待を持つ姿などが見られた。

「なす・おくら」
水やりを通して、苗からの生長に期待をし、虫よけネットの中に潜り込んでは生長の様子を確認する園児の姿が多く見られた。

〇自分で種をまく経験をし、実際に発芽する様子を見て、栽培に興味や関心が高まりつつある。
◎栽培活動を通して、普段食べている野菜がどのように育つのかを知る機会になってくれたらいいな。
◎栽培活動を通して自ら意欲的にいろんなことに取り組む姿が増えたらいいな。

◇園庭だけでなく、室内でも出来る栽培物の準備や掲示、栽培しやすいような環境構成を行う。
◇水やりのタイミングや栽培物の間引き等は、保育教諭間で連携しながら、子ども達が戸惑わないようにする。

＜初めて挑戦した室内栽培のかいわれ大根＞

＜生長の様子を気にする姿＞
「まーだかな♪」

【　早く大きくなあれ　】
毎日、登園してすぐにかいわれ大根を育てているコーナーに向かい、生長観察をすることが子ども達の日課となった。「まだかな」「もうかなり大きくなったね」と、友達と大きさ比べをする姿もあった。ついに、持ち帰りの日になると、保護者に照れくさそうに渡す姿が見られ、「自分が育てた」という自信に満ちた表情を見ることができた。

【　リベンジするぞ！　】
持ち帰る日までにすくすくとかいわれ大根が育った子もいれば、途中で根腐れを起こしてしまい、うまく育たない子もいた。保護者に渡すことができず、ショックを受ける姿があったため、保育教諭がもう一度育ててみることを提案すると、挑戦する意欲が見られた。
再挑戦が成功し、無事に最後まで生長して保護者に渡せた子は、安堵の表情と達成感に満ちた表情を見せていた。

〇栽培活動の中で、「毎日世話をする」ことを嫌がる姿は、あまり見られない。生長を近くで見られる環境だから、関心が続いているのかな。
〇友達と同じように育てているのに、うまく育たなかった時の「悔しさ」を感じたり、何度でも挑戦できる環境のもと、安心して栽培を行う中で「諦めない心」が育ち始めている気がする！

【実践事例３】「野菜の苦手なＴ児の変容」９月中旬

【背景】暑さにより戸外遊びが制限される中で、色々な感触遊びを楽しんでいた。感触遊びに使われている素材が食べ物であることを子ども達に紹介すると、驚くＴ児の姿が見られた。自ら食べることに対して消極的なＴ児が感触遊びを通して新たな「食材」を知ることにより、気持ちに変化が起きるのではないかと考え、様々な素材を使用した感触遊びを行ってみることにした。

◇感触遊びで使用する素材を用意する。（片栗粉、パン粉、寒天等）
◇図鑑や絵本等の視聴覚教材を用意し、室内の絵本コーナーへ掲示する。

「先生！見て！
形が変わるよ！溶けたり、固くなる！」
＜素材の変化を楽しむ姿＞

【　先生！見て！面白い！！】
片栗粉粘土では、自分で水の調整をしながら、感触を楽しむ中で、水の分量で形を変えることに気付き、不思議さを感じながら感触遊びを続けていた。この感触に使われている粉を紹介すると、給食にも使われている事を知り、驚く姿が見られた。
パン粉を使った感触遊びにおいては、水を入れパン粉が膨らむことで「パンになっている！」と嬉しそうに観察を楽しむ姿が見られた。

◎Ｔ児が感触遊びを通して少しでも食べ物へ関心を持ってくれるといいな。
○「面白い！」「この粉は食べ物なの！？」と驚きながら楽しむ姿が見られるようになっており、食べ物に対する意識に変化が出てきている！！

「先生！野菜、全部食べたよ♪」
＜初めて給食を完食した姿＞

【　野菜のお皿ピッカリーン！】
給食の時間、配膳されたメニューをじーっと見つめ、にんじんを自ら口に運び食べ始めた。すると、「甘い！」と驚いた表情を見せた。さらに、「先生、にんじんを食べてみたよ！」と嬉しそうに伝える姿があった。保育教諭が味の感想を尋ねてみると「甘かったよ！！」と興奮気味に伝える姿が見られた。その後、初めて給食を完食した。

○にんじんを見つめているが、もしかして挑戦しようとしているのかな？
○今までにんじんをよけて食べていたが、実際に食べてみると甘く感じて驚いたのかな。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・視聴覚教材を用いた環境構成をしたことによって、より子ども達の「食」への関心が高まったと感じる。
また、関心が高まったタイミングで栽培活動を始めたことにより、「食材」への関心にもつなげることができた。
・栽培活動を通して、植物が枯れてしまう悲しさに気付いたことで、自身の栽培物に対してより愛情をもって関わり、栽培物の生長を期待する姿につながった。
・当初はどんなに保育教諭の声かけや促しを伴う励ましにも中々箸が進まず、野菜の見た目や、「野菜は苦い」という意識が強かったＴ児であったが、感触遊びや栽培活動で自ら育てた野菜を家庭に持ち帰り、家族と一緒に食べた経験を通して気持ちに変化が起きた。少しずつ苦手な野菜を克服しようとする姿が増え、最終的には自ら野菜を食べる姿を見せ、自ら苦手を克服する姿を保育教諭に見ていて欲しいと伝えるようにもなった。自信を持って食べる姿への変容は大きな成果であった。

② 課題

・今回、畑だけでなく室内での栽培にも挑戦したが、うまく育たなかったため、室内栽培における環境（室温や湿度、斜光）を多角的に検討した上で実施した方が良かったのではないか。
・様々な栽培活動を通して食べる意欲を高めていく中で、子ども達が栽培し収穫した野菜を園で調理して食べる機会を設けることが出来たら、クラス全体で食材の「味・食感・匂い」等を共有する体験につながると思われるため、機会を設けていきたいと思う。
・自ら食べてみようとする園児の姿が増えつつある中で、どのような声かけを行うと意欲を高めることができるのか声かけに対しての援助の工夫や改善が必要であると感じた。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

今回の研究を通して、子ども達にとっての「環境」がどれほど重要であるかを再認識することができた。子ども達にとって「興味関心がない」ということは、何かに挑戦する土台がないという状態であり、意欲に繋がらない。「興味関心をもつ」から「体験する」へとつながることで、自分の中のイメージと体験が結びつき、そのようにして獲得した知識や経験を積み重ねることが、子どもの自信につながっていったように感じた。また、栽培活動の中で、思い通りにいかない難しさを経験したことが、より、食材への関心を高めるきっかけになったように思われる。自発的に苦手な食材へ挑戦するようになった姿の背景には、栽培活動を通して「枯れたら悲しい」という気持ちを感じた経験が生きているのではないかと思う。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・室内栽培の知識や技術は、保育教諭の専門性の資質向上にもつながると考えられるので、季節や環境構成に基づいた栽培方法を模索していきたい。
・給食のメニューを基に「本日の食材」ボードを作り保育室へ掲示しているが、今後は当日分だけでなく、「今週食べた食材」等、一週間のメニューで食べた食材を掲示するようにしていくことで、こども達が自分の食べた食材を把握しやすくなるのではないかと考えるため、今後、実践していきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成 30 年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

園児の言葉の世界が豊かになる為の援助の工夫

―遊びや生活の場を絵本や物語を通して―

那覇市立　城西こども園　保育教諭　與座　美夕貴

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説の第２章第４節「言葉」内容の取り扱いには「園児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」とある。言葉を豊かにしていく上で大切なことは、保育教諭との信頼関係を基に、園児の心が動かされる体験を通して、身に付けた言葉を遊びの中でたくさん使ったり、感じたりすることが出来るような環境を整えることが大切であると考える。

本学級の園児の実態としては、３歳児（３年保育）男児８名、女児５名、計１３名が在籍し、家庭保育からの子が２名、集団経験をしている子が１１名いる。入園当初から、絵本やリズム遊びが好きな子が多く、集まりの際には集団ゲームや、子どもたちの好きな絵本を繰り返し楽しむ姿が見られた。しかし、遊びや生活の中で、自分の思いを言葉にして伝えることが難しく、言葉よりも先に手が出てしまい友達とトラブルになることや、自分の思いが伝わらないもどかしさから友達に怒りをぶつけるなど、保育教諭の援助が必要な場面が多く見られた。

このような実態を踏まえ、園生活において言葉で表現する楽しさに気づき、保育教諭や友達に自分の気持ちや思いが伝わる喜びを味わってほしい。また、身近な人との関わりや様々な言葉との出会いを通して、言葉に対する感覚を豊かにし、自分なりに表現することを楽しんでほしいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　園児が言葉で表現することの楽しさを味わえるような環境の構成と援助の工夫

園児との温かな人間関係を基盤にしながら、安心して話が出来るように援助していく。また、園児が言葉にして伝えたくなるような経験を積み重ねられるように環境の工夫を行う。

２　絵本や物語を通して、言葉の表現を豊かにしていくための環境の構成や援助の工夫

絵本や物語、歌やリズム遊びなど、園児が興味関心をもって言葉に親しむことのできる環境を整えていく。また、園児なりの楽しみ方や感じ方を大切にしながら、園児の表現に共感し、言葉を使った遊びを楽しむ経験を積み重ねていく等、援助の工夫を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【事例 1】「ぼくの気持ち、聞いて欲しいな」～好きな遊びに関わる A 児の姿の変容～

《A 児の実態》

・ブロック遊びが好きで、自分なりにイメージしているものを作り遊ぶことを楽しんでいるが、その他の遊びや活動等にあまり興味や関心が向かず、集まりの場などの集団参加が難しい姿がある。

・発語が不明瞭なところがあり、自分の思いが相手に伝わらないもどかしさからか、物を投げて訴える姿がある。保育教諭や友達とのやりとりでは、一方的に話をしたり、相手が話かけても返答がなかったりすることがあった。

《保育教諭の願い》

・保育教諭との信頼関係を基に安心して自分の思いや気持ちを、自分なりの言葉で伝えようとするようになってほしい。

・自分の好きな遊びを通して、友達とのやりとりを楽しみ、興味や関心を広げてほしい。

【〇保育教諭の援助　★環境構成　】	【⇒A 児の変容】
〇本児と一緒になって好きな遊びを楽しんだり、本児なりにイメージしながら作った作品の完成を一緒に喜んだり、本児が好きな遊びを十分に**できる**時間を保障していく。 【共同作業者としての関わり】	⇒本児の好きな遊びを繰り返し楽しむ中で「先生一緒に遊ぼう」「これ作りたい」等と自分のやりたい気持ちを保育教諭に伝えてくれるようになってきた。 「先生一緒に作ろう！遊ぼう！」
〇本児の作ったブロックの作品を集まりの場で友達へ紹介し、本児のよさや頑張りを認められる場を**つくる**。クラスの皆で簡単にできる集団遊びを取り入れることで、友達との触れ合いを通して親しみがもてるようにする。 【友達との関わりや遊びを深める】	⇒同じ玩具を使って遊んでいる友達に「一緒に作る？」「いいよ」と友達を誘ったり、受け入れたりしながら、遊ぶ姿が見られるようになってきた。 「ここに繋げて長くしてね」
〇トラブルの際には、本児の「〇〇したかった」気持ちを受けとめ、気持ちを代弁したり共感したりする。また「〇〇したいって友達にお話ししてみようか」等とやりとりに必要な言葉を一緒に考えたりする。 【共感・モデル】	⇒自分の思いと違うことが起きても「やらないで」等と自分の気持ちを言葉にして伝えようとする姿や、困っている気持ちを自分なりの表現で保育教諭に訴えてくる姿が見られるようになった。 「こんなじゃないよ、、、」
★お気に入りの玩具や本児の作った作品を飾って置けるスペースを用意し、継続して好きな遊びを楽しめるように環境を工夫する。 【関わりたくなる環境】	⇒登園してすぐ、自分の飾っていた作品を手に持つことで、安心して自分の好きな遊びやクラスの活動に参加できるようになってきた。 先生見て！飛行機作ったよ！

【事例 2】「歌や絵本が大好き！親しみのある曲やお話の世界を楽しめる教材や環境を通して」

～学級の子ども達の姿、変容～

《園児の実態》

・保育教諭が４月の頃から活用していたソングシアターやペープサートに興味を示し「先生これやってみたい！」と子ども達自ら教材に触れ、遊びを楽しむ姿が見られた。また、CD の歌に合わせながら、自分なりにセリフを言ってみたり、歌詞を覚えたりする姿が見られた。

・保育教諭が読み聞かせをした本を「先生もう１回読んでみたい！貸して」と保育教諭に訴え、自分で絵本を開く姿が見られた。

《保育教諭の願い》

・子ども達の好きな教材を通して、いろいろな言葉に触れ、３歳児の言葉の世界を広げてほしい。

・友達と一緒に歌やお話の世界を楽しむ中で、関わりを広げてほしい。

【〇保育教諭の援助　★環境構成　】	【⇒園児の変容】
★歌詞やお話のイメージが膨らむようにペープサートを準備し、いつでも手に取って遊べるように環境を工夫する。 【関わりたくなる環境】 ★子どもがやってみたいと思うものを選んで遊べるように、マグネットパネルのコーナーを教室内に数か所設ける。 ★お話の世界を楽しめるよう十分に遊べる時間を確保する。 ★一人でも楽しめる空間を設置し、ゆったり落ち着いて遊べるようにする。 【関わりたくなる環境】【安心・安定】 〇遊びの中で出てきた子ども達なりの言葉や表現を受け止めたり、認めたりしていく。 【共同作業者・共感】 ★コーナーには読み聞かせや歌のCD等を準備し、お話や曲に合わせて楽しめるようにする。 ★二～三人で座ったり、触ったりできる空間を確保し、友達の関わりが生まれたり、楽しさを一緒に味わえるような環境の工夫を行う。 【友達との関わりや遊びを深める】 〇保育教諭も一緒になって遊びを楽しみ「先生や友達と一緒にやると楽しい！」と思えるような援助を行う。　【共同作業者・共感】 〇各コーナーでの子ども達の遊びの様子を把握し、集まりの場で他の遊びをしている子にも伝えたりしながら、クラスの皆で遊びが楽しめるように援助を行う。 【友達との関わりや遊びを深める】	⇒曲に合わせて歌を歌いながらペープサートのイラストを動かしたり、物語をマグネットシアターで繰り返し楽しむ中で、歌と一緒に色や物の名前を覚えたりする姿が見られた。 ⇒友達の遊びに興味をもち、他の物で遊んでいる子も興味を示し、文字遊び関わる姿や子ども達なりの言葉で、「〇〇はおおかみさんしてね」などと友達と一緒に役を決めながらごっこ遊びを楽しむ姿が見られるようになった。 ⇒集まりの場では「いろいろ何色」の替え歌を活用し「いろいろ教えて〇がつく言葉～」等と、言葉集めゲームをしていたことから、「〇〇はあが付く言葉だね」等と保育教諭や友達に話をしたり、子ども達なりに集めた言葉を文字のパネルで探して組み合わせてみたり、好きな遊びの中で子ども達が文字や言葉に興味をもつ姿が見られるようになってきた。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・A 児の好きな遊びや活動を保育教諭も一緒になって十分に楽しむことで、A 児から「先生もっと遊びたい！楽しかった！またやりたい！」等と、A 児なりに嬉しかった気持ちを言葉で保育教諭に伝えたり、友達の話や言葉にも興味をもち、聞こうとしたりする姿が見られるようになった。

・A 児の好きな遊びや活動を繰り返し楽しむ体験を積み重ねたことで、「これでロボットの顔が作れるんじゃない？」等と A 児なりに気付いたことを話す姿や、友達や保育教諭に A 児から「一緒にやってみる？」等と遊びに誘う言葉が出るようになった。

・子ども達の好きな教材を、好きな遊びに取り入れられるような環境の工夫をしたことで、子ども達が繰り返し言葉や文字遊びを楽しむようになり、文字や言葉により興味や関心が深まっていった。

・保育教諭自ら子ども達と一緒に夢中になって遊びや活動を楽しみ、一人一人のイメージや考えを受け止め、子ども達なりの言葉として表現できるようにしたことで、子ども達の言葉の豊かさを広げることに繋がった。

② 課題

・子ども達が保育教諭に伝えてくれる言葉だけではなく、子ども一人一人の内面を理解することが足りなかった。
・子ども達自らが言葉で伝えたくなる経験を積み重ねることができるように、遊びの場や色々な活動の工夫が必要だった。
・子ども達の興味や関心があるものを見取り環境の構成を行ったが、そこから遊びの展開を深め、環境の再構成をすることが必要であった。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

今回の研修を通して、改めて園児が言葉を獲得していくためには、保育教諭や身近な友達との温かなやり取りが生まれる関係づくりが大切であると感じた。また、子どもの言葉だけに耳を傾けるのではなく、日頃から子どもの表情やしぐさ等をよく観察し、子どもが何を思い伝えようとしているのかを理解しようとする姿勢も大切であると実感した。さらに、その活動がじっくり取り組むことができる時間や空間、教材の準備をすることも保育教諭の役割として大切であると実感できた。

Ⅴ 今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・子ども一人一人の興味や関心がある出来事を大切にし、子ども達が自然と触れ、言葉にしたくなるような経験が積み重ねられるよう環境作りを工夫していきたい。
・保育教諭自身が豊かな表現や言葉遣いのモデルとなりながら、子ども一人一人の実態や発達、課題に応じた教材の工夫や幼児理解に努めていきたい。
・保育教諭自らが園生活の中で、子ども達が出会う環境を意図的かつ柔軟に整え、子ども達が楽しいと感じる体験や経験の積み重ねを大切にしていきたい。そして、色々な視点から教材や援助、環境の工夫ができるよう自己研鑽に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成３０年　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
・内閣府・文部科学省・厚生労働省　令和４年３月　園児が心を寄せる環境の構成
・株式会社チャイルド本社「事例で見る幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

様式３【課題研究レポート】

自己を発揮し、友達のよさに気付くことができるような援助や環境の工夫

―保育教諭や友達との関わりを通して―

那覇市立　城西こども園　保育教諭　屋我　明希

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説における「人間関係」内容(7)には、「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」とある。また、「園児一人一人のよさや可能性を見いだし、その園児らしさを損なわず、ありのままを受け入れる保育教諭の姿勢により、園児自身も友達の良さに気付いていく」とある。保育教諭との温かな関係性を土台にして、友達と様々な遊びを共有し、相談したり試行錯誤したりする中で、自分らしさを発揮し、友達のよさに気付いたりすることができるのではないかと考える。

本学級は５歳児(3 年保育)（進級児７名、新入園児６名）の計１３名が在籍しており、入園当初は友達と一緒にブロックや色塗りなどの遊びをして楽しんでいる。一方で、初めて行う活動では不安な様子を見せ、「できない」と消極的な姿がある。また、強い口調で自分の思いや考えを伝えてしまうことが原因で友達と言い合いになったり、相手に嫌な思いを感じさせたりしてトラブルになる姿が見られる。

このような実態を踏まえ、保育教諭や友達との関わりの中で、園児が自己を発揮し、友達のよさに気付き認め合いながら関わりを深めることができる、援助や環境構成の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　安心して自分らしさを発揮し、保育教諭や友達に興味関心が高まるような援助や環境構成の工夫

(1) 温かな関係性を築くことができるように、保育教諭はありのままの園児の姿を受け止め、園児の気持ちに寄り添った援助を行う。

(2) 友達との関わりが生まれる集団遊びや活動を取り入れ、楽しさを共有する。

(3) 自分の良さを認められたことを喜んだり、自信を持ったりすることができるような援助を積み重ねていく。

２　友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わえる援助や環境構成の工夫

(1) 朝の会や帰りの会等での対話を通して、友達のよさに気付き、認め合う場を設ける。

(2) 集団遊びやクラスの活動を通して、自分の考えを伝えたり、友達の考えを知ったりすることを積み重ね、友達との関係を深めることができるように援助する。

(3) 一緒に活動することが楽しいと思えるような環境を作り、遊びが継続・発展できるよう援助する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「やってみたら楽しいね！またやりたいな！」（集団遊びや触れ合い遊びを通して）

≪園児の実態≫

・友達と一緒に遊ぶことを楽しんでいるが、はじめての歌やダンスをする時、「やったことないからやらない」「難しい」などと話し、参加に消極的な姿が見られる。

・集団遊びでは、負けることが嫌で集団遊びのへ参加が難しい園児や、皆から注目を浴びることが苦手な園児の姿が見られる。

≪保育教諭の願い≫

・はじめての活動でも「まずやってみよう。」という気持ちになってほしいな。

・友達や保育教諭と一緒に活動する楽しさを感じてほしいな。

≪環境構成の工夫≫
・集団遊び（猛獣狩り、爆弾ゲームなど）や触れ合い遊び（あさがおこりゃこりゃ、おてらのおしょうさんなど）を取り入れ、友達との触れ合いや関わって遊ぶ楽しさを味わえるよう時間を十分に確保する。
・安心して活動に参加することができるよう、互いの顔を見ながら活動を進めることができるようにする。
・参加が難しい園児も活動する楽しさを感じたり、友達の様子を見たりすることができるように近くに椅子を準備するなど居場所をつくる。

≪援助の工夫≫
・子どもたちの様々な気持ちを受け止めながら、友達や保育教諭と一緒に活動することの楽しさや面白さに気付いたり、感じたりすることができるようにする。
・活動への参加が難しい園児に対しては、様子を見守ったり、遊びに参加したくなるような言葉掛けをしたりする。
・友達や保育教諭と一緒に活動する面白さやゲームの楽しさを感じることができるように、勝敗にこだわらない集団遊びを取り入れる。
・ゲームを通して、好きなもの・ことなどを知り、親しみの気持ちを持つことができるようにする。

≪園児の変容≫
・「またゲームしたい！」「皆で遊んだら楽しいね」などの声が多く聞こえるようなった。
・集団遊びへの参加に消極的だった園児が、友達に「一緒にこのゲームやろう」と誘われると、喜んで参加するようになってきている。
・クラスで集団遊びをしたことで、友達との関係が広がり、室内遊びでは誘い合って遊ぶ姿が見られるようになった。

【実践事例２】「みんなでゲームをしたり、踊ったりするの楽しいな」（A 児の変容を通して）

≪A 児の実態≫
・室内遊びでは、友達と一緒にブロックや塗り絵をして楽しむ姿が見られる。一方で、集団活動では、初めてのことや不安感から遊びへの参加が難しい場面が見られる。
・勝敗へのこだわりからゲームの輪から離れるなど、友達との関わりやゲームの楽しさを十分に味わえていない様子が見られる。

≪保育教諭の願い≫
・安心して自分らしさを表現したり、自己を発揮したりしてほしいな。
・クラスでのさまざまな活動を通して、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしいな。

≪環境構成≫
・好きな曲を流して楽しむことができるようラジカセやＣＤを置いて、コーナーを設け、A児が好きなダンスを楽しんだり、友達と関わるきっかけが生まれるようにする。
・友達の様子を見たり、互いの遊びが見えるように教室内のコーナーを配置したりして、友達や遊びへの興味関心が広がるようにする。
≪保育教諭の援助≫
・安心して自己発揮することができるように、A 児の良さを認める言葉かけを行ったり、頑張っている姿を全体の場で共有したりして自信を持つことができるようにする。
・集団遊びを一緒に楽しんだ後には、A 児の気持ちに寄り添い、気持ちを代弁したり、共感したりして楽しさを感じることができるようにする。

≪園児の変容≫
・友達や保育教諭と一緒にさまざま活動を経験する中で、気の合う友達ができた。笑顔が増え、本児から話しかけることが多くなった。
・友達と一緒に楽しんで活動に参加することが増え、はじめて聞く曲でも、歌ってみたり、踊ってみたりする姿が見られるようになった。
・コーナーで好きな曲を流し、楽しんで友達と踊る姿が見られるようになった。
・繰り返し遊ぶことで、自信を持って自己を発揮する姿や友達と一緒にだと頑張って活動に参加できることが増えていった。

踊るのたのしい～

みんなで歌うの楽しいな

【実践事例３】「力を合わせて、成功させたいな！」（共通の目的に向かって友達と一緒に取り組む活動を通して）

≪園児の実態≫
・友達との関係が広がりつつあるが、友達と思いや意見が異なる時に自分の意見を伝えず、別の場所で遊ぶ姿が見られる。
・友達と意見が違った時に、自分の意見を押し通そうとする園児の姿が見られる。

≪保育教諭の願い≫
・友達のよさに気付いたり、認め合ったりすることができるようになってほしいな。
・友達と一緒に活動する楽しさを感じてほしいな。

≪環境構成≫
・ダンスやバルーンをしている自分たちの姿を振り返ることができるように動画を用いて、振り返りを行う場を設ける。
・室内でもやりたい時にダンスを楽しむことができるように、ばち付きのポンポンやラジカセ、CD を準備する。
≪保育教諭の援助≫
・子どもたちのつぶやきや考えを拾いながら、ダンスやバルーンの練習を進め、「やりたいな」「成功させたいな」などの意欲を引き出すことができるようにする。
・運動会練習をしている動画を見て振り返る中で、自分の思ったことや考えたことを伝え合うことができるような言葉かけを行う。
・友達の頑張っている姿や良いところを言葉にして伝える大切さをクラス全体で共有し、褒められた時の嬉しい気持ちを園児から引き出す援助を繰り返し行う。
・クラスの皆で技ができるように試行錯誤したり、話し合いながら練習を進める楽しさや共通の目的に向かって頑張る喜びや充実感を味わうことができるように援助を行う。

≪園児の変容≫
・友達と意見が異なった際も、相手の話を聞き、相談しながら遊びや生活を進める姿が見られるようになった。また、友達が間違えた時には優しく教える姿が見られるようになった。
・運動会練習の時に、「〇〇さん、頑張れ！」「〇〇さんならできるよ」など友達を励ます言葉を掛ける姿が見られるようになった。また、他の活動をしている時も「〇〇さん、縄跳びの練習頑張っているよね」「絵が上手だね」など友達の頑張っていることや良さに気付き周りにも伝える姿が見られるようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・保育教諭が園児と温かな関係性を築き、園児の気持ちに寄り添うことで、徐々に安心して集団遊びに参加し、自己を発揮することができるようになった。

・友達や保育教諭と関わりや触れ合いを楽しむことができる集団遊びを取り入れたことで、ゲームで負けることが苦手な園児も遊びに参加することができるようになり、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう経験を積み重ねることができた。また、一緒に楽しめるゲームを取り入れたことで、共通の体験ができ、友達と関わるきっかけとなり、親しみが生まれた。

・動画を見て振り返ったり、クラス皆で話し合う場を設けたりしたことで友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わうことができたと感じる。また、友達と共通の目的に向かって頑張る喜びや充実感を味わう経験を通して、伸び伸びと活動に参加することができるようになった。この経験が園児の自信に繋がり、次の遊びや活動に向かう意欲に繋がった。

② 課題

・どのような経験を積み重ねたら良いか、また何を感じ取ってほしいのか、保育教諭自身が思いや願いをもって保育に臨むと共に、子どもの思いや願いを汲み取りながらバランス良く展開させていくことが不十分であった。

・周囲の園児へ友達のよさを伝えることだけではなく、集団の中で一人一人のよさが生きるような関わりや援助をすることが必要だったと思う。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

・友達と一緒に楽しんで活動するには、自分を温かく受け入れ、認めてくれる保育教諭の存在や園生活の中で友達と築いてきた信頼関係が大切だとわかった。また、周囲から受け入れられ認められる経験が個々の安心感となり主体性の発揮に繋がったと考える。

・クラスの皆で一緒に考えたり、意見を出し合ったりする経験を通して、自分とは違う考えを知るきっかけになったと思う。友達の思いを知り、認め合う経験を通して、友達のよさに気付くことができるようになった。また、話し合いを繰り返すことでクラスの一員であることを実感できたと考える。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・園児が楽しみながら期待できる生活を願い、一人一人の興味や関心、好奇心を汲み取り、「もっとやりたい」と夢中になるような活動や言葉掛け、援助を捉え直し努めたい。

・友達と一緒に活動する楽しさを味わうことができるように様々なリズム表現や伝承遊びなどを取り入れ、教材研究を深め、いつでも保育の中に取り入れることができるよう工夫していきたい。

・個々の園児のよさや主体性を引き出し、園児同士の関係を深めていけるよう、保育教諭としての資質・技能の向上を目指し、自己研鑽に励みたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省
平成 30 年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

自分の思いを伝え相手の思いに気付いていく子どもの育ちを支える保育を目指して

～友達と思いを伝え合い、一緒に遊ぶ楽しさを味わう活動を通して～

那覇市立大道みらいこども園　保育教諭　村田　優希

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領第２章「人間関係」のねらい（２）に「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ」とある。また、内容（７）には「友だちの良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。」と示されている。それは、友達と互いに思いを伝え合って遊ぶことを通して、友達の良さに気付き一緒に活動をする楽しさを味わうことで、さらに友達とのかかわりも広まり深まっていくと考える。

本学級は、４歳児（６年保育）男児１５名、女児８名の計２３名が在籍し、ほとんどの子が集団保育の経験がある。虫探しやボール遊び、色水や製作遊びなど、自ら好きな遊びを見つけ、気の合う友だちと一緒に楽しんでいる。一方で、相手の思いや気持ちに気付かず、自分の思いを通そうとしたり、友だちの行動に対して強い口調で注意をしたりする姿がある。また、自分の思いを相手に伝えることが難しい子がいるなど、一人一人の生活経験や発達段階に合わせた援助が必要である。そこで、子ども達が友だちと様々な心を動かす出来事を共有し、自己を発揮しながらも相手の気持ちに気付いたり、互いの良さを知ったりしながら一緒に活動する楽しさを味わって欲しいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　園児一人一人の幼児理解に努め、安心してやりたいことに取り組めるようにするための援助の工夫

園児の言動や表情から、思いや考え等を理解し受け止めながら、園児一人一人の良さやその子なりの力を見出し、ありのままの姿を受け入れることで、自己を発揮しながら園児が自分のやりたいことに安心して取り組み、楽しさを味わえるように援助していく。

②　互いの思いを伝え合い、相手の気持ちや良さに気付けるような援助の工夫

友達と活動する中で、いざこざの状況や園児の様々な体験の背景や思いを捉えながら、それぞれの園児の主張や気持ちを充分に受け止め、互いの思いが伝わるようにしたり、気持ちの立て直しができるようにしたりするための援助の工夫を行なう。

③　相手の思いを視覚的にイメージできるような環境構成の工夫

絵を描いたり、表情カードを使って、トラブルが起きている状況を視覚的に捉えられるようにするなど、相手の気持ちをイメージしやすくするために環境構成の工夫を行なう。

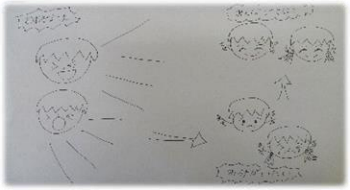
Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例】『～友達と思いを伝え合い、一緒に遊ぶ楽しさを味わう～』

＜進級・入園当初の幼児の実態＞

・絵本の読み聞かせやダンスなどの集団活動を好み、友達と活動する中で楽しさを感じながら、関わりを深めている。
・自ら好きな遊びを見つけ気の合う友達と一緒に遊びを楽しむ姿がみられるが、相手の思いや考えに気付けず思いが一方的だったり、口調が強かったりと、トラブルになることがある。
・友だちや身近な人のしていることに興味関心を持って関わろうとするが、相手の良いところよりも、良くない行動や言葉に目が行ってしまい、強い口調で注意をしたり、保育教諭に伝えに来る姿がみられる。
・活動を楽しむ姿は多く見られるものの、自分の思いや感じたことを言葉で表現することが難しい子がいる。

＜保育教諭の願い＞
・好きなことや楽しいことに思い切り取り組むことで安心して自己発揮してできるようになってほしい。
・相手にも思いや気持ちがあることを知り、思いが伝わる楽しさや喜びを味わってほしい。
・一人一人に良さがあることに気付き、互いに認め合えるクラスになってほしい。
・「言われてうれしい言葉」や「言われると嫌な言葉」について知り、場面に応じて、友だちとふさわしい言葉での関わりを持てるようになってほしい。

	・活動と子ども達の姿 「」つぶやき	◆環境構成の工夫 ☆保育教諭の援助	●子ども達の変容
６月 ７月 **『いっしょにあびたい』気持ちの広がり**	・友達と一緒に遊ぶことに興味、関心を持っている。 **「いっしょにあそびたいな」** **「何してあそんでいるの？」** 	◆担任間で、安心して友達と楽しんだり、関わったりする遊びを相談し、友達と一緒に取り組むことのできるゲーム等の遊びにチャレンジする時間を作る。 ◆友達と一緒に遊んだ時間について、友達と繋がりを感じられるようにサークルタイムの中で発表する場を設ける。 ☆集団遊びの参加が難しい子には、保育教諭が一緒に側で参加したりするなど、タイミングをみて、参加を促していく。 ☆サークルタイムの中で発表の機会を設け、子ども達の「たのしかった」「うれしかった」等の言葉を拾い、友達と遊ぶ楽しさや友達の良さをクラスで共有できるようにする。	●一人で好きな遊びをすることから、グループやクラス全体での遊びを楽しみにする姿が見られるようになってきた。その中で「こうしてみようよ！」「力を合わせたらできるんじゃない？」などと工夫したり、協力しようとする姿が見られるようになった。 ●友達と取り組んで、楽しかったことや嬉しかったことなどを帰りの会などに発表し、「〇〇さんと鬼ごっこをしてドキドキした気持ちになって楽しかったです」等、言葉の表現も、豊かになってきている様子が見られた。
９月 **思いを伝え合いながら深まる関わり**	・友達と遊ぶ楽しさを感じながらも、思いが一方的になってしまったり、相手の気持ちに気付かずにトラブルになる姿も見られる。 	◆トラブルになったり、困ったりしている子がいる時には、仲介に入りながら、落ち着いてお互いの気持ちや考えを確認する時間や場をつくる。 ◆絵を描いたり「表情カード」を使ったりして、言葉だけでなく、視覚的にも相手の気持ちやトラブルの原因などをイメージできるようにする。  ☆一人一人の気持ちや主張を十分に受け止め、互いの思いが伝わるようにしたり、納得して気持ちの立て直しができるように援助する。	●トラブルが起きた時や、困り事を感じている時に、絵を描いたり、表情カードを使ったりすることで、視覚的に相手の気持ちや思いをイメージすることができ、相手の気持ちや自分の思いを理解しやすくなって、相手との折り合いを付けようとする姿が見られるようになった。 ●友達とトラブルになった際、相手にも「自分とは違うことがしたいんだ」「今はどんな気持ちなんだ」という思いや考えがあることに気付き始めている。また、自分の思いや気持ちを少しずつ言えるようになったり、表現したりすることが出来るようになった。 ●ゲームや集団遊びを通して友達と一緒に取り組む楽しさや喜びを感じている姿が見られた。

１０月 １１月 思いを伝え合い、力を合わせる楽しさ	・運動会で人前に立つことを楽しみにしている子がいる一方で、不安を感じている子の姿も見られる。 みんなでやる遊びをお母さんにみせたいです！ みんなの前では少し恥ずかしいな… 	◆担任間で話し合い、日頃友達同士の関りをもてるように運動遊びの内容を工夫していく。 ◆運動会や運動遊びに必要な道具やルール等、子ども達と作ったり、決めたりして進めていけるようにする。 ☆「人前に出るのは恥ずかしい」という子の思いを受け止めながら「どの運動遊びをしたいか」等、全員で楽しめる運動会になるのかをクラス全体で話し合う。 ☆「どうしたら勝てるのか」「どうしたら楽しくできるのか」をチームごとに話し合う場をつくったりして、一人一人が「がんばりたい・楽しみたい」と思えるように進めていく。	●繰り返しクラスでやりたい運動遊びを話し合ったり、意見を出し合ったりしたことで、不安を感じていた子も「これはやりたい」「楽しそう」の気持ちを持つことができた。クラスでの話し合いの際にも、意欲的に運動会に取り組もうとする姿が見られた。 ●クラス全体で決めた３つの運動遊びに取り組んだことで「このゲームがすき！」「これは〇〇さんが得意だ！」等、友だちを認めたり「がんばってね」「かっこいい」「すごい」などの声をかけたりする姿も見られ、友達の姿を認めたり、友達に認められる喜びを感じていた。 ●互いに認め合う経験を通して、自信に繋がり、色々な運動遊びにも「やってみたい」という意欲が湧いている姿が見られるようになった。
１１月 １２月 言葉を大切にしながら広がる関わり	・運動会後から、今まではあまり関りのなかった友達と遊ぶ姿もみられ、友達関係に広がりが見られる。 ・自分の思いを伝える際に、「口調の強い言葉」をつかってしまう場面が多くみられ、上手く遊びが続かない姿が見られる。 〇〇さんが『椅子の持ち方』を優しく教えてくれて嬉しい気持ちになりました。 	◆絵本『きもちってなあに？』『ちくちくとふわふわ』、歌『すてきなことば』等に触れ、自分の経験と結び付けながら、想像したり、表現したりすることを楽しみ、どんな言葉を使ったり、相手にどんな言葉を言ってもらえると嬉しいのかを考えるきっかけを作っていく。 ◆保育教諭や友達が優しい言葉や素敵な言葉を楽しそうに使用している場面に出会い、自分でも同じ言い方を口ずさむことでその楽しさを共有することが出来るようにする。 ☆トラブルが起きた時は、一人一人の気持ちや考えを十分に受け止め、仲介に入りながら援助する。 ☆すてきな言葉や優しい言葉を使おうとしている姿を認めたり、褒めたりして、喜びや満足感が味わえるようにする。	●「だめだよ！」等、強い口調になってしまうこともあるが、友達の様子や表情を見ながら、「こうした方がいいんじゃない？」「こうしてみたら？」等と、優しい言い方に言い換えようとする様子が見られるようになりつつある。 ●言い換えが難しかったり、どう相手に伝えればよいのかが分からない時には、絵本や歌詞カードを見返したり、「どうやってお友達にいえばいい？」と保育教諭に尋ねたりして、友達に対する思いやりを感じることができる言動が増える等、態度の育ちも見られつつある。 ●「～が優しい言葉を使ってくれたよ！」など、友達の声のかけ方に気付いたり「ずっとフラフープを最後まで練習していてすごかったよ！」等、友達の頑張っている姿や良いところにも気付く様子も見られるようになっている。

＜結果・考察＞

・園児一人一人の生活経験や発達過程など、幼児理解を大切にした援助を行なったことで、園児が安心感を持ち自信を持って自分の力を発揮していくことに繋がったと考える。

・子ども達の優しい言葉や行動を認めたり、褒められたりする経験を通して、自分や友だちの良さに気付くことができ、自信に繋がっていたり、協力して遊びを進めることができるようになったと思われる。
・トラブルが起きた際に絵を描いて視覚的に状況を整理することで、相手がどんな思いや考えを持っているのかを表情や行動から読み取りながら自分の思いを伝えようとする姿が見られるようになってきた。
・「やさしい言葉」を意識することで、自然と行動にも優しさがともなってきている姿が見られた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・園児の生活経験や発達過程、特性など個人差の大きい学級の中で、園児一人一人の幼児理解に基づき、援助を行なったことで、安心して自己を発揮しながら自分のやりたいことを見つけ、友達と一緒に遊ぶことの楽しさを味わっている姿が見られるようになった。
・これまでクラス全体的に強い口調で注意し合ったり、保育教諭に嫌なことや不満等を伝えにくる姿が見られたが、自分が認められる経験を通して、友だちの良いところに目を向けようとする雰囲気ができ始めている。また、互いに認め合うことで自信が生まれ、色々な遊びにも関心を持ち、もっと頑張りたい」という意欲が湧いている姿が見られるようになった。
・トラブルが起きた時等に絵を描いたり、表情カードを用いたりして、視覚的に状況を整理することを通して、相手の思いや考えがあることに気付いたり、自分の思いや考えを伝えようとする姿が見られるようになった。
・言葉の表現も豊かになり、自分の思いや考えを優しい言葉で伝えようとしたり、強い口調の言葉を優しい言い方に言い換えようとする様子が見られるようになった。

②課題

様々な経験を通して相手の考えや気持ちに気付けるようになりつつある一方で、自分の思いを通そうとしてトラブルが生じる場面も見られた。園児双方の思いに寄り添いながら仲立ちする際、援助の在り方や友達同士で落ち着いて話し合える場や時間が不十分である等、配慮が行き届かない部分があった。

③実践を通した自身の気づき、考え

友だちや保育教諭、身近な人から認められた経験から、自信が生まれ、色々な遊びに自ら進んで関わり「やりたい、やってみたい」という意欲につながることを改めて感じた。そして、自分が認められることで、相手を認めたり、思いやったりしようとする気持ちが沸き、協力して遊びや活動に取り組むことが出来るようになることの大切さを学んだ。子ども達が認め合い、育ち合うことができる学級を目指して、子ども達の心の声に耳を傾けられるような保育教諭でありたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

今後も家庭との連携を取ったり職員間で情報共有をしたりして、園児一人一人の思いや育ちの過程を大切に受け止め、子ども達がお互いに認め合いながら遊んだり、園児同士が落ち着いて思いを伝え合ったりできるような環境の構成をし、一人一人の思いに丁寧に寄り添った援助の工夫ができるようにしていきたい。

＜主な参考文献＞

① 文京区立お茶の水女子大学こども園（2020）『遊びを広げて学びにかえる　思いをつなぐ　保育の環境構成　４・５歳児クラス編』中央法規出版株式会社
② 仁平説子（2023）『「人とのかかわり方」が気になる子の理解と支援』株式会社Gakken
③ 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

思いや気持ちを言葉で表現しようとする力を育む環境構成と援助の工夫

―絵本の読み聞かせや手遊び歌などを通して―

那覇市立上間こども園　保育教諭　池原　千真

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、デジタル化が進み、様々な電子機器を家庭にて園児自身も取り扱う姿が見られる中、人と人が関わり合う社会において、コミュニケーションを取りながら、自分の思いや気持ちを相手に伝えたり、相手の話を聞いたりする力が大切であり、身近な人と関わり合うことで、言葉への興味を育むことができると考えられる。

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「言葉」の領域には、「保育教諭等や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。」「絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。」とある。絵本の読み聞かせや手遊び歌などを通して言葉への興味を育み、園児が保育教諭や友達に自分の思いや気持ちを言葉で伝えたいと思えるような温かい関係を築くことが大切であると考える。

本学級は３歳児（3 年保育）男児９名、女児６名、計 15 名在籍し、個性豊かなクラスである。好きな遊びを楽しむ中で、絵本を見たり、学級内での読み聞かせを楽しんだりしている。また、友達の遊びに興味を持ち、一緒にレゴブロックで遊んだり、園庭にてブランコを漕いだりと楽しんでいる。しかし、遊びや園生活の中で上手くいかないことや思いが通らないことがあると、言葉で伝えられず、泣いたり、表情で周りに助けを求めたりする姿が見られる。

そこで、絵本の読み聞かせや手遊び歌などに興味や親しみを持ち、保育教諭や友達と一緒に楽しみながら、安心感を持って、自分の思いや気持ちを言葉で表現しようとする姿に育ってほしいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　絵本の読み聞かせを通して、見たり聞いたりする楽しさを感じる環境構成や援助の工夫について

(1)　園児の興味関心のある絵本、季節や行事を感じる絵本などの種類や冊数などを準備し、絵本コーナーの環境構成を工夫する。

(2)　絵本の読み聞かせの際に、声の強弱や間合いなどに気を付け、物語の世界観に引き込み、心が動かされるような援助を行う。

２　手遊び歌や絵カード遊びなどを通して、言葉でのやり取りを楽しむ援助の工夫について

(1)　手遊び歌や絵カード遊びなどを楽しむ中で、感じたことや気持ちなどを自分なりの言葉で話したくなるような援助を行う。

(2)　一人一人の思いや気持ちを受け止め、自分なりの言葉で伝えたいと思えるような援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【 実践事例１ 】「絵本って楽しいな～様々な言葉と出会う中で、保育教諭や友達と一緒に楽しむ～」

≪園児の実態≫

・園児が自ら絵本を選んで手に取り、絵本の絵を見たり、学級内での読み聞かせを楽しんだりしている。
・繰り返しのある言葉のフレーズを口ずさんだり、絵本の絵を指さし、保育教諭にどのような場面なのか聞いたりしている。
・見たい絵本が同じだと、絵本の取り合いになってしまうことがある。

≪ 保育教諭の願い≫

・絵本に親しむ中で、様々な言葉に興味を持ち、物語の世界観を楽しんでほしい。
・絵本の読み聞かせを楽しむ中で、園児と保育教諭、友達と心を通わせる喜びや楽しさを感じてほしい。

≪ ★環境構成　◎保育教諭の関わりや援助 ≫

★園児の興味関心のある絵本、季節や行事に関する絵本などを準備する。
★絵本の表紙を見やすく置いて整える。また、同じ絵本やシリーズものを 2～3 冊用意し、保育教諭や友達と一緒に見る楽しさを感じられるようにする。
◎絵本を見て、感じたことや気付いたことを、その園児なりに表現している姿（言葉、身振り手振り、動作など）を受け止め、共感していく。
◎絵本の読み聞かせ後の園児の声を拾い、受け止めたり、全体へ伝えたりすることで思いの共有を図る。
◎園児の伝えたい思いや気持ちを受け止め、「〇〇だね」とさりげなく言語化していく。

≪ 園児の変容 ≫

・友達の隣に座って「一緒に見よう」と同じ絵本を見たり、ページをめくったりと楽しんで見る姿が見られるようになった。
・絵本を保育教諭や友達と一緒に楽しむことで、物語の世界観に浸る姿が見られるようになった。
・物語の世界観を楽しみ、絵本の言葉やフレーズを覚え、繰り返し口ずさんだり、話したりする。
・園児同士が話したいことや思いが伝わると嬉しそうな表情や喜びを表す動作（ハイタッチやジャンプ、ハグなど）で表現する姿が見られる。
・友達と同じ絵本や図鑑を見て、「〇〇かな？」「〇〇だと思うよ」など絵本の場面を見て話し、互いの感じたこと、気付いたことを伝え合おうとする姿が見られる。

【 実践事例２ 】「手遊び歌、絵カード遊びって楽しいな～友達との関わりへつなげていく～」

≪ 園児の実態 ≫

・手遊び歌やペープサートなどを楽しみ、リズムにのったり、体を揺らしたりとその園児なりの表現を楽しんだり、保育教諭や友達が楽しんでいる姿を少し離れたところから見たりする園児もいる。
・様々な物や道具を使って遊ぶことが好きだが、「あれ、これ、それ」で使いたいもの、遊びたいものの名前を保育教諭や友達に知らせることがある。
・遊びの中で、相手に伝えたい思いや気持ちが言えず、困ったり戸惑ったりする姿が見られる。

≪ 保育教諭の願い ≫

・歌や遊びを楽しむ中で様々な言葉に触れ、自分なりに表現してみようとする楽しさを感じてほしい。
・日常のやり取りを通して、物の名前に興味を持ち、言葉で伝えようとする体験を積み重ねてほしい。

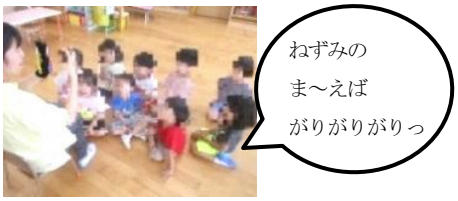
≪ ★環境構成　◎保育教諭の関わりや援助 ≫

★遊びや園生活に興味が持てるような、手作りの手袋シアターやペープサート、絵カードを準備する。
★園児がいつでも好きな時にペープサートや絵カードを使って遊べるように環境を整えていく。また、園児が使いやすく、遊びに取り入れやすいよう、形状や素材等を工夫する。
◎繰り返しフレーズのある手遊び歌を園児と一緒に楽しみ、その園児なりの表現（口ずさんだり、リズムにのったりする姿）を受け止めていく。
◎日常生活や行事等で経験したことをクイズやカルタ形式で楽しめるよう、手作りの絵カード遊びを用いて、「画用紙を切る物は何かな（答え：はさみ）」「はな組さんで棒を使って割った果物だね（答え：すいか）」など、保育教諭と園児が互いにクイズやヒントを出し合うやり取りの中で、遊ぶ楽しさを感じられるようにする。
◎一人一人の表現を温かく受け止め尊重し、その園児なりの表現を周りの園児にも知らせていく。

≪ 園児の変容 ≫

・保育教諭や友達が楽しんでいる様子を少し離れたところから見ていた園児が、手遊び歌や絵カード遊び、ペープサートなどに興味を持ち、保育教諭や友達の真似をして楽しんだり、一緒に遊びに加わったり、「〇〇の歌、歌いたい」と自ら保育教諭に曲のリクエストを伝えたりする姿が見られるようになった。
・始めは個々でペープサートを楽しんでいたが、「私も歌いたい」などと友達と声を掛け合い、ペープサートの歌う順番を決めたり、交互にペープサートを貸し借りしたりと友達と一緒に楽しむ姿が見られる。

・遊びたい物や使いたい道具などの名前を知り、言葉で伝えたり、指さしで知らせたりするようになった。また、周りの園児が「折り紙って言うんだよ」と教えたり、物の形や色、音や動作、状況を自分なりの言葉で伝えようとしたりする姿が増えている。
・遊びの中で自分の思いや気持ちを相手に伝えることが難しく、トラブルになることもあったが、保育教諭が仲立ちすることで、少しずつ自分なりの言葉で相手に伝えようとする姿が見られた。



手袋シアター
『ねずみのはみがき』

ペープサート『山の音楽家』

カルタ遊び

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

(1)　伝えたい思いや気持ちを表情で訴えたり、泣いて周りに助けを求めたりすることが多かったが、絵本の読み聞かせや教材に興味関心を持ち、様々な言葉と出会うことで、自分の思いや気持ちを身振り手振りや動作、自分なりの言葉で伝えてみようとする姿が増えてきた。

(2)　絵本コーナーの絵本の種類や冊数を整えたり、手遊び歌のレパートリーなどを準備したりすることで、絵本や手遊び歌、ペープサート、絵カード遊びなどに興味や親しみを持ち、保育教諭や友達と一緒になって、見たり聞いたりと楽しむようになった。

(3)　遊びや園生活を通して、一人一人の言葉や表現を受け止め、遊びの楽しさに共感することで、話したい、伝えたいという気持ちが育ち、保育教諭や友達に自分の思いや気持ちを伝えようとする姿が増えてきた。

２　課題

(1)　園児が自由に絵カードを手に取って遊ぶような環境の工夫をしたが、園児の声や発想を拾って遊びが広がるような援助の難しさを感じた。

(2)　思いや気持ちを言葉や動作などで友達に伝えているが、園児同士だけでは伝わりにくい時があった。園児が自分なりに表現する姿を認め、保育教諭が仲立ちとなり、相手に伝える喜びや楽しさを感じられるような援助の難しさを感じた。

３　実践を通した自身の気づき、考え

(1)　絵本の読み聞かせを通し、園児は保育教諭や友達と物語の世界観を楽しみ、心を通わせる姿が増えているように感じる。

(2)　絵本コーナーの環境を整え、園児が思い思いに絵本を選んで手に取れる環境を構成することで、好きな絵本を通して、友達同士や集団で一緒に見ることを楽しみ、言葉のやり取りが増えているように感じる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

(1)　一人一人の思いや気持ちを受け止め、全体の場にて共有し、保育教諭や友達と心を通わせ、「もっと話したい」「もっと伝えたい」と思えるような雰囲気作りの工夫に努める。

(2)　園児の言葉への興味が広がるよう、引き続き、絵本の読み聞かせや様々な遊びを楽しめるよう工夫する。また、遊びを通して、友達との関わりが深まるよう援助していきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成30年3月『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』
株式会社フレーベル社
・徳永満理　2013年　『よくわかる　0～5歳児の絵本読み聞かせ』　株式会社チャイルド本社

様式３【課題研究レポート】

応答的な関わりの中で言葉への興味や表現しようとする意欲を育む環境構成と援助の工夫

―絵本の読み聞かせや歌、手遊びを通して―

那覇市立宇栄原みらいこども園　保育教諭　喜納　尚子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第３節の領域「言葉」のねらいには「絵本や物語等に親しむとともに、言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを通わせる」と示されている。絵本や歌、手遊びなどを通した関わりの中で、保育教諭との応答的なやりとりを重ねることは、子どもが安心して思いを表し、言葉への興味や表現しようとする意欲を育む基盤になると考えられる。

本園は０歳児から４歳児までの５年保育を行っており、本学級は１歳児１７名（進級児６名、新入園児１１名）で構成されている。１歳児は言葉の発達に個人差が大きい時期であるが、日々の保育の中では、どの子も絵本に親しむ姿が見られる。繰り返し読み聞かせを行う中で、絵本のフレーズを真似て口ずさんだり、身振りや表情など言葉以外の手段も用いながら、自分なりの表現を楽しんだりする姿が増えてきている。一方で、自我が芽生え、自己主張が育つ時期でもあることから、思いをうまく言葉で表現できず友達に手が出てしまったり、大きな声を出したりする姿も見られる。これらの姿から、子どもたちは人との関わり方や、やりとりの仕方を日々の経験を通して学んでいる過程にあると考えられる。そこで本研究では、絵本の読み聞かせや歌、手遊びを通して、子どもが興味・関心をもてる環境を整え、保育教諭や身近な人との応答的な関わりを大切にした援助の工夫を行い、やりとりする心地よさを感じられるようにしたいと考えた。こうした関わりを積み重ねることで言葉への興味をもち、自分なりに表現しようとする意欲を育んでいくことを目指し、本テーマを設定して研究を行うこととした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自ら好きな絵本を選んで取り出したり関わったりできるような環境構成の工夫

⑴　子どもたちの興味や関心が持てるよう保育室に絵本棚を設置し、この時期にふさわしい絵本を選書したり、手に取りやすいように表示を工夫したりする。

２　絵本の読み聞かせや歌、手遊びを通して簡単な言葉を繰り返したり模倣したりして遊ぶ援助の工夫

⑴　子どもたちの気に入っている歌や絵本、手遊びを繰り返し行い簡単な言葉のやりとりが楽しめるようにしていく。

⑵　保育教諭が子どもの発する言葉に耳を傾け、共感する言葉をかけたり、愛情を持って応答的に関わることで、大人の言葉を模倣したり、耳にした言葉を遊びや生活に取り込んだりして、やりとりを経験できるよう援助していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】　「よんで」から始まる心地よいやりとり　―少人数で楽しむ絵本の読み聞かせを通して―

＜子どもの姿＞

・畳間に置いたベンチに表紙が見えるように絵本を何冊か並べると、自分の好きな絵本を手に取ったり、ベンチに座って自分でページをめくったりする。また、保育教諭が子どもの手に取った絵本を読み聞かせをすると、自然と周りの子も集まって少人数での読み聞かせを楽しんでいる。

〇保育教諭の願い〇
・好きな絵本を選んで自ら手に取り、保育教諭や友達とも一緒に絵本に親しんだり、やりとり遊びを楽しんだりしてほしい。

＜保育教諭の援助と環境作り＞

・子どもが好きな絵本を「よんで」と仕草や言葉で要求を伝えた時には、丁寧に温かく言葉をかけながら１対１、または少人数での読み聞かせを楽しめるようにする。
・子どもの目の高さに合わせた絵本棚を設置し、表紙が見えるように絵本を置く。
・表紙の写しを表示し、子どもたちが絵本を“絵本のお家”に戻せるようにする。

＜子どもの変容＞

・手の届く位置に絵本棚があることに喜び、好きな絵本を取り出したり、また、絵本棚に貼り付けた表紙の表示を見て「ガラガラドン、いっしょだね」と見たことや感じたことを言葉で発し、喜んで“絵本のお家”に戻したりする姿も見られる。

＜結果と考察＞

・少人数での読み聞かせは、子ども一人一人の反応や言葉を受け止め、保育教諭が丁寧に言葉を補いながら返したりすることで、保育教諭の言葉を模倣したりし、友達とも一緒にやりとりを楽しむことができた。
・子どもの「よんで」という思いを受け止め、応答的に関わることで、安心して気持ちを伝えられる経験につながったと考えられる。

【実践事例２】まねっこが楽しい！絵本から遊びへ

＜子どもの姿＞

・音楽やリズムに合わせた絵本の読み聞かせでは、興味を示して集中してお話を聞こうとする姿がある。また、保育教諭の真似をして部分的に一緒に歌ったり、手遊びを楽しんだりしている。

〇保育教諭の願い〇
・安心した環境の中で一緒に歌ったり、絵本のフレーズを真似たり、自分なりの感じ方で絵本の世界を楽しんでほしい。
・応答的なやりとりの中で自分らしい表現を楽しんでほしい。

＜保育教諭の援助と環境作り＞

・『ぴょーん』など身体が自然と動き出し遊びたくなるような絵本や『だるまさんが』など言葉や動きを模倣したくなるフレーズの絵本などを繰り返し楽しめるようにする。
・言葉の意味を理解して楽しむというよりも、言葉そのものの音やリズムの響きがもつ面白さを繰り返し楽しめるようにする。
・『おおかみと七ひきのこやぎ』の読み聞かせを喜んでいたので、遊びの中で物語に触れる楽しさを味わえるよう、段ボールと画用紙を使っておおかみとかあさんやぎの絵のペープサートを用意し、イメージをもって遊びが広がるようにする。また、おおかみがお家に入ってくる場面では、子どもたちがこやぎになりきってかくれんぼ遊びを楽しめるように、隠れても保育教諭や周りの様子が分かり安心感が持てるよう大きなガーゼ布を用意する。

おおかみと
かあさんやぎの
ペープサート

あ！おおかみだ！
かくれるぞー

＜子どもの変容＞

・最初、おおかみがトントンとドアを叩く場面で「開けてもいいのかな？」と問いかけると「いいよ」と答えていた子どもたち。何度も繰り返し読み聞かせをするうちに「だめだめ！」「あけないよ」などやりとりをしたり、かくれんぼを楽しんだりしていたので、日頃のペープサートを使ったごっこ遊びの姿を生活発表会で見てもらうことができた。

＜結果と考察＞

・ペープサートを使ったごっこ遊びを通して言葉の響きやリズムを楽しめるように援助したことで、子どもたちが無理なく言葉に親しみ、表現しようとする意欲が高まったと考えられる。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

(1) 子どもの発する言葉に、保育教諭が丁寧に言葉を補いながら応答的に関わることで、身近な人に言葉で気持ちを伝えたいという思いが育まれてきている。

(2) 絵本に親しめるように手の届く位置に絵本棚を置くことで、自ら絵本を選び、取り出したり、戻したりする姿が見られるようになった。子どもが主体的に絵本と関われる環境を整えることの大切さを改めて感じることができた。

２　課題

・日々の生活や遊びにおいて簡単な言葉のやりとりを楽しみ、保育教諭や友達と言葉による気持ちの伝え合いや、表現したいという意欲を育んでいけるような援助や環境の工夫。

３　実践を通した自身の気づき、考え

(1) 子ども一人一人の思いを丁寧に汲みとり、応答的なやりとりを重ねていくことが、子ども自身が自分の気持ちを伝えようとする意欲を育むことにつながると感じた。今後も、子どもがさまざまな語彙や表現に出会えるよう、人的環境としての役割を意識した関わりを大切にしていきたい。

(2) あまり発語が見られなかった子が、園庭でちょうちょが飛んでいるのを見つけ、「ちょうちょ！」と初めて自分の発見を言葉で伝える姿があった。その際、「ちょうちょ、いたね」「きれいだね」など、子どものまなざしや気づきに共感する言葉をかけながら応答的な関わりを重ねていくことで、指し示す対象と言葉が結びつき、それを相手に伝えたいという気持ちが育っているのだと感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・絵本や歌、手遊びなど子どもが興味や関心を持って言葉に親しむことのできる環境を整えるとともに、子どもたちが表情や言葉、仕草などで表した気持ちを丁寧に受け止め、応答的なやりとりの中で温かい言葉かけを意識しながら関わっていきたい。

・友達との関わりの中で絵本や玩具の取り合いなどが生じた際には、保育教諭が一人一人の気持ちを汲み取り、「～がほしかったんだね」「～が見たいんだね」など気持ちを代弁しながら、言葉で伝えることの大切さを知らせるとともに、言葉による気持ちの伝え合いが芽生えるように援助していきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年 3 月「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館

・「非認知能力を育てるあそびのレシピ　０歳～５歳時のあと伸びする力を高める」大豆生田啓友・大豆生田千夏　講談社

様式３【課題研究レポート】

互いの良さを認め合い、思いやりを育む保育教諭の関わりと援助

―集団生活で保育教諭や友達との関わりを通して―

那覇市立泊こども園　保育教諭　城間　菜音

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の領域「人間関係」のねらい(２)に「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感をもつ。」とある。さらに領域「言葉」の内容(４)では「人の話を注意して聞き、相手にわかるように話す。」と記されている。園生活の中では園児同士の自己主張のぶつかり合いにより葛藤する場面が見られるが、その経験を通して互いに理解し合いより良いものになるように工夫したり、一緒に活動する楽しさを感じたりできるよう援助することが重要である。

本学級の園児は５歳児(2 年保育)男児 12 名、女児 11 名、計 23 名在籍し、個性豊かで様々な意見を出し合いながら、活動や遊びを楽しむ姿が見られる。しかし、園生活を送る中で、自分の気持ちを押し通そうと強い口調で話したり、相手の意見を否定するような言葉が見られたりしている。さらに、自分のしていることに夢中になり保育教諭や友達が話している場でも反応が見られず関心を示さない場面もある。

そこで、園生活において友達の良さを認め、相手の意見を注意して聞いたり、相手の立場に立ち伝わるように話したりする中で一緒に遊びを進める楽しさを感じてほしいと願い、テーマを設定し研究をすることにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　様々な遊びに興味を持ち、相手の良さに気付けるような環境構成と援助

自分のイメージや考えたことを十分に表現して遊びに活かせるよう様々な素材を用意し、設置場所を工夫するなど環境を整える。またその遊びを思う存分楽しめるような時間を確保する。

２　自分の思いを伝えたり、相手の思いに気付いたりできるような言葉掛けの工夫

(1) ふわふわ言葉やちくちく言葉について園児と一緒に考え、相手が聞いていて嬉しくなるような言葉が増えるよう園児同士の関わりを意識して観察し、援助を行う。

(2) 遊びを通して気付いたことや感じたことを発表する場を設け、友達の気づきに共感したり、聞いてもらう喜びを味わったりできるよう言葉掛けを工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】(６月～８月)　友達とイメージを共有しながら表現を楽しむ援助の工夫　～お祭り屋さん～

〈園児の姿〉

・園児一人の「お店屋さんをしたい」という声から周りの園児も興味を持ち、各自自分の作りたい食べ物をイメージして廃材や折り紙等を使って製作することを楽しんでいる。

・園児の中でイメージを持ち、色の工夫はしているが、形や大きさにこだわりはなく出来上がった物を飾っても何を作ったのかは一目で分からない状況である。

〈保育教諭の願い〉

・自分のイメージしたものを様々な素材を使って表現することを楽しみ、遊びの中で友達との対話を繰り返し行いながら関わりを広げてほしい。

・友達のアイディアを聞いたり、作っている物を見たりして、自分の表現に取り入れながら一緒に作る喜びを感じてほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・お祭りのポスターを見せ、掲示をすることで子ども達からどのような食べ物を作りたいのかやお祭りには食べ物のほかに何があるかを引き出しながら、お祭り屋さんのイメージが膨らむようにする。
・廃材棚を子ども達と整理しながら、色々な素材がある事を知る機会を作り、どのような製作に使えるかを一緒に考える。さらに子ども達の作りたいものをどのように作るか考え、大きさや立体的な部分に気付けるよう声を掛けながら一緒に作る事を楽しむ。
・友達のアイディアをクラスで共有しながら様々な製作の方法に気付き、自分も自分のイメージに合わせてやってみようと思えるような声掛けを行う。
・実際にお祭り屋さんをする日付をクラスで話し合い、隣のクラスや年中児を招待することで友達と一緒に一つのことに向けて取り組む楽しさや達成感を感じられるようにする。

≪園児の変容≫

・廃材棚に様々な素材を用意し充実させることで、折り紙のみで製作をしていた園児も自分のイメージに合わせて花紙や画用紙、カラービニール、空き箱など様々な素材を使って表現することを楽しむようになった。
・隣の友達と別の物を作って見せ合いをしていく中で、違う表現の方法に気付き、真似をしてみたり友達にどう作ったのかを聞いたりしながら友達と関わって遊ぶことが増えた。
・普段消極的な子どももクラス全体で取り組む事で一緒に作る喜びを感じ、友達との関わりが増えたり思ったことを伝えたりすることが多くなった。

「お肉たくさんの弁当作りたい」
★自分のイメージを折り紙や容器を使って表現している。

「本物みたいに作れた！」
★様々な素材を使ってより本物に近いものを作り、出来たことを喜ぶ。

「どうやって作ったの？」
「教えて！」
★友達のアイディアを聞きながら一緒に作る事を楽しむ。

「いらっしゃいませ」
「やったー、売れたよ」
★他クラスを招待し、友達と一緒にお祭り屋さんを楽しむ。

≪結果と考察≫

お祭り屋さんを通して自分のイメージを友達に伝えたり、友達の作り方を見て真似たりするなど友達との関わりを楽しむ様子が増えた。また、作った物をクラスの集まりの際に紹介をすることで、あまり興味を持っていなかった園児も集まり後に遊びに参加し「どうやって作ったの？」と積極的に友達に聞いていた。友達の良さに気付くことで興味を持ったり質問をしたりすることに繋がっているのではないかと考える。

【実践事例２】（７月～）　友達の良さに気付き、共感し合う場の工夫　～こころの星を探そう～

〈園児の姿〉
・七夕の時に園全体で取り組んだ「こころの星占い」(図１)を引き続きやりたい園児が多く、帰りの会で当番さんに占ってもらい(写真１)、頑張った事や楽しかったことを紹介している。
・友達とのトラブルが起こったり、自分の思いが通らなかったりする場面で相手が傷つく言葉や行動を行う姿が度々見られた。

〈保育教諭の願い〉
・友達の良い所や頑張っている事に気付き友達の大切さを感じて園生活を送ってほしい。
・相手にしてもらって嬉しい事を考え、自分も相手にしてあげたいという気持ちが芽生えてほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・園全体で行った星占いを「またやりたい」と興味と持っている園児の姿があったため、クラスで継続して取り組み、自己肯定感が高まるよう集まりの中で発表する場を作り、子ども達の気持ちに共感する。また、子ども達同士でも友達の良い所さがしを行い、互いを認め合ったり思いやりを持った行動を紹介したりできるような場を設け、自分もやってみようと思えるような言葉掛けを工夫する。

・少しずつこころの星の瓶の中が溜まっていく喜びや達成感を感じられるよう集まりの中で子ども達が紹介してくれた内容を掲示する。

（図１）

（写真１）

≪結果と考察≫

クラスの集まりで友達の良い所を振り返る事で「素敵だね」と共感しながら互いを認める様子が増えている。さらに友達の良い所を素直に受け止め、自分もやってみようと挑戦したり困っている友達に声をかけて助け合ったりするなど相手を尊重し、思いやりを持つ場面も少しずつ見られるようになっている。園児が見つけた友達の良い所を分類ごとで視覚的に表示することで「ハッピーマンが多いよ」「次はキラキラマンを探そう」と、こころの星が溜まる喜びを感じているように思う。

Ⅳ　実践の振り返り

１．成果

・保育教諭が子ども達と一緒に遊びを楽しみながら園児の考えを尊重することで、子ども自身が表現することに自信を持って遊びに取り組むようになった。

・周りの友達に自分の表現を認めてもらいながら遊びを楽しむことで、次第に相手の考えや行動に気付いて自分の考えとは違ったアイディアも取り入れながら遊びを進めることが増えている。

・友達と一緒に遊ぶ中で互いの思いの共有や意見の食い違いなど、様々な経験をすることで子ども同士の関わりがより深まっている。

・クラスで発表する場を設けることで、友達に伝わるよう言葉を考えたり、人の話を聞く姿勢を意識したりすることにつながっている。

・友達にしてもらって嬉しかったことや困った時に助けてくれたことをクラスで共有していく事で、思いやりの気持ちで自分もやってみようと取り組む姿が出てきている。

２．課題

・友達の遊びを認め、様々な意見を取り入れて一緒に遊びを進める姿が多く見られるようになっていることを踏まえ、今後は協同して物事を進める楽しさを感じられるような活動を取り入れる。

・クラスとしては友達の良さに気づいたり、相手を思いやる行動や言葉がみられたりしているが、トラブルの場や気持ちが高ぶっている場で強い口調になることがあるため、園児一人一人の内面理解に努める。

３．実践を通した自身の気づき、考え

・子ども達は自分の遊びを十分に楽しみ気持ちが満たされることで、周囲に目を向け、刺激を得ながら友達との関わりが広がっていくのだと実感した。

・子ども達の「やりたい」という興味・関心を保育教諭がしっかりと捉え、遊びに必要な道具や場、時間などの環境を整えていくことで、遊びがより深まり、楽しんでいるように思う。子どもが主体であることを忘れず、子どもの実態や興味・関心と保育教諭のねらいのバランスを考えながら保育を進めていきたい。

・子ども達の発達に合わせてどう保育を進めていくと良いか迷うことが多くあった。その際にペアの保育教諭に助言を仰いだり、相談をしたりすることで子ども達の姿や様子の捉え方、声掛けや関わり方等を工夫することができた。保育を行う中で自分一人で進めていくのではなく、周りの保育教諭との情報共有を大切にしながら子ども達の成長につながる保育実践に努めていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・子ども達の実態として、遊びの中で自分の考えやイメージを伝えあい、友達と一緒に遊びを進める様子が見られている。子ども同士で相談をしながら遊びを展開している姿を認め、その遊びがより楽しくなるよう環境や援助の工夫を考えていく。さらに遊びの中だけでなく子ども達自身が園生活を進める楽しさを味わえるよう当番活動やグループでの話し合いなどを取り入れながら協同性を育てていきたい。

・クラス全体で認め合うという姿が増えている反面、相手が良く思わない言葉や行動で表現してしまう姿もまだ見られる。これらの言動の背景を丁寧に捉え、保護者との連携を十分に図りながら友達の考えに気付けるよう援助していく。そして、クラス全体で相手を思いやる気持ちや友達と一緒に取り組む楽しさを感じたりできるような活動を継続しつつ、個別でもじっくり一緒に遊びを楽しみながらその子の気持ちを十分に受け止め、丁寧な関わりを心がけていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　2018 年 3 月　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

小さな〝できた〟が大きな〝できる〟になる！自信に繋がる援助の工夫

―保育教諭や友達との関わりを通して―

豊見城市立上田こども園　保育教諭　大城　美裕

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第３節「人間関係」のねらい（１）には「幼保連携型認定こども園の生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。」と記されている。また、内容の取扱い（２）には「集団の生活の中で、園児が自己発揮し、保育教諭等や他の園児に認められる体験をし、自分のよさや特技に気付き、自信を持って行動できるようにすること」とある。園児が自己発揮する為には、まず保育教諭等が、園児の心に寄り添い、その園児のよさや特技を認めることが大切だと考える。また自分に力があると信じて取り組み、自信を持って行動することができるようになる中で、友達の良さに気付き認められるようになってほしいと感じる。

本学級の実態としては、４歳児（３年保育）女児９名、男児１３名、計２２名在籍しており、内４名が新入園児である。全員が集団生活を経験しており、新しい環境に積極的に関わる姿が見られた。一方で、自己調整が課題であり、活動や気持ちの切り替えに時間がかかったり、保育教諭の援助を待つ様子が見られる。

このような実態を踏まえ、一人一人が保育教諭や友達に認められ、その良さが生かされる学級のあり方を考えることで、園児が集団の中で自信を持って行動できるようになるのではないかと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　小さな〝できた〟を認めて自信に繋げていけるような援助の工夫
保育教諭等との信頼関係の中で、園児なりに取り組んでいる姿を認めたり、励ましたりしながら安心して自己発揮できるようになる援助の工夫をする。

２　友達との関わりを通して、一緒にできる喜びを感じていけるような援助や環境作り
友達と思いを伝え合う中で、気持ちの折り合いのつけ方、解決策の見つけ方、また一緒に遊ぶ楽しさや心地よさを感じ、自信を持って協同していけるような援助や環境構成の工夫をする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１　～小さな〝できた〟から広がる自信～

□　幼児の姿　　◎保育教諭の援助　　□環境構成

・

【安心・安定】【自己調整】
・４月、新しい環境に積極的に関わる姿が見られる一方で、自己調整が課題であり、活動や気持ちの切り替えに時間がかかったり、保育教諭の援助を待つ様子が見られる。

≪保育教諭の思い≫
・自分でできることは、自分で取り組めるようになってほしいな
・自分でできた喜びや成功体験を積み重ねて、自信をつけてほしいな

◎新しい環境への幼児の不安な思いを受け止めながら、安心して過ごせるように保育教諭も一緒になり遊びや生活に関わる中で、自分でしようとする姿を認めたり励ましたりする。
◎出来たことや頑張ったことを伝え合う場を設け、クラス全体で共有し保育教諭や友達に認められる喜びや自分の良さを感じていけるようにする。

◎個人面談でクラスでの取り組みを伝え、家庭と連携しながら頑張っている姿を沢山褒め合い、自信に繋げていく。
□出来たことや頑張ったことを発表する場に名前を付けたり、どんな思いや考えも受け止めることや個々に合わせた配慮など、安心して自己表現できるような環境作りを行う。

泣かないで来れたよ

自分で名札つけれたよ

並べてあげよう

発表の場を『グッジョブにじタイム』とみんなで名付け、頑張っている姿を“グッジョブ👍”と認め合っている。

安心･安定

友達の頑張る姿に影響を受け、様々なことに自分で挑戦しようとする姿が見られ始める。

成功体験の積み重ね

意欲

自分で出来ることが増え自信が付き始めると、身の回りのことにも積極的に取り組むようになる。

自己肯定感

自信

≪幼児の姿の変容≫
・一人ひとりに寄り添い、受け止めてきたことで、朝の支度や着替え等を自分でやってみようとする姿が増えていった。
・グッジョブにじタイムを取り入れると、自分の頑張ったことを友達に認められる経験が繰り返され、自信に繋がったようで、今まで保育者が援助にくるのを待っていた子も、自分から様々なことに挑戦する姿が見られるようになった。
・成功体験を重ね自信のついた子どもたちは、自分以外の物事にも目を向けるようになり、身の回りの事に積極的に取り組んだり、グッジョブにじタイムを子ども主体で進めよとするようになった。また友達関係の広がりからも、自信がついた様子を感じることができる。

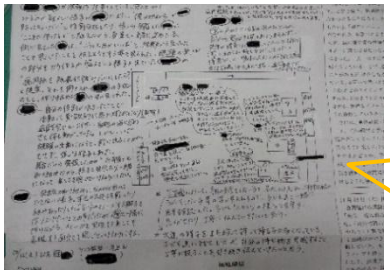
実践事例２　～保育教諭や友達との関わりを通して～

≪幼児の姿≫
・友達への関心が深まる一方で、思いのすれ違いや相手の気持ちを聞き入れられずトラブルになる。
・相手が嫌がる言葉を投げかけたり、一方的に自分の気持ちを押しつけようとする姿が見られる。

≪保育教諭の思い≫
・自分の気持ちを言葉で伝えたり、相手の思いに耳を傾けられるようになってほしい。
・友達と仲良く遊ぶ心地よさや、楽しさを味わってほしい。
・友達と一緒に自信を持って協同的な活動に参加できるようになってほしい。

≪◎保育教諭の援助　□環境構成≫
◎□友達との関わりの中で自分の思い通りにならず葛藤している際はその思いを受け止め、伝え方を一緒に考えながら解決策を探していく。
◎幼児理解の手立てとして、マップ型保育ドキュメンテーションを記録として活用し、担任間で幼児の思いや姿、育ちなどを共有し、援助や手立てを共通理解する。

解決策をみんなで考える場を設ける。



マップ型保育ドキュメンテーションで育ちの共有を行う。

≪幼児の姿の変容≫

・初めは一方的な関わりが見られた子ども達も互いの思いを伝え合いながら進める話し合いや様々な解決法を知ることで、次第に相手の思いにも気付くようになっていった、さらに友達関係が深まるにつれ、思いやりの言葉をかけたり子ども同士での話し合いで納得のいく解決策を見い出せるようになったりと関わりが深まっていった。

・また些細なことでも話し合う時間を設けることや、友達と一緒に共通の目的を成し遂げる喜びを感じられるような活動を取り入れることで、協同性や考える力、言葉による伝え合いが育ちつつある。

・友達の優しい言葉や周りのために行動する姿などを知るとともに、自分も友達に認めてもらえる心地よさを味わうことで、個性豊かなクラスながら互いを認め合い、ともに過ごす喜びを感じることができた。

泣いている子に気付き、話を聞いています。

伝え合い

共感

友達同士で話し合う姿

怪我した友達を気遣う姿

仲間意識

集団遊びを楽しむ姿

協同

Ⅳ　実践の振り返り

1　成果

・本研究を通して、子どもの思いを受け止め、気持ちを共感したり、一緒に取り組んで課題を解決していくことで信頼関係に繋がることや、また小さな成功体験の積み重ねが一人ひとりの自信になり、自己発揮していくことが出来るのだと改めて感じた。

・話し合いの場ではどんな思いや考えも受け止めることや個々に合わせた配慮など、安心して自己表現できるような環境を作ることで活動に主体性がうまれた。

・一人で出来ないことも友達と一緒ならできると挑戦したり、友達に優しく寄り添ったりと、友達と過ごす楽しさや心地良さを育むことができたのではないかと感じる。

2　課題

・思いのすれ違いへの対応にはまだまだ援助が必要である。たくさん経験できるようにしたいきたい。

3　実践を通しての気付き

・入園・進級当初からの子ども達を肯定的に受け入れ、安心して園生活を過ごし自己調整ができるような関わりを続けてきた。その関わりから生活や遊びの中で自分の思いを伝えたり、やりたい事を生き生きと楽しんだりすることが出来た。保育教諭がきっかけとなり思いを伝える場を設けたり、様々な出来事を共有出来るような関わりをしたことで、友達の思いや良さにも気付くことが出来たと感じる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

・本研究の課題を踏まえ、今後も友達と一緒に遊ぶ楽しさや心地よさに気付いていけるように、子ども達の興味関心を把握し、発達や実態に応じた主体的な遊びが展開できるようにしていきたいと感じる。今後も自己研鑽しながら保育の質向上を目指し、日々の保育を豊かにしていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　『幼保連携型認定型こども園教育・保育要領解説』　株式会社フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

幼児教育と小学校教育の円滑な接続の推進について

―こ小の交流活動と育ちの共有、架け橋期カリキュラムの協働作成を通して―

宮古島市立　下地子ども園　保育教諭　棚原　有愉

Ⅰ　テーマ設定の理由

本園は、０歳児から５歳児が在籍する幼保連携型認定こども園で、小学校に隣接する恵まれた環境にあり、園児が小学校の運動場でのびのびと遊んだり、休み時間に訪れる児童と自然に交流したりする姿が見られる。また、年度当初に「下地こ小接続年間計画」を作成し、子ども同士や職員間の交流等を行っている。さらに、地域の小・中学校の職員を対象とした公開保育や合同研修会、授業参観なども実施し、連携がより一層深まってきている。より円滑な接続に向けた相互理解やカリキュラムを目指すために、幼児期の学びがどのように小学校教育へとつながっていくのかを改めて整理し、共通理解を深めていく必要がある。また、協働的に「架け橋期カリキュラム」を作成することを目的とし、これらの課題に向けて取り組んでいきたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

1. 相互理解の工夫

「下地こ小接続年間計画」を見直し、交流会の充実、円滑な幼小接続に繋がる連携のあり方等について話し合いながら相互理解を深めていく。

２．カリキュラムの改善・作成

さらに実効性のあるカリキュラムにするために、1 年生の教科書から単元や学習内容を把握したり、遊びを通した学びがどのようにつながっていくのかを話し合いながら見直すことにした。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み

視点１　幼児教育と小学校教育の円滑な接続を実現するための相互理解の工夫

１．「子ども同士の交流「七夕交流会」

1 年生から招待状をもらい、七夕交流会に参加した。

《活動を終えて》

子どもの実態と課題：5 歳児と 1 年生の交流は楽しそうだったが、5 歳児は主体的に交流する姿が見られなかった。行事や活動では子どもの思いを汲み取る事が大切だと感じた。

教諭間の実態と課題：お互いにねらいを立てたが、共有できていなかった。教諭同士でねらいを共有することの必要性を感じた。

２．子ども同士の交流「虫取り（５歳児）・生き物との関わり（１年生）」

虫取りに夢中になる園児の姿と１年生が虫取りをする姿が見られた。子どもの興味・関心から自然な流れで幼小の生活・学びをつなげることをねらいとして、合同で虫取りを行った。また、虫取りをしたり、生き物を育てたりしたことを通して気づいたことや調べたことを１年生がまとめて発表をした。

合同虫取り

１年生による発表

《考察》

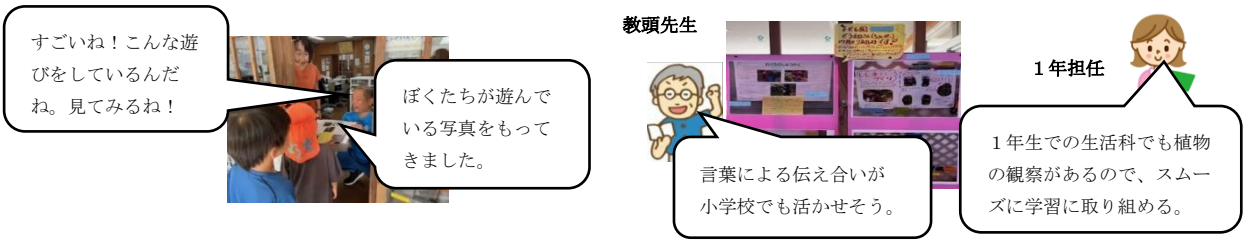
・お互いの興味・関心がある活動だったので、児童は「伝えたい」、園児は「もっと知りたい・調べたい」という姿が生まれた。

・１年生を身近に感じることで他学年とも自ずと関わるようになった。

・ねらいを事前に担任間で共有したことで、充実した交流活動になった。

3. ドキュメンテーションで遊び・育ちを伝える

「遊びを通して学ぶ」という幼児教育を小学校の教諭に理解してもらえるように、園児の遊びの様子をドキュメンテーションにして小学校に掲示してもらうことにした。ドキュメンテーションは園児が届けることで、小学校教諭との交流を図った。



《考察》

・ドキュメンテーションを通して、小学校の先生方に園児の育ちや学びを伝えることができ、幼児教育への理解を深めることができた。小学校と連携しながら継続していきたい。

・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手がかりに、こども園での遊びが小学校のどの授業につながっていくのか意見をいただくことができ、幼小接続に対する共通認識を図ることができた。

・園児が届けたことで、小学校の先生方とふれあう機会が増え、小学校への親しみを高めることができた。

視点２　幼児教育施設と小学校との協働によるカリキュラムの改善・作成

１．園内研修（学びの連続性・一貫性を見据えることの大切さ）

園内研修では、架け橋期の対象である５歳児だけではなく、０歳児か５歳児の発達の特徴を職員間で確認し合うことにした。５領域の中の「言葉」と、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「言葉による伝え合い」に焦点を当て、それぞれの発達の特徴を踏まえたエピソードを出し合いながら育ちの連続性について話し合った。育ちのつながりを可視化したシートを小学校とも共有したことで、幼児教育への理解を図る機会とした。

《考察》

・各年齢の発達の特徴を話し合ったことで、育ちにつながりがあることを再認識し、園内で共通理解を図ることができた。

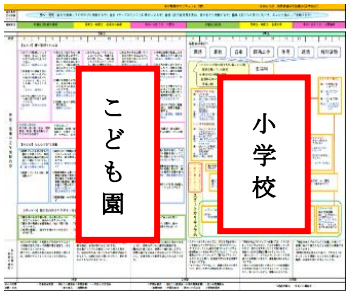
・育ちのつながりを小学校に伝えたことで、幼児教育への理解を深めることができた。

2．カリキュラムの改善・作成

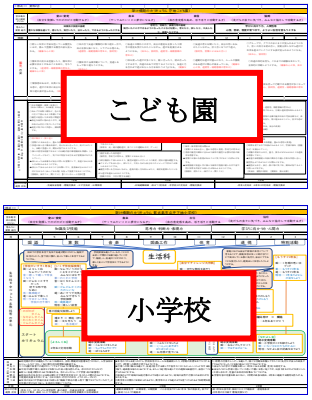
昨年度は、宮古島市の幼小接続のビジョンを共通の視点として幼小協働で架け橋カリキュラムを作成することができた。今年度はさらに実効性のあるカリキュラムにするために、1年生の教科書から単元や学習内容を把握したり、遊びを通した学びがどのようにつながっていくのかを話し合ったりしながら見直すことにした。改善点としては以下の2点であった。

（1）昨年度の架け橋カリキュラムは、1枚のシートの左半分に幼児教育、右半分に小学校教育を示したが、スペースが狭く、遊びや学習内容を十分に記すことができなかった。それで、1枚のシートにそれぞれのカリキュラムを作成した。

【R６年度のカリキュラム】



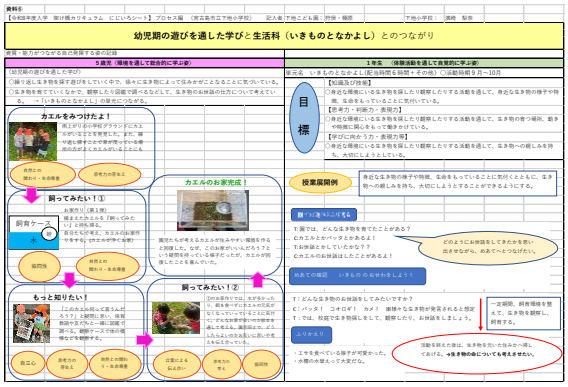
【R７年度のカリキュラム】



（2）幼児期の「あそび」が、小学校ではどのような学びや単元につながっていくかがわかるように、実践事例（にじいろシート）を作成した。

幼児期の遊びを通した学びと算数科（図形）とのつながり

幼児期の遊びを通した学びと生活科（いきものとなかよし）とのつながり《プロセス編》



《考察》
・架け橋期カリキュラムの改善やにじいろシートを協働で作成したことで、お互いの学びのプロセスがより理解できるようになった。
・園での遊びや育ちはそれぞれの領域が絡み合っているが、小学校でも合科的関連的な指導がなされていることを知ることができた。
・にじいろシートの作成を重ね、円滑な幼小接続を図る。

Ⅳ　成果と課題

1　成果

①交流活動を通して、こ小の子ども同士、小学校教諭との日々の関わり合いが見られるようになった。

②実践事例（にじいろシート）を協働で作成したことで、具体的なつながりを可視化することができ、より実践的なカリキュラムを作成することができた。

③にじいろシートの作成を通して、小学校の生活や学習を見通すことができ、つながりを意識して保育を見直すことができた。

2　課題・改善策

〈課題〉

①　組織的な切れ目のない連携

②　カリキュラムの見直し、改善

〈改善策〉

①　接続担当教諭同士の連携にとどまらず、学校・園が組織的につながり合い、幼小の円滑な接続の構築を図る。

②　「架け橋カリキュラム」や「にじいろシート」を協働で見直し、実践事例を積み重ね円滑な幼小接続を図る。

《主な参考文献》

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
・文部科学省　（２０２４年）　令和６年　『幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？』　東洋館出版社
・監修：岸野麻衣・吉永安里、宮城利佳子、久龍和己　令和７年　『幼保小をつなぐ架け橋プログラムハンドブック』　啓林館
・福井県教育庁義務教育課　幼児教育グループ・福井県幼児教育支援センター　令和７年　『学びをつなぐ希望のバトンカリキュラム』

様式３【課題研究レポート】

友だちとの関わりや経験から自己肯定感を育てる工夫
—保育教諭や友だちとの関わりを通して—

宮古島市　上野こども園　保育教諭　氏名　前盛　智香

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、デジタル機器の普及に伴い室内で過ごす時間が増え家族内でもコミュニケーションが減ってきているように感じ、これらが幼児に引き起こす影響として人間関係の希薄化・コミュニケーション能力、非認知能力低下に繋がっていると感じる。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の領域「人間関係」のねらい(2)身近な人との親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を味わうとある。この時期の園児は他者との関わりが増える中で自分の意思を表現しながら、自己の存在感や他の人と共に活動する楽しさを味わい、ときには園児同士の自己主張のぶつかり合いによる葛藤などを通して互いに理解し合う体験や考えを出し合いより良くしたり、一緒に活動する楽しさを味わう体験を重ねたりしながら関わりを深め、共感や思いやりなどをもつようになるとされている。

本学級の実態としては、４歳児クラス（６年保育）男児８名、女児９名計１７名在籍している。クラスの雰囲気は活発な園児が多くお友達との関わりも多い。活動の中でも「一緒に遊ぼう」と遊びを誘いかけたりする姿が多く見られる一方で、自己主張が強いため友だちとぶつかり合うことも多く、相手の意見や気持ちに気付けず、泣いたり、トラブルになることも多い。感情のコントロールが苦手で手を出したり、口調が強くなり自分の要求を通そうとする姿も見られる。

このような実態を踏まえ、まずは自分自身の良さに気づき好きになり、認められ自信を持つことで、友だちの良さにも気付き、一緒に活動する楽しさを味わいながら、お互いに協力し合え温かなクラスになって欲しいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

（１）お友だちや保育教諭と積極的に関わりながら自分や相手の良さに気付き、喜びや悲しみを共感し合う環境構成と援助。

（２）日々の生活や遊びの中で小さな成功体験を積み重ねることが出来る援助の工夫。

（３）サークルタイムを設け、対話や意見交換を通し協調性や自己肯定感の育成を図る。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例①】

〈子ども達の姿〉

・男の子が主にブロック遊びを好み、一人で黙々と遊ぶ園児がほとんどでブロックの数が足りなくなったり部屋中にブロックが散乱している。

・気持ちのすれ違いや貸し借りの中でトラブルになったり、相手が思い通りにしてくれない時には苛立ち部屋を飛び出したりするなど遊びの継続が難しい。又、１人遊びで集中したい園児もいる中なかなか集中出来ずに、お部屋をウロウロしたり保育教諭の側にずっといる園児もいた。

〈保育教諭の願い〉

・１人遊びが集中できるような遊びを見つけ遊び込み、一人遊びから集団遊びへと発展することで活動の幅が広がって欲しい。

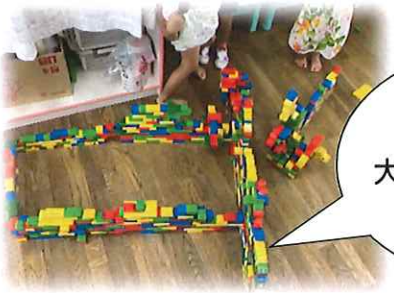
〈保育教諭の援助・環境構成〉★援助　　〇環境構成

〇一人遊びが集中出来るような玩具（パズル・ブロック・お絵かき・折紙）を設置し、配置位置も考慮しながら遊びに集中できるようする。

★遊びを見つけられない園児には遊びを提供したり、時にスキンシップの時間を意図的に設け気持ちが安心出来るようにする。

合体してつなげよう！

※一人遊びからお友だちと協力して思い思いに作ることに発展しました。



大きな船が完成！！

「ここをもっと高くしよう!」
「こうしたらいいんじゃない？」
「えー、こんながいい」
「分かったよ。こうでしょ！」

〈幼児の変容〉

・様々な教具を設置したことで遊びの幅が広がり一人遊びができる環境が作れた。最終的にはブロック遊びが発展し単数遊びから複数遊びとなった。共同し大きな作品が完成した喜びからお友だちとの関わりが増え一緒に作って楽しい！と楽しさを共有することが増えた。

・お友だちとの関わりが増えたことで言葉でのやりとりも盛んになり互いの意見に耳を傾ける機会も増えたことで自分の気持ちを発するようになった。

【実践事例２】

〈子どもの姿〉

・椅子取りゲーム・鬼ごっこ・リレーなどルールがある遊びを保育教諭が提案し誘いかけるが、「負けるからやらない」「めんどくさい」「やりたくない」など消極的な意見が多く聞こえゲームが成立しない。

〈保育教諭の願い〉

・自分に自信を持ちながら何事にも意欲的に取り組んでほしい。

・お友だちと活動のルールを共有しながら思いを伝え合い、共に活動する楽しさを味わいながら目的が達成する喜びを感じて欲しい。

〈保育教諭の援助・環境構成〉★援助　　○環境構成

○身体を思う存分動かせる園庭遊びを積極的に取り入れ、その中でルールがある遊びへと移行できるようにする。

○日々の保育の中で小さなルールを設定し達成できやすいようにしたり、ポジティブな声かけを常に意識することで自信へと繋げるようにする。

★園児同士が遊んでいる様子を見守りながら、さりげなくルールを設置しそのルールが達成できるようにする。また、必要な時に仲裁に入りお互いの気持ちの代弁をし思いが伝え合えるようにする。

順番だよーー！
おまけのおまけのきしゃぽっぽ！ぽーっとなったらかわりましょ♪
※順番を待つというルール

サークルタイムを設け、その日楽しかったことなどを発表してもらい自信へと繋げ、保育教諭は前向きな言い回しを意識し意欲向上に努めた。

〈幼児の変容〉

・勝ち負けにこだわらずリレーを最後まで楽しく走りきったり、鬼ごっこや椅子取りゲームなどにも積極的に参加するようになった。

・小さな成功体験を通し自信へとつながり生活発表会では堂々と走り、去年は踊らなかった園児も踊るようになった。

みんなで作ったブロックの作品を生活発表会で高飛びとして披露しました。

様式３【課題研究レポート】

自信をもって思いや考えを伝え合い、主体性・自主性を育むための援助の工夫

―様々な役割を担う保育教諭の人的環境としての関わり、思いを伝え合う場を通して―

宮古島市立　伊良部こども園　保育教諭　氏名　下地　夏子

Ⅰ　テーマ設定の理由

本学級には、５歳児（５年保育）の男児７名、女児７名、計１４名が在籍している。クラスの実態として、仲の良い友達と虫捕りや製作、ままごとなど好きな遊びを楽しんだり、大好きなダンスやかけっこでは進級児が中心となりルールをいろいろ考えたりしながら活発に皆で楽しむ姿がある。一方で、初めて経験する事や出来ない事に対する苦手意識が強い園児も多く、遊びの途中で諦めてしまう姿や困り感を伝えられずにいる姿がある。また、朝の支度や挨拶など保護者に任せてしまったり、全体への声掛けに応答が無かったりする姿など、特定の場面で受動的・非主体的な姿も見られる。

このような実態から、自分の思いや考えを伝えることに自信をもち、「自分でやってみたい」「最後まで諦めない」など主体的・自立的に園生活を過ごせるようになってほしいと願いを持った。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」の内容の取扱い(1)「保育教諭等との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、園児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力で行うことの充実感を味わうことが出来るよう、園児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。」とある。園児の主体的・自立的な活動の為には園児との信頼関係を見直し、関わりを深めていくことが保育教諭の課題であると考えた。また、主体的、自立的な取り組みには、自分の思いや考えを伝える力など「言葉」の領域が重要であると感じ、このテーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　園児が安心して自分のことを表現しようとする、人的環境の工夫

園児が安心して自分の考えや思いを自分から伝えたくなるよう、保育教諭が園児との関わりを見直すとともに、支援員とクラスの保育観について共通理解を図る。

②　自分の思いや考えを周りに伝えてみる体験や、伝える力を育てる遊びの援助や工夫

自分の思いや考えを伝える事への自信や意欲が育まれるよう、一人ひとりの様々な意見を否定しないような関わりを大切にする。また、皆で同じテーマについて考えてみる機会やイメージを広げる遊びを取り入れ、自分事として積極的に考えたり、自分なりに伝えようとしたりする力を育んでいく。

③　幼児が主体的に様々な環境に関わる中で自信を育み、自分で諦めずに最後まで取り組む意欲を育てるための援助や環境構成の工夫

様々な遊びに取り組み失敗や成功を繰り返す中で自己肯定感を高め、自分でやってみたいと思える自信や最後まで挑戦しようとする意欲が育まれるような援助を工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１　～こども会議をしよう！～

《園児の実態》

・普段は友達や保育者に元気な声で話しかけているが、集まりなど人前になると、恥ずかしがり話せずにいる姿が見られる。

・遊びの中で、自分たちでルールを考え遊ぶようになってきたが、折り合いがつけられないとすぐに怒って離れてしまったり、自分の気持ちが伝えられずに泣いてしまったりする姿がある。

≪保育教諭の願い≫

・自信をもって自分の気持ちや考えを伝えてほしいな。

・自分たちの考えを出し合いながら、自分の気持ちに折り合いをつけたり、問題を解決する方法を知ってほしいな。

☆環境構成・援助の工夫☆

・こども会議を取り入れ、皆で１つの話題について話し合ってみる時間を作る。最初に誰かの意見を否定しないことを約束し、保育教諭自身も意識してあたたかい雰囲気の中で取り組むようにした。また、クラス内であった出来事やトラブルなど、身近な話題を会議にすることで、自分事として捉えたり、自分の考えや思いを伝えたりしやすいようにした。

・ふり返りの時間に、楽しかったことや自分の作品を発表する時間を設け、自分から発表してみたいと思えるような環境を準備した。

【園児の変容】

・こども会議を繰り返す中で、会議の中で自分の考えや思いを積極的に伝えようとする園児が増えてきた。

・遊びの中で言い合いが起こると、子ども会議で決まった解決方法を伝え合い、折り合いをつけようとしたり、自分たちで集まって遊びの相談をしたりする姿が見られるようになった。

・自分の作った作品に自信をもち、緊張しながらも「皆の前で紹介したい！」という気持ちが見られるようになった。

【結果と考察】

・身近な話題を取り入れることでイメージがしやすく、積極的に考えたり考えを伝え合ったりする経験に繋がったと考える。また、自分たちで話し合いながら約束事や解決策を考えたことで、主体的に園生活を進める姿が見られるようになったと考える。

・自分の経験だけでは言葉にしたり発表したりするのが難しくても、自信のある作品を通して相手に伝えてみようという意欲が育ったと考える。

実践事例２　～自分で出来ることは自分でしようとする気持ちが育つように～

《園児の実態》

・朝のお支度を保護者主体で行い、登園時に保護者と離れるのに時間がかかる園児が多く見られる。挨拶も保護者が行うことが多く、保育教諭からの挨拶、声掛けに返答が無いことも多い。

・今年度から関わる支援員に、遊びや生活の中で自分で出来ることでも「手伝って」「やって」と主張する姿や、難しさに直面すると途中で諦めてしまう姿がある。

≪保育教諭の願い≫

・自分で出来ることは自分でやろうとする意欲が育ってほしいな。

・自分で出来ることに自信をもち、色々なことに挑戦していってほしいな。

・挨拶を交わす気持ちよさを感じて、元気な挨拶が身についてほしいな。

☆環境構成・援助の工夫☆

・様々な小さな課題を仕掛け成功体験を増やし、自分で出来たという自信がもてるように関わった。

・園児の実態から、援助する範囲やタイミングを見極めながら励ましたり交渉したりし、自分の力で解決する経験を大事にした。また、自分の困り感が伝えられるように、場面に応じた伝え方を繰り返し教え、伝えやすい雰囲気作りを行った。

・保護者に園児の成長を伝え、嬉しさを共有しながら園児の出来る力を知らせるようにした。また、自立心を育む大切さを丁寧に伝えるとともに、登降園時の約束事を掲示し、保護者も園児も意識して取り組んでいけるようにした。

・支援員と園児の実態、育ってほしい姿等を共有する時間を設け、一貫した関わりが持てるよう共通理解を図った。

・保育教諭の関わりを見直し、自主性を意識して見守り過ぎずに共主体で環境に関わるようにした。

・保育教諭が積極的に挨拶をする中でスキンシップを図り、挨拶の嬉しさが感じられるようにしたり、園児からの挨拶や返事に対して、嬉しさをその都度伝えるようにした。

【園児の変容】

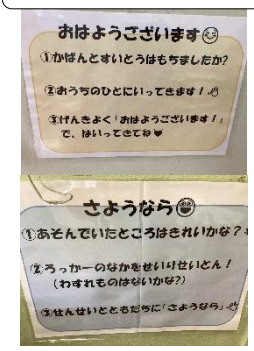
・保育教諭と支援員に対する園児の姿が一定し、自分で出来ることは自分で行い、難しさに直面してもすぐに諦めずに取り組もうとし、困ったことや助けてほしいことは伝えるようになった。

・自分で出来たことに喜びを感じ、新しい事に挑戦する意欲がみられたり、自分の「出来た」を認めてもらう経験から、友達の「出来た」に共感したり良さに気づいたりする心が育ち一緒に喜び合ったりする姿が見られるようになった。

・保育教諭や友達の姿をみて、様々な物事へ関わってみようとする姿が見られるようになった。

・自分で鞄を持ち、元気に挨拶をして登園してくる園児が増え、保護者と離れるのがスムーズになった。また、友達や保育者と主体的に挨拶をし合う姿が見られるようになった。

登降時に自分で頑張ってほしいことを掲示



保育教諭が育てているカマキリ・青虫と、園児が捕まえてきたオタマジャクシ

【結果と考察】

・保育者間で園児の姿や育ちに共通理解を図ったことで、一貫した自立心を育むための関わりが出来、自分でやってみよう、新しい事に挑戦しようとする意欲や、最後まで諦めない力が育ったと考える。

・友達と互いの気持ちに共感したり、良さに気づいたりする経験を通して関係が深まり、相手に言葉で伝えようとする気持ちや思いやりの心、自分の気持ちに折り合いをつける力が育ってきたと考える。

・挨拶を通して、朝から元気に園生活を過ごし様々な活動への意欲に繋がったり、友達同士の関わりが深まったりしたと考える。

・登降園時の約束事を視覚化することで、園児だけで無く保護者も意識して一緒に取り組むことが出来、挨拶やお支度、整理整頓などを主体的に行おうとする姿が育ってきたと考える。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・皆で園生活に関わる物事について考えたり話し合ったりする中で、自分も考えてみよう、自分の考えを言葉で伝えてみようとする姿が育まれてきた。

・保育教諭に声を掛けられ自分で出来ることは自分で行っていた「行動」から、自分でやろうとする「主体的」な姿に変化してきた。

・自分で出来た嬉しさを感じて自信を身につけ、色々なことに挑戦してみようとする意欲が育った。難しさに直面しても諦めずに最後まで取り組もうとしたり、取り組んでみて助けが必要な時には援助を求める声掛けが出来るようになった。

・友達や保育教諭と嬉しさを共有したり、挨拶を交わしたりする中で、友達や保育者との関係が深まり、相手の気持ちに共感したり思いやる心が育ってきた。

・自分たちで決めたルールや約束事を伝え合い、園児同士で自主的に園生活を進める姿が見られるようになってきた。

②課題

・自分の思いや考えがより伝えやすくなるように、言葉を豊かにする為の環境構成や関わりの工夫。

・園児が話し合って得た気づきや考えを皆で振り返ることが出来る環境構成の工夫。

③実践を通した自身の気づき、考え

・保育教諭や友達と関わる中で得た安心感を基に、主体性・自主性が育まれていることを改めて振り返ることが出来た。信頼関係の見直しを行い、同じ遊びを楽しむ友達としての関わりを増やし「共主体」で環境に関わることで、園児の興味関心を広げて主体性を伸ばしていけると感じた。

・一貫した関わりを持つことで園児の育ちがみられ、保育者間（保育教諭、支援員、保護者など）で、園児の実態や育ってほしい姿を共有する重要性を感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・自分の思いや考えを伝え合っていけるよう、言葉の面白さに触れる遊びや言葉集めを取り入れるとともに、美しい言葉を知らせて言葉や文字への感覚を豊かにしていく。

・話し合いの場で出た園児の気づきや考えを必要な時に振り返ったり、共有したり出来るよう、可視化（ウェビングマップなど）して、園児の育ちの過程を一緒に喜びながらさらなる自信に繋げていく。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

地域文化に親しむ中で育まれる子どもの主体性

―八重山のわらべうた遊び・獅子舞再現遊びを通して―

石垣市立かびらこども園　保育教諭　吉濱　江利奈

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、少子化、核家族化の伸展により幼児を取り巻く生活環境は大きく変化し、地域とのつながりや、地域文化に触れる機会が減少している。一方、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説において、第２章「教育及び保育の内容」では、身近な環境や文化に親しみながら、子どもが自ら感じ、考え、表現する経験を積み重ねていくことの重要性が示されている。また、日常生活の中で、地域社会における様々な文化や伝統に親しみながら、地域の自然や文化、人との関わりを通して主体的に活動することが、幼児期の育ちにおいて大切であるとされている。これらを踏まえると、地域に根差す地域文化は、子どもにとって身近で意味のある環境の一つであり、その価値を実感していくものであると考えられる。

本学級は、男児３名、女児５名、計８名の５歳児（６年保育）クラスである。クラスの多くは、保護者が地元の出身ではない家庭で育っており、家庭生活の中で地域文化に触れる機会が少ない子が多い。本園が所在する川平地域は、獅子舞やわらべうたなど、人々の暮らしの中で自然と受け継がれてきた豊かな地域文化がある。しかし、現状では地域文化に触れる経験が少ないため、あまり興味を示さない家庭もある。これらを踏まえ、地域文化や伝統を直接経験することで子ども自身が感じ、考え、関わっていく中で地域への愛着が育まれていく。そのため、園生活の中で地域に根差す伝統文化を取り入れ、再現遊び等を通して関わる経験が子どもたちにとって重要であると考えた。また、幸い本年度、文化庁主催の方言サミットが石垣市で開催されることになり、方言の担い手として育ってほしいという願いもある。

そこで本研究では、子どもが遊びの中で地域文化に親しみ、「やってみたい」「もっと知りたい」と主体的に関わる姿に着目した。地域文化との関わりが、子どもの主体性の育ちにどのようにつながっていくのかを明らかにするとともに、保育者の関わりや環境構成の在り方について考察することを本研究の背景とする。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　地域文化に親しめる環境構成

⑴　地域出身の講師を招き、八重山のわらべうたを継続的に触れられる機会を設ける。

⑵　他園との交流の中で、他者と関わりながらわらべうた遊びに取り組むことで、歌の響きや独特のリズム、臨場感や表情などを感じ取り「わらべうた」の良さに親しめる機会とする。また、一緒に方言サミットへ参加し自身をもって発表することでより楽しさや豊かさを味わう機会とする。

⑶　獅子舞に関する写真や道具を身近に置き、子どもが自由に見たり触れたりできる環境を整える。

⑷　地域の行事に参加し、獅子舞を直接見る機会を設ける。

２　子どもの主体的な関わりを支える保育者の援助

⑴　子どものつぶやきや発想を大切にし、考えを広げられるような声掛けを行う。

⑵　子ども同士で話し合う場面を保障し、意見の違いも受け止めながら活動を進められるよう援助する。

⑶　伝統文化を子どもが遊びの中で楽しめるよう、関わり方を工夫する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

実践事例１

わらべうた遊び
わらべうた交流会

４月より川平地域出身の講師（東嵩西のり子氏）を招き、月２回程度、３歳児、４歳児、５歳児が参加し、「八重山のわらべうた」に親しむ時間を設定。８月以降は、他園の子どもたちとの交流をして、大勢の人と関わりながらわらべうたに親しみ遊ぶ。

わらべうた遊びの終わりには、しぅまむに伝承研究会の発行する「やえやま民話絵本」の読み聞かせを行うことで、楽しみながら方言にふれることができた。(「猿の生き胆」「黄金の花」「すずめ孝行」「かっこうどり」の民話絵本)。

園児の姿	保育者の願い	保育者の援助・環境構成
・月１回から２回、継続的に八重山のわらべうたに触れる中で、子どもたちは方言の響きや独特のリズムにも徐々に慣れ、わらべうた遊びを楽しむ姿が多く見られるようになった。身近な自然物に関心を寄せ、せみを見つけてわらべうたの「せみのひとりごと」を口ずさみながら遊ぶ姿や、別の遊びをしながら自然とわらべうたを歌う姿が見られた。 ・他園との交流では、他者と関わりながらわらべうた遊びを楽しむ姿が見られた。	・方言の独特のリズムに触れる中で、地域の文化に親しみをもち、友だちと一緒に歌ったり体を動かしたりする楽しさを味わうことで、主体的に表現する姿へと繋がってほしい。 ・他園との交流を通して、自分たちの経験や表現に自信をもち、人前で表現することへの喜びや、仲間と共に創り上げる楽しさを感じてほしい。	・子どもたちが主体的にわらべうた遊びに関われるよう、歌い方や動きを一方的に教えるのではなく、子どもの気付きやつぶやきを大切に受け止める関わりを意識した。「今、どんな歌が合いそうかな」「どんな動きにしてみたい？」と問いかけながら、子ども自身が考え、遊びを広げていけるよう援助した。 ・他園との交流の中で、「一緒に歌えるって楽しいね」といった気持ちを共有し、安心して関われる雰囲気づくりを心がけた。

実践事例２

方言サミット八重山大会

10 月に文化庁主催の方言サミットへ参加し大舞台でわらべうたを披露する経験。

園児の姿	保育者の願い	保育者の援助・環境構成
・伝統的な着物を身にまとい、洋服とは違う着心地を感じたり、可愛くしてもらうことで気持ちが高まっていった。 ・大勢の人に見てもらう喜びを感じながら堂々と発表する姿が見られた。 ・緊張する様子も見られたが、仲間と気持ちを一つにしながら歌い、互いに支え合う姿から、自信と達成感が感じられた。	・地域の地域文化であるわらべうたに親しみながら、自分の思いや感じたことを表現する喜びを味わい、自信をもって取り組む力を育んでほしいと願った。また、地域の行事や大きな舞台を経験する中で、「自分たちの文化」を大切に思う気持ちや、仲間と共に一つのことを成し遂げる達成感を味わい、主体的に活動に向かう姿へとつなげたいと考えた。	・方言サミットへの参加にあたっては、子ども一人ひとりが安心して表現できるよう、日頃からわらべうた遊びを十分に楽しむ時間を確保した。また、他園との交流の場では、互いの歌い方や表現を認め合えるような声かけを行い、「一緒に楽しむこと」を大切にした。 ・方言サミットに向けては、着物や舞台の写真を事前に掲示することで、子どもたちがイメージをもって活動に参加できる環境を整えた。

実践事例３

獅子舞再現遊び

地域の行事に参加したことがきっかけで、獅子舞再現遊びが始まる。「シーシーガンガンガン」のかけ声に合わせて、獅子舞の動きを表現。

園児の姿	保育者の願い	保育者の援助・環境構成
・地域行事に参加し、間近で獅子舞を見る機会を得たことで、獅子舞への関心は高まった。園に戻り、獅子舞の動きや音を真似する姿が見られ、担任が用意していた獅子舞の頭を手に取ると、自ら「しっぽを作りたい」と材料を探し始め、色々な素材を使ってしっぽを製作する姿が見られた。 ・二人一組で獅子舞を操作しながら、頭の動かし方や歩き方を試行錯誤し、実際の行事を思い出しながら再現遊びを繰り返すようになった。獅子頭がへこんだり、擦り切れるほど、獅子舞再現遊びに夢中になって遊びを深めていた。	・地域文化を身近に感じながら、一人ひとりの興味や関心が芽生える時期を大切にし、将来的に主体的な遊びへと発展していく土台づくりを行いたい。 ・地域行事を通して「やってみたい」「まねしたい」という子どもたちの高まった思いを大切にし、獅子舞を題材とした遊びの中で、自ら考え、工夫し、仲間と協力しながら主体的な製作活動や遊びを深めてほしいと考えた。	・獅子舞について詳しく説明したり、新聞や写真などを掲示し、子どもが自ら興味を持つような環境づくりを行った。 ・掲示物を見て、「これなに？」「こわいね」「おまつりで見たことある」などのつぶやきが聞かれた際には、「地域のお祭りで大切にされている獅子舞だよ」など、簡単に背景を伝える程度にとどめ、子どもの気付きや感じ方を受け止める関わりを行った。 ・子ども同士の会話や反応を大切にし、無理に広げるのではなく、興味の芽が育つ過程を見守ることを意識した。

【実践１～３の結果と考察】

・地域文化であるわらべうた遊びを、子どもが自然に親しみ、遊びの中で取り入れていくことを大切にしてきた。４月当初は、方言に対して戸惑いを見せていたが、地域出身の講師を招き、継続的にわらべうたに触れる機会を設けたことで、次第に音やリズム、言葉そのものを楽しむ姿へと変容していった。特に８月以降は、生活や遊びの中で自らわらべうたを口ずさむ姿や、興味のある生き物と結び付けて歌う姿が見られるようになり、わらべうた遊びが子ども自身の表現手段として定着していったことがうかがえた。これは、子どもが自分の興味や関心を基に、主体的に遊びへ取り入れていた姿であると考えられる。

さらに、他園との交流や文化庁主催の方言サミットという大きな舞台を経験したことで、「みんなで歌う」「人に伝える」といった意識が育ち、わらべうた遊びへの関わりがその場限りの活動ではなく、子ども自身の経験として積み重なっていった。これらの経験を通して、子どもが自ら関わり、表現しようとする主体的な姿の育ちが見られたと考える。

・獅子舞再現遊びは、地域の行事への参加を通して、子どもたちの興味・関心が一気に高まり、主体的な遊びへと発展した点に大きな意義があったと考える。実際の獅子舞を間近で見た経験が、子どもたちの「やってみたい」「まねしたい」という思いを引き出し、自ら素材を選び、工夫し、仲間と協力しながら遊びを深めていく姿へとつながった。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成果

⑴　わらべうた遊び

・方言や地域の伝統文化に親しみ興味をもって関わる姿が育まれた。
・わらべうた遊びを自分たちなりにアレンジしてみたり、日常の遊びの中でも自然と取り入れたりするなど、多様な表現が見られるようになった。
・他園との交流や行事等で経験を重ねる中で、人前で表現することへの自信や達成感を味わうことができた。
・１日の活動内容を選択する場面において、これまでと違い「わらべうたをやりたい」という声が多く見られるようになった。

⑵　獅子舞再現遊び

・地域文化を「見る・知る」だけでなく、「自分たちの遊び」として進んで遊びの中に取り入れる姿が見られた。
・獅子舞の動きや構成を再現する中で、友だちと役割を分担し、相談しながら遊びをつくり上げる姿が見られた。
・地域行事に参加し、再現遊びをすることで獅子舞に対する興味や憧れが生まれ、地域文化への愛着や大切にしようとする気持ちが芽生えた。

２　課題

⑴　わらべうた遊び

・わらべうた遊びを楽しむ一方で、その背景にある文化的な意味や成り立ちを保育者がどのように子どもたちに伝えていくかが今後の課題である。
・日常保育の中での位置付けや、継続的な活動。
・他の遊びや行事との関連を意識した上で、わらべうたあそびが園生活で日常的に活動できるようにする。

⑵　獅子舞再現遊び

・子どもたちの表現活動を保障するとともに園内での協力体制を考えたい。
・地域との連携を密にし、子どもたちの表現活動を豊かにしていく。

３　実践を通した自身の気づき、考え

わらべうた遊びを通して、保育者自身の伝統文化に対する捉え方に大きな変化があった。これまで、地域文化は「正しく伝えるもの」「教えるもの」として捉えがちであったが、子どもが自ら関わり、遊びの中で取り入れていくことで、より深く、豊かな学びにつながることに気付かされた。また、子どもの姿を見守り、すぐに正解や方向性を示すのではなく、「どのように感じているのか」「何を楽しんでいるのか」に寄り添うことの大切さを改めて実感した。地域文化を保育者主導の活動として取り入れるのではなく、子どもの遊びや生活と結び付けながら、主体性を育む保育を実践していきたい。

獅子舞再現遊びでは、保育者が主導して形や内容を決めるのではなく、子どもの思いを起点に環境を整えることで、遊びがより深まり、主体的な活動へと繋がることを実感した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

本研究を通して得られた学びを一過性のものとせず、日常の保育へと継続的につなげていくことが重要であると考える。わらべうた遊びは、保育ドキュメンテーションやクラスだより等を活用し、園での取り組みや子どもの姿を積極的に発信することで、保護者や地域と共有しながら実践を深めていきたい。また、地域出身の講師や他園との交流を今後も継続し、地域文化を身近に感じられる経験を重ねることで、「八重山方言」や「わらべうた」への興味・関心をさらに育んでいきたい。

また、やえやまの民話絵本の読み聞かせを取り入れたことで、その絵本を題材に生活発表会へと発展させることができた。保育者自身も、より積極的に方言や地域文化に触れ、地元への愛着が芽生えるような学びを深めていきたい。今後は、ペープサートや手袋シアターなど、方言を取り入れた教材づくりにも取り組み、子どもたちが楽しみながらわらべうたや方言に親しめる保育実践を行っていきたい。

獅子舞再現遊びについては、子どもたちが抱いた思いや憧れを大切に受け止め、卒園制作など別の形で表現できる機会へとつなげていきたい。地域の伝統文化への敬意をもちながら、子どもの思いを尊重した関わりを継続することで、主体的に関わろうとする姿を育んでいきたい。

〈主な参考文献〉
・内閣府文　文部科学省　厚生労働省　平成３０年　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
・無藤隆　２０１７年　『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領ハンドブック』株式会社Gakken
・安藤江里　２０２０年『わらべうたの伝承と幼年期教育における文化の継承』

様式３【課題研究レポート】

快適な生活を送るための環境構成と援助の工夫
―みんなでクリーン活動を通して―

金武町　並里こども園　教諭　氏名　田端　美希

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章「健康」の領域に（８）「幼保連携型認定こども園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しを持て行動する」とある。園生活には、所持品の管理をしたり、遊んだ後を片付けたりするなど、皆が一緒に過ごすために必要な生活の仕方がある。そのやり方や必要性に気付き、自分たちの生活しやすいように整える体験を通しながら、次第に見通しをもって行動できるようになっていくことが大切である。

本学級は男児２名、女児１５名、計１７名の４歳児クラスである。朝の身支度は親に頼ってしまう子も数名。片付けが苦手な子も多く、生活に必要な行動を一つ一つ獲得し、友だちと一緒に活動する経験を通し、集団の中で生活する楽しさ充実感を感じながら進んで準備をし、片付けが出来るようになってほしい。保育室の環境を整えることで子どもたちにどう変化が見られるかを研究したいと思い本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①幼児が主体的に身支度を行い、積極的に取り組もうとする気持ちを育むための援助や環境構成

・幼児一人一人の良さを認め全体に共有し、自信をもって取り組み、自己肯定感が高まるような援助をし、自信をもって意欲的に身支度できるようにつなげていく。

・遊んだ後の片付け方についてみんなで話し合い、自分たちでできるやり方を考え気持ちよく次の活動に取り組めるようにする。

②遊びを発展させ、遊びこめる環境、見通しをもって行動できる環境・援助の工夫

・幼児の姿をとらえ、一人一人の空間から友だちと遊べる空間に繋げたり、互いの思いを知り、認め合いながら遊びが楽しめるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

１【自分のことは自分でやってみよう。綺麗を感じ心地よく過ごそう。】

【幼児の姿】

・自分で鞄をもって登園し身支度できる子、親に頼ってしまう子がいる。

・片付けに時間がかかってしまう。整理整頓が苦手でロッカーなどが乱れている。

【保育教諭の願い】

・自分で出来た喜びを感じ、自信をもって身支度出来るようになったらいいな。

・きれいになったことを感じ意欲的に片付けできたらいいな。

《〇保育教諭の関りと☆環境構成》

〇自分で出来た経験を積むことで意欲を引き出し、自立を促す。

・朝の会で出来たことを褒め、認めてもらったことを感じられるようにし、自分も褒められたいという思いから意欲的に出来るように繋げていきたい。

☆身支度を簡単な仕組みにし、1カ所に揃えやりやすくする。

☆クラス全体で玩具の家を決め、写真を貼り視覚化する。

☆ご褒美シール表をつくり掲示、タイマーや音楽を使って勝負する。

〇次への見通しを伝えながら励ましていく。

↑個々のシール表を壁に貼り視覚化し、意欲を引き出した。「〇個になってきた」などと数を数えるようになったり、友だちと比べることでさらにやる気へとつながった。

片付け場所を全体で決め、写真を張り視覚化する。

《幼児の変容》

・「自分で鞄持ってきたよ」「自分でお支度したよ」と嬉しそうに報告し、喜びを共感してもらい、認めてもらうことで自信をもって身支度できる子が増えてきた。

・褒められたい、シールをもらいたい思いから急ぎ足で片付けに夢中になる子が増えてきた。

・「これはこっちだよ」と玩具の片付け場所が間違えていると教え合ったりする姿も見られてきた。

・ミニほうきを持ってきてゴミを集めたり、教室を綺麗にする姿も見られた。

２【お互いの気持ちを分かち合い、やりたい遊びを思う存分楽しもう】

【幼児の姿】

・自分の好きな遊びを楽しむ子、気の合う友だちと一緒に遊びを楽しむ子、保育者との遊びを好む子がいる。（自分の思いが通らない、仲間外れにされてしまい泣き出す子もいる）

・様々な遊びに興味を持って遊ぶが、遊んでいた玩具をそのままにするので玩具が散乱してしまう。

【保育教諭の願い】

〇自分の思いや考えを言葉で表現し、友だちとイメージを共有したり膨らませたりすることで伝え合う楽しさ、認め合う心地よさが味わえるようになってほしい。

・片付けることでまた気持ちよく遊べる心地よさがあることにも気付き、遊びによって片付け方があることを知り色々な経験を積んでほしい。

・次の活動の見通しをもって取り組んでほしい。

《〇保育教諭の関りと☆環境構成》
☆必要な道具などが自由に取り出せるように手の届くところに配置する。
〇遊びに発展が見られたときは見守ったり、必要に応じて声掛けする。
〇思いを伝えることが難しい子は仲立ちしたり、言葉を引き出したり素直な気持ちで話ができるようにそっと寄り添う。
☆片付けの時間をなるべく同じにする。

《幼児の変容》
・パズルや塗り絵、粘土あそびなど一人で夢中になって遊ぶ姿が多かったが絵の具遊びの楽しさを知り、自分たちで道具を準備し、友達同士教え合ったりしながら正しい使い方を覚え、絵の具での塗り絵を楽しむ姿が増えてきた。色を混ぜると色が変化する、水の量によって紙が破れることにも気付くことができた。また、塗り絵だけでなく画用紙に自由に描いてみたり発展も見られた。
次の遊びをする時は片付けてから次の遊びをすると身の回りがきれいな空間でゆったり遊べるこ

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

「〇〇あそびしていい？」などと聞いてくる姿が見られたが、自由に遊べる時間を設け保育室に玩具を配置することで好きな遊びを見つけ遊びを楽しむ姿が見られた。始めはその環境で色々な遊びに興味を持ち様々な遊びを楽しむことで玩具が散乱し、片付けに時間がかかったり整理整頓が難しかった。コーナー遊びを充実させながらも片付けしやすいように環境を整えることで片付けが楽しくできたり、自分たちでごみ集めをし、部屋がきれいになることを実感できた。自分たちで道具を準備したり、最後まで片付けることで達成感を味わい、次の活動に取り組めるようになった。
また、身支度など出来たことを認めてもらい、喜びを共感することで達成感を味わうこともできた。

②課題

子どもたちが互いの良さに気付いたり、認め合ったりしながら一緒に活動（片付け）する経験が楽しさや充実感につながるように、環境の構成・援助をしていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

子どもたちの姿を捉え、興味・関心にあった環境構成、保育教諭の思いや意図をもって援助・環境を整えることの大切さを改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

いろいろな経験を通し、達成感を味わい主体的に活動でき、充実した生活が送れるように更に環境を整え、狭く限られた保育室を工夫し、コーナー遊びが充実できるようにしていきたい。子どもたちの思いをくみ取り、遊びの続きが出来るように写真に残したり、場所をあけたり、片付けだけでなくその後の展開や発展も考えていけるようにしていきたい。
また、職員間での幼児の姿を共有し、かかわりを深め、自ら行動できる力を育てていけるように環境の構成と援助に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

様式３【課題研究レポート】

諦めない気持ち・挑戦する気持ちを育てる

―戸外（運動的な）遊びを通して―

金武町　認定こども園金のほし　保育教諭　宮城　ちぐさ

Ⅰ　テーマ設定の理由

現代社会において子どもの体力低下が懸念されている。特に近年では、新型コロナウィルス感染症の影響で運動の機会が減少し、体力低下に拍車がかかっている。１つ目の原因は、子どもの保護者をはじめとする国民の意識が変化している事、２つ目は子どもを取り巻く環境に関する問題で、テレビ・ゲーム・スマートフォンなどによる映像の視聴時間が増加していることも原因とされている。

本学級の幼児は５歳児（6 年保育）在籍８名。男の子１名、女の子７名と少人数である。室内では、お絵描きや文字を書くことに興味を示している。園庭ではセミやバッタなどを捕まえ、砂場では草花や水を使った遊び（ごっこ遊び）を楽しんでいる。しかし、鉄棒や縄跳びなどの運動遊びにはあまり興味を示さず長続きしない姿があり、「暑いから外イヤだ～」の声もきかれる。その事から、戸外の空気に触れて活動し、その楽しさや気持ち良さを味わうことができるようにしたい、様々な遊びの中で十分に体を動かしてもらいたいと思いテーマ設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　戸外の遊び（運動遊び）に興味関心が向くような工夫について。

戸外での運動遊びに興味を持たせるよう、楽しくて魅力的な遊びを提案する。様々な遊びを通して、体を動かす楽しさを体験する。また、保育者が一緒に遊びに参加し、楽しんでいる姿を見せることで子ども達の興味を引きだせるようにする。

②　「やりたくない」から「やってみよう」、「できない」から「できた！」の喜び・達成感が味わえるような体験の工夫について。

子どもの「できた！」の喜びの瞬間を見逃さず、しっかりと褒めることを大切にして自信に繋げる。スモールステップを踏んで、成功体験を積み重ねられるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

≪幼児の実態》

・普段の遊びよりも運動遊びを優先し、友達を誘って挑戦する姿が見られる。
・負けず嫌いな気持ちから、自分が納得いくまで何度も練習を続けている。
・友達ができるようになると刺激を受け、自分もできるようになりたい！と練習を続けている。
・できない事に悔しさを見せながらも気持ちを切り替えて、自分で目標を決め練習に取り組んでいる。

《保育教諭の願い》

・戸外での運動遊びを通して、子ども一人ひとりが「やってみよう」という気持ちを大切にし、上手くいかなくても諦めずに挑戦し続ける経験を重ねてほしい。失敗や困難にあった時でも、「できない」から「やってみよう」と、目標に向かって自分なりに工夫したり、繰り返し挑戦したりする中で、できた喜びや達成感を味わい、自信へと繋げ津具への意欲と変わっていく姿や自分の力を信じ、何度も挑戦しようとする心を育んでいきたい。

《保育者の関わりと援助》

・子どもが挑戦したくなる環境作り

・安全に挑戦できる見守り・できた喜びを感じられる関わり

・諦めそうな時に支える言葉かけ・気持ちを支える

・成功しやすい場を作る（補助を入れたりしながら）

《幼児の変容》

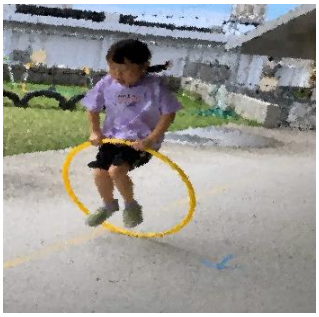
・もう１回やってみようと、挑戦する気持ち

・少しずつ成功体験を積み重ね、「できた」「やればできる」という達成感を味わっている。

・自信や意欲が高まっている。

・子ども同士の刺激やスモールステップ、保育者からの励ましの言葉により「やってみよう」の姿が見られるようになる。

・身体的な成長だけでなく、心の成長（諦めない気持ち・挑戦する気持ち）や自己肯定感の育ちとなっている。



＊園庭に出ると竹馬や鉄棒などと、友達を誘って挑戦する姿が多く見られるようになりました。また、「大縄したい」「綱引きしょう」などと、他の遊びもやりたいと、クラスみんなで楽しく過ごす姿も見られました。

《結果と考察》

・戸外での運動遊びを継続して行った結果、子ども達は運動活動に対して前向きな姿が見られてきた。失敗すると諦めたり、不安な気持ちになっていた子どもも自分なりの目標をもち、繰り返し挑戦する姿が見られるようになった。また、友達の姿から刺激を受け意欲を高めたり、友達同士励まし応援し合う

姿も見られ、挑戦する気持ちがクラスに広がっていった。これらの変化は、子ども一人ひとりの気持ちや発達に応じたスモールステップの設定や、挑戦の過程を認める保育者の関わりが子どもの安心感と意欲に繋がった為だと考えられる。また、戸外という開放的な環境で身体を動かすことで、成功体験だけでなく失敗も含めた学びを共有し、友達との関係の中で挑戦する気持ちが育まれたと考えられる。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・戸外での運動遊びを繰り返し経験する中で、これまで苦手意識をもっていた活動にも自ら挑戦しようとする姿が見られるようになった。最初は、失敗するとすぐに諦めていた子どもも、保育者の励ましや友達の姿に影響を受け、「もう１回やってみる」「もう少しでできそう」と前向きに取り組むようになり、粘り強さや達成感を味わう姿に繋がってきた。

②　課題

・挑戦する姿が増えた一方で、友達と比べてしまい上手くできない事に不安や悔しさを強く感じる子どもが見られたり、難しさが大きい活動では意欲や集中力が低下する場面もあった。個々のベースを大切にしながら、友達の挑戦を認め合える関係づくりへの援助が今後の課題である。また、その日の気分や個々によって挑戦する気持ちが継続しにくい子どももいた。日々の積み重ねの中で、無理なく継続して取り組める環境づくりが課題である。

③　実践を通した自身の気づき、考え

・子どもが諦めずに挑戦する為には、「できた・できない」の結果よりも、挑戦する過程を認める保育者の関わりが重要であることに気づいた。また、保育者が先回りして手助けするのではなく、子どもが自分で考え、試行錯誤できる時間を保障することが、主体的な挑戦に繋がると感じた。今後も子どもの思いに寄り添いながら、挑戦したくなる環境づくりと関わりを大切にしていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善点、今後取り組んでいきたいこと

・子ども一人ひとりの運動能力や気持ちに合わせたスモールステップを意識し、無理なく挑戦できる環境づくりを行っていきたい。用具の高さや距離を調整したり、遊び方に選択肢を持たせることで、子ども自身が「これならできそう」「やってみたい」と感じられるようにしていく。また、友達と比べるのではなく、それぞれの挑戦や成長を認め合えるよう、保育者の言葉掛けや関わり方を工夫していきたい。「できたかどうか」ではなく、「挑戦したこと」「繰り返し取り組んだこと」に目を向けて言葉にすることで、諦めずに続けようとする気持ちを支えていく。さらに、日々の遊びの中で挑戦する経験が積み重なるよう、活動を継続的に計画し、子どもの姿を丁寧に振り返りながら実践を深めていきたい。

＜主な参考文献＞

・幼稚園教育要領解説
・幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説
・保育の心理学　育ってほしい 10 の姿

様式３【課題研究レポート】

こども達が「やってみたい、遊びたい」と思える環境構成の工夫
―友達や保育教諭との遊び、園生活を通して―

沖縄市（私立）　おきなわ地球こども園　保育教諭　氏名　喜友名　莉夢

Ⅰ　テーマ設定の理由

幼保連携型認定こども園教育・保育要領の表現の領域に「自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて楽しんだりなどの楽しさを味わう」と記されている。また、「保育教諭等は、園児の持っているイメージがどのように遊びの中に表現されているかを理解しながら、そのイメージの世界を十分に楽しむことができるように。イメージを表現するための道具や用具、素材を用意し、園児と共に環境を構成していくことが大切である」と記されている。これらのことから、多様なイメージを引き出す道具や用具、素材を工夫し、それらに園児が日常的に触れていく環境の工夫することが、表現をする楽しさを味わうことに繋がるのだと捉える。

本学級は２歳児、男児６名、女児 12 名、計 18 名で構成される。全員進級児ではあるが、新しい環境や生活の流れに戸惑う子や登園時に泣いてしまう子の姿が見られた。少しずつ新しい環境にも慣れ、楽しく過ごす姿も見られるようになってきた。戸外遊びでは、砂遊びや三輪車を保育者や友達と一緒に楽しむ姿が見られる。また、室内遊びではパズルやままごとが好きな子が多く、集中して取り組む子、お母さんになりきる子、友達同士で会話をしながら楽しんでいる姿が見られる。そこでこども達の世界観をさらに膨らませ、遊びこみ、充実感や達成感が味わえるような環境を作り、楽しい園生活を過ごしてほしいと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①遊びを通して表現する楽しさを経験するための工夫

・絵本やままごとを通して世界観を楽しみ、演じて遊ぶ楽しさを味わえるようにする。

②こども達の興味・関心に応じて様々な遊びの楽しさを経験するための工夫

・コーナー遊びや自由遊びを取り入れ、自ら遊びを選び楽しむことを味わえるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例１「遊びを通して表現する楽しさを経験する」

園児の姿

・ままごとや人形遊びが好きで、友達同士で会話をしながらお店屋さんごっこをしたり、料理を作る姿が多くみられる。しかし、玩具を投げたり、床に食器や食べ物が散乱するなど、遊びが長く続かない様子が見られる。

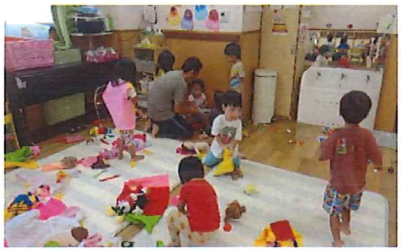
→

保育教諭の願い

・自分のイメージを膨らませながら表現する楽しさを味わってほしい。
・身近な人を模範して楽しんでほしい
・見立て遊びを通して保育教諭や友達とコミュニケーションをとって欲しい。

〇環境構成工夫　★保育教諭の援助

〇イメージが膨らむよう、テーブルや椅子を用意したり、人形の寝床を作る。
〇ままごとや人形に期待が持てるように玩具を見やすいように配置する。
★１人で遊んでいる子に「何屋さんですか」「〇〇を１つください」などの声かけをし、周りにいる友達を誘っていく。
★玩具の使い方がわかりやすいようにこども達の手本となり一緒に楽しむ。
★こども達同士で遊んでいる場合は世界観を壊さないように見守っていく。



【園児の変容】

・テーブルや椅子を用意したことで普段の生活を表現することができ、食べ物や食器の散乱が少なくなり、落ち着いた雰囲気で楽しむことができた。
・役になりきる姿が見られ、フライパンを持って料理をして友達に「どうぞ」とあげたり、セリフのような言葉を言う子の姿も見られるようになる。
・友達同士のコミュニケーションも増え、一緒に座って弁当を見せ合ったり、会話をする姿が見られるようになる。
・人形に服を着せ布団に寝かせ入眠を促す姿が見られるようになる。

【考察】

・実際の生活でも使っているものを用意することで、こども達の興味関心を引き出すことができ、身近な人になりきり、お母さんのように料理をしたり、弁当を作ったりする姿につながったと考える。
・おままごとをする際、床でやっていた時は目線が下へ下がっており、個々で遊ぶ姿が見られたが、向かい合わせになり目線の先に友達や保育教諭がいることで、他者の存在に気づき会話につながったと考える。
・布団や枕を用意することで人形を寝かし、実際に午睡時間の保育教諭の姿などを模範してなりきる楽しさを味わったと考える。

実践事例２「コーナー遊び」「こどもが遊びを選択する」

園児の姿

・普段から「〇〇で遊びたい」「〇〇がしたい」と好奇心旺盛な姿が見られる。好きな遊びを選択して楽しめるようにコーナー遊びをするが仕切りがないことで玩具が混ざってしまい、落ち着いた雰囲気の中遊んでいる子や明るい雰囲気の中遊んでいる子が混ざり合っており、遊びに集中できないことがある。

保育教諭の願い

・こどもたちの主体性や集中力を育み落ち着いた環境でじっくり遊んでほしい。

・自分たちの空間を作り、安心した環境で友達と関りながら遊びに没頭してほしい。

・玩具の散乱を防ぎ、動と静のメリハリをつけたい。

〇環境構成　★保育教諭の援助

〇玩具の散乱を防げるよう、牛乳パックで作った仕切りを用意する。

〇椅子に座り静かな活動もできるようテーブル、椅子を用意する。

★何で遊びたいかを事前に話し合い、何をどこで遊ぶのかもしっかり決め、分かりやすいようにする。

★玩具が混ざりそう場面があれば、こどもに声を掛け、再度どこで遊ぶ玩具なのかを繰り返し伝える。

★危険なものはないか、空間を十分に確保し、安全に遊べるようにする。

★こども達の主体性を尊重し、見守りながら一緒に楽しんでいく。

【活動の様子】

【園児の変容】

・落ち着いた環境でそれぞれの遊びを楽しむことができた。

・遊びに集中して没頭する姿が見られるようになった。

・「ここは〇〇で遊ぶ場所なんだ」と認識することが出来るようになり、玩具をもってほかの場所へ移動しようとする姿が少しずつ減っていた。

・同じ玩具で遊んでいる友達同士で会話をしたり、作った物を見せ合うなどの交流が見られた。

【考察】

・仕切りを用意することで、好きな遊びに集中し、それぞれの遊びを楽しめることに繋がったと考える。

・混ざり合っていた玩具がまとまることで、周囲に気を取られず、自分の世界観を楽しめたと考える。

・玩具別に遊ぶ場所を確保した為、同じ玩具で遊んでいるこども同士でのコミュニケーションが活発になった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・コーナー遊びをすることで、こども達それぞれが遊びに没頭し、自分の好きな遊びに夢中になる姿が見られた。

・ままごとを通して、演じる子の姿やそれを見て楽しむこの姿が見られるようになり、こども達同士で模範する姿が見られるようになった。

・こども達と遊びたいことを考え活動をしたことによって、「やりたい」と言う気持ちを高め、主体的に行動する姿が見られた。

②課題

・コーナー遊びの際の仕切りが倒れやすく低かったため。仕切りを持って遊んでいる子が数名見られたので、全体での周知をその都度伝えていきたい。

・こども達同士で遊ぶ姿が見られるようになった分、玩具の貸し借りでのトラブルがある。

③実践を通した自身の気づき、考え

・こども達の「やりたい」「やってみたい」を大切にし、環境構成を考えることができた。また、こども達の世界観を壊さないように、安全に遊べるよう見守りながら、必要な際は間に入り、話を聞くようにした。こども達が自発的に遊べる環境、興味関心が途切れることなく展開していくよう、環境構成について学びを深め、実践・改善を繰り返しより良い環境を作っていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・ままごとや絵本だけでなく、いろいろな遊びを通して世界観が味わえるように、環境構成の工夫を行い、実行していく。

・保育教諭、担任どうしで、こども達の目線に立ち、心地よい環境なのか、遊びが見つけやすい環境なのかをしっかり話し合っていく。

・静と動の活動をバランスよく行い、こども達の表現力、想像力を育み、「やってみたい」を伸ばしていきたい。

〈主な参考文献〉

・幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

話し合う中で伝える楽しさや喜びを味わうための援助と工夫

―全体集会や学級での活動を通して―

中城村　吉の浦こども園　保育教諭　氏名　新垣　友希

Ⅰ　テーマ設定の理由

本園の目指す子ども像の中で「よく考える子ども（自分の考えを素直に表現できる子、いろいろな活動に意欲的に取り組める子）」とある。幼保連携型認定こども園保育要領の中にも第２章　第４節（２）内容（６）「自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く」、第２章　第４節（５）内容（７）「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする」とあり、遊びを通して個の成長と集団としての活動の充実を図ることが求められている。

本学級は男児８名、女児８名、計１６名の学級で活発な子、個性豊かな子が多いが、中には集団が初めての子や集団活動が苦手な園児もいる。活動中には少人数で相談をする場面が見られるが、意見が通らないと場を離れてしまう子、自分の思いを伝える事が出来ない子がいる。また、製作を楽しむ子もいるが、途中で活動への集中が持続しにくい子もいる。

そこで学級活動の中で聞くことの大切さに気付き、その経験から話す喜びを味わい、園児が充実した園生活を送ることが出来るような援助の在り方を研究したいと考え本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　園児が自分の思いを伝える場を設け、話し合いの中で互いの良さを感じる事が出来るような援助と環境構成の工夫

遊びの中で思いを伝え合う経験を重ね、相手の気持ちに気付く機会を設ける。意見が分かれた時には話し合いの中で互いに納得できるように考えや思いを伝える事が出来るようにする。

休日の出来事や体験した事、感じた事を話す場を設け、自分の経験や気持ちを言葉で表現する楽しさを味わえるようにする。

②　イメージを共有して製作を楽しむ中で、仲間意識を持ち取り組めるような援助と環境構成の工夫

製作活動に意欲的に取り組み、園児同士で共通の目的を持つ中で工夫し考えて製作に集中できるように環境を構成していく。また遊びの中で製作物を互いに見せ合う機会を作る。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践１）「伝えるって楽しいな」

＜園児の姿＞
- 自分の思った事や困った事を友達や保育教諭へ話す子もいるが、言葉で表現する事が苦手な子もいる。
- 遊びの中でも注目される事が苦手で自分の気持ちを上手く伝える事が出来ずに仲立ちが必要な子がいる。
- 対面での発言に苦手意識を持つ子がいる。

＜保育教諭の願い＞
◎自分の思いを素直に話せるようになって欲しい。
◎自分の言葉で伝え合う喜びを味わって欲しい。
◎人前に出る事に自信を持って欲しい。

○環境構成	☆教師の援助
○全体での話し合いの場が苦手な子もいるため、少人数での話し合いの場を作る。 ○集まりの形式を対面だけでなく円形も取り入れ、園児同士で互いの表情を見て自分の思いを話す機会を作る。 	☆朝や帰りの集まりなど人前に出る事を苦手と感じる子もいるため、クラス活動（散歩や集団遊び）で何をしたいのか話し合いの場を設け、互いに意見を出し合えるようにする。 ☆円形での話し合いで隣の子とおしゃべりをしてしまう子もいるため、話を聞く姿勢についてどのようにしたら良いか一緒に考えていく。

○誕生会での司会や出し物に挑戦し、人前に出る機会を設ける。 ○出し物を決める際に全体で円になり話し合いをする事で友達の発言を聞き、様々な考えがある事に気が付けるようにする。	☆誕生会では２～３名で司会をすることで人前に出る事が苦手な子も挑戦する意欲が持てるようにしていく。 ☆出し物の内容を話し合いで決めてもらい、園児みんなが自信を持って楽しめるような出し物にしていく。 ☆出し物の練習で互いに見せ合う機会を作り、少人数に披露する場を重ねて自信に繋げていく。

＜幼児の変容＞

・円形での発表や話し合いを繰り返し経験し、人前で発言することの苦手意識が払拭され自信を持って自分の思いを話せるようになっている。互いの顔が見えることで聞く態度も変わり、表情を見ながら自分の感じた思いを話すことができるようになっている。

・誕生会の出し物を園児同士の話し合いで決定すると、積極的に取り組み、楽しんで参加する姿がみられた。初めは見学だけだった子も経験を重ねたことで自分の意思で舞台に上がることができた。

（実践２）「次は何作ろうかな」

＜園児の姿＞
・製作物を使ってごっこ遊びに発展するが、各々好きな物を製作してなかなか遊びに広がりが見られない。
・様々な活動の中から製作を好む子が数名しかおらず、クラスとしての製作活動になかなか発展しない。
・製作を始めても興味の移ろいが見られる。

＜保育教諭の願い＞
◎園児同士共通の目的を持って製作を楽しみ、互いに思いを伝え合い工夫して製作に取り組んで欲しい。
◎自分の製作したものに愛着を持ち、物を大切にする気持ちが育って欲しい。
◎製作に楽しさを感じ、園児同士で協力し、楽しさを共感して欲しい。

○環境構成	☆教師の援助
○製作した作品を帰りの集まりや遊びの中で紹介する時間を作り、製作に興味を持てるようにする。 ○作品作りに夢中になれるように様々な廃材や教材を準備していく。 ○園外保育にて図書館へ行き、興味を持った本を借用する。興味に合わせて環境を構成しコーナーを作る。 ○ハロウィン迷路で影絵コーナーを作り、楽しかった経験を他クラスにも共有できる環境を作る。	☆作品を紹介する時間を設け、友達の良さに気付けるようにする。 ☆園児の「おもしろそう」「作ってみたい」のつぶやきを聞き、「友達に教えてもらおう」「先生も作ってみたい」と互いに教え合う雰囲気を作る。 ☆一緒に製作を楽しみ、工夫したり試してみる中で考える経験ができるようにする。 ☆図書館で興味を持った本を読み聞かせし、製作を楽しむ中でコーナーを作り、発展できるようにする。 ☆影絵コーナーでの経験を活かしてハロウィン迷路内に影絵のコーナーを作り、クラス全体での製作活動を取り入れてみんなで楽しむ経験を重ねていく。 ☆クラスを２つに分けて互いに見せ合う事で「友達に隠れてるよ」など見せ方にも気付くことができた。

＜幼児の変容＞

・製作を友達に紹介する場を設けたことで「作ってみたい」「作り方教えて」と園児同士で教え合いや工夫する姿が見られるようになってきた。小グループで一緒に製作する事が増え「一緒に〇〇作ろう」と園児同士相談し合い、互いの考えを尊重しながら試行錯誤する姿が見られるようになっている。

・こども園ならではの異年齢での関りの中で「赤ちゃん組は下にした方が見えるんじゃない？」など様々な気付きに繋がる場面があった。また、異年齢での遊びの中で製作物の作り方を教えたり、折り紙を一緒に楽しむ姿も見る事ができた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・一人での発表に自信がない子もクラスでの出し物を経験し達成感を味わうことで発表の場への苦手意識が薄らいできた。話し合いや会の中で友達の話を聞く姿勢が変わり、興味を持ち、話を聞いたり共感する姿が見られるようになっている。

・製作に興味を持たない子も友達の遊びを見て興味を持ち「一緒にやってみたい」「なにやってるの？」製作に取り組むことが多くなってきた。また、遊びの経験を活かして行事のコーナーを作ったことで園児同士で経験を伝え合う姿やアイディアを共有する場面も見られ、クラス全体で楽しむ姿が見られた。

②課題

・少人数での話し合いは積極的に取り入れる事が出来るが、まだ全体での話し合いの中で話がうまくまとまらない事が多いので、残りの園生活で話し合いの機会を多く設けて経験を積み重ねていきたい。

③実践を通した自身の気づき、考え

・話し合いの中で意見を伝える事が苦手な子も園児同士の遊びの中では発言する事が出来るので、発表の場の経験を増やして更なる自信に繋げていきたい。

・様々な視点を持って幼児理解を深める事が適切な援助に繋がっていくため、子どもの姿を捉え、共有し園児と一緒に環境を構成して遊び込める空間作りをしていきたい。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・話し合いの機会を設けることで、発言することに苦手意識が見られる子も少しずつ自分の意見を伝えようとする場面が見られるようになってきたので、他クラスの手伝いなどでたくさんの人と関わる機会を作り、自信を持って活動に取り組めるようにしていきたい。

・園の環境の中で園児がどのように遊んでいるのか、何に興味関心を示しているのか理解を深め、必要な援助や環境を構成していきたい。

・これまで少人数で製作を楽しみ、個々でイメージを形にする経験を重ねたことでクラス全体での製作へ発展するとみんなのイメージを共有する難しさを一人一人が感じている様子が見られた。イメージを共有する場で自分の考えを言葉で伝え、友達の思いを受容しみんなが楽しんで園生活を送ることが出来るようにしていきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　平成３０年３月　「連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館

・宮里暁美　編著／文京区立お茶の水女子大学こども園　２０２０年「思いをつなぐ　保育の環境構成　４・５歳児クラス編」

様式３【課題研究レポート】

「子どもの主体的な学びを支える保育者の援助と工夫」

―クラス活動や遊びの中での関わりを通して―

おひさま認定こども園　教諭　氏名　伊佐　莉穂

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、保育における自立心を育てる課題として、基本的な生活習慣や対人関係、規範意識の不足、また意欲の低下などがあげられている。【保育士バンク！】これらの課題の背景には、自分で考えて行動する経験の少なさがあると考えられている。幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」として、「主体的に学ぶ力」「自立心」などの資質・能力が示されている。その中でも「主体的に学ぶ力」は、相手の気持ちに気づきながら折り合いをつける経験を通して育まれていき、自分で考えて行動しようとする気持ちや、自ら考えて行動しようとする力が育まれていくとされている。5 歳児は仲間との関係が深まり、互いに声を掛け合ったり、相談し合ったりしながら活動に取り組む姿が増えてくる時期である。本園のクラス状況は、男児 15 名、女児 13 名、計 28 名在籍し、男女ともに「優しい子」が多く、相手のことを考えたり思いやったりする姿も多くみられる。しかしその一方で、自分の考えを持たずに周りに流される姿や、失敗を恐れて自分の意見を出すことをためらう姿も見られている。こうした姿から、子どもたちが自分で気づき、考え、行動することを通して、主体的に学ぶ力を育んでいくためには、どのような保育者の援助が必要なのかを考えることが重要だと感じられる。そこで、子どもの主体的な学びを支えるための援助の在り方を明らかにしたいと考え、このテーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　幼児が自分の気づきや考えをもとに行動しようとする姿や、学びに繋がる姿を育むための援助の工夫について

当番活動やクラス活動での遊び、行事などを通して、保育者がどのように関わることで、子ども達が主体的に取り組み、自らの学びにつなげていこうとする気持ちが高まるかを援助の視点から考察し、幼児の育ちを見守れる保育者同士の連携や自発的に育つ環境にも配慮する。

２　クラス活動や遊びの中で、子ども同士の関わりや自立の芽生えが学びに繋がるような援助の工夫について

子ども同士が互いに助け合ったり、関わり合ったりしながら活動に取り組む中で、保育者がどのような声掛けや環境構成を行うことで、主体的な学びや気づきが引き出されるかを考察し、子ども達の友情関係や自立心が育まれる言葉かけや援助に配慮する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例１】幼児自分の気づきや考えをもとに行動しようとする姿や、学びにつながる姿を育むための援助の工夫について

《幼児の実態》

・当番活動で自分の役割を意識して張り切って取り組む子がいる一方で、声を掛けられないと動けない

子もいる。
・製作やひらがな学習の際に「どうすればいいの？」「なにをかけばいいかわからない」とすぐに保育者に答えを求める姿がある。
・スポーツフェスティバル（運動会）に向けたなわとび練習の際に、すぐに「できない」「やりたくない」と言って諦めてしまう子もいれば、できるまで何回もチャレンジし練習を重ねている子もいる。
・友だちが工夫している姿に刺激を受け、自分でも試してみようとする姿が見られる。

《保育教諭の願い》
・当番活動を通して、自分の役割を自覚し、責任をもって最後までやり遂げようとする気持ちを育んでほしい。
・「できた！」という達成感や「もう一度やってみよう」という意欲につながるような力を育んでほしい。

《保育教諭の関わりと援助》
・当番表やカードを活用して、「今日は自分の番だ」と分かるようにしたり、張り切っている子に「〇〇ちゃんにも声掛けてみて」と促しをお願いしたり、動きにくい子が自然に参加できるようにする。
・子どもが失敗した時は頑張りを認め、次に成功するためのアイデアなどを提案しながら見守る。
・どんな場面においても、「先生が見守っているから大丈夫」という安心感を子どもが持てるように声かけをする。

《幼児の変容》
・グループごとの当番カードを作ったことで、自分が当番であることに気づき、意識して取り組むようになった。
・友だちに「〇〇お当番だよ」と声をかけられることで、自分の役割に気づいて急いで準備するようになった。
・なわとび練習で失敗しても、周りの友だちを見てどうやったら跳べるかを考え、自分なりに工夫しながら取り組んでいた。
・成功した経験を自信に繋げ、「先生見ててね」と縄跳びを跳んでいる姿を見せてくれるようになった。

【結果と考察】
・視覚化することで自分がお当番ということに気づかない子も表を見て気づくようになり、積極的に取り組んだり次回のお当番まで覚え教え合ったりなど、主体的な姿が見られるようになった。
・当番活動や行事を通して、友だちの頑張る姿を観察して積極的に練習に参加するようになったり、自分の頑張りに自信を持って保護者や保育者に嬉しそうに見せたりなどの姿が見られた。

【実践事例２】クラス活動や遊びの中で、子ども同士の関わりや自立の芽生えが学びにつながるような援助の工夫について

《幼児の実態》
・グループ決めやペア決めの際にいつも組む友だちが決まってきていて、仲の良い友だちと組めないと不満を言ったり、泣いたりする姿が見られる。

・勝ち負けへのこだわりが強く、勝敗のあるゲーム遊びに参加したがらない。
・友だちとのトラブルが起こると、自分の気持ちや考えを伝える前に、すぐに保育者に助けを求める姿が見られる。

《保育教諭の願い》
・仲の良い友だちだけでなく様々な友だちとの関りを大切にし、また友だちと一緒じゃなくても自分で考えて行動できるようになってほしい。
・勝ち負けのあるゲームでも、結果だけでなく友だちと一緒にやる楽しさや悔しさを感じ、自分で気持ちを切り替えて活動に参加できるようになってほしい。

《保育教諭の関りと援助》
・子どもたちの友だちの輪が広がるまでは、日頃のグループやペアを保育者が決め、関わりの少ない子とも関りを持てるようにする。
・椅子取りゲームで負けてしまった子に抜いた椅子に座ってもらったり、負けても応援を頑張った子に応援団賞をあげたりなど、負けても居場所があるという体験をできるようにする。
・トラブルがあった際には、「こうされたらどんな気持ち？」「こういう時はどうするの？」など子どもがイメージしやすいような具体的な話を全体に問いかけ、子どもたち自身に考えてもらいお互いで声掛けできるようにする。

《幼児の変容》
・グループやペア活動を通して関わりの少ない子と関わることで、その子の良さを知ったり、気が合うことに気づいたりして普段の自由遊びやペア決めの際にも一緒にいることが増えるようになった。
・仲の良い友だちと一緒じゃなくても、一緒のグループの友だちと楽しく過ごす姿が見られ、不満を言ったり泣いたりする姿が少なくなった。
・ゲームに負けても「〇〇応援しよう！」と勝ち残っている友だちを張り切って応援したり、「負けてもいいんだよね」と互いに認め合ったりする姿が見られるようになった。
・保育者に言いに来る前に、「じゃあじゃんけんで決めよう！」と意見を出し合ったり、「〇〇って言ったら嫌な気持ちだよ」と互いに気持ちを伝え合ったり、自分たちで解決しようとする姿が見られるようになった。

【結果と考察】
・友だちと関わる幅を保育者が広げることで、色々な友だちと深く関わろうとする気持ちに繋がると思うのでその機会を作ることが大切だと思った。
・負ける悔しさや次は頑張ろうという思いを経験する積み重ねが、自分で気持ちを切り替えるための認める力になると思うので、ゲーム遊びや日々の活動を通して経験の場を作っていきたいと思った。
・子どもだけだは解決できないトラブルもあるが、案を出し合ったり、譲り合ったり、自分たちで話し合おうするなど自主的に話し合う姿が見られた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

本研究では、「子どもの主体的な学びを支える保育者の援助と工夫」をテーマに、クラス活動や遊びの中での実践を通して研究を行った。特に、幼児が自分の気づきや考えをもとに行動しようとする姿や、友だちとの関わりの中で学びを深めていく姿に着目し、保育者の関わり方や環境構成の工夫について考察した。実践①では、当番活動を通して役割を視覚的に示したり、子どもの挑戦や失敗を温かく見守る関わりを行ったことで、自分の役割に気づき、意欲的に活動に取り組もうとする姿が見られるようになった。また、成功体験を積み重ねることで自信を持ち、次の活動へ前向きにつなげる姿も見られた。実践②では、クラス活動やゲーム遊びの中で保育者が意図的に関係性を調整しながら子ども同士の関わりを広げる援助を行った。その結果、仲のいい友達同士だけでなく、様々な友だちと関わろうとする姿や、トラブルが起きた際にも自分たちで話し合い、解決しようとする姿が増えていった。

これらの二つの実践から、保育者が子どもの姿をよく捉え、先回りして援助するのではなく、「見守る」「認める」「繋ぐ」関わりを意識することが、子どもの主体性を引き出す重要な援助と考えられる。子どもが自分の思いや考えを表現し、友だちとの関わりの中で試行錯誤する経験を積み重ねることが、主体的な学びの土台になっていくと考える。

今後も、子ども一人一人の育ちや関係性を丁寧に捉えながら、子ども自身が気づき、考え、行動する経験を大切にした保育を実践していきたい。

〈主な参考文献〉

・マイナビ保育士　自立心とは？子どもの自立心を育てる保育のポイントを紹介
・【幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿】「自立心」。保育に表れる子どもの姿の実戦事例

様式３【課題研究レポート】

研　究　テ　ー　マ
五感を使い感性の豊かさや経験を育むための援助と工夫
―遊びや集団生活を通して―

おひさま認定こども園　保育教諭　小橋川 百合花

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、保育の中で「経験や体験」を重視する働きが高まっている。【Webサイト‘保育士バンク’引用】　特に乳児期では、五感を使った遊びや関わりの中で周囲の環境や人とのつながりを感じ、安心感や興味関心を育んでいく大切な時期である。

その為、人的・物的環境に着目し季節を感じたり発達に応じた感触遊び・知育遊びなどを取り入れたり環境設定を工夫していこうと考える。

本学級の子どもたちは、０歳児クラス．男児５名．女児４名の計９名（低月齢）が在籍し、探索活動や運動遊びを取り組みながら伸び伸びと身体を動かして遊ぶ様子が多くみられる。しかし、限られた活動時間内でさえも遊びに没頭する姿があまり見られない。

日々の保育がルーティン化し同じ遊びの繰り返しや個々の子どもの感覚や反応に合わせた関わり・環境設定が十分に行われていないため、五感に刺激の得る遊びの少なさや感性の豊かさを育てる体験が不足しているなど、日頃から‘集中して長く楽しむ遊び’が限られている。

０歳児は言葉のやり取りはもちろん、コミュニケーションの取り方でさえ幅が少ないため、五感を使って反応を示し、他者との意思疎通や自己表現ができる。このような大切な時期に【触れる・見る・聴く・匂いを感じる・味わう】といった経験や体験を重ねることで、感性を豊かにし遊びに対する想いの変化を感じることが出来ると考える。特に０歳児の保育においては、保育者が子どもの発達や個性を理解し、好奇心や探求心の向上、また心地よく過ごせる環境を整え、五感を通して安心できる関わりを援助することが重要であると感じ、今回このテーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　五感を使って、感性の豊かさや経験・体験を育むための援助と工夫

視覚・触覚・聴覚・嗅覚・味覚などを取り入れた遊びや環境設定を工夫し、好奇心や探求心の向上へと繋がるような援助を行う。

②　興味・関心が増え、活動を楽しく没頭できるための援助と工夫

発達段階や成長に応じて、一人ひとりの興味・関心を把握し、活動内容をより充実するための援助と工夫。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例①】~五感を使って、感性の豊かさや経験・体験を育むための援助と工夫~

≪幼児の実態≫

・五感を使っての遊びを楽しんだり、模倣遊びを繰り返し行ったりする姿がある。

・一人ひとりの感情表現に大きな偏りが見られ、担任でも気持ちの受け答えが難しい場合がある。

≪保育経論のねがい≫

・日々の保育活動や保育者、お友だちとの関わり合い、知育玩具等から経験や体験を育み感性の豊かさ

を養ってほしい。
・五感に刺激の得るような遊びを繰り返し、好奇心や探求心の向上へと繋がってほしい。
≪保育教論の関わりと援助≫
・個々の発達段階や季節に応じた遊び（知育遊び・水遊び・制作活動・手作り玩具・お散歩…）を、活動内容に取り入れ経験や体験の積み重ね、子ども一人ひとりが楽しく遊ぶ中で、その一瞬一瞬で感じる想いを保育者が代弁し声をかける。
　≪幼児の変容≫
・手作り玩具を用いて遊んだ際には、初めての感触に喜ぶ様子が見られ、気持ちの切り替えが難しい子も素材に触れると自然と落ち着く姿がある。
・個々の発達段階や季節ならではの遊びに取り組む中で、一つ一つの活動内容に好奇心や探究心が育ち、「楽しい。嬉しい。もっと遊びたい。」など感情を表に出す事が増えるようになった。
　【結果と考察】
・今までにない初めての感触を楽しみ、落ち着いて遊ぶ姿が見られるようになった。又、好奇心や探究心が育ち、「楽しい。嬉しい。」「もっと遊びたい。」などの気持ちを表現する姿が増え、体験や経験を通して感性の広がりや情緒の安定が見られた。
・発達段階や季節、五感を通した遊びは、子どもにとって安心感や満足感を得やすく、情緒の安定に繋がったと考えられる。特に手作り玩具は、素材の温かみや柔らかさを直接感じることができ、子どもが自分のペース遊びに
取り組むことができるため、気持ちの切り替えが難しい子にとっても心を落ち着かせる要因となったのではないかと感じる。

【実践事例②】~興味・関心が増え、活動を楽しく没頭できるための援助と工夫~

≪幼児の実態≫
・新しいもの好きで、活動に対しての興味, 関心, 意欲が見られるものの、設けられた活動時間の中で、遊びに持続性がなくすぐに飽きてしまう。
・活動内容が、ルーティン化してくると、飽きて泣いてしまう時間が早くなったり、目的とは違った遊びを始めてしまったりする姿が見られる。
≪保育者のねがい≫
・０歳児にとって遊びの持続性を持つことは少し難しいことだと感じるが、興味, 関心を持って遊びに繰り返し触れることで気持ちの膨らみや活動内容の深まり、その遊びに対する世界観が広がってほしい。
　≪保育教論の関わりと援助≫
・子どもの姿や反応に寄り添いながら、無理に遊びを持続させるのではなく、気持ちが向いている遊びを受け止め、活動が自然と広がって取り組めるよう援助する。
・活動の中で見られる小さな変化や繰り返し取り組む姿を大切にし、遊びに向かう気持ちが深まっていく過程を見守る。
　≪幼児の変容≫
・月齢での異なりが見えているものの、成長すると共に活動内容に対しての興味, 関心が増え「この活動はすき。」「この活動はあまり得意ではない。」など、一人ひとりが自分なりの想いや選び方を持って活動に向き合う姿が見られる。
・身体の使い方がしっかりとし始めてくると、子どもたちにとっては戸外遊びが楽しみになり、身体を伸び伸びと動かして活動時間内を没頭する様子がある。

【結果と考察】

・設けられた活動時間を最初から最後まで遊び続けることは、保育者側のねがいであり、０歳児にとって難しく必ずできるようになるとも限らない。又、目にするものや経験するものすべてが初めてであり、その中で一人ひとりが異なる興味,関心を示している。そのため、活動を一律に進めるのではなく、子どもが心を動かされた瞬間を大切に捉え、丁寧に関わることが重要であると感じた。

・一つひとつの興味,関心から子どもの「やってみたい」という気持ちや可能性の広がりを援助できるような環境構成を工夫する大切さを実感した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・日々の保育活動の中で、様々な「環境」に触れる経験を重ねることで、五感を通した感性の広がりが育まれ、季節ならではの遊びや発達段階を踏まえた活動内容により、子どもの姿に変容が見られた。その変容からは、好奇心や探究心の芽生え、「楽しい。嬉しい。」「もっと遊びたい。」といった感情の表出、活動に対する興味,関心や意欲の高まり、個々の感性の広がりへと育むことに繋がっていくと改めて確認することができた。私の立てた課題や援助は、０歳児クラスにとって少し難しいこともあったかと思うが、成長するにつれ遊びの幅の広がり方や子どもの心をより豊かに育てる意味で、この研究は大切な機会となることを感じた。又、子どもは目にするもの経験するものすべてが初めてであり、その一瞬一瞬で感じる想いを保育者が常に感じ取り、代弁し、気持ちに寄り添った関わり方や安心して自己表現ができる環境を整えていく必要があるということを知ることができた。これからも、日々の保育活動の中での経験や体験、五感を通しての感性の広がりや興味,関心を育んでいくよう、子ども一人ひとりの成長を支えるための働きかけや丁寧な関わりを大切にしていきたい。

今後の課題としては、日々身体や脳の発達が進む子どもたちは、言葉や自分の身体の作りを理解し始め、動きがより活発になり指先も器用に使いこなすことができるため、今だからこそできる感触遊びや知育遊び、戸外遊びを通して、安全面に配慮し五感を十分に使いながら更なる興味,関心,感性の広がりへと繋げていくことのできる援助の仕方や環境の構成を研究していきたい。

〈主な参考文献〉

Web サイト‘保育士バンク’引用

社会福祉法人 脇浜保育園【令和４年度 あひる組・０歳児 研究発表】

＊2 ページから 3 ページにまとめること

様式３【課題研究レポート】

友だちの良さに気付き関わりを深める環境構成の工夫

―思いの伝え合いや良いところ探しを通して―

浦添市公私連携 仲西こども園　保育教諭　新城　紋音

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説』の第２章第４節「人間関係」の領域に「友だちの良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」とある。互いの良さが生かされると一緒に活動する楽しさが増してくるとあるが、そのためには、友だちと様々な心を動かす出来事を共有し、感じ方や行動の仕方等に関心を寄せ、それらが交わることを通して、それぞれの違いや多様性に気付けるようにする必要がある。自己主張のぶつかりや葛藤を通して、お互いに理解し合う体験が増えていく事で、互いに認め合えるとある。

本学級は、４歳児、男児７名、女児１０名、計１７名が在籍している。生活に慣れ、自信がついてきたことで、他児へ教える姿があるが、その際に口調が強くなることがある。自分の思いや考えを伝える際に、相手に受け入れてもらえないと手が出そうになる姿、泣いて訴える姿が見られる。優しい言葉でのやりとりや、良さに気付いて友だちとの関わりを深めてほしいと願い、このテーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　優しい言葉でのやり取りができる環境構成の工夫について

ふわふわ言葉やちくちく言葉を知らせ、優しい言葉でのやり取りができるよう工夫を行う。

２　自分の気持ちを伝え、相手の気持ちにも気付いて受け入れられる環境設定や援助の工夫について

集団遊びを取り入れ、そこから自分の思いを受け入れてもらったり、相手の思いを受け入れたりする経験を増やし、友だちとの関わりを深められるように援助していく。

３　友だちの良さに気付ける環境作りについて

友だちの良さや言われて嬉しかったことの伝え合いを通して、友だちとの関わりを深められる場の設定を行う。言葉で伝えることで、遊びがより楽しくなることや嬉しさを感じられるようにしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】　「言葉って何だろう？～絵本の読み聞かせを通して～」

＜幼児の実態＞７～８月

・自分で身の回りの事ができるようになり、自信が付いてきたことで、他児へ教えてあげる姿が見られるようになったが、その際に口調が強くなることがある。

・仲の良い友だち同士だからこそ些細なことでも気になり、保育教諭へ「〇〇が～していた」と訴える回数も多く見られる。ヒートアップすると言い合いになり、口調が強くなり、手を出してしまう姿もある

＜保育教諭の願い＞
・優しい言葉を使ってやりとりをしてほしい
・自分が言われたらどのような気持ちになるのか考えることで、相手の思いにも気付いてほしい

＜保育教諭の関わりと援助＞
・絵本を通して、ふわふわ言葉とちくちく言葉について知らせ、子どもたちへ質問を投げかけながら言葉について話し合う場を設けた。
・繰り返し絵本の読み聞かせを行うことで、理解を深めたり、クラスのみんなで考えた優しい言葉を文字に表して掲示したり、自分の考えを発表する機会を設けた。
・取り組みを通して、優しい言葉を使おうとする姿が見られ、できた際には褒めてクラス間での共有を行う。

絵カードのイラストを見て、優しい言葉を考えてみたよ！

手を挙げて発表してくれたお友だち

クラスみんなで考えた言葉の種類

言葉探しの様子

活動が終わった後も、イラストを見ながら言葉探し！一人がやっていると、次々とお友だちが集まってきました。

【実践事例２】　「自分の気持ちを言えるかな？～集団遊びでの思いの伝えあいを通して～」

＜幼児の実態＞９～１０月
・自分の気持ちを中々伝えられずに困ったり、泣いてしまう姿がある。
・仲の良い友だちだからこそ言葉を強く言ってしまうことがある。

＜保育教諭の願い＞
・自分の思いを言葉にして、伝えられるようになってほしい
・相手の気持ちにも気付いてほしい

＜保育教諭の関わりと援助＞
・集団遊び（爆弾ゲーム）の中で、友だちの良い所や、友だちにやってもらって嬉しかったことなど、思いを伝える機会を持つ。
・友だちに関することの発表を行い、話しやすい雰囲気を作る。
・何度か繰り返し行い、一部の人だけにならないようにバランスよく指名し配慮していった。
・良い所を伝えることが難しい様子が見られたので、保育教諭が例を出しながら進めていった。

ゲームで当たった友だちの好きなところを発表したよ！

爆弾ゲーム

好きなところ言いたーい！！

【実践事例３】　「友だちに褒められると嬉しいね！～ゆめ組のふわふわ言葉を増やそう～」
＜幼児の実態＞１１月
・友だちの素敵なところ探しを通して、色んな友だちに伝えられるようになった。
・ふわふわ言葉を言われたら嬉しくなることを知り、意識して使おうとする姿が見られてきた。
・遊びの中や並ぶ順番の取り合いなどの際に、ついちくちく言葉を言ってしまう姿もある。

＜保育教諭の願い＞
・優しい言葉をどんどん増やしてほしい。
・ついちくちく言葉を使ってしまったとしても、気付いてふわふわ言葉に言い換えて伝えようとしてほしい。

＜保育教諭の関わりと援助＞
・さらにふわふわ言葉を使えるように、ふわふわ言葉を使えた際には、ハートの紙に言葉を書いて掲示をした。壁いっぱいにハートが埋まっていくようにと意欲を誘う声掛けをしていった。
・保育教諭だけでは気付けないこともあるので、友だちがふわふわ言葉を使っている際には、保育教諭に教えるよう声をかけた。
・帰りの会など集まりの時間に、１日を振り返り、どのような言葉が出てきたか共有する。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・言葉について考えて話し合う場を設けたことで、ふわふわ言葉を使えたことを嬉しそうに話したり、「こうやっていうんだよ」と優しく友だちへ教えてあげたりする姿が見られるようになった。また、どうしたらふわふわ言葉が増えるのかの質問から、「笑って話せばいいんじゃない？」といった気付きも生まれ、子ども達の考えも広がっていった。
・取り組み始めは、保育教諭が見ている側で、優しく友だちに言えたことをアピールする子が多かったが、自然と友だちとの遊びの中でも伝えあう姿が見られるようになった。
・普段あまり発表をしない子も、友だちの良い所を伝える発表の場では手を挙げる姿があった。
・良い所の伝えあいを通して、仲が深まり、一緒に給食を食べる約束をしたり、一緒に遊んだりと輪が広がっていった。
・積極的に言える子から広まり、ほとんどの子ども達が優しい言葉を使えるようになった。

②課題

・良い言葉探しでは、ハートに文字を書いての取り組みだと、文字を読めない子もいるので、目に見える形（シールを貼る、何かを集めるなど）でさらに分かりやすく取り組んでみても良かったと感じた。
・友だちの良い所に気付くことが難しい子もいたので、共感したり、気付きになるように、保育教諭が普段から子どもたちの良い所を褒める姿を見せたりと環境構成を工夫していく。

③実践を通した自身の気づき、考え

・クラスの中で起きた、実際にトラブルになったケースを絵カードで分かりやすく知らせたことで、今までの自分の姿を振り返ることに繋がったと感じる。この時には、こう伝えたら良かったと感じられたからこそ、再び同じような場面が起きた際には自分で気付き、優しく発言できたのではないかと考える。
・普段は言えないことを伝え合う機会を通して、友だちの思いに気付くきっかけになった。友だちの仲も深まり、クラスの雰囲気も落ち着いたように感じる。
・思っていた以上に言葉への興味関心が高く、絵本での導入があったことから、優しい言葉を使って伝えることに広げられたと感じる。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・ふわふわ言葉を言われたら嬉しいことを知り、使おうとする子が増えてきた反面、トラブルになると、つい、ちくちく言葉を使ってしまうことがあるので、引き続き知らせていきたい。
・友だちの良いところ探しでは、発表したいと手を挙げていても話す時になると、言葉に詰まったりうまく言えないことがあったので、伝える経験をもっと増やしていきたい。
・ふわふわ言葉を意識して使う子もいるが、中々ふわふわ言葉で伝えられない子もいるので、今後はさらに興味関心を深めていけるような、わくわくするような取り組みを考えていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府　文部科学省　厚生労働省　平成３０年３月　『幼保連携型こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館
・齋藤　孝　令和５年７月　『ふわふわとちくちく：ことばえらびえほん』　株式会社日本図書センター

様式３【課題研究レポート】

継続して取り組む力を身に付ける環境構成と援助の工夫

―身体を動かす遊びを通して―

浦添市　あおいこども園　保育教諭　氏名　砂川　理沙

Ⅰ　テーマ設定の理由

こども園は幼児期における心身の発達を支える重要な役割を担っている。『幼保連携認定こども園教育・保育要領』の「健康」には、「心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、園児の気持ちに配慮した温かい触れ合いの中で、心と体の発達を促すこと。特に、一人一人の発育に応じて、体を動かす機会を十分に確保し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。」と示されている。また、「人間関係」には「幼保連携認定こども園の生活の仕方に慣れ、きまりがあることやその大切さに気付く」と記されている。これらを踏まえ、体操や全身を使った運動遊びを通して、幼児が楽しみながら集中力や体力を養うための環境構成が重要であると考えた。さらに集団遊びを通じて、ルールや約束事、順番を理解し、友だち同士での関わりを深める援助が必要であると考えた。

本学級の実態としては、２歳児３０名（男児１０名、女児２０名）の園児が在籍している。進級当初は朝の会や帰りの会には参加できずに座り込む姿や、部屋の中を走り回る姿が見られた。また、活動中に玩具の取り扱いが乱雑になり、他の玩具と混ざったり、貸し借りのトラブルが生じる事もあった。

こうした実態を踏まえ、体を使った遊びを通じて、楽しみながら集中力を身につけ、保育教諭や友だちとの関わり方を学ぶ環境構成と援助の工夫が必要と考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①子どもの発達に合わせた遊びや環境構成の工夫

個々の発達過程や興味に合わせた体操曲や運動用具を用意し、子どもの意欲や興味が広がる環境構成を工夫する。

②遊びの中での関わり方や保育教諭の援助

保育教諭が声掛けや手本を示して、子どもが「やってみたい」と思える気持ちを育てる援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例】「平均台渡り」

〈幼児の実態〉
・平均台に並ぶ際、順番を待ちきれず前に進もうとする姿が見られる。
・「せんせい見てて！」と積極的に保育教諭の手を掴んで渡ってみようとする子もいるが、まだ踏み出すことに戸惑っている子も見られる。

☆保育教諭の願い☆
・できた喜びを共有したり、できなくても挑戦しようとする気持ちを育つようにする。
・自分の番を理解して待つことができ、友だちの姿を見て見通しを持てるようにする。

〈環境構成と援助の工夫〉
・平均台の前に「待つ場所」をテープで示す。
・保育教諭が「できたね！」など言葉をかけて喜びを共有し、達成感を味わえるようにする。
・気持ちに寄り添いながら安心できる言葉をかけ、挑戦する意欲を高めることができるようにする。

【幼児の変容】

・平均台渡りを始めた当初は、なかなか一歩が出ず、保育教諭の援助を必要としている子が多く見られた。一緒に手を繋いで渡ってみたり、「一緒に渡ろう」と、声を掛け誘ったことで、順番を理解して取り組めるようになった。今では自信を持って、自分の力でバランスを取りながら歩くことが出来る子が増えている。

【結果】

・毎週の運動遊びを通して、平均台を最後まで自分の力で渡れる子が増え、バランスをとって安定して進む姿が多く見られるようになった。また、並んで待つなどの集団での動きも身に付いてきた。

・〝順番〟を知ることで、玩具の貸し借りが以前よりスムーズに行えるようになってきた。

【考察】

・安心できる環境の中で繰り返し経験したことで不安が軽減され、自信をもって取り組めるようになったと考えられる。

【実践事例】2　フラフープジャンプ

〈幼児の実態〉

・初めの頃はフラフープの位置や距離感がつかめず、ジャンプしてもフープを踏んでしまったり、よろけてフープの外に着地してしまう姿が見られた。

☆保育教諭の願い☆

・自分の体コントロールをしながら跳ぶ経験を積み、身体機能の発達に繋げていけるようにする。

・保育教諭の合図や説明を聞き、「やってみよう」と自分から取り組めるようにする。

〈環境構成と援助の工夫〉

・シールで目印をつけ、ジャンプする位置を視覚で知らせる。

・ジャンプが苦手な子にはまたぐ・小ジャンプ・両足ジャンプとステップを踏む。

・色や順番を意識し、跳べた時には「ジャンプできたね」と認める。

【幼児の変容】

・繰り返しの経験を通して、最初はバランスの崩れが見られた子ども達も、少しずつ両足でジャンプすることができるようになった。距離の取り方や着地の位置を自分で調整する姿が増え、活動中の集中も高まってきた。また、友だちの跳ぶ様子を見ながら並んで待つ姿や、合図を聞いて動ける姿が見られるなど、集団で活動する力もついてきた。

【結果】

継続してフラフープジャンプに取り組む中で、足をしっかり上げる動きや体のバランスが育ち、成功体験が自信となり、生活の中でも自分でやろうとする姿が多く見られるようになった。

【考察】

両足ジャンプの経験を積むことで跳ぶ動きは安定したが、片足跳びは発達段階的に難しく、段階的な援助が必要だと考えられる。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・平均台渡り・・・初めは恐怖心から足を止めたり、保育教諭の手を求める姿があったが、繰り返し挑戦する中で手を横に広げ慎重に進もうとする姿や、落ち着いてバランスを取ろうとする姿が見られた。ゆっくり、慎重に歩く経験を通して、自分の体の動きをコントロールする力が育ってきた。

・フラフープジャンプ・・・遠くのフラフープへ飛ぶ、両足をそろえて着地するなど、ダイナミックな動きが安定してきた。特に足を高く上げる動きがしっかりしてきて着脱（ズボンの上げ下ろしなど）の動きにいい影響が見られた。成功体験を重ねることで「もう一回やってみる！」という主体的・意欲的な姿が増えてきた。

共通の成果として、順番を守る、合図を聞いて動く、待つ➡動くの切り替えなど、生活につながる社会性・見通しを持った行動が育ってきた。また、友だちの挑戦を見て刺激を受けるなど、周囲の存在を意識した関わりが増えた。

②課題

・フラフープジャンプでは、両足ジャンプは安定してできるようになったものの、片足跳びまでは到達できず、より細かいステップの設定が必要だったと感じた。また、運動遊びで育った力を生活の中で意識的に結びつける声掛けや、活動中の待ち時間が長くなる場面の改善など、今後の課題が見られた。

③実践を通した自身の気づき、考え

・平均台渡りやフラフープジャンプなど、運動遊びを通して、子ども達は自分のペースで挑戦できる環境や声掛けがあることで、大きく成長するということに気が付いた。最初は不安がっていた子も、安心できるかかわりの中で少しずつ挑戦し、自信をもって取り組めるようになった。また、運動遊びで育つ「バランスをとる」「体をコントロールする力」が着脱などの生活面の自立にも繋がっていくことを実感した。遊びと生活はつながっているため、その結びつきを意識した声掛けや環境作りが大切だと感じた。今回の実戦で、子どもをよく見て、気持ちに合わせた援助をすることの重要性を改めて学んだ。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・課題の改善策として、両足跳びに慣れてきた子ども達にはまず、片足で立つ練習を繰り返しながらバランスをとる練習を行っていきたい。また、フラフープをまたぐなどの小さな動きから始め、少しづつ片足で跳べるように段階的に設定していきたい。「１．２．３．ジャンプ」などの掛け声や見本を示していくことでタイミングが掴みやすくなるように援助し、必要な子は手を繋いで一緒に跳ぶ体験をし、成功した際にはその都度、「やった！できたね」　など褒め、自信をもって挑戦し続けられるように関わっていきたい。

今後取り組んでいきたいこととして、運動遊びを通して着脱や排泄・姿勢保持など生活面の自立につながる力を育てていきたい。そのためには、体を動かす経験や安心して挑戦できる環境を整えながら、「自分でやってみよう」とする気持ちを大切にした関わりを続けていきたい。

〈主な参考文献〉

・内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成30年　幼保連携型認定こども園・保育要領解説　株式会社フルーベル館
・山本　秀人　編著　2023年　「0.1.2歳児　発達をおさえた運動遊び」　株式会社　学研

新しい発想や表現する力を育む援助の工夫

～ハサミを使った製作活動を通して～

学校法人みのり学園幼保連携型認定こども園みのり幼稚園　保育教諭　比嘉舞子

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、都市化や情報化が進み、子ども達の生活空間の中に公園や広場などといった遊び場が少なくなってきている。

戸外で豊かな自然に触れる機会も減ったことで、テレビやゲームで遊ぶ子ども達が増え、自ら工夫し遊びを展開することや、自分の考えなどを表現する機会が減ってきているといわれている。

『幼保連携型認定子ども園教育・保育要領解説』第２章第３節には「園児が試行錯誤しながら様々な表現を楽しむことや、自分の力でやり遂げる充実感などに気付くよう、温かく見守るとともに、適切に援助を行うようにすること」とある。幼児期に表現を楽しむという事は、豊かな感性や自己表現の意欲を育む上で非常に重要となっている。

本学級の幼児は３歳児（３年保育）男児１５名、女児１５名、計３０名在籍する。

明るく活発な子が多く、園児自ら保育者やお友達に声を掛け、関わりを楽しむ姿が見られる。

園庭やホールで体を動かして遊ぶことを好む一方、ブロック遊びや積み木遊びなど自分の作りたいものをイメージし形を作るという事にまだまだ楽しさを見出すことが出来ず、遊びが展開していかない。

そこで自分のイメージしたものを表現し、作る事の楽しさを感じてほしいと願い、テーマを設定した。

そして、なぜハサミに視点を置いたかというと、本学級のほとんどが新入園児ということもあり、初めてハサミに触れる子やハサミの持ち方が安定しない子が多く見られる。そこでハサミに視点を置き、用具の扱い方を学び、試行錯誤を重ねて、自分なりに表現する楽しさを感じてほしいと思った。

Ⅱ　課題に対する具体的な手当て

１　ハサミの正しい使い方を学び、表現したいと思う気持ちを育む援助の工夫について

毎月の壁面製作やハサミのワークを通して、安全な持ち方や切り方を丁寧に伝え安心して取り組めるようにすることで切ることの楽しさや「またやりたい！」と思う気持ちを持てるようにする。

２　製作活動を通して幼児自らが考え、表現する楽しさを感じる援助の工夫

様々な素材や色の紙を用意し、子どもが自ら選択しながら活動できるようにすることで切る意欲や創造性を高めるようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み

【実践事例１】

《　幼児の実態　》５月～７月【一発切り】

園生活にも慣れ始めた５月に初めてハサミを使った製作を行った。

初めてハサミを使う子もおり、ハサミや画用紙の持ち方に苦戦している子が多く見られた。

まずは保育者がお手本となり子ども達にハサミを使っている所を実際に見てもらった。

その後は丁寧に指導できるよう、グループごとに製作に取り掛かった。

その中でも支援が必要な子には集中して取り組めるよう環境を整え、１対１でハサミの指導を行った。

苦戦しながらも作品が完成すると「たのしかった！またやりたい！」との声も聞こえた。

《　保育者の関わりと援助　》
・初めてハサミを使う子もいたので、ハサミを渡す前に子ども達にハサミの使い方を伝えた。
・一人一人丁寧に説明するために、４～５人のグループを作りグループごとに製作に取り組んだ。
・沢山の色の画用紙や折り紙を準備し、子ども達に好きな色を選んでもらった。
・子ども達にイメージを膨らませながら製作に取り組んでほしいので、保育者も「〇〇みたいだね～」等声を掛け、子ども達との会話を楽しみながら取り組んだ。

《　幼児の実態　》８月～
少しずつハサミの使い方にも慣れ、毎月の壁面製作を楽しみにしている子ども達。
一発切りも上手に出来るようになってきたので、線に合わせて切る練習を始めた。
最初は思った通りに切れず苦戦している子も多く「もうおわりたい～」と諦めてしまう子もいたが
切り方を丁寧に伝えると、切り方のコツを掴みはじめ楽しそうに取り組む姿が見られるようになってきた。
また、切ったものを組み合わせたりして作品が完成すると「楽しかった！またやりたい」と達成感を感じていた子ども達。

《　保育者の関わりと援助　》
・ハサミの持ち方が中々覚えきれない子や、手先が不器用でハサミに苦手意識がある子には個別に声を掛け、丁寧に援助を行った。
・製作に楽しさを感じられるよう、子ども達一人一人に前向きな声を掛け、上手に出来ていることを伝えた。

↓毎月の壁面製作

一発切りでこいのぼりのうろこを
切ったり、イカとタコの足を
作ったりしたよ！

↓ハサミのワーク

【実践事例２】
ほとんどの子がハサミの持ち方や扱い方を理解してきている。
お友達がハサミを間違った扱い方をしていると、お友達同士で「あぶないよ」などと教え合う姿も見られるようになってきた。
また毎月の壁面製作やハサミのワークをこなしていく中で細かい形も切る事ができるようになってきている。
だが見本がないものや、完成の見通しが持てない物に不安な表情を見せる子がいる。

《　保育教諭の願い　》
・製作活動を通し、作る事の楽しさや表現する事の楽しさを感じて欲しい。
・イメージしたものを形にする事が難しくても、試行錯誤しながら前向きな気持ちで活動に取り組み、完成した際には達成感を感じて欲しい。

《　保育教諭の関りと援助　》
想像力を培うために、沢山の色の画用紙を用意し子ども達に自由に画用紙を切ってもらった。

クラスの約半分の子は自分の好きな形に画用紙を切り、色々な物を作り出すことが出来ていた。
だが残り半分の子はどのような形に切って良いのか分からず、手が止まってしまっていた。
そこで保育者が子ども達と一緒になって、自由に画用紙を切り、組み合わせて色々な生き物や食べ物などを作ってみた。すると子ども達もハサミを持ち始め、色々な形を切り始める姿が見られた。
そこから、切った形を組み合わせイメージし形にすることができた。

《　幼児の変容　》

・好きな物をイメージする事が難しかった子ども達。
保育者が一緒になって製作活動に取り組み、コミュニケーションを取る事で会話から作りたいものが広がってきた。
・製作の中で、子ども同士でも作ったものを見せ合ったりと会話を楽しむ姿が見られた。
　「次は水族館をつくりたい！」との声があったので、みんなで❝さくら２くみ水族館❞を作る事にした。

《保育者の援助》

・子ども達が自信を持って製作活動に取り組めるよう、前向きな声掛けをしたり、保育者も一緒になって製作活動に取り組む。
・子どもが作るのに苦戦している時には、形を下書きしたりお手本を見せたりと一緒に楽しむ。
・色々な種類の紙や色を準備し、子どもが選択しながら製作活動に取り組めるようにする。

★さくら２くみ水族館を作る様子

好きな魚を紙に描いたりして、
ハサミで切ったよ！
その後はノリでペタペタ～

Ⅴ　実践のまとめと考察

この１年間、子ども達がハサミに触れる機会をたくさん作り、色々な物を作ってきた。
製作活動を通してお友だちと一つの物を作りあげる事の楽しさや、自分のイメージしたものを形にする事の楽しさを子ども達も感じることが出来たと思う。
一方、表現することが苦手な子も多く見られたが、保育者やお友達同士での会話を通して子ども達もイメージを膨らませる事が出来ていた。
そこで改めて、“誰かと一緒に活動に取り組む事の大切さ”を感じた。
今後も子ども達の豊かな表現力を引き出せるよう、活動を設定したり環境を整えていきたい。

自分の気持ちを相手に伝える援助と工夫

～文字と言葉を通して～

学校法人みのり学園幼保連携型認定こども園みのり幼稚園　保育教諭　宮國絢女

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、情報機器の普及に伴い、手書きで文字を書く機会が減ってきている。『幼稚園教育要領解説』の第２章４の「言葉」の領域には「幼児が日常の生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること」とある。さらに近年「文字が書けない、忘れた」という声を聞くようになってきている今、幼児期にはとくに言葉や文字で自分の気持ちを伝えることが大事な時期である。幼児期の心を育むために、友だちや保育者、身近な人との関わりの中からコミュニケーションを取っていく事で、自分の気持ちを相手に言葉や文字で伝えることが必要である。また、友だちや保育者、身近な人との関わりから自分の気持ちを伝えれるようになる。

本学級の幼児は４歳児（３年保育）男児１６名、女児１３名、計２９名在籍し、ほとんどの子どもが３歳児からの持ち上がり。持ち上がりのこともあり、男女ともに仲良く元気いっぱい何事にも楽しんで行うことが出来、学習面にもやる気がある姿が見られる。しかし、数名初めはやる気があり楽しんで行うことが出来るが、集中力が続かなく諦めてしまう子や別の事に気を取られてしまう子の姿も見られる。また、遊びの中からのトラブルなど自分の気持ちを上手く伝えることが出来ない姿が見られる。

そこで、まずは遊びの中から自分の気持ちを伝えれるように保育者が援助を行っていき、その幼児にあった声かけを一緒に行っていくこと。また言葉だけじゃ難しいことでも文字に移していくことで伝えれることも出来るのかと感じた。そこから子ども達が自分の気持ちを言葉や文字で伝えれるようになってほしいと願い、このテーマに設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分の気持ちを相手に伝えれるように園児の気持ちに寄り添う工夫について

子どもが安心して話したり表現したりできるよう、保育者が子どもの言葉に耳を傾け、「そう思ったんだね」「教えてくれてありがとう」と気持ちを受け止める姿勢を大切にする。

２　言葉だけでなく文字を使ったりと自分の気持ちを伝えたり、表現する援助の工夫について

絵本やお手紙セット（便せんや保育者が作ったポストなど）を用意し、文字や言葉に自然と触れられる環境を整え、子ども達はお手紙のやり取りを楽しみながら、自分の気持ちを伝える経験が出来るようにする。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み　（実践）

〇４月～　　“自分の気持ちを相手に伝えることが難しい”

【幼児の実態】

・クラスも変わり少し子ども達も緊張している様子が見られていた。その為、子ども同士の言葉で思

いを伝えるのが難しい部分も見られた。
・トラブルになった事があり、子ども同士で話し合いもせずに、すぐに保育者に助けを求めていたり、周りの子達が知らせていた。解決せずに終わりどちらかが気持ちの整理がつかないことも多々あり、泣いて訴えることもあった。

【保育者の関わりと援助】

・初めはクラスも変わり新しいお友だちもいて、自分の気持ちを伝える事が難しく保育者が仲介に入った。並ぶ順番を決めている時にトラブルがあり、子ども同士で解決することが難しく泣いて訴えることもあった。その際に、保育者が仲介に入りお互いの意見を聞き、お互いの気持ちにも寄り添いながら、何がお互い嫌だったのかを話し合いが出来る場を設けた。自分の気持ちが言えない子には、側で聞いて相手に伝えるなどお互いの気持ちがすっきりするような声かけを行い解決した。

【幼児の変容】

・子ども同士のトラブルになった際には、少しずつではあるが自分の気持ちを相手に伝えることが出来ている。自分がやられて嫌なことも考えられるようになってきていると感じた。

〇６月～　　“ひらがなカード遊び”

【幼児の実態】

・動物などのカード合わせの中から子ども達がひらがなを１つずつ呼んでいたため、ひらがなのカードを出してみた。年少さんの時からひらがなには触れていたため、カードで友だちの名前や色んな物をひらがなカードで並べて楽しんでいる様子が見られた。まだ読めないひらがなもあったが、友だちと協力して完成させていた。

【保育者の関わりと援助】

・子ども達の遊びの中からヒントを得て楽しめるひらがなカードを用意した。まだ読むことが難しい子ども達も興味を持ったり、子ども同士で協力しあっている感じがした。言葉を言ったり、お題を出しながら子ども達と楽しみながら行った。難しい文字はひらがな表を出したりと見つけてもらったりした。

【幼児の変容】

・子ども達が遊んでいる物からヒントを得ることで、文字に興味が無かった子や難しくて自分から挑戦しない子にも遊びを通して、少しずつひらがなに興味を持っていた。
・ひらがなカードで自分の名前を作ったり、「同じ文字が使われているね」という子など気付きがあった。お友だちの名前にも興味を持つようになっている。

〇９月～　　“ひらがなの塗り絵”

【幼児の実態】

・子ども達が塗り絵やお絵描きをしたいと言うようになり、塗り絵やお絵描きの中で自分の名前や書きたい文字を書くようになっていた。カードの時は文字を読んだり並べたりだったが、色塗りやお絵描きでは自分の分かる文字を書いたりと楽しんでいる様子が見られた。まだ鏡文字の子もいるが頑張って書いている姿が見られたり、文字が書けなくて困っている様子が見られた。

【保育者の関わりと援助】

・子ども達が文字を塗り絵やお絵描きに書いているが、まだ上手く書けなくて戸惑っている姿が見られたので、ひらがな表を見せたりした。そこから、ひらがなと塗り絵がセットになっている物を用意し、ひらがなを学びながら出来るかと感じた。子ども達は自分でひらがなを選び、ひらがなが書けたら、花

丸を付けて色塗りを行う。

【幼児の変容】

・子ども達はひらがなが上手く書けない子も色塗りとひらがなを学びながら楽しめていると感じた。ひらがなを何度も繰り返すことで少しずつ上手になっている感じがした。また、ひらがなを教えあったり、「このひらがな上手だね」と子ども同士でのコミュニケーションになっている。

○１２月～　　“お手紙でお友だちや先生に気持ちを伝える”

【幼児の実態】

・ひらがなを使った遊びの中から、子ども達が保育者や友だちに自分の思いを言葉にしてお手紙を書くようになっていた。お家や園で書いた手紙を交換したりと楽しく遊びながら気持ちを伝えていた。

【保育者の関わりと援助】

・子ども達が楽しめるようにポストを用意したり、お手紙用の便せんを用意しいつでも書けるように準備した。ポストに入れることで子ども達も楽しめている様子が見られた。

【幼児の変容】

・ひらがなに興味が無かった子も手紙を通して、相手とコミュニケーションを取りながら楽しめている感じがした。自分の気持ちを相手に言葉だけではなく絵なども書きながら伝えることが出来ていた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・初めは自分の気持ちを相手に伝えることが難しかった子ども達やひらがなに興味を持っていなかった子ども達も遊びの中で楽しんで学ぶことが出来ていた。

②課題

・まだひらがなや自分の気持ちを伝えることが難しい子も中にはいるのでそこをサポートしながら、引き続き援助していきたいと思います。

③実践を通した自身の気づき、考え

・相手に言葉で伝えるのではなく手紙を通して行う事で緊張している子も自分の気持ちを伝えることが出来ると感じた。また、まだひらがなが難しい子ども達も一生懸命、保育者に聞きながら書く事で相手に伝わることが分かった。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・今取り組んで事を引き続き子ども達の反応を見ながら、遊びの中から取り組んでいることや頑張りたいことを伸ばしていくことが出来たらなと思いました。中々、ひらがなも難しいという子もいるがやりたいという気持ちに寄り添いながら楽しんでいきたいなと思いました。これからも学習の中からひらがなを学ぶ事もあるので、子ども達の気持ちに寄り添いながら行っていきたいと思います。

〈主な参考文献〉・内閣府・文部科学省　平成３０年　幼稚園教育要領解説　株式会社フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

基本的な生活習慣の自立に向けての環境構成と援助の工夫

―自ら進んで自主的に行動できる様になるには―

浦添市ハイジこども園　保育教諭　下地　美里

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」第２章第３節の「健康」の領域におて、「身の回りを清潔に保つ心地よさを感じ、その習慣が少しずつ身に付く」と示されている。園児は、日常生活の中で保育教諭等からの援助や関わりを通して、身辺を清潔にすることの意味や理由を体験的に理解し、自ら清潔を保とうとする習慣を身に付けていくことが大切であるとされている。

本学級の幼児は２歳児クラスの男児８名、女児９名、計１７名が在籍している。男女共に、何でも意欲的に挑戦し、活動や遊ぶ姿が見られる。最近では、身の周りのことに興味を持つ姿が見られる。着脱の際は「脱ぐ、穿く」など自分でやってみようという姿も見られるが、「できない、やってちょうだい」と甘えたり、「できない」と諦めてしまう子もいるため、意欲的に身の周りの事を行い基本的な習慣が身に付くにはどのような環境構成や援助の方法があるのか研究したく、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①生活習慣が身に付くための援助や環境構成の工夫について

一日の流れの写真や絵カードを掲示し、視覚からの情報を得られるよう知らせ、個々に応じた声かけや援助を行う。

②意欲的に行い、達成感を味わうための援助の工夫について

自ら意欲的に進んで取り組めるよう、ご褒美シールやメダル等を用意する。自分の意思で行動し、経験を通して、できた達成感を味わえるようにする。また、子どもだけでなく、保育教諭も子どもと同じように共感、喜び合い、自立心を育めるよう援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

実践事例①「～自分で着脱をしよう・手洗いの仕方を覚えよう～」

【幼児の実態】
- ズボンを自分で穿く事ができる子もいるが、難しくて「やってちょうだい」と諦めてしまう子もいる。
- 上着、ズボンの着脱が自分でできる子もいるが、袖に手や足が上手く脱いだり通す事ができずに諦めてしまう子もいる。
- 手を洗うことはわかるが、石鹸を手の平に出してそのまま水で流す子が多い。
- 保育教諭と一緒に援助されながら洗う子も見られる。

《保育教諭の願い》
- 衣服の着脱が自分で出来るようになって欲しい。
- 手洗いの手順が身について欲しい。

【保育教諭の関わりと援助】

・子どもが着脱しやすいよう、子どもに合わせた高さのパンツチェアを用意し、ズボンが穿きやすいよう、子どもに合わせて使用する。
・上着の着脱は、手を添えて通す場所を知らせたり、絵柄を見て衣服の前後を知らせる。
・手洗いの手順のイラストを掲示し、手順を確認しながら洗えるようにする。
・必要に応じて、保育教諭と一緒に手を添えながら洗えるようにし、日頃から手洗いの大切さを知らせていく。

実践事例②　「～身のまわりの事を自分でやってみよう・ご褒美シールをもらおう～」

【幼児の実態】

・身のまわりのことに興味を持ち始め、保育教諭と一緒にやろうとする。
・何をしたら良いのか、困っている子が見られる。
・シールが欲しくて、シールばかりに目がいってしまう。

《保育教諭の願い》

・身辺自立に向け、簡単なお支度や身の回りの事を自分で出来るようになって欲しい。
・出来た事を保育教諭や友だちと共有し、自信が持てるようになってほしい。

【保育教諭の関わりと援助】

・お支度に興味を持ち、意欲的に出来るようパンツかご、タオルかごに動物や食べ物のシールを貼り、ロッカーの場所を決めた。
・毎朝のお支度を自主的に取り組めるよう、イラストを用意し、興味を持って子どもたちが『見て』取り組めるよう掲示をする。
・子どもたちが好きなキラキラシールなどを用意し、表を作って子ども達の目の届く位置に掲示をする。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果

・パンツチェアーに興味を示す子が多く、「ここは、パンツとズボンを穿く場所だよ」と知らせると、「〇〇もやりたい」と自ら進んで意欲的に着脱する子が増え、ズボンを上げる、脱ぐなどの動作が自立してきた。
・手洗いの手順のイラストを掲示し、保育教諭の声かけで、手順を確認しながら洗う子が増え、石鹸を出す、こする、流すなどの動作がスムーズになり、一人で洗うことが出来るようになってきた。
・イラストを掲示することで、進んで取り組もうとする姿や、一つ一つ持ち物を確認しながら、準備ができるようになってきた。また、自分の持ち物やロッカーの場所がわかり、必要な物を自分で取り出そうとする姿が見られるようになった。
・『ご褒美シール』を取り入れる事で、達成感を味わい、自信を持って、身のまわりの事に興味を示している。身支度、着脱、手洗い等の身の回りの事を積極的に取り組もうとする姿が見られるようになった。

② 課題

・身辺自立に向けて、「自分でやりたい」という思いはある一方で、生活の流れの理解や集中の持続、身辺動作の未熟等が重なり、一連の流れを自分で行うのはまだ難しいところがある。その為、子ども達がわかりやすい環境づくり、個々に合わせた丁寧な援助が今後も必要である。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

・「自分でやりたい」と意欲的な姿が子ども達から見られるようになったが、まだ、保育教諭の援助が必要な場面も多く、「できない」背景には、発達の差、気分など個々の要因があることを知り、一人ひとりに合った声かけや丁寧な援助が、改めて大切だと実感した。
・できることが増えてもまだ、この年齢では、難しいことがあることを頭に置き、できるようになるための声かけや環境構成を見直す必要があると感じた。保育教諭の声かけや援助の仕方で子どもたちの意欲を高めていけるのではないかと改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・２歳児は、生活の流れを自分で進めることにまだ難しいところがある。視覚から情報が入りやすいよう、イラストや写真を掲示してみたが、できる子、出来ない子の差があるため、個々に合わせた関わりや援助が大切であると感じた。次年度の進級に向け、身辺自立やできる事が増えるよう、環境をつくり、できたところは大いに褒めて、次への自信へと繋げていきたい。今後は、一人でできる範囲を少しずつ増やしながら、子ども達が自分で生活の流れを理解し、主体的に取り組めるよう継続して支援していきたい。

〈主な参考文献〉

分部学章　平成30年　　「幼稚園教育解説」　フレーベル館

様式３【課題研究レポート】

「友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じられる環境構成と援助の工夫」

―友だちや保育教諭との遊びを通して―

浦添市　ハイジこども園　保育教諭　氏名　砂川　千廣

Ⅰ　テーマ設定の理由

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」第２章・第４節「人間関係」の領域のねらいに、身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼関係をもつとある。

本学級は男児１０名、女児８名、計１８名の３歳児クラスである。身の回りのことが自分でできるようになり、一人一人が自信をもって活動しようとする姿がみられる。遊びではブロック遊びやパズル、ままごと、ぬりえなど好きな遊びを見つけて楽しんでいる。しかし、一緒に遊び始めると「〇〇がおもちゃとった」「いじわるするからもう遊ばない」などと、トラブルになってしまうことも多々ある。

そこで､好きな遊びを楽しむ中でいろいろな感情を経験しながら､一緒に遊ぶ楽しさを感じてほしいと願い、本テーマを設定し、研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①友達と一緒に活動する楽しさを味わう環境構成の工夫

遊びを通して友だちとの関わりが生まれるような空間づくりや、共通の願いや目的を工夫しながら協力して取り組める環境構成。

②保育教諭の援助の工夫

友だちと遊ぶ中で、自己主張したり、トラブルが起きた時には、保育教諭が仲立ちとなって相手の思いに気づかせたり、共感できるような声掛けや援助の工夫。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「わらべ歌遊び」

幼児の姿

・個々の遊びや単発的な遊びをする子が多く、遊びが長続きしない。

・保育教諭との関わりを求める子が多い。

・「〇〇がいじわるする」「一緒に遊ばない～」などといった声が多い。

保育教諭の願い

・友だちや保育教諭とふれあい遊びを通して、もっとクラスの友だちに興味をもってほしい。

・友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。

【保育教諭の援助〇　環境構成の工夫☆】

☆遊びを通して友だちに親しみが持てるよう、わらべうた（なべなべそこぬけ・でんでらりゅうば）を使ったリズム遊びをする。

〇子どもたちの興味や関心を受けとめ、友だちとイメージできるように働きかけながら、子ども同士のつながりを広げ、友だちと遊ぶ楽しさを味わえるような声掛けや援助を行う。

【幼児の姿と変容】

「なべなべそこぬけ」を始めに取り組んだ時には、2 人ペアからスタートした。2 人ペアでもうまく呼吸を合わせないと回れないので、初めは転んでしまったり、手を離してしまう子が多かった。何回か遊びをかさねていくうちに、「せーの！」と声をかけあったり、どこに回るかを相談する姿もみられるようになってきた。

回り方がわかると、そこから自分たちで考えて人数を増やして取り組む姿がみられるようになった。しかし、人数が多くなると回るのも難しくなり、お互いに意見を出し合いトラブルも見られる。

【結果と考察】

・自由遊びの時には、一人でパズルや絵本を読んだりする子が多かったが、簡単にできるリズム遊びを取り入れることで、自由遊びの時間には友だちを誘い、一緒になって歌を歌いながら遊ぶ姿が見られる。また、その延長から「次は一緒にパズルしよう！」「ままごとして遊ぶ？」などと、友だちと関わろうとする時間が増えてきた。

・一緒に遊んでいく中で、トラブルも増えてきた。一方的に思いばかりを伝える子、相手の話を聞かない子なども多くみられるようになってきた。

【実践事例２】「制作活動・ままごと」

幼児の姿

・言葉のやりとりを楽しみながら、ごっこ遊びを楽しんでいる。

・一緒に遊ぶ中で、思いを一方的に伝えている。

・思いがうまく伝わらず、泣いてしまう子がいる。

保育教諭の願い

・自分の思いを言葉にしながら、相手の気持ちにも気付いてほしい。

・保育教諭や友だちと力を合わせながら、工夫して取り組む喜びを感じてほしい。

【保育教諭の援助〇　環境構成の工夫☆】

☆友だちと一緒に協力して活動できるスペースを用意する。友だちと道具を共有したり、教え合ったりできる配置にする。

〇保育教諭も一緒に取り組みながら、子どものもつイメージを膨らませることができるように、言葉をかけたり援助したりする。

〇子どもが自分の思いやイメージを伝えようとしているときには見守り、うまく言葉にできないときには必要な言葉を知らせたり、補ったりする。

【幼児の姿と変容】

ままごと遊びをしているときに、家族で行ったお祭りの話になった。「お祭りにいって、焼きそばたべたよ！チョコバナナもあったよ」などと話が弾む中で、「じゃあその食べ物、作っておままごとで遊ぼう」と提案してみると、「やりたい！」と話していた。

制作の準備をしていく中で、紙コップや割りばしなどをみて、友だちと「これでなにがつくれるかな？どんなしてつくるのかな？」などと楽しみにする様子が見えた。

制作活動を始めると、使う材料を友だちと話して決めたりしていた。その中で、使いたい物が違い、トラブルになっている子がいた。保育教諭が「どうしたの？」と互いの思いを聞き、解決方法を一緒に考え、「二つの色を使うのはどお？」「一つずつ色をかえてみるのは？」等アドバイスをしてみると、トラブルになっていた二人で話し合い、「２つ使う！」と決め、一緒に制作を進めていた。

【結果・考察】

・制作遊びを通して、お互いにどんなものを作るかイメージを共有しながら活動を進めていた。
「ここにテープ貼って！」「ここつかまえといて」などと、友だちと協力して作品をつくる様子も見られた。

・使いたい色が違いトラブルになっていた子たちは、話し合う中で互いの思いに気づき、自分とは異なる考えがあることに気づくことができたと考える。

・作ったものをままごと遊びの中で取り入れることで、お店屋さんやおうちごっこの遊びに発展し、さらに集団での遊びに広げることができた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・個々の遊びや単発的な遊びが多かったものの、リズム遊びや制作活動などを通して、友だちと関わる楽しさを感じられるようになった。

・友だちと話し合ったり、遊びを広げたりできる環境を整えることで、友だちとの関わりが深まり自分の思いや考えを言葉で表せるようになった。また相手の思いにも気付き、考えがあることをわかるようになってきた。

・困っている子がいると、「先生、〇〇が困っているよ」などと知らせにきたり、自分から「どうしたの？」と声をかける姿がみられるようになってきた。

②課題

・思いを伝え合う場面で、言葉が乱暴な子どももいるため、保育教諭が適切な言葉の使い方を示しながら関わりを支えていくようにする。

・遊びを最後までやりきる体験や、じっくり遊びこむ経験をさらに積み重ねられる工夫や子どもの遊びの様子に応じた環境づくりの工夫をしていく。

③実践を通した自身の気づき、考え

・簡単なリズム遊びや制作遊びを通して、子どもたちのいろいろ姿を見ることができた。友だちと遊ぶ楽しさを知らせるために、保育教諭自身が全力で楽しみ、遊びの広げ方を一つひとつ丁寧に伝えていくことが重要だと再確認した。少しの時間でも子ども一人ひとりに目をむけることで、子どもたちが今何に興味を持っているのか、どんな関わり方を求めているのかを知ることができた。また環境構成の工夫や保育教諭の援助の仕方を考えるのも重要だが、同様に実践を振り返ることの重要性を感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・子どもたちが適切な言葉使いを身に付けられるよう、教材選びや提示方法、実態に合わせた働きかけ、指導方法を考えていきたい。

・子どもが主体的に遊びへ取り組み、継続して活動できるような環境構成を工夫し、遊びがより豊かになるよう研究していきたい。

〈主な参考文献〉

・文部科学省　厚生労働者　平成３０年『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館

・社会福祉法人日本保育協会　『３・４・５歳児の指導計画の立て方』中央法規出版社

様式３【課題研究レポート】

いろいろな食材を食べてみよう
―食べる楽しさを感じる経験を通して―

那覇市　若狭こども園　教諭　氏名　糸数　真夏海

Ⅰ　テーマ設定の理由

本クラスは、現在支援児３名、家庭保育から入園した児１名、他園からの入園児１４名（うち多国籍児５名）の計１８名で構成された３歳児クラスである。多国籍児は日本食を好む一方で、家庭ごとに食事のマナーや食文化が異なっている現状がある。また、クラス全体として好き嫌いが多く、苦手な食べ物に挑戦する姿があまり見られないことが課題である。

そこで本クラスでは、苦手克服を目的とするのではなく、無理に食べさせることなく、一口でも食べてみようとする気持ちや、食べ物そのものに興味・関心を持てるような食育を大切にしたいと考えた。様々な食材に触れ、挑戦する経験を通して、食事マナーも自然と身につけていくことをねらいとし、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①食べる意欲を高め、食事を楽しむための援助や環境構成の工夫

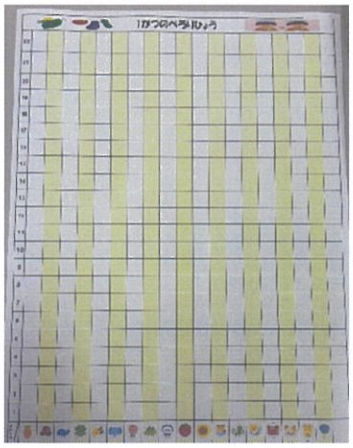
幼児一人ひとりの食べる量や気持ちを受け止めながら「ぺろり賞（完食した際に表にスタンプを押す）」の取り組みを行っている。スタンプを通して達成感を味わえるようにするとともに食べることへの意欲につなげている。また、無理に完食を促すのではなく、楽しい雰囲気の中で食事ができるよう声掛けや関わりを工夫し、食に対して前向きな気持ちが育つよう援助している。

②苦手な食べ物にも挑戦しようとする気持ちを育むための援助の工夫

苦手な食べ物を克服することを目標とするのではなく。「一口食べてみる」「興味を持つ」といった小さな挑戦を大切にしている。成功体験を積み重ねることで、自身や満足感を味わい、次への意欲につながるよう配慮している。また、様々な食材に触れる経験を通して、食事のマナーや食べ物への関心が自然と身につくよう援助している。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例】「様々な食べ物に挑戦してスタンプを押そう！」



７月にペロリ表を掲示したことで「これ何？」「何するの？」と興味を持つ姿が見られた。

季節の行事に合わせたスタンプや、キャラクターのスタンプ等、毎月種類を変え、「どれにしようかな」と選ぶ楽しさを感じる姿も見られた。
また、友達と数を数えたり「僕ここまで押せた！」と、友達同士で競う姿も見られた。

毎月、目標達成した子には園長や他の職員からのメダル授与を行ったことで「次も頑張る！」「次はメダルもらえるように頑張る！」と食事に意欲的になっていく姿が見られ、月を追うごとに完食する子が増えていった。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・ペロリ賞を行ったことで、苦手な食材に挑戦する子が増えた。
　また、少しずつ完食する子も増えた。
・配膳された給食を見て、「今日は全部食べられそう！」等とメニューに興味を持つ子がいた。
・毎月スタンプの種類を変えたことで「今日は何のスタンプ？」と期待を持つ子が増え、「今日は新しいスタンプだから頑張ろう！」と苦手な食べ物に挑戦する姿が見られた。
・『食器にご飯粒が残らないよう“ピカピカ賞”にしたら、スタンプが押せる』というルールを加えたことで、「先生見て！ピカピカだよ！」と綺麗に食べる子が増えた。また、“ピカピカ賞”を取り入れたことでお箸を器用に使える子も少しづつ増えた。
・食だけでなく、スタンプの数を数えたり友達と比較する等の関わりも見られた。
・子ども達がメダルをもらった喜びを保護者に見せたことで、家庭での食事の様子を聞いたり園での食事の様子を伝えながら、保護者とのコミュニケーションを取ることができた。

②課題

・スタンプを押したいが為に急いで食べる子や、食事のマナー、姿勢が悪くなり食べこぼしも増えた。その為、ゆっくりよく噛んで食べることや牛乳パックで足置き台を作り、姿勢よく食べるよう声掛けを行った。また、スプーンやフォークを使って口いっぱいにご飯を入れていた為、お箸の練習も兼ねてお箸を持たせると、早食いをする子が減り、お箸が上達していった。

・苦手な食べ物になかなか挑戦できず、スタンプを押せなかったりメダルを一度ももらえない子がいた。スタンプが押せないことに落ち込んだり諦める姿が見られた。

③実践を通した自身の気づき、考え

・実践を通して、ペロリ賞のメダルやスタンプといった視覚的で分かりやすい取り組みは、子ども達の「やってみよう」という意欲を高め、苦手な食材への挑戦につながることを実感した。

・スタンプを押すことが目的となり、食事のマナーや姿勢が乱れたり、偏食により達成できないことで気持ちが落ち込む子もいることが分かった。子ども一人ひとりの感じ方やペースは異なるため、結果だけで評価するのではなく、挑戦しようとする姿や少しでも食べられた過程を認める声掛けの大切さを改めて感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・課題点として、食事のマナーや姿勢が乱れてしまった原因の一つとして子ども達の身長と椅子の高さが合わなかった。その為牛乳パックで足置き台、ペットボトルで背もたれを作り、子ども達の姿勢が良くなるよう改善した。

・なかなか完食できず、スタンプが押せなかったりメダルが押せなかった子には、本児と相談しながら食べられる量を配膳し、自信を持てるようにした。また、１２月末に全員に「いっぱい食べましたで賞」のメダルを授与したことで、頑張ろうという気持ちが途絶えないようにした。
今後も継続していき、食べる楽しさや食事のマナーを伝えていく。

＜主な参考文献＞

・文部科学省　平成３０年３月　「幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説」　フレーベル館

様式３「課題研究レポート」

食に興味をもち、食べることへの意欲を育む援助の工夫

―遊びや食育活動などの日々の活動を通して―

社会福祉法人郵住協福祉会安謝こども園　保育教諭　宮里　エリカ

Ⅰ　テーマ設定の理由（課題設定の理由）

近年、子どもの食をめぐっては、発育・発達の重要な時期にありながら、栄養摂取の偏り、朝食の欠食、小児期における肥満の増加など、問題は多様化、深刻化し、生涯にわたる健康への影響が懸念されている。『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「健康」の内容の取扱いにおいて、「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、園児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で保育教諭等や友達と食べる喜びや楽しみを味わい、様々な食べ物への興味や関心をもつなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること」とある。

本学級は、男児１４名、女児８名、計２２名の５歳児クラスである。食事面に関しては、調理の先生に今日の給食のメニューを聞きに行き給食を楽しみにしている様子や、グループの友達と会話をしながら食事を楽しむ姿が見られる。一方で、好きなものは進んで食べるが、苦手なものや嫌いな食材になるとなかなか食事が進まないという現状がある。特に野菜が嫌いな子が多く、自分で完食できる量を配膳するが一切口にしない子や、野菜を飲み込む事が嫌で長い時間口の中に入れている園児もいる。このような実態を踏まえ、食材が自分の体にどのような影響を与えるのかを知り、食に関する様々な活動を通して、食べることへの意欲を育んでほしいと願い、本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①食への興味や関心を高めるための活動と援助の工夫

栽培活動を通してみんなで育てた嬉しさを共有し、クッキングを通して苦手な野菜にも親しみをもって食べられるようになる。

②食育に関する教材と環境構成の工夫

身近な食材のかるたやクイズなどを遊びに取り入れ、遊びから食に関する知識や興味、関心が持てるよう教材の工夫を行う。掲示物などの視覚的教材を用いて、友達同士で食に対しての関心が増えるようになる。

Ⅲ　課題解決に向けた取り組み（実践）

実践事例１　「栽培活動を通して野菜に興味を持ち、苦手な野菜にも親しみを持つ」

【子どもの姿】

- 野菜の種を植えるが栽培に興味がなく、水かけや観察を嫌がる子がいる。
- 野菜が苦手で中々飲み込めず、食事に時間がかかる子がいる。
- 栽培活動で育てた空心菜は食べていたが、給食に出る野菜は口にしようとしない。
- 緑色の野菜を苦手とする子が多い。

【保育教諭の願い】

- 苦手な野菜でも少しは食べることができるようになってほしい。
- 様々な野菜にふれ、クッキングを通して親しみを持って食べることができるようになってほしい。

【実践内容】

- ５月にチンゲン菜と空心菜、10 月にはにんじんと大根を植えて栽培活動に取り組み、水かけと観察をした。チンゲン菜は虫に食べられてしまい、残念がる子がいた。空心菜は 12 月までの２ヶ月の間に何回も収穫でき、みそ汁にいれてもらい子ども達もよく食べていた。にんじんと大根は現在も栽培中で、１月初めに大根２本を収穫してクッキングをする予定。
- 草抜きや水かけをやろうとしない子に対しては、「先生と一緒にやろう」などと声を掛けて一緒にやって、「この大根は〇〇のだからね」と１本だけお世話してもらうと、「〇〇の大根が１番大きいよ」等と言いながら水かけや観察を進んで行っていた。それに対して、他の園児も「これは僕の大

根！」と言いながら、全体的に進んでお世話する姿が見られるようになった。

にんじんと大根を植えたよ！

大きい大根とれました！

自分達でおでんを作り
美味しく食べました！

【子どもの変容】
・だんだん野菜が大きくなってきて、野菜への興味が強くなり、収穫を楽しみにしている。
・「園で採れた〇〇だよ」と声を掛けると、挑戦して食べてみようとする子がいる。
・空心菜は何回も収穫できたため、子ども達も「次は野菜炒めにする！」等と興味を持っている。
・給食に園で育てている野菜と同じ野菜が出ると、「これこども園で採れた〇〇？」と聞いて、興味を示していた。

【結果と考察】
・自分達で栽培する経験をすることで、野菜に対して徐々に興味関心が強くなってきて、自分で育てた野菜を食べてみようという気持ちに繋がったと思われる。
・「空心菜をどのように料理したら食べられそう？」と子ども達に聞いて、１番多かったのが「みそ汁」で調理の先生にお願いしてみそ汁のメニューの時に入れてもらった。すると、「これ空心菜？」と１つずつ確認しながら食べる姿が見られた。

実践事例２　「食に関する知識や興味を持ち、友達と一緒に食べる楽しさを味わう」

【子どもの姿】

・肉や魚は好きでよく食べるが、野菜は中々食べようとしない。
・食育かるたで遊ぶ姿が見られる。
・「食べ物は３つのグループに分けられるよ」と声を掛けると、興味を持つ子が多い。
・友達と会話をしながら食事を楽しんでいる。

【保育教諭の願い】

・３色食品群を元に、普段口にする食材が自分の体にどのような影響を与えるのかを知り、バランスよく食事ができるようになってほしい。
・友達と一緒に食べる楽しさを味わい、食べる事への意欲を育んでほしい。

【実践内容】

・給食に使われている食材を３色食品群のグループごとに分けて掲示し、何色がどんな役割をするのか子ども達にわかりやすいように伝える。
・自分で完食できる量をわかってもらうために、子どもたち自身で配膳をする。始めのうちは、見た目で美味しそうだと判断して大盛り配膳するも、食べてみると思っていた味と違ったと言って残す子も多かった。今では、食べられるか少しでも不安に思った時は、少量配膳して完食できたらおかわりをするようになっている。
・食事の前の今日のメニュー発表の時に、３色食品群のグループ分けをクイズ形式でやってみると、楽しそうに答えながら、「芋は黄色なの！？」等と、新しい発見を楽しんでいた。

【子どもの変容】
・給食を食べながら、友達同士で「これは〇色の食べ物だ！」等と３色にグループ分けをしながら食事をする姿が見られる。
・自分で配膳をすることで、自分がどのくらいの量食べられるのかを知ることができた。
・今までは野菜の量が極少量だった子も、バランスよく食べることを意識してからか野菜の量が徐々に

増えてきた。

【結果と考察】

・今までは何気なく口にしていた食材が、自分の体にどのような影響を与えているかを知ることで、栄養の偏りに自ら気づき、食事量が増えることに繋がっている様子。
・自分で食べられる量の配膳をし、グループになって友達と一緒に食べることで、周りの友達よりも食べる量が少ないことに気づけていた。他の子が野菜を食べているのを見て、少しでも食べようとする姿も見られた。
・給食を時間内に完食した子は名前を貼って、可視化することで自分も名前を貼りたいという気持ちから、時間内に完食できるように時計を見ながらよく噛んで食事をするようになった。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・食育を通して栽培活動などの自然との関わりが多くもてた。栽培活動をしていく中で、野菜が苦手な園児も徐々に野菜に興味を持ち始め、水かけや観察を意欲的に行うようになった。
・好き嫌いをする子に対して、「頑張って食べよう」という保育教諭の声かけだけでは変化が見られなかったが、３色食品群を用いて自分の体に与える影響を知ってもらうと共に、夏休みの異年齢保育等を通して異年齢の子の食べる姿に影響を受けて完食できることが増えてきた。
・毎日の給食に出る食材を「〇〇はみどりのグループだ！」等と、子ども達同士で３色にグループ分けをして、自分の体にどんな影響があるか知り、学ぶことを楽しんでいる。
・自分の完食できる量を把握することからスタートし、次は友達の量を意識して配膳するという取り組みに繋げている。
・お迎えの時に保護者と給食の展示食を見ながら「これ美味しかった！」と話をして、実際に保護者が同じようなメニューを作ってくださる家庭もあった。

②　課題

・「食べることの大切さ」を知り、学んできたが、基本的な食事マナーや正しいお箸の持ち方がまだ習得できていない子がいるので、卒園までに意識して取り組んでいきたい。

③ 実践を通した自身の気づき、考えなど

・野菜を食べない子ども達の姿をみて、もっと食に興味を持ち色んな食材を食べることができるようになってほしいと思い、栽培活動や視覚的教材を用いて食育に取り組んできたが、食べ慣れていないため苦手意識をもっている子も多くいた。園で何回も挑戦して食べられるようになったことから、家庭とも連携してその食材を繰り返し食べる経験をしていくことも大切だと感じた。
・今回３色食品群について子どもたちなりに理解し、調べて学ぶ経験をしたことが、その後も園の活動において見受けられ、自信に繋げることができた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

〇課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・「食べることができた！」という経験を積み重ねていけるように、無理のない量で少しずつ挑戦していく。
・小学校進学に向けて、自分の食べられる量の把握はもちろん、無理なく時間内に全員が食べ終えることができるように取り組んでいく。
・園の給食だけでなく、家庭でも苦手な野菜にチャレンジしてもらえるよう保護者と連携をとって双方で取り組んでいけるようにしたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成３０年　「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」　フレーベ館

自分の思いや考えを言葉で伝え合いながら、生活や遊びを進めていく楽しさを味わう為の援助の工夫

―互いを認め合い、その子らしさを発揮しながら自信を持って活動できる環境構成や援助の工夫を通して―

社会福祉法人郵住協福祉会安謝こども園　保育教諭　三木　さつき

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』の第２章第４節「言葉」の領域おいて「保育教諭等は、園児が言葉で伝えたくなるような経験を重ね、言葉を使って表現する意欲や、相手の言葉を聞こうとする態度を育てることが大切である」とある。

園生活の中で友達とのトラブルや葛藤を経験したり、達成感を味わいながら自分の考えを言葉で伝えようとする。言葉で表現することが、相手の話す言葉にも耳を傾けようとする態度を育むことにも繋がっていく。保育教諭は子どもの発達や内面を理解し、信頼関係を築いていく中で言葉で伝える楽しさや大切さを伝えていく必要があるといわれている。

本学級は、男児９名、女児６名、計１５名の４歳児クラスでほとんどの子が集団生活を経験している。

入園、進級当初から様々な遊びを通して気の合う友だちと遊ぶことが多く、困っている子に気づいて声をかける姿もみられる。一方で、自分の気持ちや思っている事をうまく言葉に出来ずに、言葉より先に手が出てしまう子もいる。また、一人遊びが多い子や気の合う友達がいないと消極的になる子もいる為、気持ちの表し方の面で課題が見られる。

子どもの実態を踏まえ、思いを言葉にして表現することを楽しみ、一人一人が自信を持って園生活を過ごしていくにはどうしたらよいかと考え本テーマを設定し研究することにした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１．　気持ちや考えを言葉で表現できるようになる為の環境の工夫

・絵本や物語などの児童文化財に出会って様々なイメージを膨らませながら言葉を豊かにしていく。

・子どもの思いに寄り添いながら、思いを言語化できるように援助する。

２．　互いの良さや個性を認め合い、自信に繋げる為の援助の工夫

・その子の発達や内面を理解し、安心して自己発揮が出来るよう適切な援助を行う。

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例①】気持ちや考えを言葉で表現できるようになる為の環境の工夫

～子どもの「やりたい」から始まったコストコごっこ～

クラスの姿

●生活を通して言葉のやり取りが増える中で，絵本を通しての言葉の理解も増えている。
●ごっこ遊びなど、役になりきって話す姿が見られる。
●時々、上手く言えず、感情が先に出てトラブルになることがある。
●困っている時に、友達に相談できない子がいる。

保育教諭の願い

・自分の考えや思ったことなどイメージしたことを、もっと言葉で表現したり、お互いで話し合って助け合えるようになってほしい！

「コストコごっこやりたい！」と子どもの声から始まったコストコごっこ。
「どうやって作る？」と尋ねると子ども達からいろんなアイディアが出て、
いつの間にかクラス全体にまでコストコごっこが広がった。
食材や販売するその他諸々も完成し、ごっこ遊びが始まり経験したことを
思い出しながら遊びに取り入れる姿が見られた。

保育教諭の援助と環境構成

●「新聞紙で作りたい！」と子どもからの案で新聞紙を用意し、試しに形を作って見本を置いてみた。
●進めていく中でレジやお金が必要になり、廃材を用意した。
・必要なものが出てくると意見が食い違うことがあったが、保育教諭が仲介に入り子どもの思いを聞きながら言語化し援助することで、問題や課題を子ども達で解決できるようにした。

絵本を通して広がる言葉と表現

・朝の時間や、活動と活動の合間に絵本を読む時間を設け、絵本に触れる時間を増やした。

●園全体で使用している絵本コーナーの他にも、行事や子どもたちの興味のある
ジャンルなどピックアップした絵本を、クラスの絵本コーナーに入れている。

地域の方の読み聞かせ

子どもの変容

・全体的に言葉数も増え、自分の気持ちや考えなどイメージしたことを友達と共有しながら遊ぶ姿が増えた。
・普段一人遊びしている子も積極的に色々な遊びに参加するようになった。
・絵本に触れる時間が増えたことで、興味を持って読み聞かせに集中し、絵本の内容を理解して感想を保育教諭に伝える姿が見られるようになった。

【実践事例②】互いの良さや個性を認め合い、自信に繋げる為の援助の工夫
仲間と一緒に　～Y 児の育ち～

Y 児の姿

家族構成：４人家族の次男
４月～６月
・言葉が思うように相手に伝わらず、１人で遊ぶことが多い。（集団の遊びに興味はある様子）
・思い通りにならないと物に当たる・怒る・さけぶ・泣くを繰り返す。（自分で機嫌を取り戻せない事が多い）
・生活習慣が崩れている時(寝るのが遅い・登園が遅い・朝ごはんを食べずに登園)や兄が休みの時は朝から本調子ではない事が多い。

保育教諭の願い

・園生活に期待を持って登園してほしい！
・自分の思いを言葉で伝えて、気持ちの切り替えが少しずつ出来るようになってほしい！

保育教諭の援助と環境構成

●絵表示を使い、二択の質問をして、気持ちの表現の仕方を伝える。
●保護者とも共通理解をし、生活習慣を整えていけるように伝えた。
●本人にも早寝・早起き・朝ごはんの声掛けを繰り返し伝えることや、明日の予定を伝え、期待感を持って登園できるように声を掛けた。
●保育教諭も遊びに入りながらＹ児の気持ちを代弁し友達を誘い、様子を見ながら自分でできるところは自分でするように援助した。

絵表示カード

コストコごっこから広がったＹ児と仲間との関わり～

７月頃からクラスで流行ったコストコごっこにＹ児も興味を示し、友達と一緒に看板や、野菜を作っていく中で、友達とのコミュニケーションも少しずつ増えていった。
食材を作ったり、店員さんの役を専念したりと言葉で交わすやり取りも増え、いつしかＹ児の方から「コストコごっこのつづきをしたい」と提案するようになり、友達とお互い笑い合う姿も以前より多くなった。
そこから遊びに、積極的に関わるようになる。

Ｙ児の変容

・朝の登園が早くなり、朝食も摂って元気よく登園する姿がある。生活習慣が整い始めた。
・泣くことが、ほぼ無くなった。（眠たい時は時々泣く）
・言葉の数が増え、友達とも楽しく遊ぶ姿がある。
・分からないことは本人が自分で聞きに来るようになってきた。

Ⅳ　実践の振り返り

①成果

・子ども自身がやりたいことを具体的に伝える姿が見られた。
・トラブルが起こった場合も子ども同士で解決しようとしている。
・一つの共通の目的に向かって皆で力を合わせて取り組む姿があった。

②課題

・日常の関わりの積み重ねを通して、相手を思いやる気持ちを築いていくこと。

③実践を通した自身の気づき、考えなど

・言葉での表現が増えると、自分の気持ちや考えを具体的に言葉で伝えようとするなど子ども自身の理解力も上がってきたように思われる。
・絵本や紙芝居などの児童文化財に触れることで、新しい語彙を遊びや会話の中で使うようになり、想像を膨らませながら言葉の世界を広げることが出来るのではないかと考えた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・園生活を通して、さらに気持ちや経験が自然に広がるような声掛けを意識して関わっていきたい。
・子どものやりたいことを最後まで聞く姿勢を意識し、子どもが安心して話せる雰囲気づくりを大事にしていきたい。
・これまでの経験や身につけた言葉を生かしながら友達とイメージを共有して、ごっこ遊びやルールのある遊びを工夫しさらに展開させていく。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』

様式３【課題研究レポート】

互いの良さを認め合い、思いを伝え合って活動する楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫

―集団生活や遊びを通して―

南城市（私立）　あおぞらこども園　教諭　緒方　美代子

Ⅰ　テーマ設定の理由

『幼稚園教育要領解説』の第２章人との関わりに関する領域「人間関係」には「友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう」「関わりの中で様々な自己主張のぶつかり合いによる葛藤、教師や友達と共にいる楽しさや充実感を味わい、次第に皆と生活をつくり出していく喜びを見いだしていくのである」とある。園は集団での生活の場であり、様々な人々と出会う場である。そこで、幼児は保育教諭や友達と関わる中で様々な活動や出来事を通してその感情を共有し、活動を進めていくことで周囲の人や友達との関わりが広がり、充実した園生活を送れるのではないかと考える。本学級の幼児は４歳児、男児１１名、女児１１名、計２２名在籍している。ほとんどの子が０歳から在籍しており、戸外では固定遊具や用具を使った運動遊びからルールのある集団遊び（助けオニやドッチボール、色オニなど)、そして虫探しや砂遊び等の好きな遊びを友達と誘いあって遊ぶ姿が見られる。その中で、オニごっこやドッチボールなどのルールのある集団遊びでは、保育教諭発信だとすぐに子どもたちは集まり遊びが始まるが、子ども同士だと「ドッチボールがしたい！」「オニごっこがいい！」などと、やりたい遊びを伝えるだけで話し合いが進まず、子ども同士の誘い合いもなかなかうまくいかないまま活動が続かないことがある。また、他の子が話していても気にせず割り入って話したり、他の子の話をさえぎるように話したり、話を聞くということが苦手な子がいる。そこで、保育教諭との信頼関係を基盤に、安心した園生活を過ごしながら、友達との関わりの中で思いを伝えたり、自己を発揮しながらも相手の気持ちに気付いたり、友達や自分の「よさ」に気付き、一緒に活動する楽しさを味わってほしいと願い、本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分や友達の「よさ」に気づき、認め合いながら友達との関わりを楽しむための環境構成の工夫

（１）　友達と一緒に活動する楽しさが感じられる日課づくりや環境構成を行う。

（２）　集団活動の中で保育教諭が園児一人ひとりの「よさ」を見つけ共有し、友達の「よさ」を知ることが出来るような場を設定する。

（３）　友達のしていることに興味を持ち友達の「よさ」に気づき、それを言葉で伝えることの楽しさや共感してもらう喜びを味わえるように、共通の話題や興味を共有する場の設定をする。

２ 集団生活や遊びを通して友達同士思いを伝え合う楽しさを味わえるような援助や工夫

（１）　学級活動やルールのある集団遊びの中で、幼児が十分に自己を発揮しながら互いの感じ方や考え方の違いに気付けるようにする。また、友達と様々な感情の交流ができるような関わりの工夫を行ない、それぞれの違いを感じながら、相手の思いを受け止めて友達の「よさ」を受け入れることができるような援助を行なう。

（２）　友達との関わりの中で自発性を獲得できるような遊びの工夫を行なう。また、目的を共有したり役割を意識したりしながら、協同して遊ぶことを楽しめる援助をしていく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【実践事例１】「友達と一緒に集団遊びを楽しむ」

≪幼児の実態≫

・　身体を動かすことが好きで活発な子が多く、オニごっこやリレー、ドッチボールなど運動遊びや集団遊びを楽しんでいる。その中で、教師発信だとすぐに子どもたちは集まり遊びが始まるが、子ども同士だと「オニごっこがいい！」「リレーがしたい！」などと、やりたい遊びを伝えるだけで話し合いが進まない。また、遊び方やオニ決め、チーム分けなどの話し合いの場では、自分の意見を通そうとする子も多く、友達の意見を聞き入れることができずにトラブルになることがある。

・　遊んでいる途中で遊び方やルールについてトラブルになったとき、友達と話し合う前に大人へ訴える。また、他の子が話していても気にせず割り入って話したり、他の子の話をさえぎるように話したり、話を聞くということが苦手な子がいる。

≪教師の願い≫

・　友達と遊び方や活動のルールを共有しながら自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりなどして、一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。
・　集団遊びやルールのある遊びを通して、自分たちで考えたり、友達の思いに気づいたりしながら活動が楽しめるようになってほしい。

≪教師の援助・環境構成≫　●環境構成 ★援助

● 様々な集団遊びを提案したり、身体を動かせる広い場所を設定したりする。
● ルールなどを確認する際は、視野的にも分かりやすいように絵や図などを活用する。
● 子ども同士で話し合いができるような時間や場所を設定する。
★ 子ども同士で話を進める様子を見守ったり、時には具体的な助言したりするなどの仲介をする。
★ 友達の話が聞けるような見守りや声かけなどの援助を行う。

≪幼児の変容≫

・　教師発信から様々な集団遊びを経験することによって、友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じ、オニごっこやリレー、Ｓケンなど様々な集団遊びを友達同士で誘い合って楽しむ姿が見られるようになった。また、自分たちで意見を出し合って遊び方を決めたり、チーム分けやルール決めをしたりしながら遊びを進めていけるようになった。
・　自分の意見を通そうとしてなかなか決まらなかった遊び決めやオニ決めの話し合いでは、話し合いの機会を多く設けたことで「じゃんけんで勝った人が決めよ」「オニが多いから、次、オニやろう」などと、自分の考えを言葉で伝えたり、友達の意見を受け入れたりしながら遊びに入る姿が見られるようになった。
・　遊びの中でトラブルが起きた時は、最初に大人に思いを訴えることがあったが、大人が仲介し思いを代弁したり、一緒に互いの話を聞く機会を作ったことで、自分の思いを相手に伝えたり、相手の思いを受け止めたり、子ども同士で解決する姿が見られるようになった。
・　異年齢児や姉妹園と合同でのリレーを経験し、リレーを楽しむだけでなく、勝敗も楽しむようになっていた。次第にリレーの走者順を話し合いやじゃんけん、足の速さ対決で決めるなど、子どもたちで提案し合う姿が増えてきた。

・自分たちなりに作戦を考えたり、トラブルを解決したりしながら遊びが続くようになった。

◎リレーでの様子

↑リレーの走者順決め

◎ドッチボールの様子

↑じゃんけんでのチーム分け

≪結果と考察≫

・　友達と一緒に遊びを進めていく経験をすることで、特定の仲の良い友達から、さらに友達の幅が広がって友達同士の関わりが深まり、みんなで遊びたい意欲が高まった。
・　友達と意見を出し合って、相談していく体験の積み重ねにより、自分の意見を伝える喜びや友達の気持ちを受け入れる思いやりの気持ちなどコミュニケーション力が高まった。

【実践事例２】「友達同士思いを伝え合う楽しさを味わえるように」

≪幼児の実態≫

・　保育教諭や友達と一緒に集団での活動や集団遊びを楽しみ積極的に関わる姿がある。
・　話し合いの場などで自分の意見を通そうとする子も多く、友達の意見を聞き入れることができずにトラブルになったり、話し合いが進まないことが多い。話や質問の途中で話を遮って、話そうとする。
・　自分の気持ちや感じたこと、考えたことなどを人に伝えたいがうまく言葉にできないことがある。

≪教師の願い≫

・　自分の思いを言葉で伝える楽しさや喜びを味わってほしい。
・　相手の話を聞いたり、表情を見たりしながら、相手にも思いや気持ちがあることに気づいてほしい。
・　友達と様々な感情の交流の中で、それぞれの違いを感じながら、相手の思いを受け止めて友達の「よさ」を受け入れることができるようになってほしい。

≪教師の援助・環境構成≫　●環境構成 ★援助

● 友達の前で自分の考えを伝える機会を設ける。（集まりのとき）

● 子ども同士で話し合いができるような時間や場所を設定する。（小グループ（５～６人）の話し合いとクラス全体での話し合い）

★ 子ども同士で話を進める様子を見守ったり、時には具体的な助言をするなど仲介する。

★ 友達の話が聞けるような見守りや声かけなどの援助を行う。

◎クラスでの話し合の様子

◎小グループ（５～６人）での話し合いの様子

≪幼児の変容≫

・ 保育教諭や友達が話をしている途中でも話を遮ってだす子がいたが、話を聞く機会や話を聞いた後に発言する期間を増やしたことで、話を最後まで聞けるようになる。

・ 教師や友達が話を始めると「静かにして」「話ししてるよ」等と子ども同士声をかける姿が見られた。

≪結果と考察≫

・ 友達と意見を出し合って、相談していく体験の積み重ねにより、自分の意見を伝える喜びや友達の気持ちを受け入れる思いやりの気持ちなどコミュニケーション力が高まった。

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・ 友達と一緒に生活や遊びの中で様々な体験をしたことで、幼児同士の信頼関係が形成され、自分の思いを伝える喜びや友達の思いを受け入れたり、思いやったりする気持ちが出てきた。

・ 友達との話し合いや遊びが展開していけるような環境構成をしたことで、友達との関わりが広がり、自分の思いや考えを言葉で伝えることが増えた。

・ 教師が幼児の言葉や行動、表情を受け止めながら状況に応じた援助をしたことで、幼児同士での言葉のやりとりが増えた。

②　課題

・ 活動の場面ですぐに援助をするのではなく、子どもの様子や子ども同士の関わりを見守りながら援助していく。

・ 幼児理解を深め、発達の見通しを持って環境構成や援助のあり方を考えていく。

③　実践を通した自身の気づき、考え

集団での活動や集団での遊びの中で、友達と心と身体で様々な感情交流をしたことで、自分自身の気持ちに気づいたり、相手の気持ちに気づいたりする姿を見ることができた。子ども同士のやりとりを見守っているとすぐに援助しに行きたくなる場面もあったが、子どもたちが自分で考えた結果「うまくいったり」「うまくいかなかったり」の経験から「次はこうしよう」「どうしたらうまくいくかな」とさらなる考えや遊びが広がる様子が見られ、援助のタイミングの大切さを感じた。子どもたちが自分で考えて行動したり、自分の気持ちや考えたことを言葉で伝えたり、相手の話を聞くことができるような環境構成や援助のタイミングを工夫していきたいと思った。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○ 課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

集団での活動（小集団や全体など）や集団遊びができるような日課や環境づくりを行い、子ども同士での会話や相談ができるような場面をたくさん持てるようにしていきたい。そして、子どもたちの遊びを見守りながらも友達とのつながりがもっと深まるように、一人ひとりの考えが発揮されるような声掛けや援助のタイミングの工夫や改善をしていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府　文部科学省　厚生労働省　「平成３０年幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」
監修：田中　真介「発達がわかれば子どもが見える＋（プラス）」編著：乳幼児保育研究会

様式３【課題研究レポート】

自分の気持ちを言葉で伝え、相手の気持ちも受け入れる力を育てる
―日々の生活や遊びでの関わりを通して―

南城市　あおぞらこども園　教諭　氏名　新垣　恵利奈

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年は、タブレットやメディアが充実して便利になっている反面、人 対 人の関わりが薄れてきていることもあり、語彙力が乏しく、相手の表情や感情を上手く理解できない子が増えている現状がある。本学級は５歳児クラス(男児９名、女児１１名)が在籍しており、男女ともにトラブルも少なく楽しんで過ごしているが、友達との物の貸し借りや相手に何か伝えたい場面になったとき、お互いでのやりとりが少ない段階で大人に伝えに来る子が多く、自分で考えて行動する機会が少ないと感じている。また、人前で話すことに苦手意識がある子も多い。

〖幼保連携型認定こども園 教育・保育要領〗の「人間関係」より、『幼児期においては、園児が子どもと関わる中で、自分を主張し、自分が受け入れられたり拒否されたりしながら自分や相手に気づいていくという体験が大切であり、このような過程が自我の形成にとって重要』とある。友達との深いかかわりを通して自己をコントロールする力や他者と協力して遊ぶ楽しさを味わいながらコミュニケーション能力を身につけてほしいという思いから、このテーマを設定し研究することとした。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

① 各グループのリーダーに、自分のグループに掃除当番箇所を伝えてもらい『前に立って発言する』ことを習慣化する。慣れてきたら、朝・帰りの集まりで、「今日楽しかったこと」や「お休みの日に行ったところ」などをみんなの前でお話しできる環境をつくる。

② 行事ごとで、子ども同士で話し合える環境をつくる。

③ 日常生活の中で、自分で考え、行動できるような声かけで援助する。

Ⅲ　課題解決に向けた取組　（実践）

【　実践事例１　】

≪幼児の実態≫

・自信を持って話すのが苦手で、大人に代弁してもらうのを待つ。

≪保育教諭の願い≫

・人前で自信をもってお話ができるようになってほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫

・朝・帰りの集まりや意見を言うときに、人前に立って発表する機会をつくる。

・人前に立つことは大人でも緊張することなので、苦手な子は質問形式で話を進めるなどして話しやすい環境をつくる。

≪幼児の変容≫
・最初は緊張して前に立てなかった子も、友達が話している姿を見て、自分もできそうと勇気を出して頑張っていた。
・質問をする子もいたので、返事をする流れで自然と話せていた。
・年長の活動の中でも話す機会がたくさんあったので、後半の時期は自信をもってお話することを楽しんでいた。

【　実践事例２　】

≪幼児の実態≫
・遊びや生活の中で、大人を通して相手に気持ちを伝えようとすることが多い。

≪保育教諭の願い≫
・自分の気持ちを整理して相手に主張したり、気持ちを受け入れてやりとりをする経験を増やしてほしい。

≪保育教諭の関わりと援助≫
・こいのぼりのデザインや色を子どもたちで決めてもらう。
・大人は必要以上には関わらず、子ども同士で話し合っている様子を見守る。
・グループごとに意見がまとまったら代表一人前に出てきてもらい、質問形式にして自然と話しやすい雰囲気をつくる。慣れてきたら自分で発表してもらう。

≪幼児の変容≫
・相談中、最初は自信なさげに伝えている様子だったが、みんなの顔や反応を見ると自然に次々と言葉が出ていた。
・自分と違う意見でも相手の意見を聞き入れたり、聞き入れたうえでもう一度意見を出してみたりと、考えながら話している姿があった。

Ⅳ　実践の振り返り

① 成果
・普段の生活にはなかった『人前に立って話す』ということを習慣化したことで、あまり緊張せずに自信をもって発表することができた。自信が持てたことで友達とのやりとりもお互いで理解・納得していることが増えた。また、協力してあそびが展開されている様子が多くみられるようになった。

② 課題

・人前に立つということは恥ずかしさもあってか、ふざけながら話すことも増えてきたので、聞いている人のことも考えながら話ができるような声かけをしていきたい。

③ 実践を通した自身の気づき、考え

・年間を通して実践していたことで、子どもたちの成長をものすごく感じた。特に５歳児ということもあり、小学校への就学を見据えながらの取り組みだったので、自分で気持ちを伝えることの大切さをより感じた。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○ 課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・朝の会や帰りの会だけではなく、遊びを通して言葉で表現することの楽しさを味わえるように活動や教材の工夫を行い、取り入れていく。

・同じ目的を持って活動に取り組む中で、伝え合いが深まるような環境構成や援助の工夫について学んでいきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省 平成 30 年「幼稚園教育要領解説書」 フレーベル館

幼保連携型 認定こども園教育・保育要領ハンドブック

＊2 ページから 3 ページにまとめること

「心が動く保育の環境構成」
～子どもの視点と子どもの世界をつなぐ環境構成の工夫～

八重瀬町あらしろこども園　保育教諭　豊見山　千春

Ⅰ　テーマ設定の理由

子ども主体の保育が重視される中で、「子どもが自ら関わりたくなる」「心が動く」ような環境づくりの重要性が見直されている。保育者の意図だけでなく、子どもの視点に立った環境構成が、子どもの興味や意欲を引き出し、主体的な活動へとつながる。子どもが心動かされる環境との出会いは、そのあとの深いあそびや学びを支えていくと考える。

本学級は、5歳児（３年保育）計２４名（進級児２０名）の園児が在籍している。
実態としては、自分たちで製作物を作って遊びに取り入れたり、鬼ごっこ等簡単なルールの中で体を動かす遊びを楽しむ姿がある。

個々の遊びが展開していく中で、活動は一時的に盛り上がるものの、継続して取り組む姿が少ないように感じている。

子どもにとって意味のある環境とは何かを問い直し、保育者がどのような意図や工夫をもって環境を構成していくべきかを探っていく。子ども一人一人の感じ方、とらえ方に着目し、環境を通した豊かな遊びを深めることを目的とし、このテーマを設定しました。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

①　自分たちで工夫しながら遊びを広げる力（材料・環境・見える化）

・試したくなるような材料の準備、〝自分で作った〟達成感や他児への「やってみたい」刺激に繋げる
・子ども同士で会話、情報交換の場のきっかけづくり「昨日の続きどうする？」「こうするともっといいよ」「これも試してみよう」
・完成よりも「過程」を大切にした言葉かけ、「どうしたらもっといいかな？」「この素材もあるよ」などの適切なタイミングでの素材提供や言葉かけ。成功体験を共有する

②　遊びが継続しやすくなる環境づくり（残せる、見える）

・前日の遊びを残して継続できる空間。

③　自分の思いや工夫を言葉で伝え合い、友達と認め合いながら活動を楽しむための援助や環境構成の工夫

自分の工夫や考えを言葉で伝える場面をつくる。また、友達の方法を見て気づいたことを共有でき、互いの工夫を認め合う雰囲気をつくる。

④　試行錯誤しながら最後まで取り組もうとする気持ちを育むための援助や環境構成の工夫

失敗と成功の両方を経験できるよう、多様な材料や道具を準備する。思い通りにいかない時にも「もう一回やってみよう」「別の方法でやってみよう」と試し方を考えられるよう、励ましやヒントを示しながら粘り強く最後まで取り組む姿を育てていく。継続して活動に取り組める環境を整える

⑤　友達と協力したり助け合いながら活動を広げていくための援助や環境構成の工夫

協力しながら「どうやったの？」と互いに方法を聞いたり教え合ったりできるように活動を広げられる場を設ける。友だちの方法を取り入れてみることで新しい挑戦や発見へとつながり、協力する楽しさが広がるよう援助する

Ⅲ　課題解決に向けた取組（実践）

【実践事例】「夢中になって取組む光る泥団子～工夫・協力・挑戦・刺激・友達からの学び合い～」

幼児の姿・心の動き	心の変化	○読み取り☆援助◇環境構成
【陶芸体験への期待】 陶芸体験への期待を持って、粘土遊びが始まる。 「陶芸体験でこれ作ろう」「ゴジラにしよう！練習！練習！」と友達と思い思いに好きな物をイメージし、形にしていく楽しさを味わっていた。 ゴジラ上手 ハチの巣 幼虫も女王蜂 もいるよ	学び 作ってみたい 上手に作りたい 興味関心を持って活動に向かう 言葉で説明したり見せたり、表現の広がり 目的を持って活動する	○イメージしたものを形にする楽しさ、友達の作品を認め合ったり、気づいたことを友達に伝えたりしているな ○友達と会話を楽しみながら見せ合い、友達との関りが自然と生まれているな ◎「何を作ってみたい？」など、子どものイメージが言葉として現れ、やりとりや交流が自然に広がるようにする。 □テーブルを用意し、友達と楽しく粘土ができるようにする □粘土板・ヘラ・型抜きなどは、いつでも手に取れるようにする。
【作りたい思いを形にする】 初めての陶芸体験に戸惑い、「作れないかもしれない」と不安を感じ涙する姿もあった。しかし、これまでの粘土の経験を思い出し、コップを２つも仕上げる子、シーサーつくりにも挑戦する中で、徐々に自信をもって取り組む姿が見られた。 土のひんやりとした感触、形が変わる面白さを味わい、満足感や達成感を感じている様子で、完成を期待する表情を見せていた 粘土で練習した ハチの巣を再現 不安を乗り越えて、 「できた」という達成感	どうさわっていいか わからない・・・ 本当に固くなるの？ やってみよう 形になってうれしい 新たな素材の感触を味わう 模倣から学ぶ 作りたい形に向けて工夫する 最後まで挑戦する力 挑戦してできた達成感	○作る楽しさ、感触を味わっているな ○友だちの作品や見本から刺激を受け、友だちのアイディアを取り入れながら形を工夫するなど、粘土遊びの経験を活かしているな ◎「前に粘土で作ったよね」経験と結びつけるような言葉かけ、挑戦へとつながる関わり ◎友だちの作品を見せてもらい、刺激が広がるようにする □見本となるような写真や子ども同士が見せ合える環境
【動き出す泥遊び・ **光る泥団子へのきっかけ】** 泥を丸めていく中で、固くなってきたことを嬉しそうに見せ合っていた。しかし、表面にヒビが入ってしまい、指先で直そうとする姿も見られた。割れる・丸くならない・ヒビが直せないと悩んでいる様子もあった。「こうするといいよ」と周りの子に手順を説明する姿も見られた 触ってみて！固いよ あっ！ヒビがはいってきた、、。 直せるかな？	もっとやりたい 直せるかな もう一回やってみよう じっくり試したい 方法を変えて繰り返し取り組む 乾燥・砂の違い・素材の特性気づく 失敗を受け止め、再挑戦する・試行錯誤 じっくり試す、興味の深化	○友達に伝え合ったり、土の湿り気や力加減を試しながら仲間同士で共有し合う関係性が広がっている ○さらさら粉を友達と集め、みんなで使えるようにしたり、協力しながら活動を進めたりする姿がみられる。 □泥団子づくりの工程が分かる絵本や写真をみえる場所に置き、子ども同士で教え合いながら水の量、土の混ざり具合や時間の経過と共に変化する様子を観察し感じることが出来る試行錯誤の時間や場所を確保する。 サラ粉つけたら 何で光るんだろう？

【ひび割れから学びが広がる】

天気を気にしながら素材を集めようとする姿や、役割分担をしながら協力して素材を集める姿が見られる。「晴れた！作りたい」と期待を持って活動に向かい、継続的な意欲がうかがえる。また、試しながら作る探求心をもち、「石が混ざるとヒビができる」と自分なりの工夫を楽しんでいる様子が見られる

大きい石取るからサラ粉お願いね

雨降る前に、この瓶にいっぱい集めよう！集めるの楽っしい～！！

ふしぎ・どうして？
試したい！
友達と一緒だともっと楽しい
いつでもできるように

不思議に気づき理由を考える

気づきや工夫を仲間に伝え合う

友達と一緒に進める楽しさ
仲間と一緒に探求し合う面白さ

○友達と情報交換しながら作り方を進めているな
○役割分担しながら期待を持って挑戦し、探求心・意欲が高まっている
◎完成した子どもの工夫を他児に紹介したり、友達の作品を認め合ったりする中で、教える楽しさや習う嬉しさを感じられるような言葉かけを行う。
◎「何で色を付けたい？」「何で光らせたい？」と問いかけ、自分で考えて素材を選び、試すことができる環境を整える。
□ステンレススプーン、ビン、布、下敷きなどの素材を用意する。
□完成した作品や製作途中の作品を展示できる場を設ける。
□室内からテラスへと環境の場を広げ、いつでも自然に手に取れるようにする

【広がる遊び】

泥団子作りに適した土、磨きの材料、サラ粉の細かさを工夫し、それぞれの泥団子が出来上がっていく中で、自分たちで新しい遊びを考え、試しながら楽しむことで、発見や〝きれい、丸い、光る〟ことへのこだわりをもって「成功」や「完成」といった達成感や「これはまだ途中」という判断も繰り返されている

♪さらこ～さらこ～雨の日は取れないよ～
さらこ～さらこ～
晴れの日しかとれないよ～♪

すごい！どうやったの？

瓶が光りやすいよ
色付けどうする？
絵具？クレヨン？
ペンでもできるって書いてるよ

さら粉ダンス考えた
みんなにも見せる
先生も一緒にやってほしい

【室内で行う子】

【下敷きで試す】

本当に光るのかな？

本当に光ってきた！

○継続して作る、集中力と探求心が高まっている
○ダンスとして表現することから、踊りたいほど心揺れる成功体験を得たのかな
◎仲間と一緒に楽しむ体験を広げ、表現する楽しさ、探求心をもって友達同士で教え合ったり、考えを取り入れたりできるよう、関わり合う場を大切にした。
◎失敗しても工夫し直す粘り強さや、協力しながら進め、試したり、遊びを広げたりできる環境を整えていく

【ビー玉の代わりに使う】

Ⅳ　実践の振り返り

①　成果

・光る泥団子の工程を見通しながら期待感をもって取り組む姿があり、継続的に作ったり、「何で光るんだろう？」自分で試す楽しさ、探求心、挑戦する気持ちが高まっていた。
・失敗から「どうやったら直せるか」考え、道具を使って試したり、さらさら粉を加えたり、工夫が継続した。
・友だちの作品を掲示したり工程をみえるようにしたことで、「昨日の続きがやりたい」という心の動きにつながった。

②　課題

・途中の作品の扱い、次にどうつなげたいのか、対話を促すことを保育者が支え続けることが必要。
・完成した作品だけでなく、途中の気づきや工夫を語り合える場をつくり、互いを認め合う経験につなげる。

③　実践を通した自身の気づき、考えなど

いつでも手に取れる環境・素材・道具の配置などの工夫で子どもの意欲が変化した。
「やってみたい」という思いから、遊びが広がっていく。友達の工夫・挑戦を見ることが刺激になり、意欲が高まっていった。一人の意欲が仲間の意欲へと連なるような環境を整える重要性に気づいた。

うまくいかない経験からも子どもたちは興味を持ち、それを解決するために協力したり伝え合う姿があった。保育者は、やり方を教えるのではなく考えたくなる言葉かけや環境構成が大事だと感じた

Ⅴ　今後の実践に向けて

友だちと協力して取り組む場面を意図的に増やすことで「友だちと一緒だからできた」という経験が生まれ、互いを認め合う関係が育つ。また、自分の感じた事や世界を知る機会になり、互いのイメージが重なり合うことで、遊びはさらに豊かに展開していく。

子どもが思わず遊び出したくなる環境や、友だちの姿に心が揺れ挑戦したくなる環境構成、「やってみたい」と思えるような仕掛けを大切にし、子どもの世界と思いが繋がる保育を目指していきたい。心が動く瞬間に丁寧に寄り添いながら、遊びが自然に深まり、子ども同士の学び合いが広がる環境づくりを継続していきたい。

〈主な参考文献〉

・幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説
・子どもとつくる５歳児保育　加藤繁美　山本理絵
・わくわくドキドキの環境から広がる遊びの世界　仲本美央
・ずかん・かがく絵本から広がる遊びの世界　仲本美央

様式３【課題研究レポート】

相手の思いを聞く力を育み、他者の気持ちに気づくことができる活動の工夫

－自分の思いを伝えたり、相手の思いを聞いたりする体験を通して－

与那原町　浜田ハピネス認定こども園　教諭　大城　未来

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、少子化による人口減少から、家庭や地域での人との関わりが希薄になっていることや、またSNSやデジタル機器の普及により、直接思いを伝え合う機会が少なくなっている。そのため、幼児期から人との関わりや気持ちをやり取りする経験を積むことが重要になっている。

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」の第２章「人間関係」や「言葉」の領域にも、園児が相手に親しみを感じて思いを伝えようとすることや、話を聞く経験を重ねることで、他者の思いに注意を向けられるようになることが示されている。

本園の４歳児クラス（５年保育）は、男児８名、女児１４名、計２２名在籍している。半数以上が持ち上がりのため、集団での遊びが活発に行われている。一方で、個別に遊ぶ友だちに対して「仲間に入れない」などの言葉で傷つける姿も見られ、相手の気持ちに配慮する力に課題を感じている。こうした実態から、遊びや園生活の中で他者の思いに気付き、共感し合いながら良好な関係を築く力を育むことを目的として本テーマを設定した。

Ⅱ　課題に対する具体的な手立て

１　自分・他者の思いに気づくための援助や関わり方の工夫

保育教諭が子どもの心の動きや他者との関わりに目を向けながら、一人ひとりの感情に寄り添い、共感的な関係性を築いていくことを大切にする。その中で、言葉や態度を通じて思いやりや気づきを引き出す環境を整え、日々の生活や遊びの中で自然に相手の気持ちに気づける力を育んでいく。また、子ども自身が安心して自分の気持ちに向き合い、受け止められるような関わりを通して、心の育ちを支える。

２　自分の気持ちや思いを言葉で伝えられるための工夫や援助

子どもが安心して自分の思いや考えを表現できるよう、日常の中に他者と共有する場面を多く設け、言葉で伝えることの喜びや大切さを感じられるよう援助する。また、友達とのやり取りを通して気づいたことを言葉にし、相手に伝える経験を積み重ねる中で、自己肯定感や他者理解の力を育む。保育教諭は子どもたちの表現を温かく受け止め、言葉のやりとりが広がるような関係性と環境を意識して援助していく。

Ⅲ　課題解決に向けた取組

実践事例１「きみの気持ち、気づいたよ　～ふわふわ言葉で広がる関係づくり～」

【園児の姿】

・遊びや活動の中で、ちくちく言葉を使ったり、「仲間に入れてあげない」といった言動が見られたりと、友達が嫌な気持ちになり、保育教諭に伝えに来る姿がある。

・相手の表情を見ずに話しかけることが多く、誰に向かって言っているのか分かりづらい場面がある。また、相手の気持ちに気づかずに関わることで、関係がうまくいかない様子が見られる。

【保育教諭の願い】

・日々の関わりの中で、相手の気持ちや状況を受け止めながら、友達と仲良く過ごしてほしい。

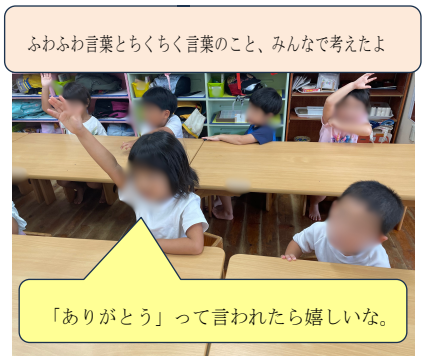
・自分の気持ちを適切な言葉で伝える力を育みながら、相手にも思いやりのある「ふわふわ言葉」を使って関われるようになってほしい。

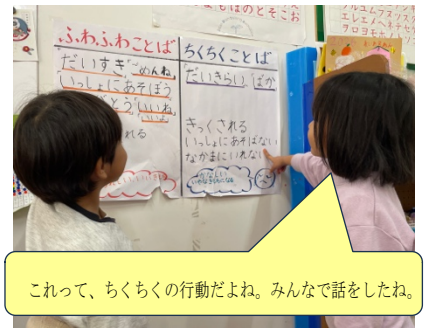
・一人ひとりが安心して過ごし、気持ちのやり取りを通して心がつながる関係を築いていってほしい。

【環境構成の工夫・保育教諭の援助】〇環境構成　★援助

〇トラブルや言い合いがあった際には、「ふわふわとちくちく」の絵本を繰り返し読み聞かせたり、関連する絵本をクラスの紹介コーナーに置いたりして、言葉の選び方によって気持ちが変わることを気づかせながら、自分の言葉を振り返り、思いやりの心が育むきっかけになるようにした。

〇子どもたちとの話し合いで挙げられた「ふわふわ・ちくちく言葉」をクラス内に掲示し、視覚的に理解しやすいよう環境を整えた。掲示物には、それぞれの言葉を言われたときにどのような気持ちになるかを表情マークで示し、子どもたちが言葉と気持ちのつながりをイメージできるようにした。
〇優しい言葉や思いやりのある行動が見られた際には、その場で紹介したり、全体の場で共有したりする場面を設けた。認められる経験を積むことで、自分の良さに気づき、自己肯定感や社会性を高めていけるようにした。クラス全員で“素敵だね”と感じた際には、容器に入れているビー玉を一つずつ増やす取り組みを行い、クラスの素敵な取り組みを視覚化した。
〇朝や帰りの会の中で「今日の出来事」や「楽しかったこと」などを振り返り、みんなの前で発表する時間を取り入れた。日々のやり取りを思い返しながら、相手や自分の気持ちに気づけるようにした。
★ちくちく言葉が見られた場面では、その都度子どもたちに「どんな言葉ならいいかな？」「もし自分が言われたらどう感じる？」と問いかけ、ふわふわ言葉の大切さに気づきやすいようにした。
★トラブルが生じた際には、個別や小集団での話し合いを行い、必要に応じてクラス全体で話し合いの場を設けることで、自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け止めたりしやすいようにした。
★自分や友達の良さに気づくことができるよう、子ども同士の気づきが見られた際には、そのやりとりを具体的に認める声かけを行った。
★子どもたちが作成した掲示物や作品をクラスに掲示しながら、「よく考えて作ったね。」「～の気持ちで作ったのね。伝わるよ。」などの声かけを通して、自分の頑張りを認め自信が持てるようにした。





【園児の変容】
・友達がちくちく言葉を使った場面で、「それはちくちく言葉だよ」と伝える姿が見られるようになり、言葉に対する意識や、相手の気持ちに気づこうとする姿勢が育ち始めた。
・これまでよく聞かれていた「仲間に入れない」といった言葉が減少し、相手を受け入れようとする姿勢や、関係を築こうとする様子が見られるようになってきた。
・自分たちで作った掲示物や作品を友達と一緒に見たり、友達にプレゼントしたりする姿が見られ、嬉しい気持ちを共有しながら関わる姿が増えていった。

【結果と考察】
・日々の関わりの中でふわふわ言葉やちくちく言葉について考えたり、クラスで話し合う場を設けたりすることで、人の気持ちに目を向けるきっかけとなった。これらの積み重ねにより、子どもたちは、自分の発言が相手をどんな気持ちにさせるかに気づき始め、言葉を使うときに相手のことを考えようとする姿が見られるようになってきたと考える。
・保育教諭との対話やクラス全体での振り返りを重ねる中で、自分の思いや気持ちを言葉で表そうとする姿が増え、自分の内面と向き合いながら表現する力が育ち始めたと感じる。
・ちくちく言葉が使われた場面でも、その理由を問われた際に「こう思ったから言った」など、自分の気持ちや背景を伝えられるようになり、互いに他者の思いに気づく経験へとつながっていったと考える。

実践事例２「ことばで伝えるって、うれしいね　～気持ちがつながる関係づくり～」

【園児の姿】
・日々の保育の中で、泣いて思いを訴えることが多く、自分の気持ちをうまく言葉にして伝えることが難しい園児の姿が見られる。
・人前で話すことに苦手意識を持ち、自信が持てずに声が小さくなったり、言葉に詰まったりするような様子が見られる。
・自分の思いはあるものの、それを言葉にして伝えることができず、もどかしさから手が出てしまう姿が見られる。

【保育教諭の願い】
・自分の気持ちや思いを、泣くことや手を出すことで表すのではなく、言葉で相手に伝えられるようになってほしい。
・言葉で思いを伝えることで、相手に気持ちが伝わる嬉しさや安心感を感じ、やり取りの楽しさを味わってほしい。
・気持ちを言葉で伝える経験を重ねる中で、相手の思いにも耳を傾けながら、互いに気持ちを伝え合える関係へとつながっていってほしい。

【環境構成の工夫・保育教諭の援助】〇環境構成　★援助
〇朝の会や帰りの会、話し合いなどで、発表する場を意識的に増やし、一人ひとりが前に出て発言をしたり、保育教諭が子ども達の発言をホワイトボードに書き残したりして、自分の思いや考えを言葉で伝える経験を積み重ねられるようにした。
〇おゆうぎ会に向けて絵本『どうぞのいす』を取り上げ、物語を通して子どもたちが感じたことや考えたことをクラスで共有する場を設けた。その中で大切にしたい思いを話し合い、日常の生活でも話し合いで考えたキーワードの言葉を意識して過ごせるような製作活動を行った。
★泣いて訴え、手が出てしまう場面では、まず園児の気持ちに寄り添いながら受け止め、「本当は、どうしたかったのかな？」「〇〇さんに、伝えたいことあるかな？」と問いかけることで、自分の思いを言葉で伝えられるようにした。
★トラブルや困り事が見られると、初めのうちは、保育教諭が見本を示し、必要に応じて仲介しながら、自分の言葉で気持ちを伝えられるようにした。
★発表の場や遊びの中では、子どもの頑張った姿や友達に対して優しく関わる姿を、その都度言葉にして紹介し、園児同士が互いの良さに気づけるようにした。
★絵本の読み聞かせを通して、言われて嬉しい言葉や、されて嬉しい行動について全体で話し合い、場面に応じた行動や言葉の使い方を意識できるような関わりを大切にした。
★発表が苦手な子どもでも安心して話すことができるよう、受け止めてもらえるあたたかな雰囲気づくりを心がけた。また、言葉にして気持ちを表すことへの抵抗感を和らげるために、話した内容を皆で共感・共有する時間を設け、自分の言葉で伝えたいという意欲につながるようにした。
★気持ちをうまく伝えられず友達とトラブルになった時にも、落ち着いて言葉で伝えようとする姿を温かく見守った。

絵本から教えてもらったことを発表

絵本「どうぞのいす」で大切なことを教えてもらったよ。

「〇〇さんと、お当番するのが楽しかったです。」

【園児の変容】
・これまで泣いて訴えることが多かった園児も、自分の気持ちを言葉で伝えられる場面が増えてきた。
・発表の場面では、少し緊張しながらも、自分の思いをみんなに伝えることを楽しみにする様子が見られるようになってきている。
・泣いている友達に「どうしたの？」と声をかけたり、困っている友達の気持ちに気づいて寄り添おうとしたりする姿も見られるようになった。
・友達とのやり取りの中で、言葉で気持ちを伝えることの心地よさを感じながら、関係を築いていこうとする姿が少しずつ広がってきている。

【結果と考察】
・泣いて手を出すことが多かった園児が、自分の気持ちを少しずつ言葉で伝えようとする姿が増えてきた。思いを言葉にして表現できるようになってきたことは、日々の丁寧な関わりや言葉かけを通して、安心して気持ちを伝えられる経験を積み重ねたことが影響していると考える。
・自分の気持ちを理解できるようになったことで、「いや」だけでなく、「何が嫌だったのか」を言葉で伝えようとする姿が見られるようになり、思いを具体的に表現できるようになってきたと考える。
・以前は保育者に訴える姿が多く見られていたが、最近では友達同士で言葉を交わしながら、気持ちを

伝え合い解決しようとする姿が見られるようになってきた。言葉で気持ちを伝えるやりとりを重ねる中で少しずつ相手の思いにも目を向けながら、やりとりをする関係が築かれてきていると感じる。

Ⅳ　実践の振り返り

１　成 果

・自分や他者の思いに気づくための援助や関わり、また、自分の気持ちや思いを言葉で伝えられるようになることを目的にした取り組みを継続的に行ったことで、日々の関わりや活動の中で困っている友達に気づき、心配し手を差し伸べようとする姿が少しずつ見られるようになってきた。
・発表の場を意識的に設けたことで、自分の思いを言葉で伝えることの大切さに気づき、トラブルの場面でも言葉を使って気持ちを伝えようとする姿が増えてきた。
・子ども同士のやり取りや会話の広がりが見られるようになり、思いを共有しようとする関係が少しずつ育まれてきていると感じる。

２　課 題

・トラブルの際に保育者として仲介に入ることがあり、その関わり方やタイミングについて迷う場面があった。子どもたちの思いを丁寧に引き出しながら、必要以上に介入しすぎない関わり方のバランスを今後も考えていきたい。
・思いやりのある行動が増えてきた一方で、友達の言葉を受け止めようとしない場面も見られた。相手の思いや声かけに耳を傾けようとする姿が育つよう、丁寧な援助を継続していく必要があると感じている。

３　実践を通した自身の気づき、考え

・自分や他者の思いに気づき、それを言葉で伝えられるようになるためには、日常の保育において、言葉の使い方や相手の気持ちに着目した話し合いを継続的に行い、他者の気持ちを考える経験を重ねていくことが重要であると感じた。子どもたちは少しずつ「どのような言葉が相手にとって心地よいか」を考えながら、思いやりの気持ちをもって関わろうとしたり、その場にふさわしい言葉を選ぼうとしたりする姿につながっていくのだと実感した。
・トラブルが起きた際の仲介では、保育者の関わり方によって子どもたちの受け止め方が大きく変わることを実感し、子ども自身が納得できるまで丁寧に話し合える時間の確保が重要であると改めて感じた。
・一人ひとりの感じ方や表現には個人差があるため、職員間で日々の様子を共有し、連携を取りながら丁寧に寄り添っていくことの大切さを実感した。
・子どもたちは保育教諭や友達に対して、自分の思いを素直な言葉で伝えようとする姿が見られるようになり、以前よりも信頼関係が育まれていると感じた。そのような関係があるからこそ、トラブルが起きた場面でも、言葉で思いを伝え合いながら相手の気持ちを受け入れようとする姿が多く見られるようになった。このような姿を通して、改めて信頼関係の大切さを実感した。

Ⅴ　今後の実践に向けて

○ 課題の改善策、今後取り組んでいきたいこと

・文字を読むことができる園児が増えてきたことから、「思いやりの木」の活動に取り組んでいきたい。友達から受けた嬉しかった言葉や優しい行動を保育教諭が書き留めて掲示し視覚化することで、掲示された園児は自分の言動が認められたことに喜びを感じ、自己肯定感の育ちにつながると考える。また、その様子を見た他の園児も「自分も掲示されたい」という気持ちを持ち、前向きな言葉や行動につなげていこうとする意欲を持つと考えられる。「思いやりの木」の取り組みを通して、クラス全体の関係がより深まり、思いやりのあるあたたかな雰囲気づくりができるよう目指したい。
・トラブルや日常のやり取りの中で、その場に応じたふさわしい言葉を考えて伝えられるよう、子どもたちの気持ちに寄り添った援助や話し合いの場を大切にしながら、友達への声かけや伝え方を一緒に考えていきたい。

〈主な参考文献〉

内閣府・文部科学省・厚生労働省　平成 30 年度　『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』　フレーベル館

無藤隆/監修　平成 29 年　『イラストたっぷり　やさしく読み解く　幼稚園教育ハンドブック』　学研プラス